524

名人指南碁

二、三子局

213
616

213-616
1200901411479

名人指南碁

二、三子局

名人 本因坊秀哉指南講評

廣月絶軒詳註

平凡社版

213-616

二子局目次

二子局配置の心得……一—九

第一局　中押勝　少年HM君氏……一〇—一九
來賓

第二局　中押勝　少年TS君氏……二〇—二四
來賓

第三局　勝　少年KT君氏……二五—三〇
來賓

第四局　中押勝　少年SM君氏……三一—三七
來賓

第五局　中押勝　少年XY君氏……三八—四二
來賓

第六局　勝　少年MK君氏……四三—五〇
來賓

第七局　勝　少年GF君氏……五一—五四
來賓

第八局　（補充の一）　少年HS君氏……五五—五八
來賓

第九局　（補充の二）　宮阪六段S氏……五九—六三
來賓

第十局　（補充の三）　宮阪六段T氏……六四—七〇
來賓

三子局　計十局……七二—一五三

例言

一、名人の指南碁は四子より九子迄に限られてゐる、三子以上は手合卽ち實戰であつて稽古碁ではない。

一、本集は主として名人の指南碁を同好者に紹介する意味で旣刊四册は四子、五子、六七子、八九子を公にした。

一、二、三子及互先局は碁として最も興味深きものである。

一、二子局及三子局の材料も名人の指南道場に求めた。

一、黑は凡て素人である。

一、白は孰れも坊門の麒麟兒を以つて目されし當時の少年、今日現に高段に上つてゐる碁界の龍虎である。

一、專門碁士の對局は日々の各新聞紙上で諸君の滿喫されてゐる所。

一、本集が勉めて材を素人に取つたのは、素人の通弊は概して如何いふ處にあるか、素人は專門家に如何樣に打ちコナされるか、といふ點を適確に見て、其の間に定石布石の神髓を會得せしむるを要領とした。

一、○印が名人の講評たる事は從來の通りであり△印及註解は凡て編者の筆に成る事は言ふ迄もないが、參考圖の末節に至る迄一々專門家に諮詢して、斷じて編者の臆測を强調しなかつた事を附記しておく。

一、二子局及び三子局共、卷頭に布石初期に於ける配置の心得なる項目の下に數頁を費しておいた、之れは從來の碁書に其の類例を見ざる斬新の注意として、讀者の參考資料たるべき事と確信する。（絕軒）

名人指南碁 二三子局

名人 第二十一世 本因坊秀哉師 指南講評
廣月絕軒 詳註

二子局に就て

△古來專門家の間に於ても二子局は最も六つかしいとされてある。

置かせる側（上手）から言うと、互先局に比して狹い（局面變化の區域の局限される意味）ことも非常であるし、之を三子、四子に比すると、對局者の技倆も大に接近して居る譯であるから、二子の效力を漸次に削つて局勢を勝敗不明の域に導くといふ事を唯一の方針とせなければならぬ。

又之を置く側卽ち黑の立場からいふと、白に先手を持たれ、二隅を互先狀態に置いて戰はねばならぬのであるから、一步を誤ると忽ち二子の效力が疑問になつて終ふ。

乃で、置いた石としては、成る可く局勢を平明にして、其の複雜化を避けねばならぬ、と言つても其は決して退嬰的消極主義ではイケヌのである、其處が六かしい處で同時に面白い處でもある、骨折れば其だけの骨折ガイもある、勝がコメば先に進んで敵の壘を摩するの快も味はゝれる事とならう。

初學者に布石の概念を與へるため、特に『二子局配置の心得』と題して卷頭の數頁を割く事とした、勿論腹の底迄得心の行く樣に詳細を盡すには布石法として數册を要す可く、玆では不可能である。

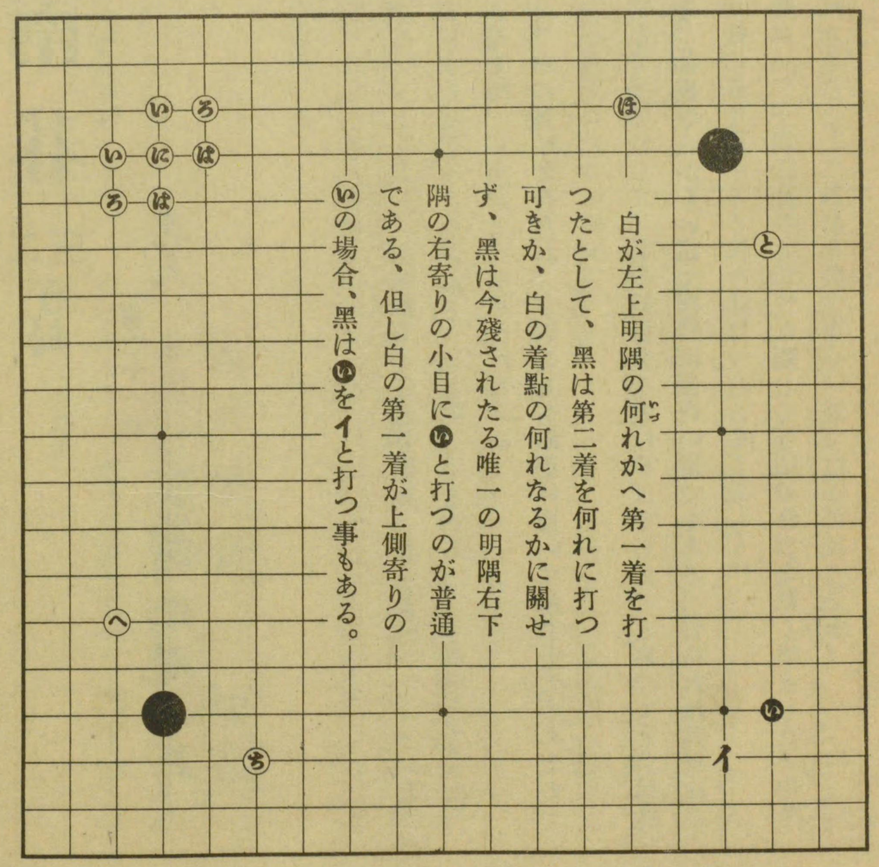
二子局配置の心得

△（其の一）　前提圖

二子局に於て白は其の第一着を何處へ打つて來るか判らぬ。

右上の置石に向つて㋩若くは㋣、或は左下へ㋹、又は㋷と掛つて來る事も凡て白の自由ではあるが、先づ明隅である左上隅或は右下隅へ先鞭をつけるのが理論上普通である。

白が明隅に先著を布く場合、何れの點を擇ぶか、既に二子を置かせてゐる白の立場として見ると、隅としての有利な點であるからとて必しも㋑と小目に據るが普通だとは言へぬ左右何れかの目外へ㋺、或は㋥と高目に、又は㋛と星に、其は白としての策戰の自由である。



白が左上明隅の何れかへ第一着を打つたとして、黑は第二着を何れに打つ可きか、白の着點の何れなるかに關せず、黑は今殘されたる唯一の明隅右下隅の右寄りの小目に❶と打つのが普通である、但し白の第一着が上側寄りの❶の場合、黑は❶をイと打つ事もある。

△（其の二）　黑四の尖み

白一、黑二は前説の通りである、白三でイと高く掛るのも白の自由である、兎に角三の手で右下隅へ掛り黑の一隅獨占を妨げておくのは最も急務である。

黑四で左上隅白の獨占を妨げて❶と掛るのは合理的着手である。

或は白三に對して優先權を利用してホと一間夾、若くは㋛の點から白三を三間夾とする積極手段もある。

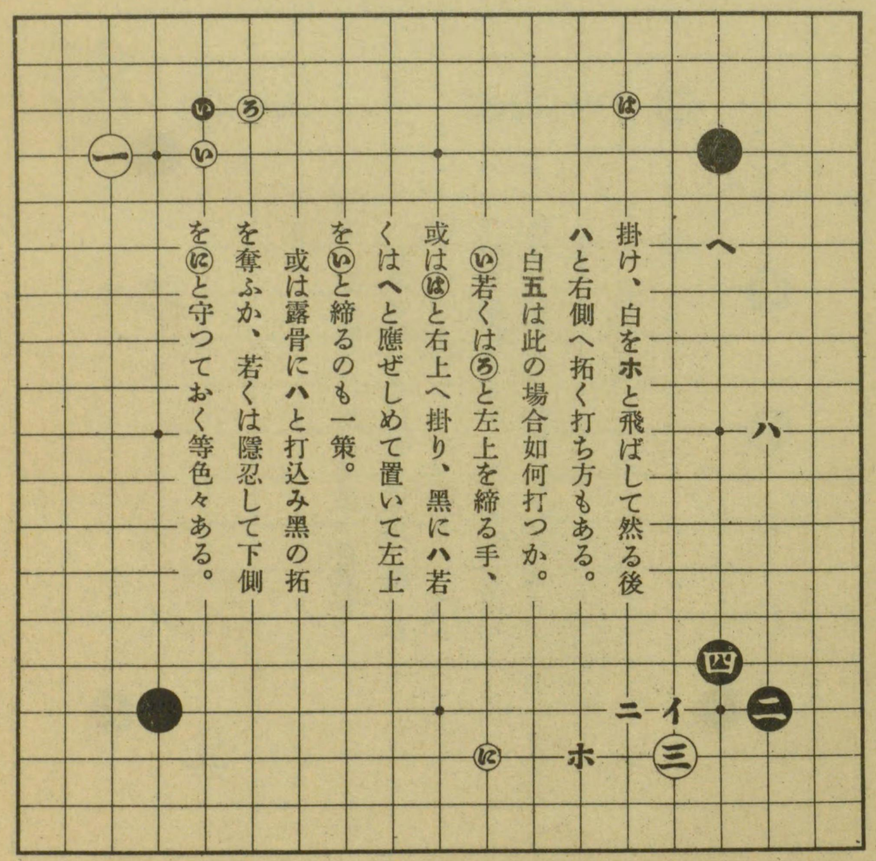
圖の如く黑四と尖むのは理論上少し緩いが二子局であるから最もよいといふのが專門家の定説である。

黑四は決して消極一方の手ではない、此の尖みによりて白三よりする種々の策動を制限しておいて、次でハと右側へ大勢を張るか、或はニと掛け、白をホと飛ばして然る後ハと右側へ拓く打ち方もある。

白五は此の場合如何打つか。

❶若くは㋺と左上を締る手、或は㋥と右上へ掛り、黑にハ若くはヘと應ぜしめて置いて左上を❶と締るのも一策。

或は露骨にハと打込み黑の拓を奪ふか、若くは隱忍して下側を㋛と守つておく等色々ある。



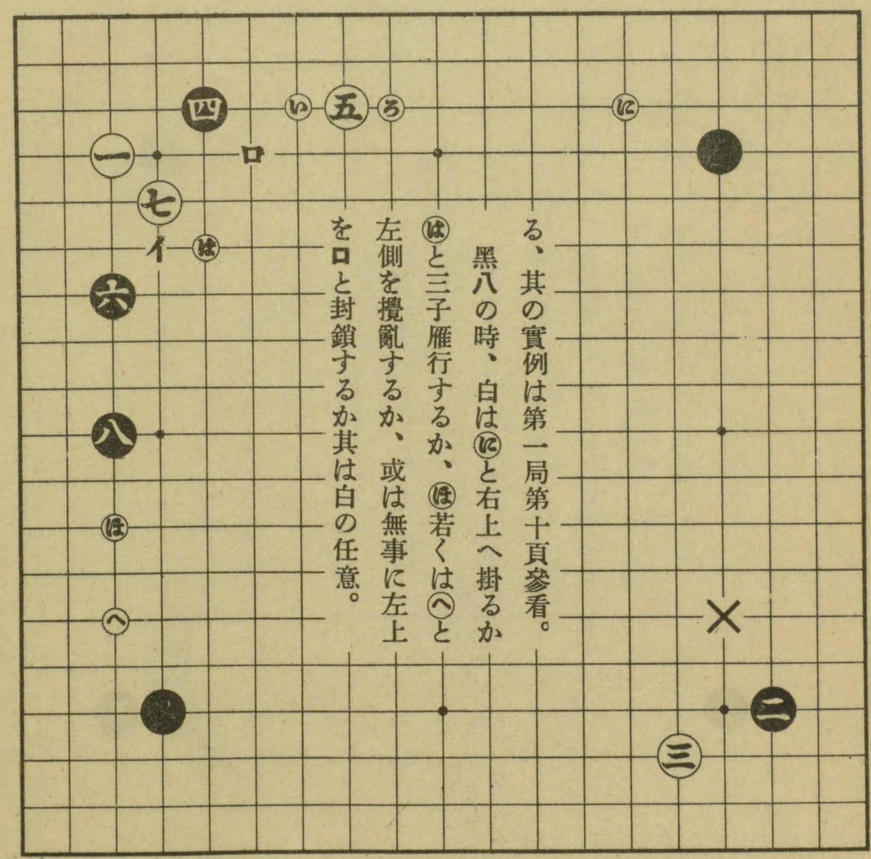
△（其の三）　黒四の相掛り

黒四の相掛りに對し白は左上を手拔して右下黒二に對し×の點から大斜に掛けるか或は其の他色々攻撃の手段もあらうが、普通に行はれる手法としては左上黒四を夾撃する手である、其の夾む點は、いの一間夾或はろの三間夾、勿論白の任意ではあるが、比較的變化が多いといふ意味から、白としては五の二間夾が最も多く行はれる。

白五に對する黒四よりの發動は、三々頂、斜走掛以下定石の指定する型は色々あるが、此の場合圖の如く六と夾返して八と拓く手が最も簡明なのである。

白七を此く尖むは普通であるが、或は紛れを主としてイと來る事もある、其の實例は第一局第十頁參看。

黒八の時、白はにと右上へ掛るかはと三子雁行するか、ほ若くはへと左側を攪亂するか、或は無事に左上をロと封鎖するか其は白の任意。



（指）

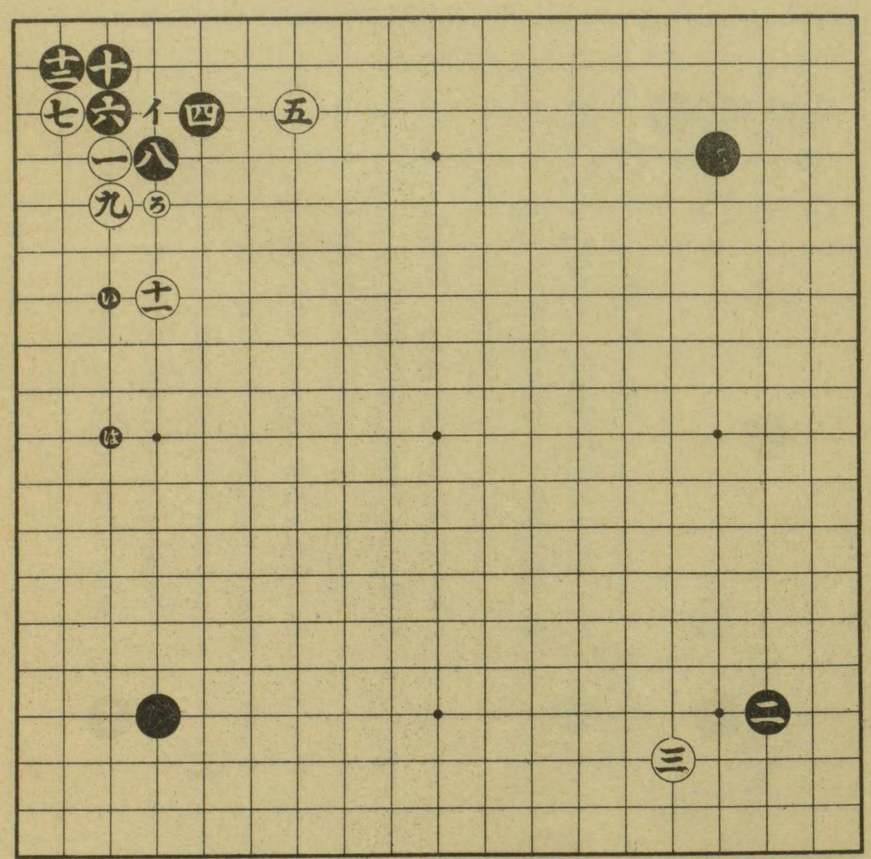
△（其の四）　白五の一間夾

白が五と酷しく一間に夾んで來た時、黒六の三々頂以下十二迄は定型の一種である。

或は六の手で前圖の如くいと二間に夾返し、白ろ、黒はと運んでもよい（其の變化の一斑は前圖黒六以下の説明參看の事）

此の圖で注意しなければならぬのは、黒八と綽ねた時、白に九の手で十の點へ綽ね返される手があるのを考慮しておかねばならぬ、といふ一事である。

此の數字中最も大切なのは黒十二と曲る手である、此の手で此の隅の黒の活は確定した、若し之を怠ると白より此の點に押され根據を奪はれ攻め立てらるゝ不利がある。

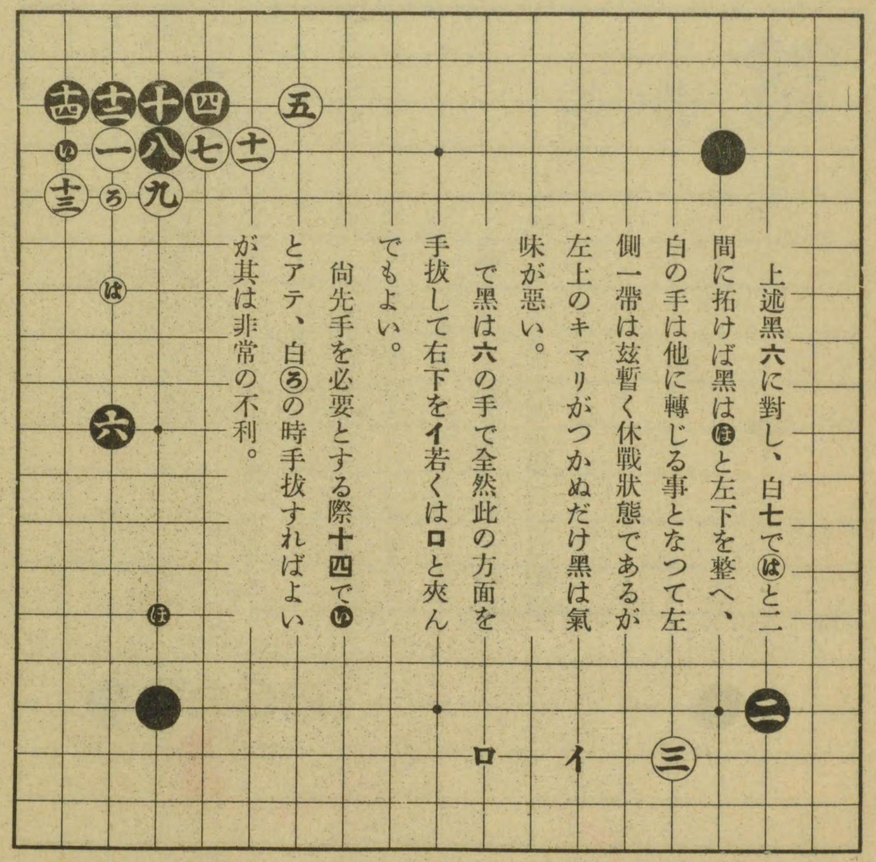


（指）

△（其の五）　黑六の手拔

黑六を手拔とは言ふものゝ全然の手拔ではない、間接の手拔きで、何となれば圖の如く左上に白の堅壁が出來た處で黑六が其の堅壁の效用を幾分削つてゐる（卽ち黑六のある爲め白は左上の壁を利用して左側に大規模の地を造くる事が出來ぬ）のである、或は白七で此く頂けぬかも知れぬ、卽七の手で㋺と拓いて、一方六に對して響きを與へ、一方隅黑四を十の點から尖頂けて攻める機會を覗つてゐる手もある。

白七に對する黑八の綽込みは右下黑二の配石あるため征が黑に有利なからである（征關係は、黑八の時白十と截り、黑九、白十二、黑十一と運び白七の一子を征とする手順）



上述黑六に對し、白七で㋺と二間に拓けば黑は㋹と左下を整へ、白の手は他に轉じる事となつて左側一帶は玆暫く休戰狀態であるが左上のキマリがつかぬだけ黑は氣味が惡い。

で黑は六の手で全然此の方面を手拔して右下をイ若くはロと夾んでもよい。

尙先手を必要とする際十四で㋩とアテ、白㋺の時手拔すればよいが其は非常の不利。

△（其の六）　黑二の破格手段

白一に對して黑二は（以上諸圖に示した通り）必ず右下隅（本圖三の點）に小目に打たねばならぬのであらうか。

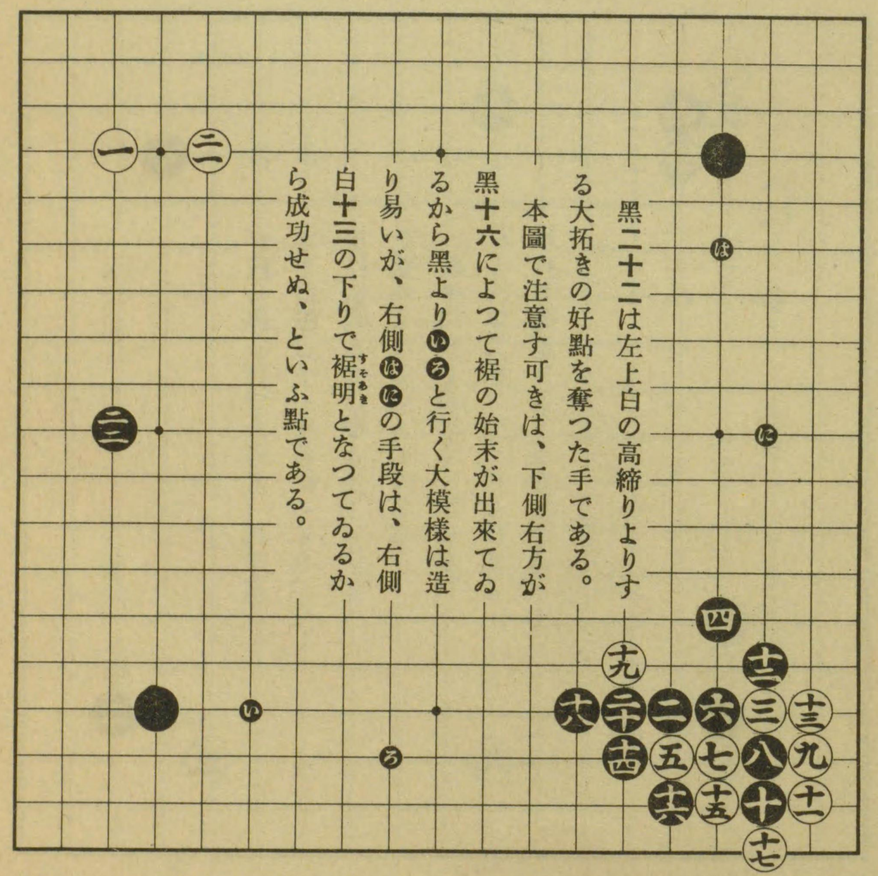
小目は隅の實利を保有するに便利なからである。

既に二子を置いてゐる局面故敢て奇を弄する要はない。

といふ穩健な意味で小目に據るを普通とするが、力一パイに打つて見ようといふ意ならば此く高目に二と行く手段も敢て惡いとは言へぬ。

白三も色々手段もあらうが玆に掛るとすれば三の一手。

黑四に至つては手段は幾通りもある、が此く六以下十八迄を豫期して四と打つのも一策である。



黑二十二は左上白の高締りよりする大拓きの好點を奪つた手である。

本圖で注意す可きは、下側右方が黑十六によつて裾の始末が出來てゐるから黑よりいろと行く大模樣は造り易いが、右側はにの手段は、右側白十三の下りで裾明（すそあき）となつてゐるから成功せぬ、といふ點である。

△（其の七）　白一の目外し

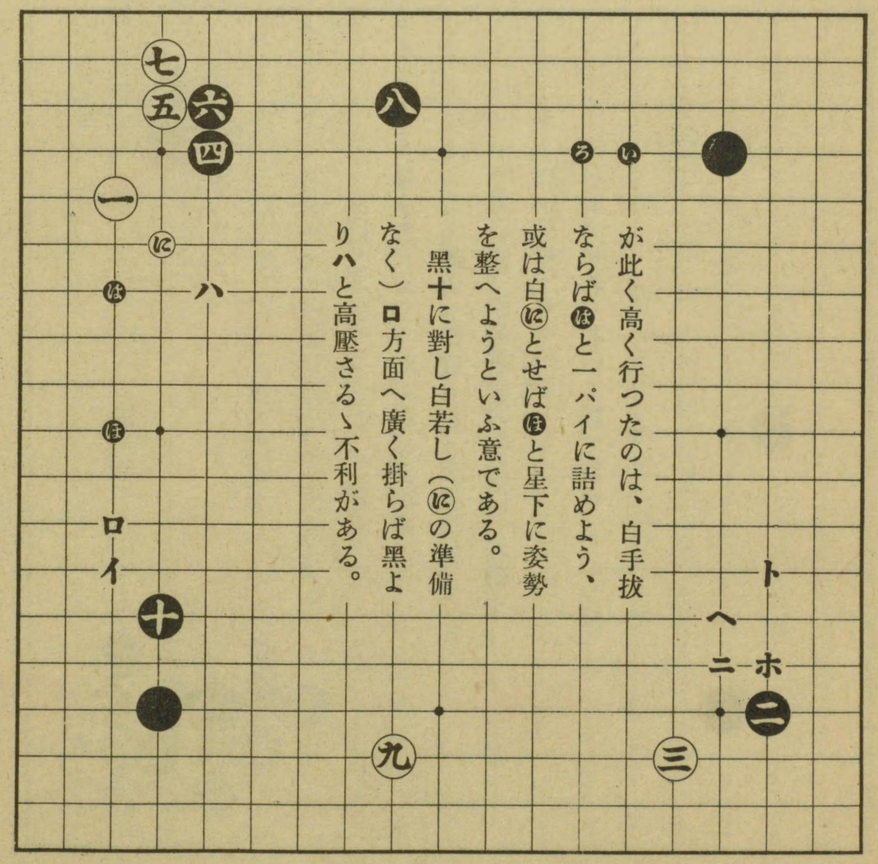
白一の策戰は、黑を左上五の點に掛からして左側へ廣く拓き、左下隅黑の置石よりする發動に制限を加へんとするのである。

黑四の高掛りは白の策を破り、却つて上側に廣漠たる地域の基礎を築かんとするのである。

即ち黑四より八迄は此の場合に於ける定型の一種で、次にい若くはろと完成する時機を窺うてゐる。

白九は右側黑二に對して二、へと威壓を加へ得る三の目外しの特長を利用して極度に廣く拓き、黑の動靜を觀てゐる手で、必しも二、へと掛けるとは限らぬ、或ば右側トより夾んで攻める意味もある。

黑十は普通イと低くする所である



が此く高く行つたのは、白手拔ならばほと一パイに詰めよう、或は白にとせばほと星下に姿勢を整へようといふ意である。

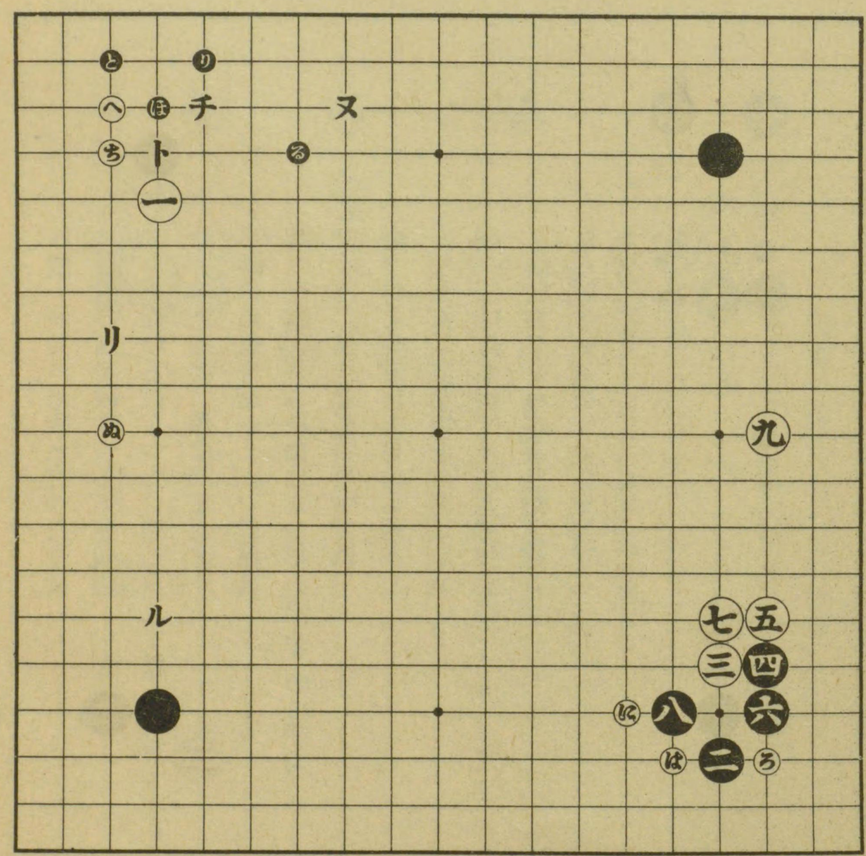
黑十に對し白若し（にの準備なく）ロ方面へ廣く掛らば黑よりハと高壓さるゝ不利がある。

△（其の八）　白一の高目

白一の策戰は前局の目外しと同じく主として左側に目的があるので直接右下隅には影響せぬ、其故二と一隅の優先權を占有する。

白三の時、黑は四の手で中側九の邊に拓き、白にろ、或はは、又はに等に打たして大勢を制する手段もないでは無いが、尙且普通に四と頂け八、九迄の定型に運び一隅の治りをつけておいてほと左上隅の實利を爭ふ方針に出るがよい。

黑ほの掛りに對し、白へならば、黑と、白ち、黑り、白ぬ、黑るとの普通に應接してゐても十分、或は白への時黑手拔して左側星下ぬの點に打ち、白ト、黑チ、白と、黑ヌ、白リ、黑ルと運んでも差支ないのである。



二子

第一局

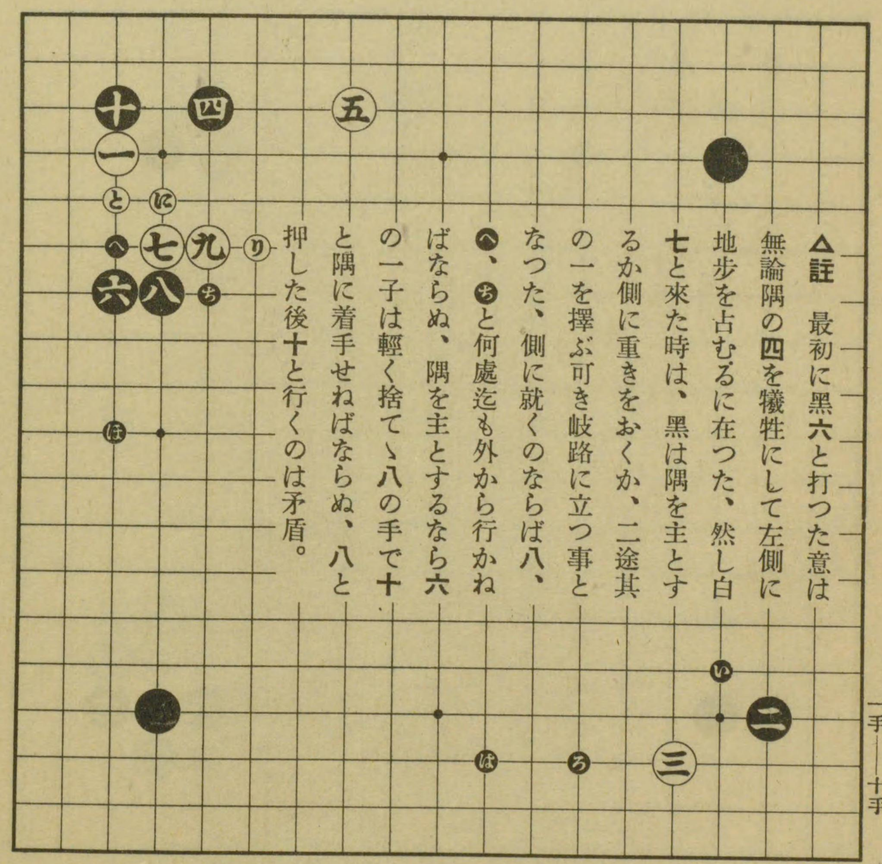
中押勝　少年M君
來賓H氏

△冠註　黒四でいと堅實に尖んでも或はろ、又はぬと積極的に攻勢を取つても敢て差支はない。

然し白が三と黒右下隅の獨占を妨げて來たに對し、黒も亦白左上隅の獨占を妨げて四と打つのは合理的對策である。

黒六は白がにと尖まばほと拓かうといふ（卷頭第四頁參看）考である、白七はにの尖みに比して稍複雜な策戰を含んで居る。

○　黒八は單に十と頂く可く一たん八と押した以上は十の手でへと曲り、白と、黒チ白りとせねばならぬ。



△註　最初に黒六と打つた意は無論隅の四を犧牲にして左側に地歩を占むるに在つた、然し白七と來た時は、黒は隅を主とするか側に重きをおくか、二途其の一を擇ぶ可き岐路に立つ事となつた、側に就くのならば八、へ、ちと何處迄も外から行かねばならぬ、隅を主とするなら六の一子は輕く捨てゝ八の手で十と隅に着手せねばならぬ、八と押した後十と行くのは矛盾。

一手―十手

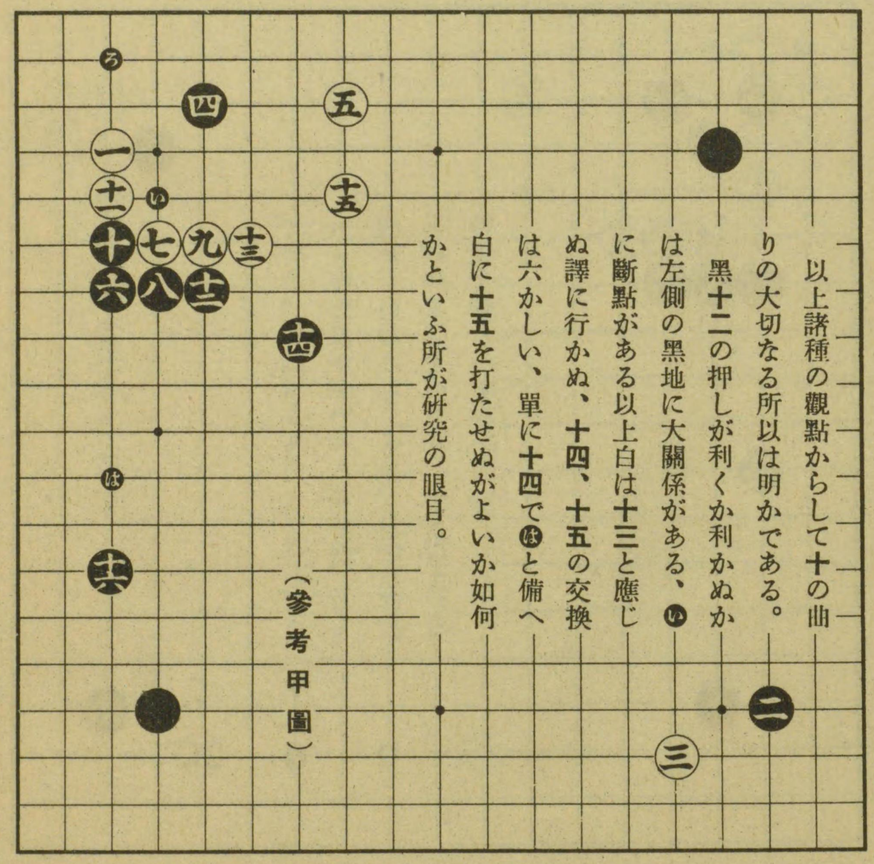
以下三圖は前頁黒八の參考圖

△（參考甲圖）　前頁でも說いた通り、黒が一旦八と外から押した限り、其の意を繼承して側に重心を置く可きである。

黒十の曲りは大切である、從つて白は九の手で玆（十の點）を押へる手もある、然し九の點も大切であるから、白としては九と行びるか、十へ抑へるかは暫らく問題としておくも白九ならば黒としては是非共此く十と曲らねばならぬ。

其は捨てるものと覺悟した隅の利を削つておく意味もあり、又いの斷點を利用してろと走る味もある。

白から十の點に抑へられて六、八の二子がダメヅマリに陷るのを嫌らふ意味もある。



以上諸種の觀點からして十の曲りの大切なる所以は明かである。

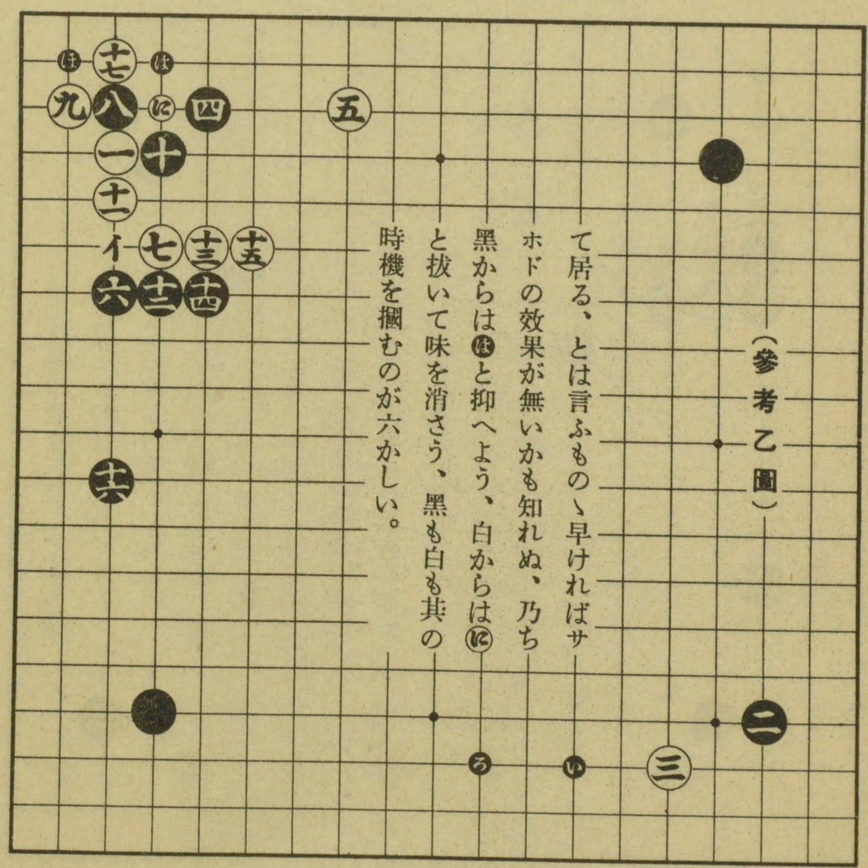
黒十二の押しが利くか利かぬかは左側の黒地に大關係がある、いに斷點がある以上白は十三と應じぬ譯に行かぬ、十四、十五の交換は六かしい、單に十四でほと備へ白に十五を打たせぬがよいか如何かといふ所が研究の眼目。

（參考甲圖）

△（參考乙圖）　黒が隅へ八と頂けた時、白は圖の如く九と綽ねるか、其ともイと抑へて側に迫るかは白の自由である、白九に對して黒十、白十一、黒十二、白十三迄は確定の手順である、乃で黒十四、十五の交換を遂げておいて十六と左側に備へ、白亦十七と綽ねて隅の死命を制する段取りである。

黒は十八の手を何處へ打つか、いと一間に夾むか、ろと三間に夾むか二途其の一を擇んで白に迫るが此の場合に於ける黒の取る可き方針。

たゞ黒も白も忘れてはならぬのは左上隅を黒よりはと抑へる味である はと抑へられた限り、白がにと取らねば黒よりはと截られ本劫となるは必至の勢、黒ははと行く時機を覗つて居る、とは言ふものゝ早ければサホドの效果が無いかも知れぬ、乃ち黒からははと抑へよう、白からはにと拔いて味を消さう、黒も白も其の時機を摑むのが六かしい。



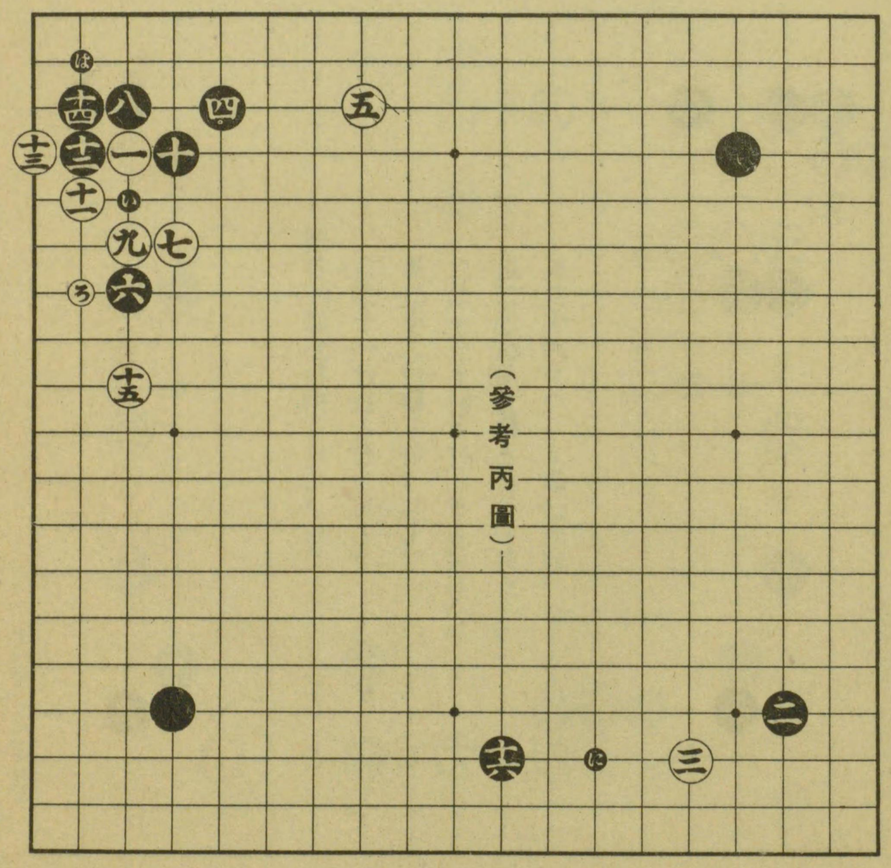
（參考乙圖）

△（參考丙圖）　黒八に對する白九は堅實な手である、十一、十三は一の一子を犧牲として輕く玆を捌かうといふ意、白十三の時、黒の應手に二通りある、一は圖の如く十四と粘ぐ手、一は白一の一子をいと拔く手である。

黒十四と粘げば白十五と夾んで姿勢を整へる、若又黒十四の手でいと拔けば、白は六の裾をろと綽ねる、孰れも定型である。

圖の如く黒十四であれば隅は極めて堅實に治まるが、黒十四の手でいと拔き、白ろと運んだ後は、時機を見て白より隅十四の點にアテ、黒はに白一と劫に行く味が殘る。

本圖白十五となれば黒當面の急はに若くは十六と夾む手順である。



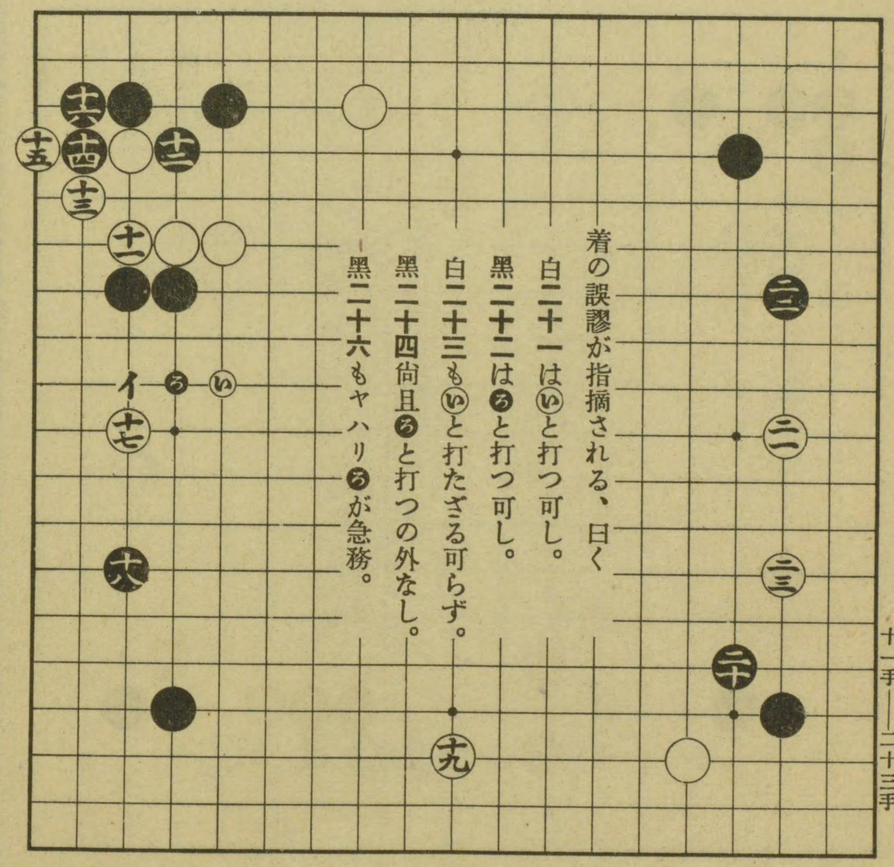
（參考丙圖）

○ 白十七、本來は一路窄くイとしておく可きで然らば二子の黑は容易に動く事は出來ぬのである。

白十七と一路疎な處へ、今黑より十八と迫られたのであるから、白としては十九の手でいと圍ひ、黑二子を完全に手中に收めておかねばならぬ、其が本手である。

然るに白は十九と他に着手していの要着を缺如して居るのは由つて以つて黑の乘ず可き機會であるから黑は二十の手でろと打ち、十七の一子と左上六子の白とを兩斷して攻める手段に出づ可きで、然すれば十八の一子も效力を發揮し、一方捨石となつて居た六、八の黑二子も活動する事となるのであつた。

此の意味の繼承として次の黑白數



着の誤謬が指摘される、曰く

白二十一はいと打つ可し。

黑二十二はろと打つ可し。

白二十三もいと打たざる可らず。

黑二十四尙且ろと打つの外なし。

黑二十六もヤハリろが急務。

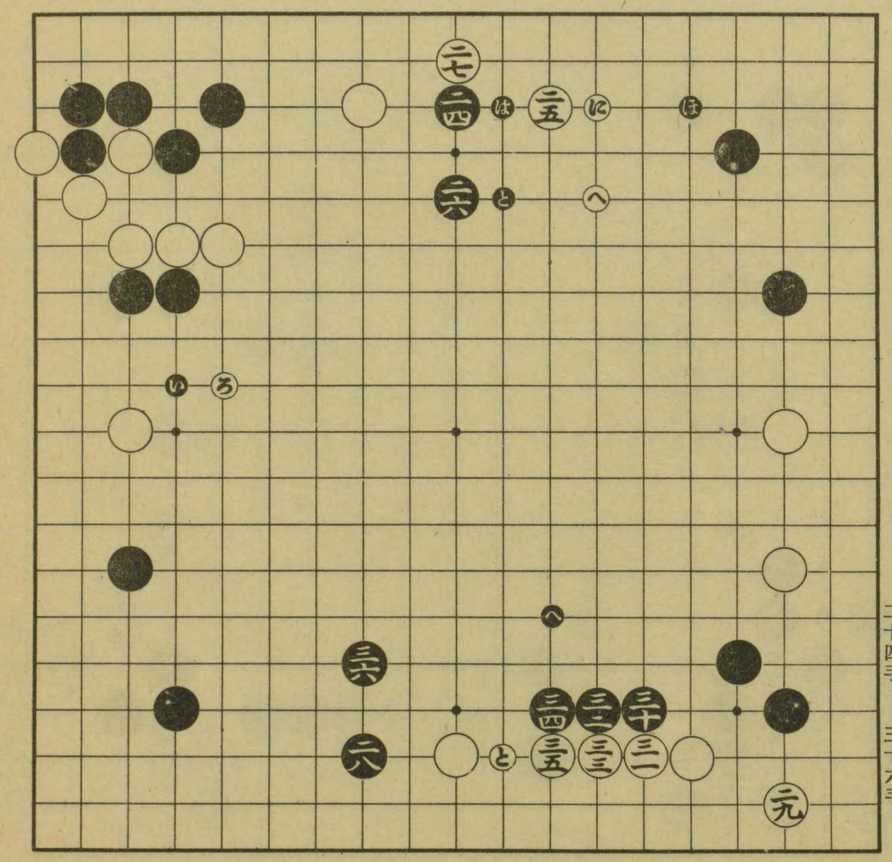
十一手——二十三手

○ 黑二十四、二十六の二着共局面唯一の重要所たるいに打つ可きである、本局の勝敗係つて此の一着に在りといふ可き要點である。

然し左側の如き大切なる個處なくして單に上側方面に着手するとせば黑二十四は一路控へてはと打つがよい、其の時白若しにと來たらば、黑はほと尖んで右上隅を守り、白へと飛んだ時黑亦とと飛び、白を左右に隔てゝ戰ふ可きである。

黑二十八は緩慢至極、ヤハリいが要點である。

黑三十二は輕く三十四と飛び、白三十三の時へと飛び、白にとと後手を引かしていに先鞭をつく可く、黑三十六に至つても、尙いの要點たるに氣付かざるは不思議である。



二十四手——三十六手

○　白三十七悪し、早く五十二と打たざる可からず。

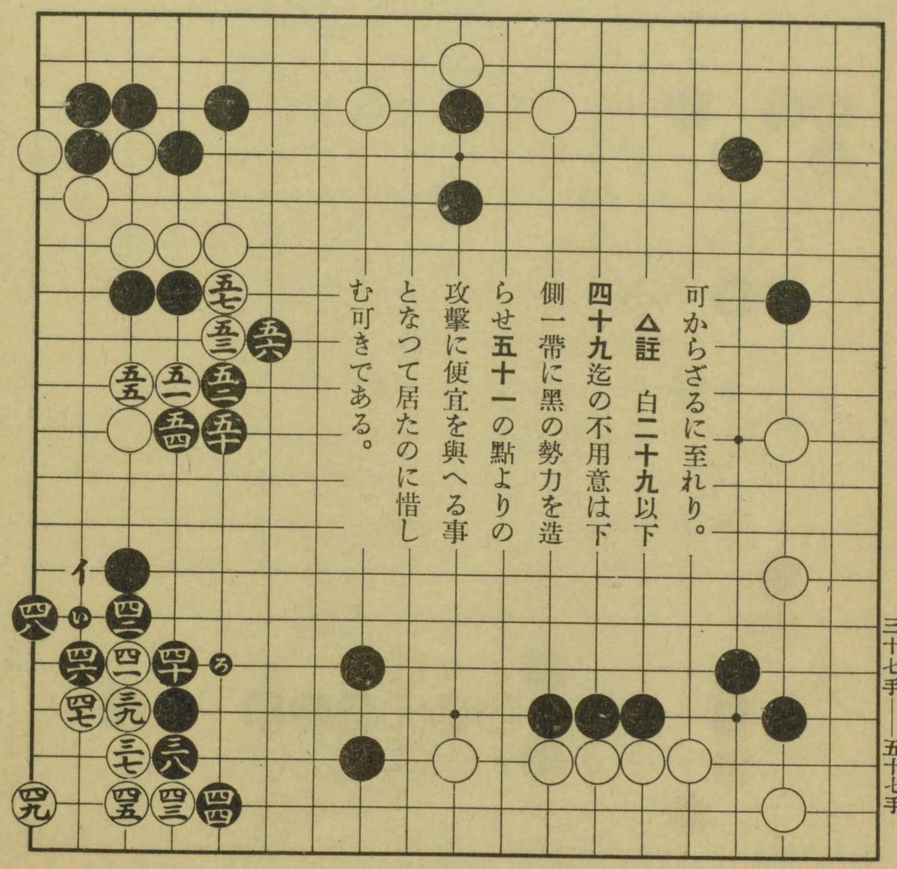
黒四十は四十一の點に抑へ、白四十六、黒ゐ、白四十、黒四十二、白四十三、黒四十四、白四十五、黒ろ白四十七と後手を引かして左側五十一の點に着手す可し。

黒四十八打たずして單に五十一とし、白に迫る可し。

△註　先手粘ぎである四十八を打たずに置けといふのは、保留して置いて次に五十一の點から白に迫り、白の動き具合によりて、ゐ、イ、四十八の三種の粘ぎ方の何れかで上下兩方へ利かせる機會があるかも知れぬからである。

黒五十は五十一の點を要處とす、一路の差は勝機を逸して終に挽回す可からざるに至れり。

△註　白二十九以下四十九迄の不用意は下側一帶に黒の勢力を造らせ五十一の點よりの攻撃に便宜を與へる事となつて居たのに惜しむ可きである。



三十七手——五十七手

○　黒五十八はスヂチガヒにて悪し、ゐとして中原を守るを正形とす。

白五十九は輕卒なり黒の失着に乘じ直ちに六十二の點に綽ぬ可し。

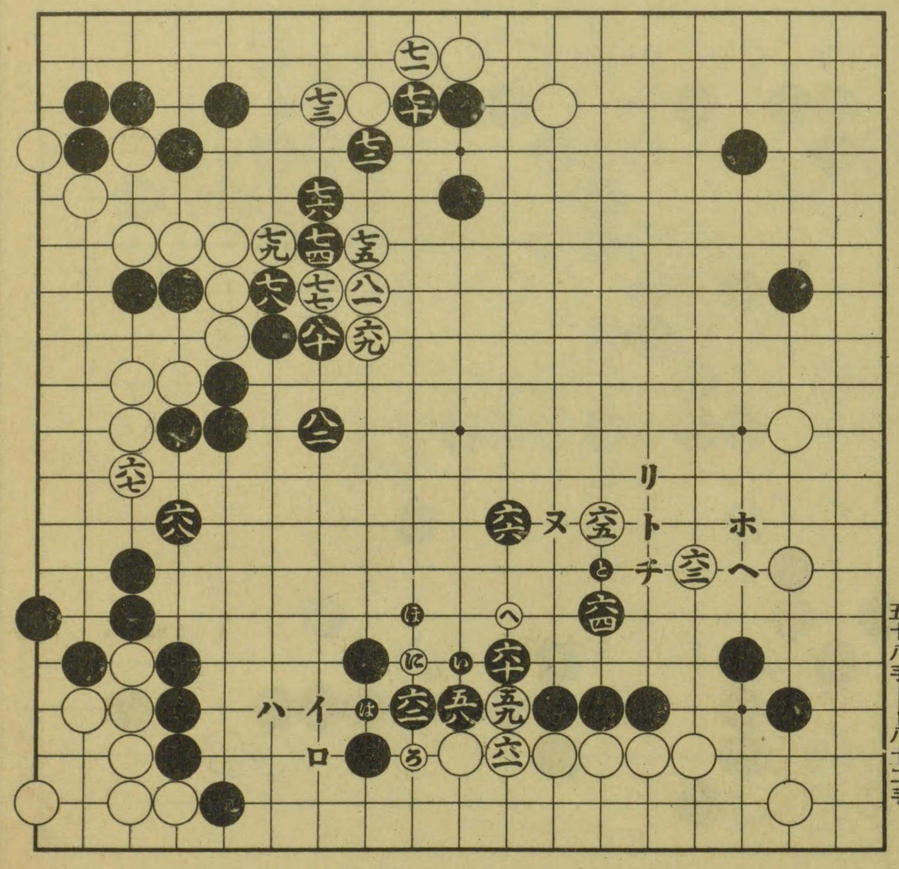
△註　其の時黒ゐと行び、白ろと粘ぎ、黒は、白に、黒ほとなつて味の悪い事夥しい、或は白ろの時黒にと封鎖し白は、黒イ、白ロ、黒ハと成つても黒は損をした上に後手であるからお話にならぬ。

○　黒六十二は白よりへと夾まるゝ味あり（中原侵略の因となる故）面白からず、ゐと堅固に粘ぐ可し。

黒六十四はとして差支ない。

黒六十六の手でホと覗き、白へ、黒ト、白チ、黒と、白リ、黒ヌと二子の犧牲を拂つて中原を始末す可し

黒七十は七十一へ抑へる事無論。



五十八手——八十二手

○ 白八十三はいと頂く可し。

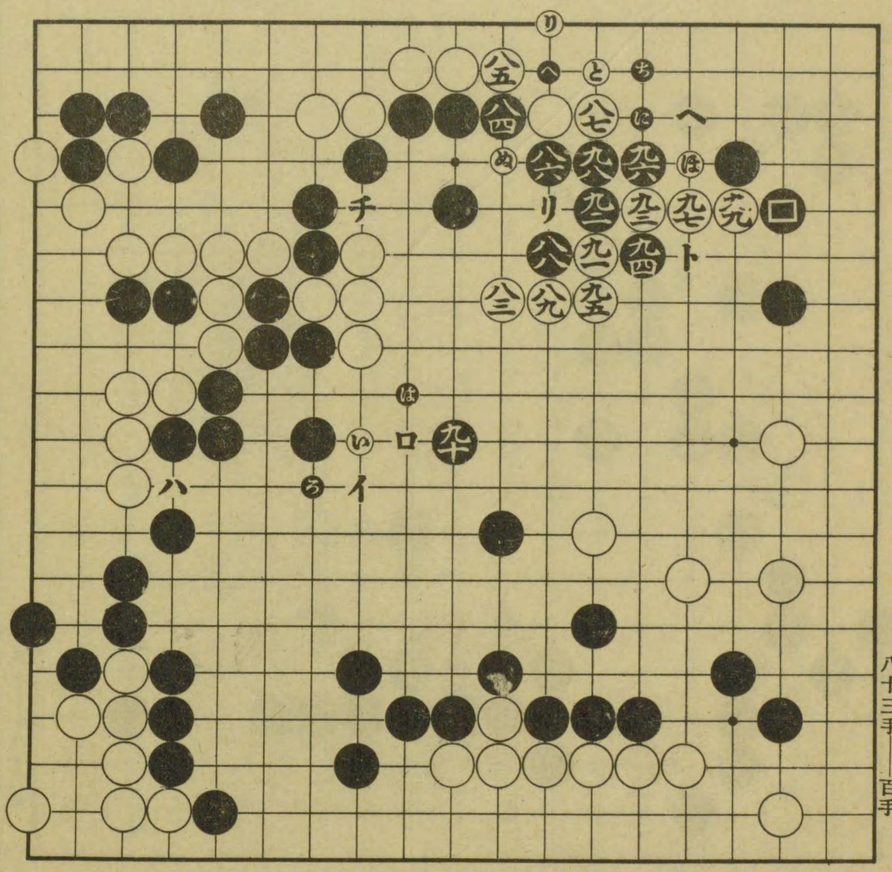
△註 白よりいと迫まられたならば、黒はろと行びるか、或はイと綽ね、白ロの時ろと手戻りするか何れにしても左方ハの缺點と關聯して色々味のある處であり、黒に手を引かせるだけ打ち得である。

○ 黒八十八はほと備ふ可し。

黒九十二は九十三の點に打ち、白九十二、黒九十八、白九十六、黒に、白ほ、黒へ、白と、黒ち、白り、黒九十七と始末す可し。

△註 然すれば其の結果ぬと截られる中邊多少の犧牲は餘義なしとするも右上隅は安定する。

○ 黒九十八の手で九十九とし白九十八、黒リ、白ほ、黒へ、白に、黒ト、白九十六、黒チとす可し。



八十三手——百手

（指）

㋹は四子粘ぐ

△黒十は悪手である、イと下つて白二子を提らうといふ手の利く處を十一と粘がせて今度はイの點に截り提られる手が出來る。

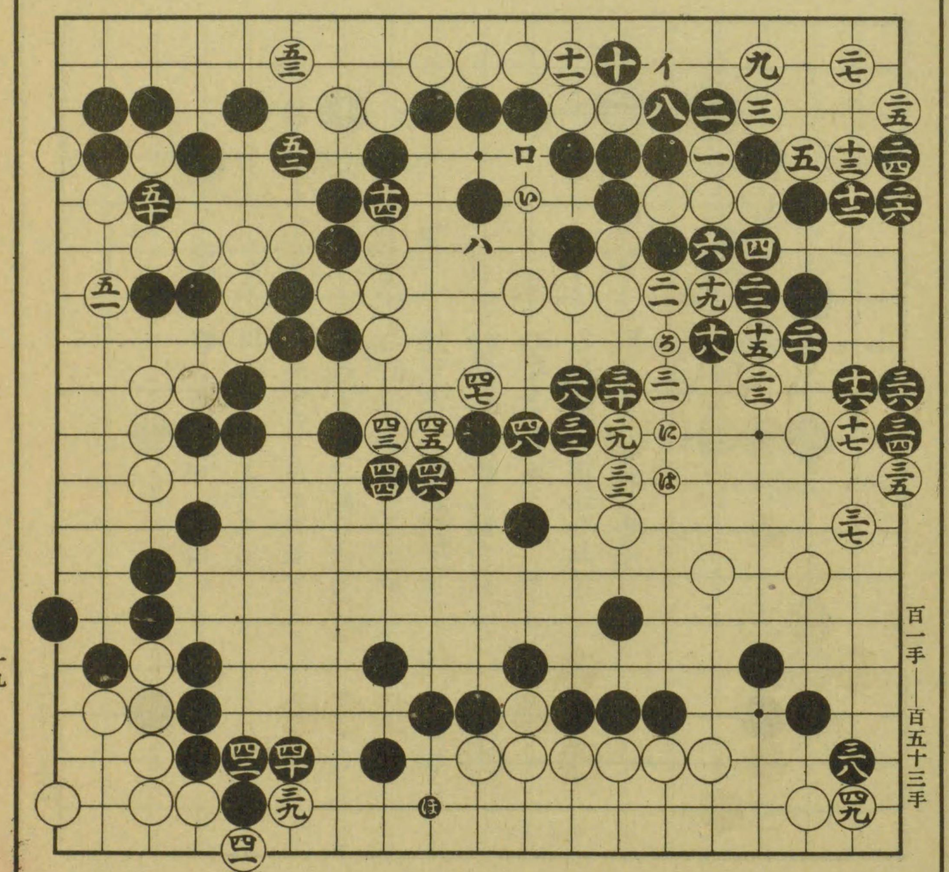
○ 白十五はいと打ち黒に手を引かせてからである。

△註 白い、黒ロ、白ハ、黒五十二と運ぶ。

○ 白十九もヤハリいである。

△黒二十は二十一に截り、白ろの時二十二に拔けば大劫爭となるか或は更に十五の一子を拔くか何れにしても黒大利である。

△黒二十八は三十三に頂け白は、黒二十九、白にの次ぎほと打つて白の地を削りつゝ三十九の手を拒いでおけば尚勝敗不明の局である。



百一手——百五十三手

（指）

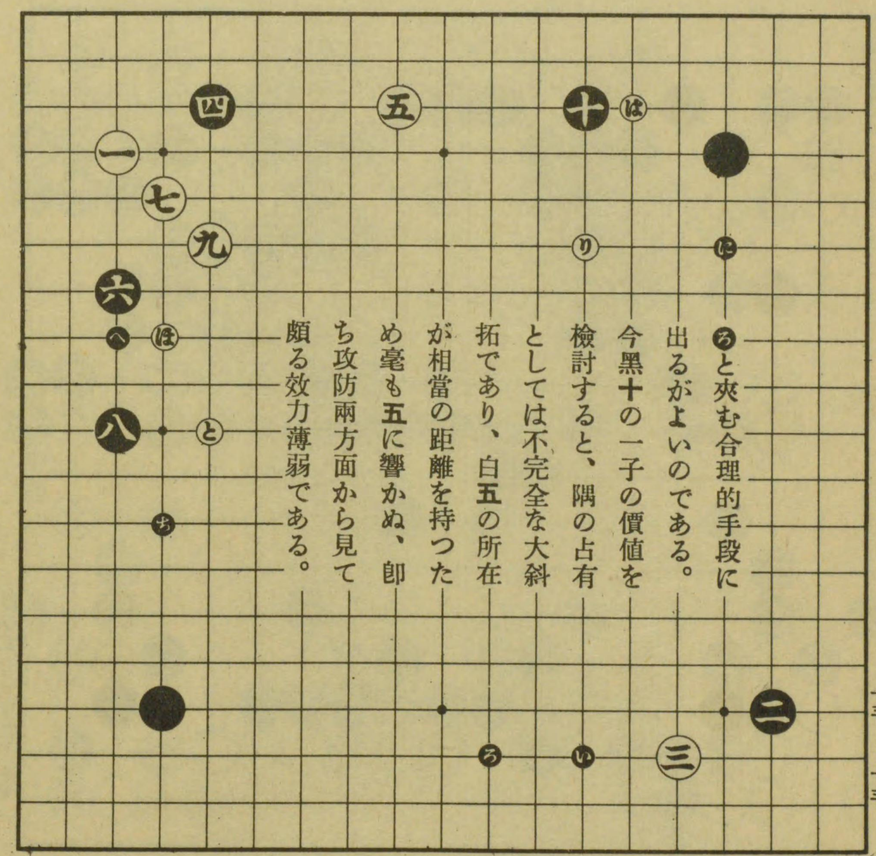
二子第二局

中押勝　少年S君
來賓T氏

○　黒十はいの若くはろと白三を夾み攻むるを急務とす。

△註　白九の策戰は右上へはと掛つて黒をにと飛ばせ、次でほと左側へ迫り黒への時とと壓し、黒がちと應じた時りと飛躍して上側方面を廣く取らうといふにある、乃で黒は其の策のウラを掻き、十と先鞭を着けたとすれば一理ある着手である、然し上側左方が白五の三間夾で、黒四の活動す可き餘地は十分ある、上述白の策が遂行されたとしても黒は敢て驚くに足らぬから悠然として右下をいの若くはろと夾む合理的手段に出るがよいのである。

今黒十の一子の價値を檢討すると、隅の占有としては不完全な大斜拓であり、白五の所在が相當の距離を持つため毫も五に響かぬ、即ち攻防兩方面から見て頗る效力薄弱である。

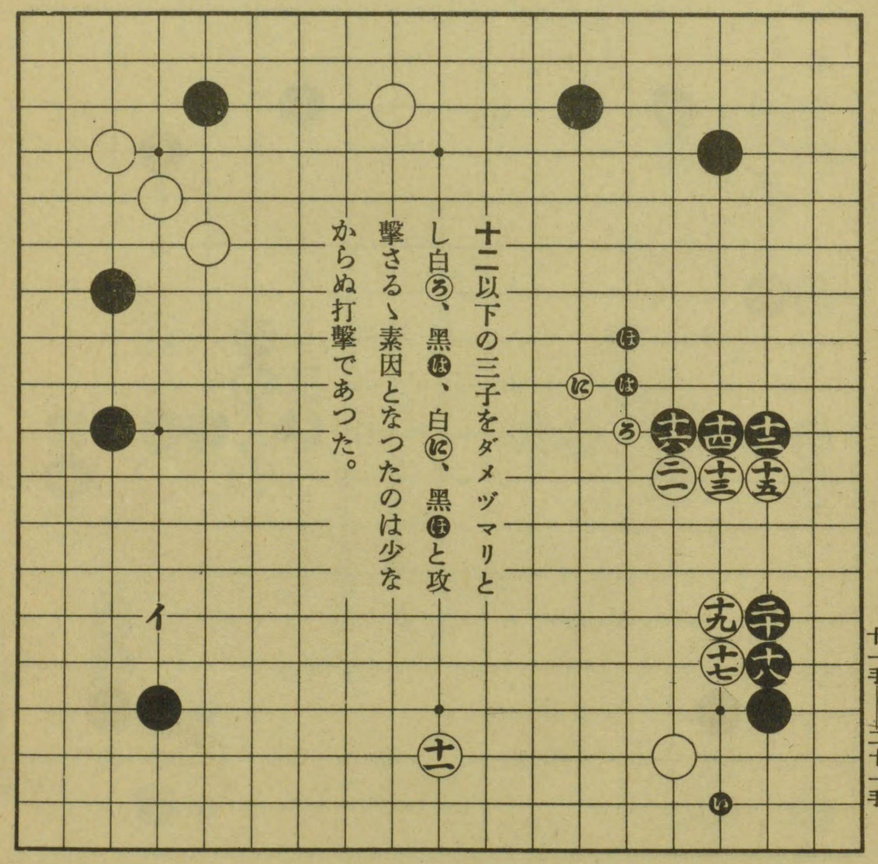


○　黒十二は寧ろ左下隅をイと飛ぶを以つて優れりとす。

△註　要するに十の着點宜しきを得なかつた爲め局勢に多少の弛緩を來たしたのは致し方がない、十の散漫に次ぐに十二の散漫を以つてす、二子の效力は雲煙模糊の感がある、或は十二の手で右下隅より十七の點に尖んでおくのもよい、其は布石の當初四の手の時でさへ好着點と評された處であるから今十二で十七に尖み此の方面に於ける白の策動に制限を加へておくといふ事は確に良い譯である。

○　黒二十はいの點に隅を守るを適切なりとす。

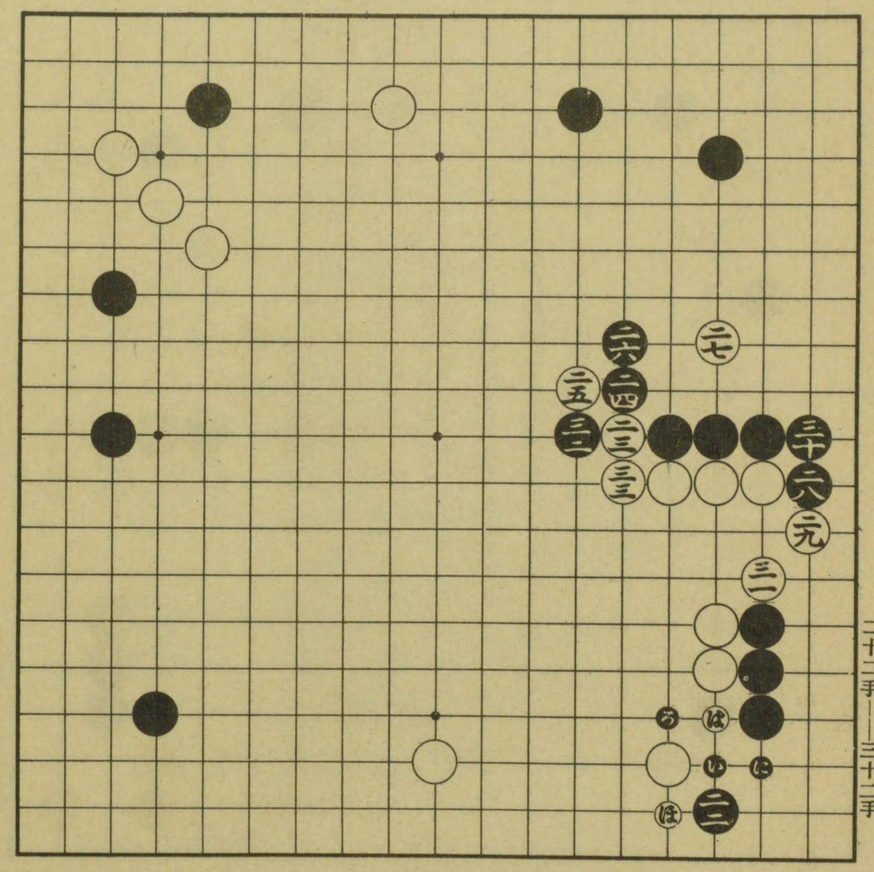
△註　黒二十と行びた爲め白に二十一と一着兩利の手段に出られ、十二以下の三子をダメヅマリとし白ろ、黒は、白に、黒ほと攻撃さるゝ素因となつたのは少なからぬ打撃であつた。



○　黒二十二は緩漫なり、二十の押しにより、白二子のダメヅマリとなりたるを奇貨とし、先手を以つて此の隅の始末をなす可くいの點に尖み頂けざる可からず。

△註　二十二の手で黒がいとした時、白二十二の點に綽ねたならば、黒はろと綽出し、白はは、黒にに、そこで外部の白には上下兩方に缺陷が出來る、或は白二十二と綽ねずろと立たば、黒手抜。

或は黒いの尖頂に對し、白單にはの點に下らば、黒も亦二十二の點に沿うておけばよい、其の時白はとしても三十一の點のダメが明いてゐる故黒手抜にて隅活、白若しはを手抜せば黒よりろと綽出す手が殘る。

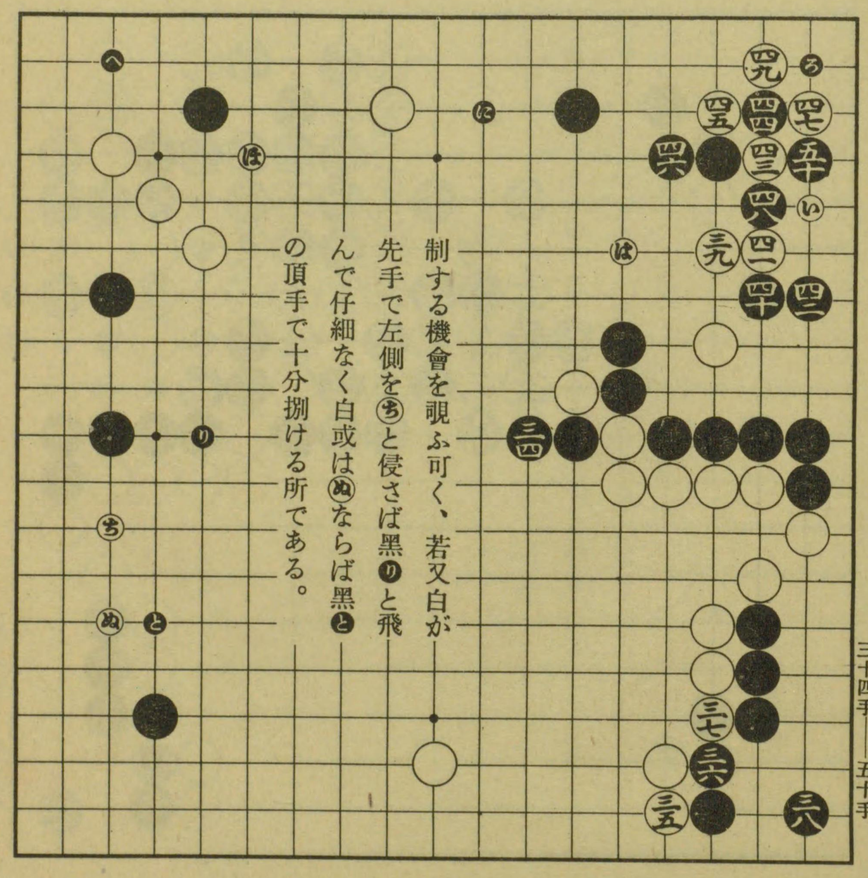


（指）

○　黒三十四は無用、單に三十九と打ち白二十七よりの策動を制限するを急務とす。

黒四十八惡し、四十九の點に行び、白いと掛粘ぎ、黒ろと曲り、白はと飛べば、黒亦にと飛び、白を中原に逸走させて實利を占む可し。

△註　本圖の場合、黒は二十、二十二及三十四に於て着點を誤り不利の局勢を釀せしとは言へ、四十八以下に於て評の如く右上隅の活を確實にし、活き形の確定せぬ白三十九以下を中原に逸走せしめて其の機會に右側中邊の黒を安定する方針に出たならば決して悲觀す可き局面ではなかつた、卽左上隅は白にはと掛けられた後に於てもへと走る味あり、黒はとに大勢を制する機會を覗ふ可く、若又白が先手で左側をちと侵さば黒りと飛んで仔細なく白或はぬならば黒とへの頂手で十分捌ける所である。



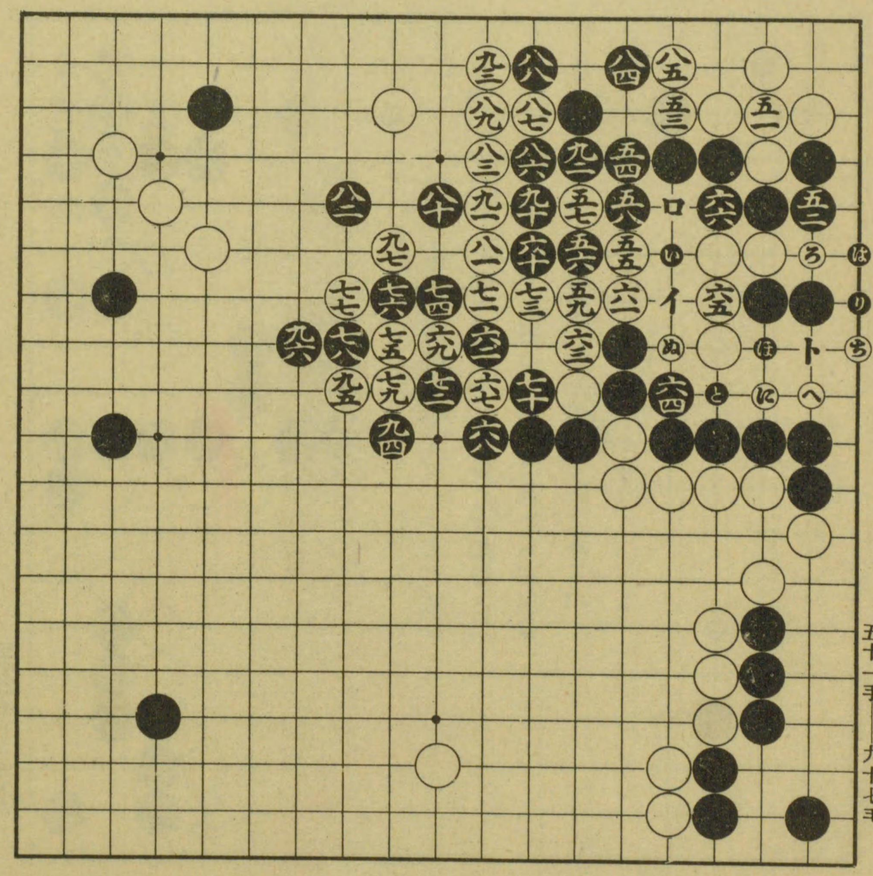
（指）

○　黒五十六はぬとワリ込まざる可らず、其の際白イとするもロとするも其の何れたるに論なく黒は五十六と夾む可く、然らば圖の如き慘境に陷らざりしならん。

以下又評論の限りに非ず、白より九十七と打たるゝに至つて黒は右側ろの點に後手活の餘義なき手順となりては到底人力の及ぶ處に非ざるを如何せん。

△註　圖の後、黒若し手拔すれば、白よりろと出られ、黒はと盤りし時、白にぬと尖まれ（黒へならば白トで眼なし）黒はの時、白へと下り、黒とと截つた時白にちと尖まれて萬事休する次第である。

一目敗けた日は碁を打つな
二番連敗の時は中止せよ　（俗諺）



（指）

二子

第三局

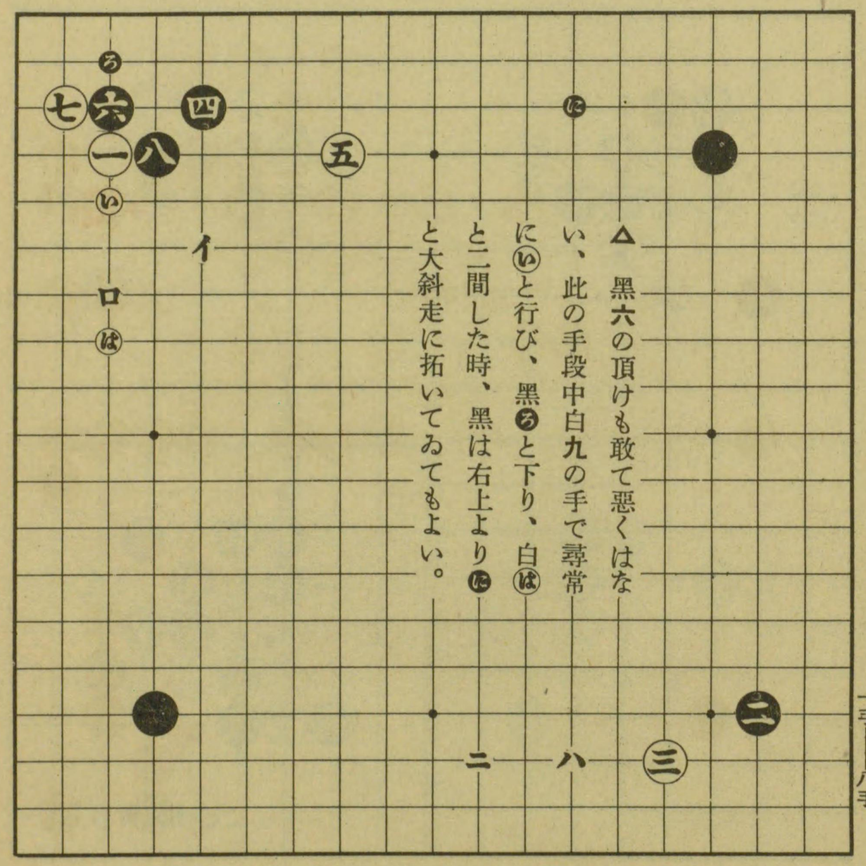
勝　少年T君
來賓K氏

○　黒六の手を以つてロの點より二間に夾返すも又一策たる可し。

△註　元來白五と高く二間に夾んだのは策戰を主とした手で普通定石ではない、白五の意味は、黒の意表に出て局面の紛擾を誘起しようといふ考も多少ある、要するに此く着點が一路高いだけ、白としては輕く捌ける譯である。

黒六でロと二間に夾返した結果は如何なるか（參考天圖參看）

白五に對し黒はイと二間し、白ロと二間に應じた時、下側をハ若くはニと夾む手法もある。



△　黒六の頂けも敢て惡くはない、此の手段中白九の手で尋常にいと行び、黒ろと下り、白はと二間した時、黒は右上よりにと大斜走に拓いてゐてもよい。

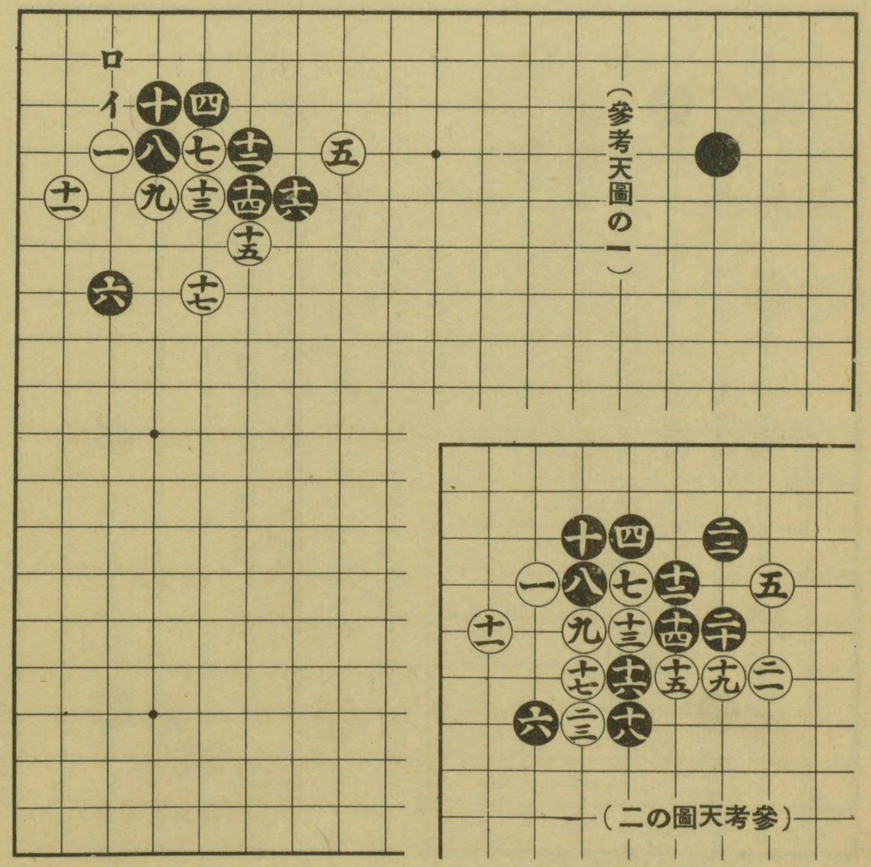
（指）

△（天圖の一）　右下隅の配石が征關係に有利であるから、黒は八と綽込んだ（白九の手で十の點を截り、黒九と行びた時、白イと隅を粘ぐと黒に十二の點から七の一子を征として取られる）其故白九は餘義ない手である、白十一は粘ぎを兼ねて後にロの飛びによつて隅の活を保留する巧妙手段。

黒十二、十四と平凡な直接行動に出ると、白十五、黒十六と虚三角の不利に陷る。

△（天圖の二）　前圖黒十六の愚形を避けるために、此く十六と截つたならば如何。

白に十七と利かされ、更に十九、二十一の行びによりて十六、十八の二子を取られる不利を免かれぬ。



（參考天圖の一）

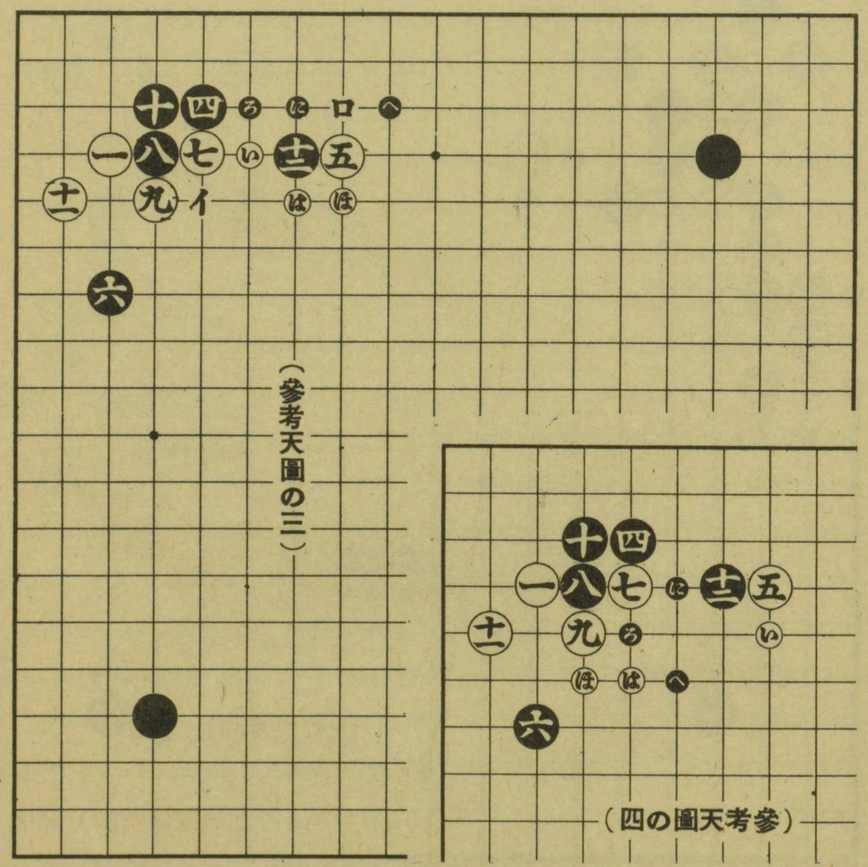
（二の圖天考參）

△（天圖の三）　此の場合黒の取る可き手段は、前圖十二、十四と行く直接行動を避けて、單に圖の如く十二と頂けて樣子を見るのが賢明の策である。

乃で白がいと突き當つて來れば黒ろと應じ、白はの時にと粘ぎ、白ほと粘がば（其はロと抑へ込まうといふ考であるから）黒はへと飛び、徐ろにイの斷點を覗つてゐるがよい。

△（天圖の四）　或は白十三の手でいと立たば、黒ろとアテ、白はとアテ返した時、にと拔き、白はほと粘ぎ、黒亦へと出る手順。

要するに此の處多少黒に不利の傾きのあるのは、白一と先着の主權に向つて黒四と客位を侵して行た處であるから致し方はない。



（參考天圖の三）

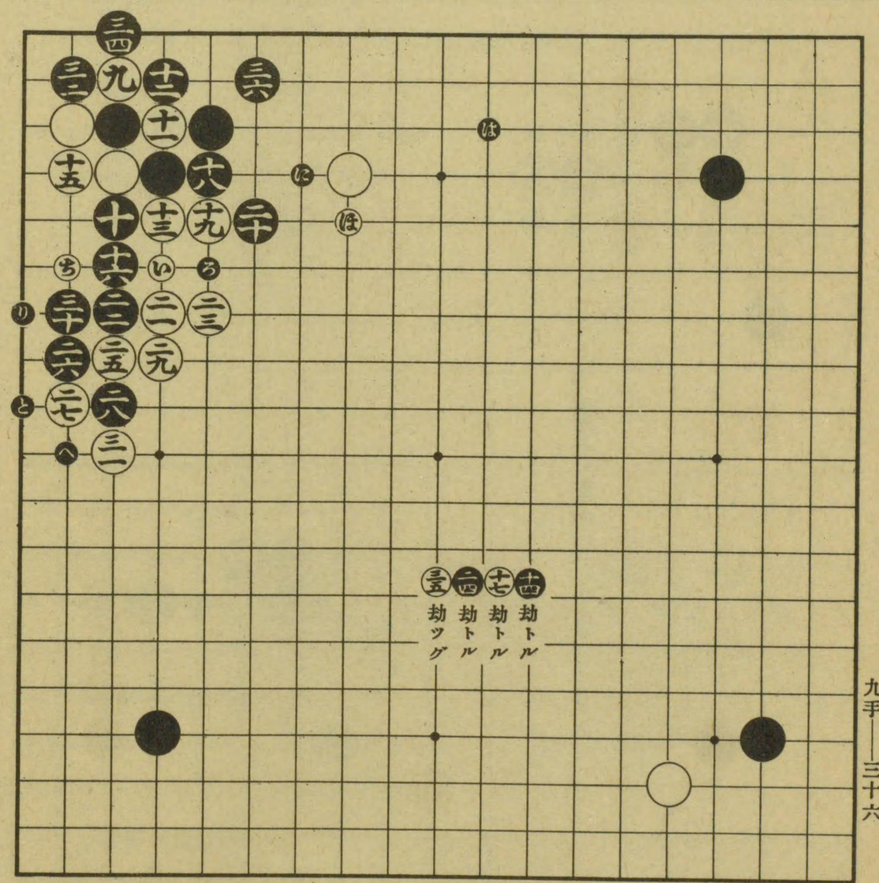
（四の圖天考參）

○ 黒十六は十九の點よりアテ、白い、黒ろ、白二十一、黒二十三、白二十九と運び、十の一子を捨て、玆に先手を取つてはと打ち、上側に於ける白の策動に制限を加ふ可し。

○ 黒二十四と劫を取る手を以つてにと尖み頂け其の應手を問ふも一策たる可し、黒にの時白はと立たば黒二十八と飛んで左側を治まる可く、若又黒にに對し白手拔にて二十五と綽ねなば、黒二十六、白二十七、黒二十八、白二十九、黒へ、白三十、黒とと拔き、白ちの時、黒は先手を取つてはと綽ねる手順になる。

○ 黒三十でりと掛粘いておけば後劫の時多少有利なり。

△註 白三十三は一應三十四の點に下つておく可きである。



九手——三十六

（指）

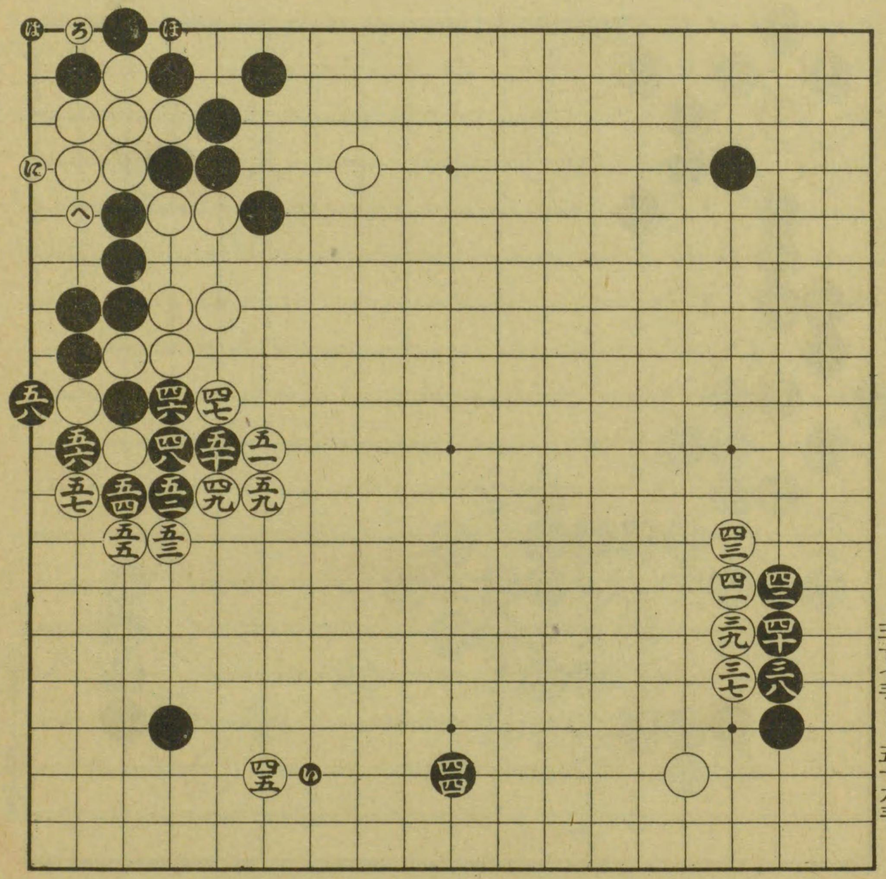
○ 黒四十は普通に四十二と飛び一歩を先んじおく可し。

○ 黒四十四はいと左下より大斜に拓きて徐々に自己の地域を纒めざる可からず。

△註 征待ちとして四十四の如き露骨にして而も着點の漠然たるは拙劣の甚しきものである、征待ちの一着が非常に嚴しく利く場合は別として然らざる限りは露骨に之を打たず意味に於て白を牽制する方針を取るがよい。

○ 白四十五は四十六の點に黒一子を打拔きおくが本手なり。

△註 單に四十六と打拔いておけば、後に白からろと打込み黒はの時に、は、へと行く劫手段が殘る是亦約三十目の利害問題である。



三十七手——五十九手

（指）

○ 黒六十二は六十三に立ざる可らず、此く包圍さるゝに至つては中腹に白をして大規模の地域を造られる結果となる。

○ 黒六十八は直にいとアツ可し。

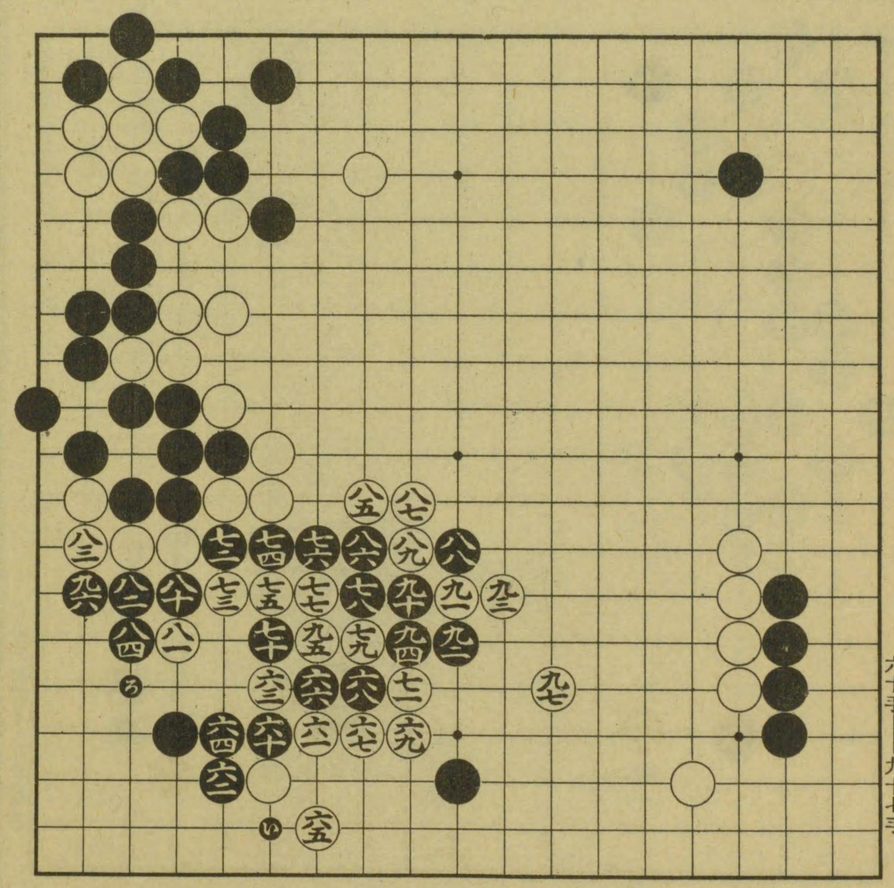
△註 此かる場合にいとアテるは本手である、但しアテられても白は決してつがぬ。

○ 黒七十二の截は無法なり、七十八と飛ぶ可し。

△註 黒七十二の手で七十八と飛び、白が七十三に掛け粘いだならば黒は隅をろと尖んで活きておけばよい。

△ 白に九十七と閉鎖さるゝに至つては形勢極めて險悪。

此の局勢では現在地域に於て黒不利なる事明了。



（指）

二子

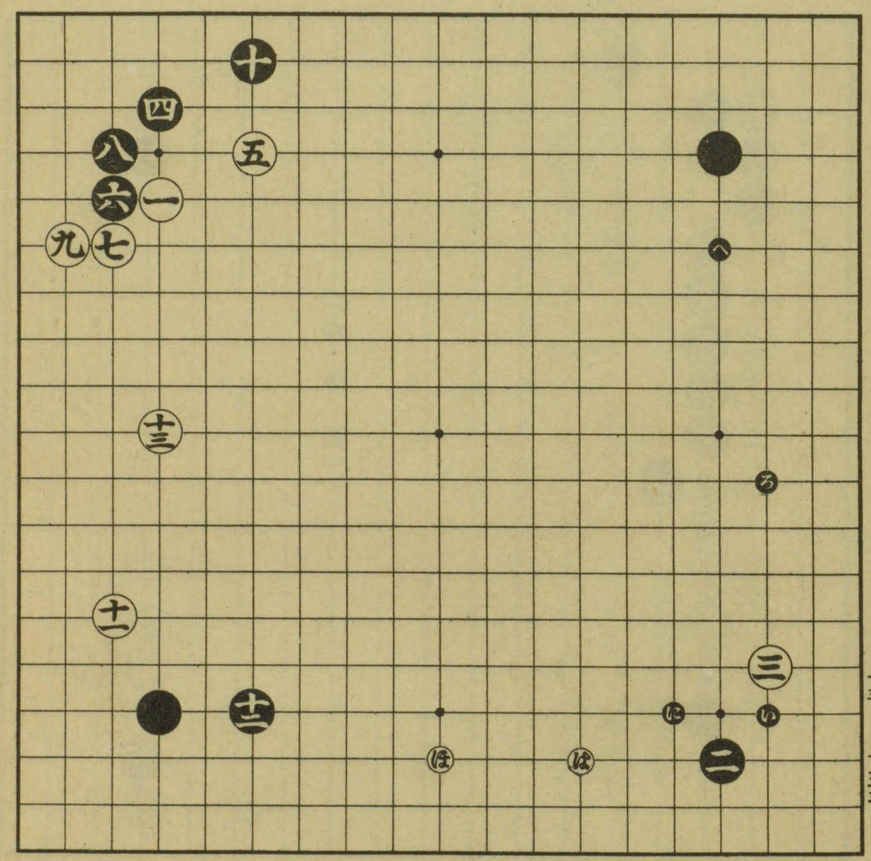
第四局

中押勝 少年M君
來賓S氏

△冠註 白一の高目に關せず黒二を右寄りの小目いに打つても差支はない、本圖二は白三の掛りに對してろと夾み、白は、黒に、白ほとなつた時右上へへと高く飛んで右側上方の姿勢を整へる意も含んでゐる。

黒四は此の場合最良の掛りである、白五は中原政策を取らうという手、白九の下りは隅に響かすと同時に左側を地にした時實利が大きい、白十一、十三は一、五、七、九の策を完成した手である。

（黒十二の變化） 參考圖を見よ。



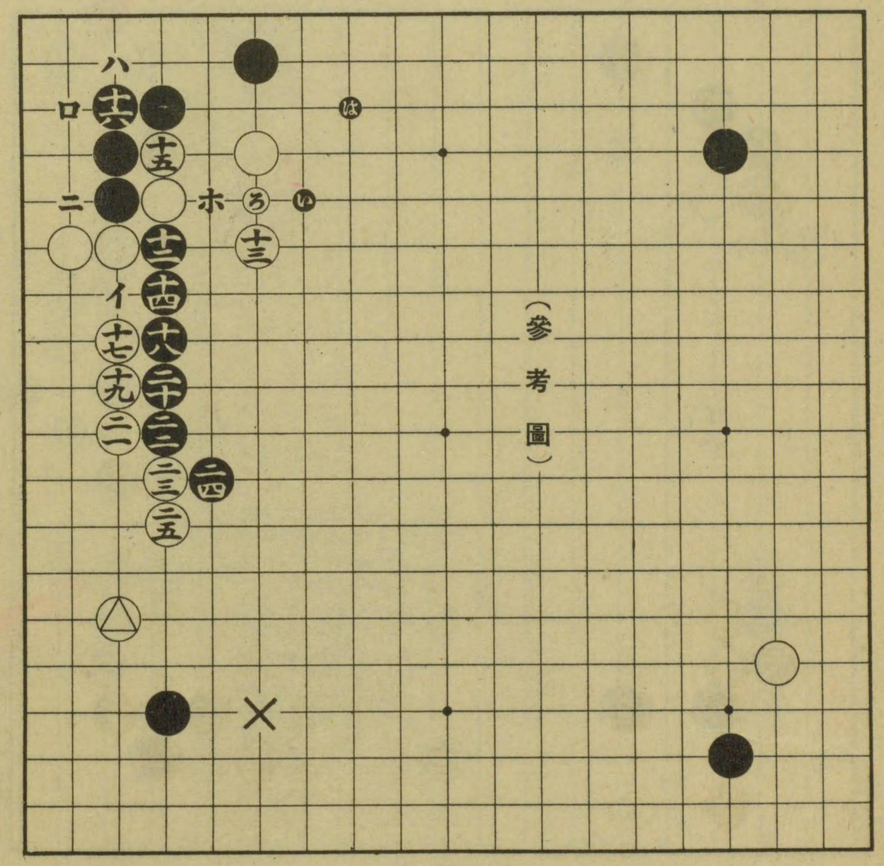
（指）

△（參考圖）　白十一（△印）の掛りに對し、黑が×印へ一間に應ずるは普通であるが、十二の手で白の計劃のウラを搔いて、本圖の如く十二と截る手段もある、白十三は此の場合の手スヂで、黑ホと來たならば十四の點から綽ね捲くらうといふ意。

白十五は十六のキリを覗ひ先手で上面の連絡を計る慣用手段である。

場合によつては黑十六の手でイと曲り、白に十六と截らせて黑ロ、白ハ、黑ニと振替る手もあるが玆では不利であるからヤハリ十六と粘ぎ、白十一（△印）の配石のある方へ十七、十九、二十一と低く這はせるのが十二と截つた主旨を貫徹させる譯。

圖の如く運んだ後黑からはいとノゾキ白ろ、黑はと行く理もある。



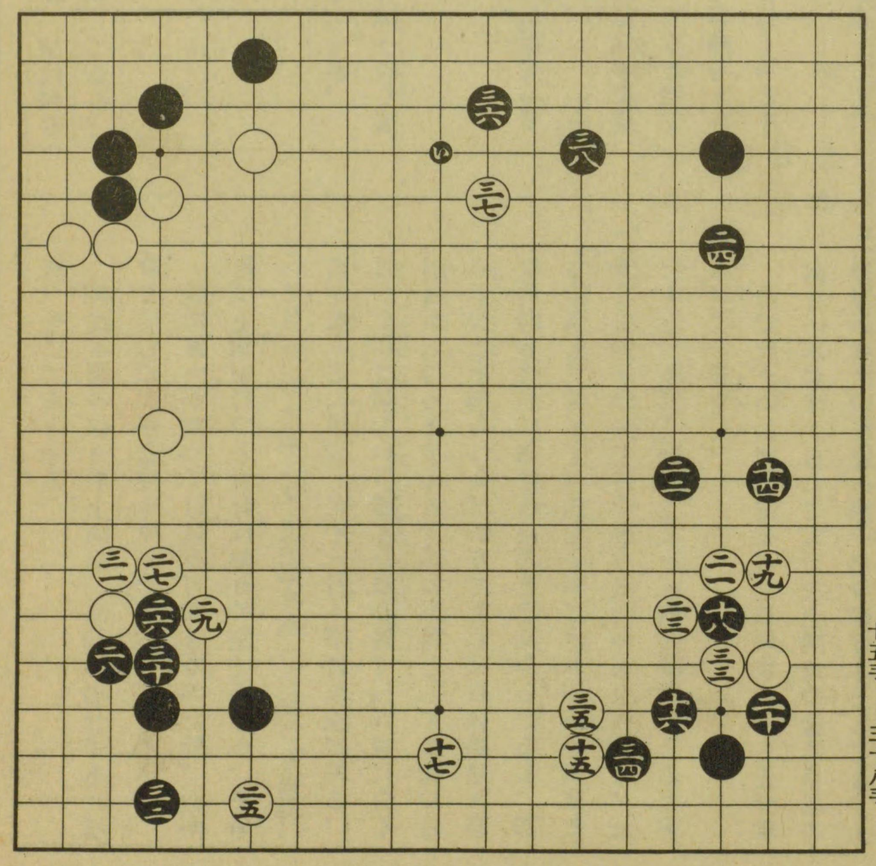
○　黑三十六は一路高く而して廣く（星に）いと打つをよしとす。

△註　此ういふ所がピタリッと要所に來る樣になれば段以上の技倆だが、初學者は元より相當有力の士と雖も迷ひ易い所である。

今初心者のために此ういふ場合打着點の撰定に就て如何いふ處から見當をつけて行くか、參考とす可き二、三の心得を記しておく。

之は應用範圍の極めて廣い布石上の注意で否注意と言はんよりは布石の通則と言ふ可き要件、其を標準として考を纏める。

モ一つは、自分が守るのは隅の何れの點なるか、といふ事、更に自分が手拔した時白に隅へ打込まれ其を活かした結果を一考する。



モ一つ重要な考は自分が今打たねば、敵は何の邊より來り侵すか、といふ事を想像して見る。

最初に擧げた布石の通則とは、

(一)自己勢力の重複に陷らぬ樣。

(二)勢力の分賦均衡に偏重なき樣。

此の二つの意味を含んで

一方が低ければ、必ず一方を高く配置する事。

一方が密(强堅)ならば、必ず一方を疎(高く廣くの意)にする事。

乃(もと)で順序を以つて考を纒めて行く。

此ういふ大きな處で上側星附近に打てば必らず白に隅を侵される。

白に隅をいと侵されたものとして黑ろ以下符號の手順で包圍した黑の勢力がちと來るものと覺悟せねばならぬ、右方の黑が堅固に低くろち等とあるものとして次に黑が上側を打つ場合低く窄くイと行くの不利は言ふ迄もない。

或は黑が隅へ白より打込まれる事を嫌うて之が備へを立てるとする。

其は本圖の如き右上隅黑一間飛の場合であればロと尖むのが隅を守る唯一の堅固な點である。

隅に備へが立つて打込不可能となつた時、白が先づ上側を打つとすれば何れの點であるか、を考へて見る、右上隅にロと堅固な備への立つた場合、白が低く之に接近してイと行く事は危險である、何となれば忽ちハの邊より黑に隔てられ假に白イが逸出し得るとするも、其の影響として左側の白地が宏壯を削られるばかりでなく、右側黑地×邊の薄弱も自然に補はれる事となるからである、即ち繰返して言うと、黑右上隅にロと備へが出來た後は上側方面への白の來攻點はハ若くはニで、低くイと來る事は斷じてない(來れば白のため百害あつて一利なし)

乃(もと)で此ういふ考が定まる、白來攻の點を先づ奪ふといふ意味からしても、右上隅ロの邊に自己の勢力が加はつた後(黑)自身が行くとしても、上

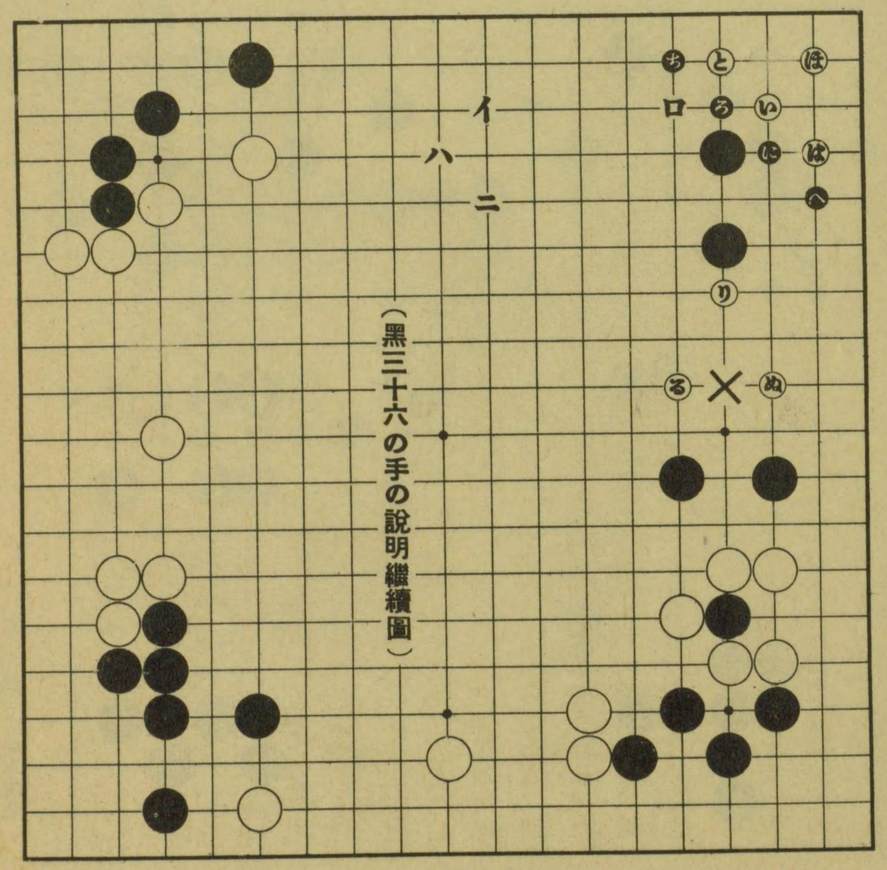
(指)

側へイと低く窄く行く道理は決してない、少くとも第四線の星にハと行かねばならぬ。

(三十六に關する詳說了)

尙本圖の形で白より黑既成の地域を侵すには、りの頂け、ぬの打込み、るの威壓等であるが、言はゞ部分的で大局的地點ではない。

モ一つ本圖の形勢で黑が注意す可き要點は、左側一帶が白模樣となつて居る、右下方面及び下側も大體に於て白の中原政策に便宜を與へてゐる、そして三隅は黑の地として稍治つて居るから黑は或る程度迄白の中原經營を妨げる意向でなくてはならぬ、隨つて右上隅を守らず小サク活かす方針を取つて、三十六で大局に着眼したのは考としては良かつた。



(黑三十六の手の說明繼續圖)

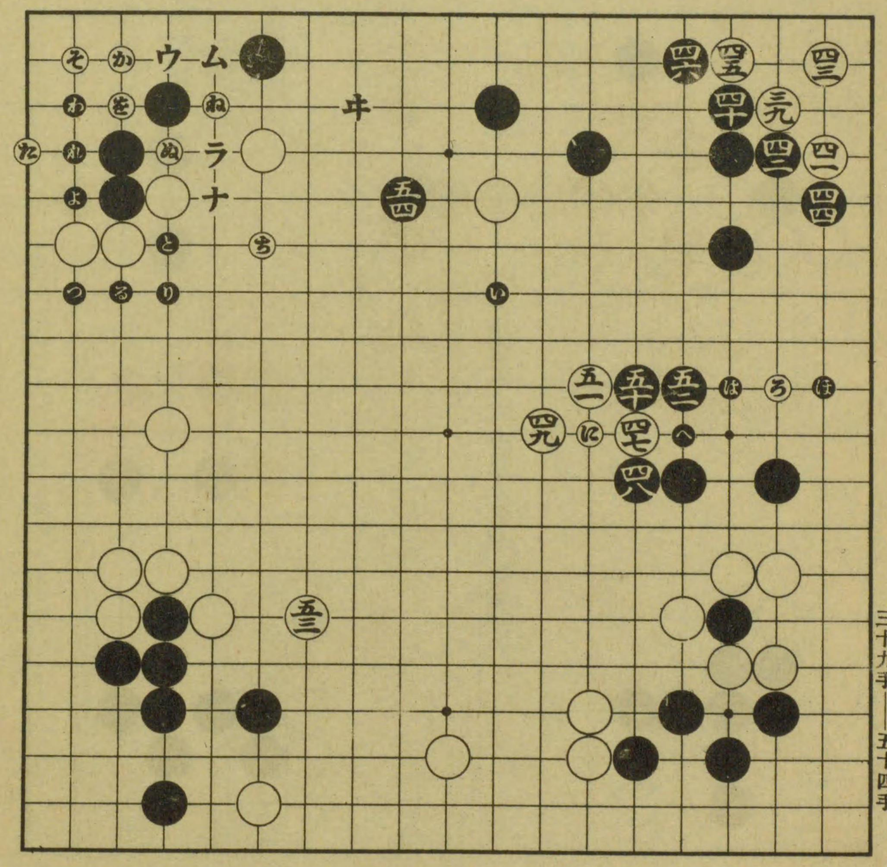
(指)

○　黑四十八以下面白からず、却つて白を援けて中原に勢力を加へしむる事となれり。

△註　黑四十八の手でいと打ち積極的行動を取るがよい、其の際白ろと來らば、黑はと頂けるの一子を右下へ盤らして先手を取ればよい、白或はろと來ずはの點に斜走すれば、黑四十八と押し、白にの時ほと走つておけばよい。

○　黑五十二の緩み惡し、へと塡めて味を消しおく可し。

△註　尙中原に於ける局勢次第で黑はとと截り、白ちならば、黑りと行び、白ぬの時、黑ると曲り以下符號順に左側と隅とを振替る手段もある、尙白ねの後黑ナ白ラ黑ム白ウ黑キと攻める手もある。



三十九手——五十四手

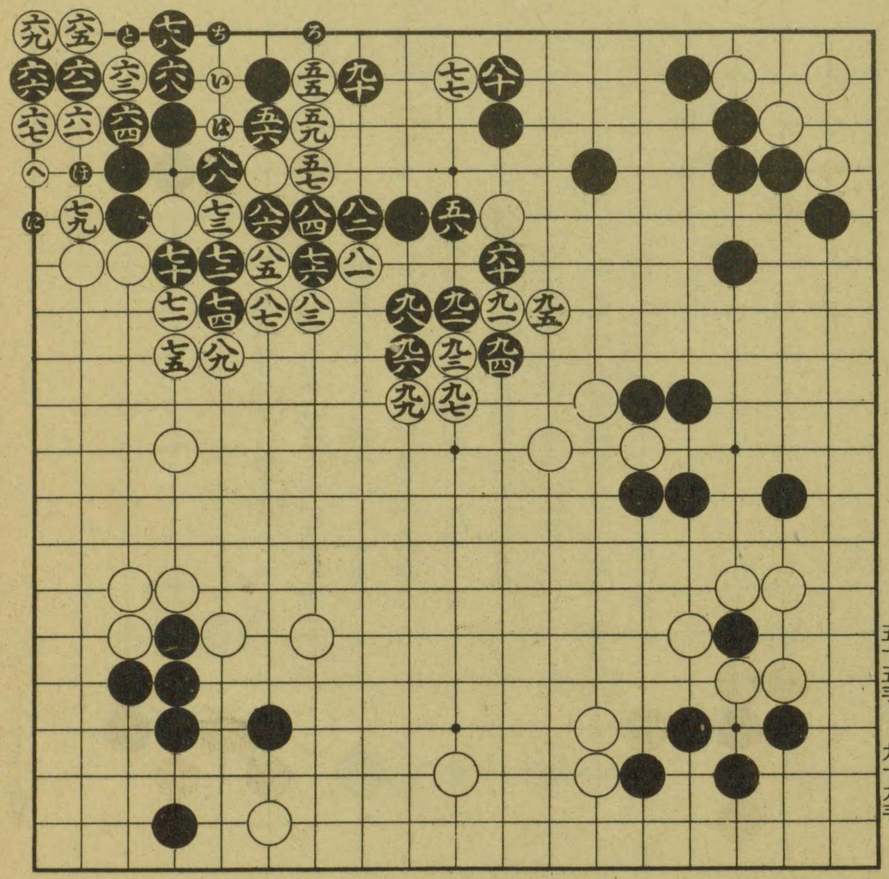
○　黑五十六は五十九の點に綽ね白五十六、黑九十、白いの黑ると振替り、白若しはと打つたならば黑は、直ちに六十八と沿うて居るか、或は此の手を保留して中原に活動す可し。

○　黑五十八は五十九の點に突破せざる可からず。

○　黑六十二の手でほから打つ方が劫は劫なれど味よし。

○　黑七十八は先づにと打ち、白七十九の時黑はほと打ち、白へと差込んだ時、六十二に打込み、白六十一に一子提つた時、更にとと打込み、白七十八の時ちと抑へて劫にするより外なし。

○　本圖白は八十一の手を以つてはの點より迫り早く黑を捕獲し、おかざる可らず。



五十五手——九十九手

二子

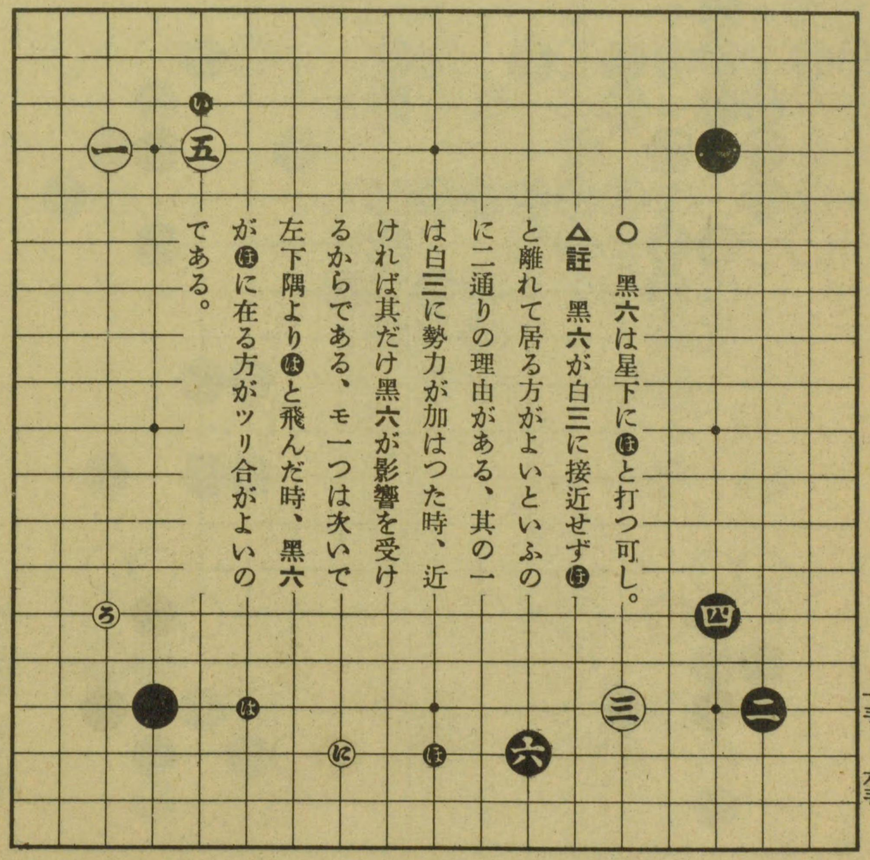
第五局

中押勝　少年Y君
來賓X氏

△冠註　白三の趣向は、黒に四と應じさせ、先手を取つて左上隅を五と締まらうといふ考である。

白の策戰が其の通り運んだとしても其が敢て黒の不利といふ譯ではないから、黒は普通に圖の如く四と應じておいてよい、黒四を全然手拔して左上いに掛るとか或は間接の手拔で下側を六若くはほと行く樣な奇道を行ふ必要は毫もないのである。

白五の手でろと掛らば黒はと應じ、白にと小斜走に掛つた時、黒手拔して左上いに掛るもよい。



一手——六手

○　黒六は星下にほと打つ可し。

△註　黒六が白三に接近せずほと離れて居る方がよいといふのに二通りの理由がある、其の一は白三に勢力が加はつた時、近ければ其だけ黒六が影響を受けるからである、モ一つは次いで左下隅よりはと飛んだ時、黒六がほに在る方がツリ合がよいのである。

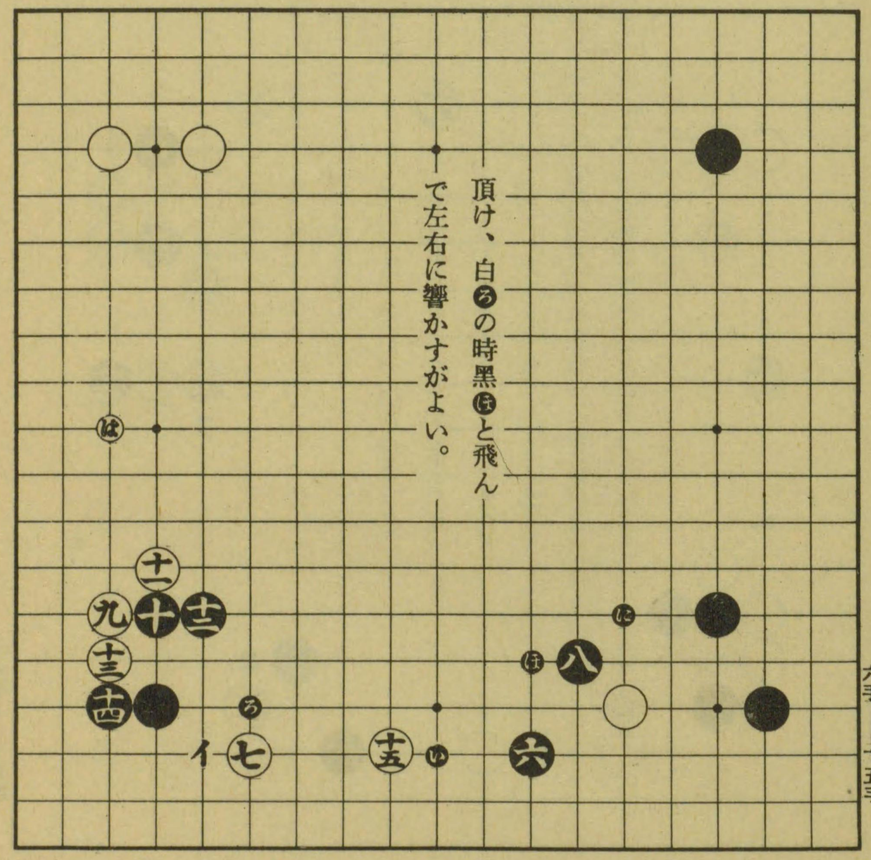
（指）

△（前頁黒六の説明の續き）　黒六の手で下側星下にいと打ち、白若し左側から九と掛つて來たならば黒はろと飛んで下側左方の姿勢が自然に整う、次で白左側星下へはと拓いたならば、黒はとと飛んで孤立の白一子に迫り、白の動靜によりて右側を宏壯にするか、或は下側を手厚くするかの機會を覗ふ手順になる。

○　黒八は單に十の點に飛んで白の來方を觀望す可し。

△註　黒八の手で十とした時、白左側星下へはとせば、黒はイと尖頂け、白をろと立たして下側を十五の點に二間拓しておく。

或は黒八の手で十の時、白下側を十五と二間拓せば、黒はイと尖頂け、白ろの時黒ほと飛んで左右に響かすがよい。



六手——十五手

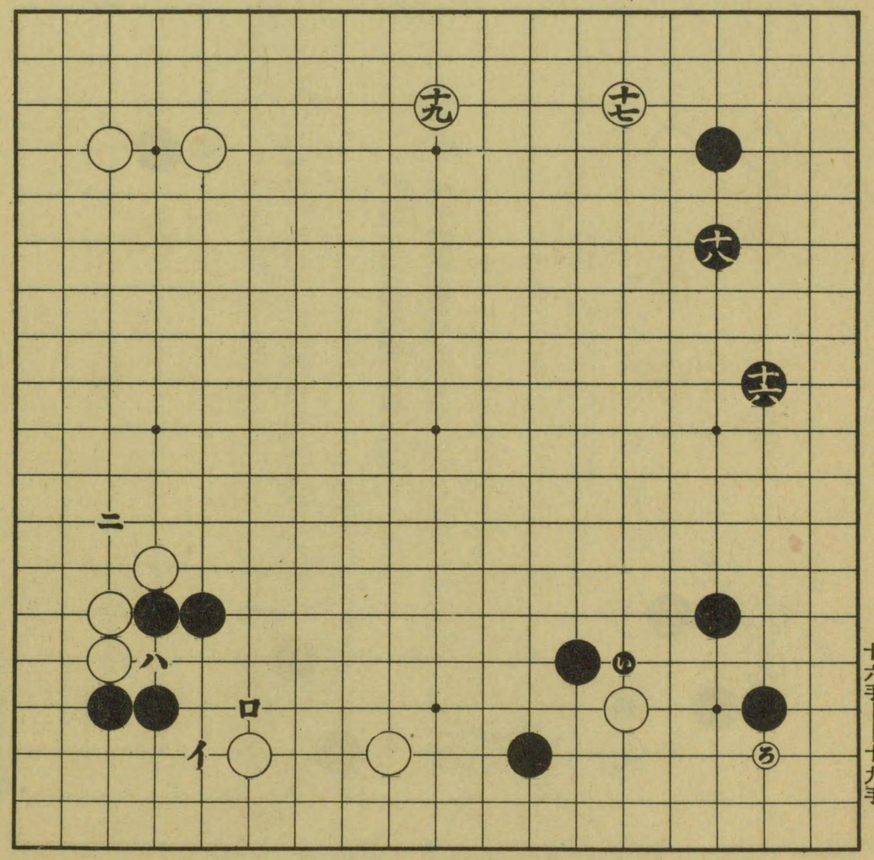
（指）

○　黒十六は右下白一子の頭を㋑と押し其の死命を制しおく可し。

△註　後に至つて白より㋺に頂けられ此の隅を蹂躙さるゝ事となつた、此くては黒の二、四、六、八の四子は何のために打つたか分らぬ事となる、㋑と押してあれば白が㋺と頂けて來ても活はない。

或は此の場合十六の手でイと尖頂け、白ロの時、黒ハとダメを塡め、白にニと備へさせてから右下を㋑と封鎖しておくのもよい。

△註之註　黒より㋑と押さるゝは白として非常な苦痛である、然し黒よりイと尖頂けられた時、白ロの手拔も出來ず、次で黒ハに對しニを手拔する事も出來ぬ、黒イハが打つてあれば左下も安定。



十六手——十九手

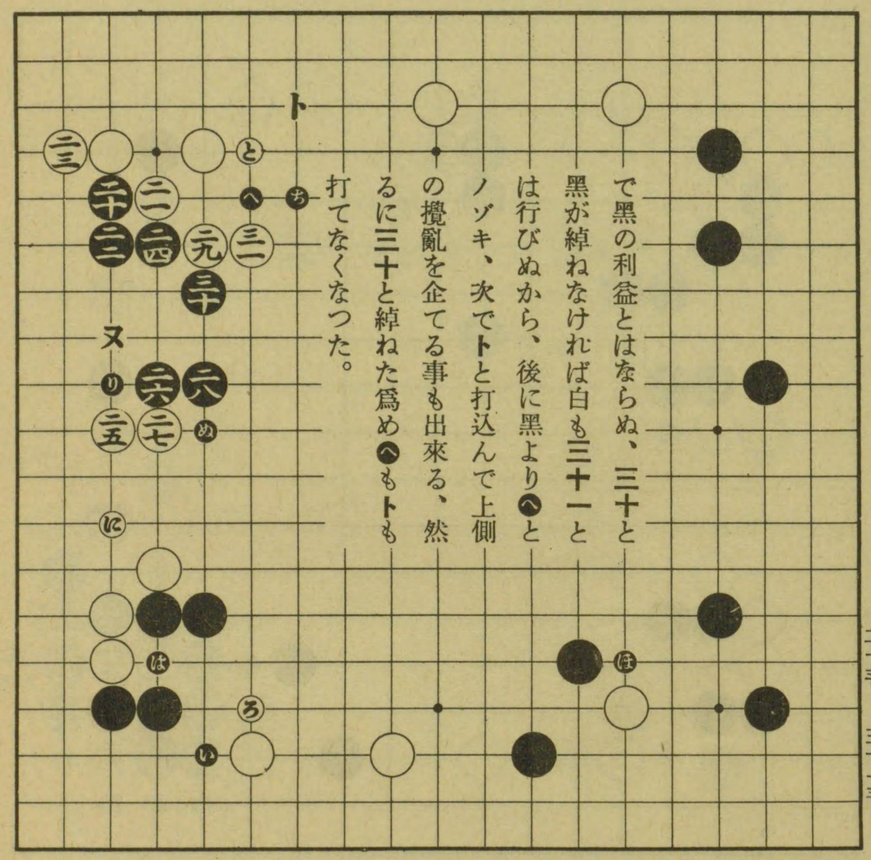
（指）

○　黒二十の手段面白からず、此の手で左下を㋑と尖み頂け、白㋺、黒㋩、白㋙（前述の手順）の後右下㋭の點に押すを急務なりとす。

○　黒二十六はへと打ち、白㋩と應ぜば㋚と行び、上側の白を低位に就かしむ可し。

○　黒三十は打たずして單に左側を㋛と抑へるか㋜と曲る可し。

△註　三十の手で㋛と抑へるのには二つの意味がある、此の㋛の點が明いて居て白よりヌと飛ばれたならば黒の根據は一擧にして顚へる、其故㋛若くは㋜は左側に於ける此の黒を凌ぐ大切な手である、モ一つは一旦白から二十九と來られたからは、三十と綽返し三十一と行びらるゝ手が白を益するのみで黒の利益とはならぬ、三十と黒が綽ねなければ白も三十一とは行びぬから、後に黒よりへとノゾキ、次でトと打込んで上側の攪亂を企てる事も出來る、然るに三十と綽ねた爲めへもトも打てなくなつた。



二十手——三十一手

（指）

△註　黒三十二の手に於てもヤハリ㋺若くは㋩とせねばならぬ。

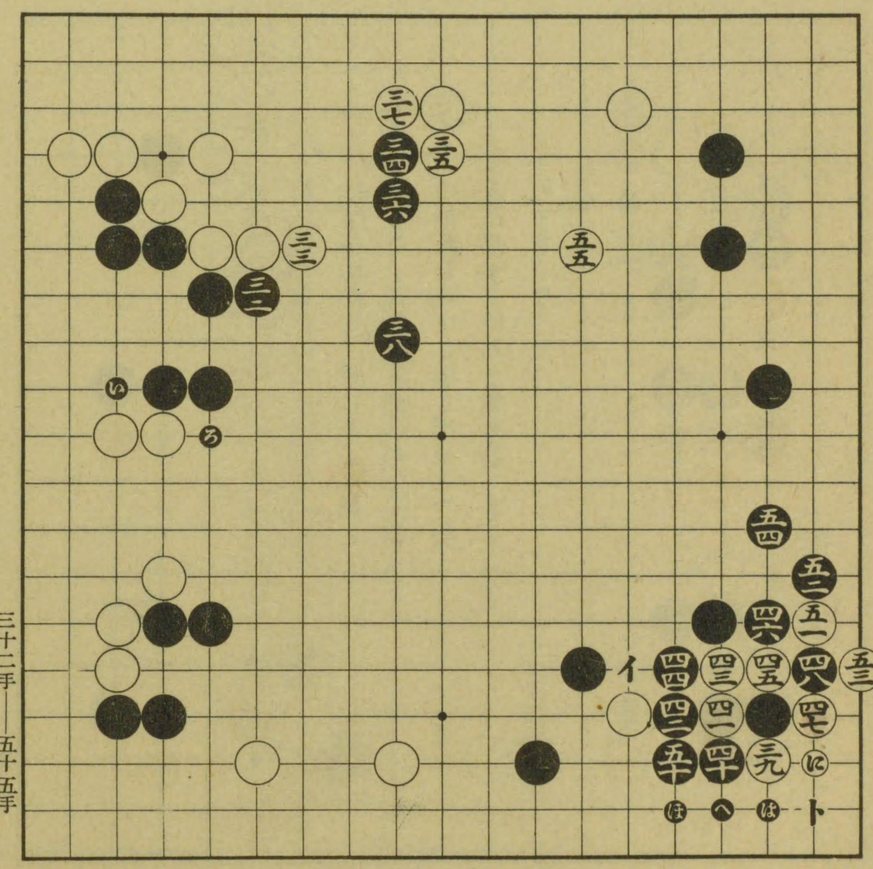
○　黒三十四大悪手、㋺を急務とす。

○　白四十七は四十八の點に下る可し、其の際黒㋭とアテ、白㋬と下り黒㋮と掛粘く手順となり白より五十二の點へ飛出しの手殘る。

○　黒五十はへの下りでよし、後にトと隅を消す味あり　㋷ツグ

△（結論）

初期に於ける、右下イの點の押し、次に三十、三十二、三十四時代に於ける㋺の抑へなど兎角閑却して捨ておくのは初學の通弊である、勝敗の樞機は此ういふ處にあると悟る樣になれば餘程強い、解らぬ乍らも專門家の確論として辛棒して打つて居れば自然に解る樣にもなる。



（指）

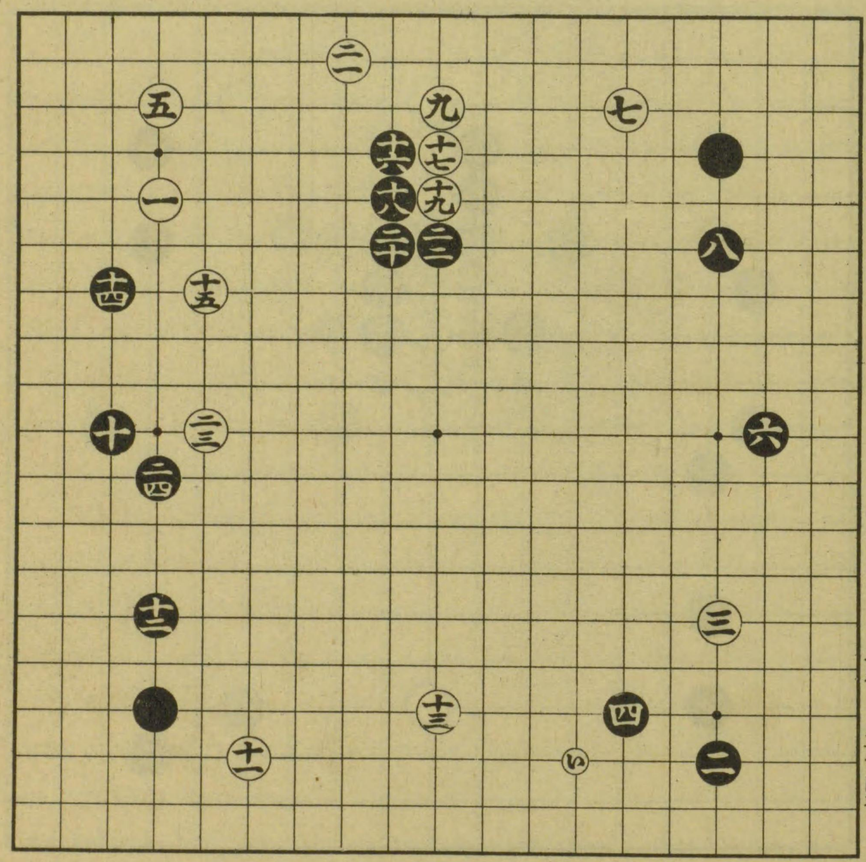
二子

第六局

勝　少年K君
來賓M氏

△冠註　白一より五迄の配置は、手順と方向とを異にしてゐるが、前圖五迄の布石と同結果に歸してゐる、黒の六、八、十、十二の布置は中ぶんなし、白十三の趣向は次で時機を見て右下黒四の裾をㄴと窺ひ、下側に於ける自己の姿勢を整へようといふ意で、往々用ゐらるゝ手法である。

○　黒十六以下二十二迄上側の白地を消した策戰は必しも悪しといふに非るも寧ろ此の（十六の）手を以つて左側二十三の點に一間飛して宏壯を計るを優れりとす。



（指）

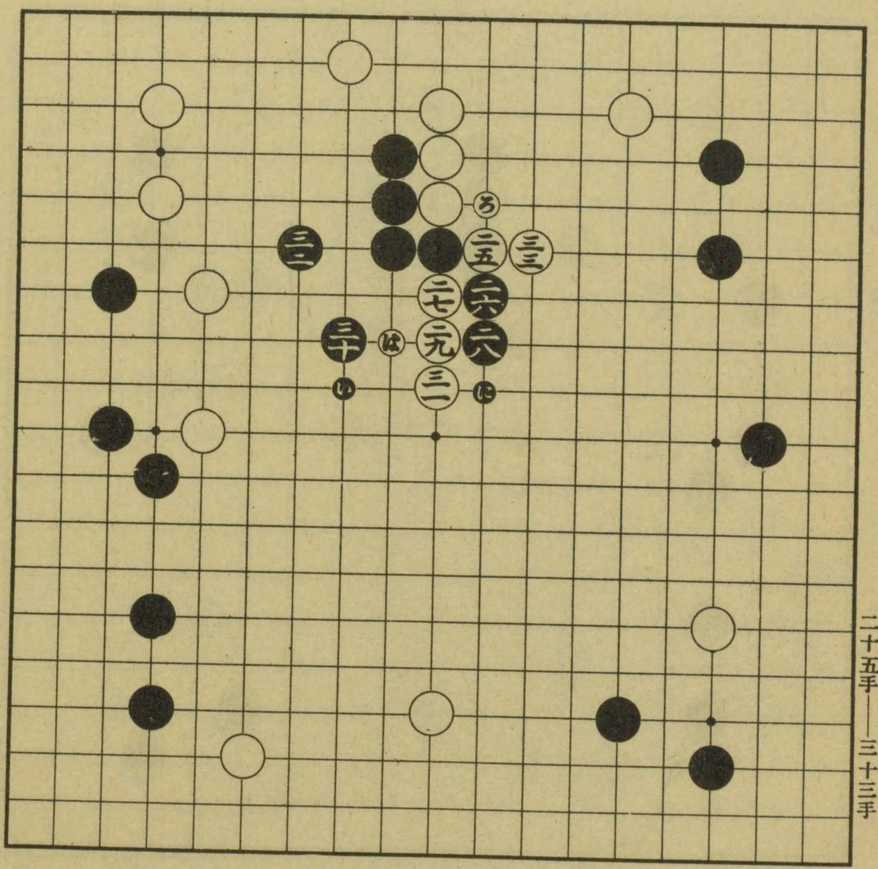
○ 黒二十六惡し、單に二十九の點に飛び、白二十六の點に行びし時、ゐと斜走して凌ぐを本手とす。

○ 黒二十八の手にて兎に角三十三と一擊を與へ白にろと粘せおく可し。

△註 二十八の手では無論であるが此の後三十の手の時、或は三十二の手の時に於ても尙且つ三十三とアテ也、本圖の如く截りの利用のなき點は打ち惜しみせず早く利かしておく可し、然すれば後に白より三十三の行びを利かさるゝ不利も無かつたのであつた。

○ 黒三十は三十一の點より綽ね、白はと曲りし時にと堅く粘ぎ四子を捨つる方針によりて工夫す可し。

△註 三十以下幸に四子の黒を連絡しても中央に失ふ處極めて大。



二十五手——三十三手

四四

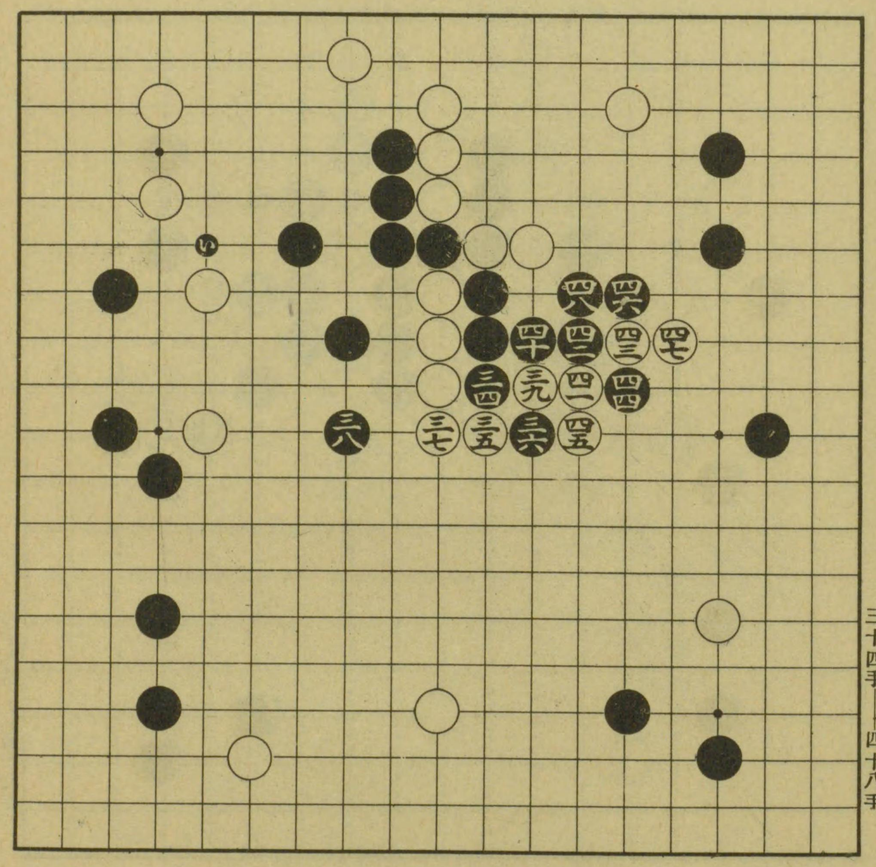
○ 黒三十四は危險なり、三十八と飛ぶを急務とす。

△註 黒三十四は自己をダメヅマリに導く手であり、同時に三十五三十七と中央の白に勢力を附加して左右に隔てらるゝの危險に陷る惧がある、宜しく中央右方を放棄して三十八とし此の黒の凌ぎを講ぜねばならぬ。

○ 黒三十六はスヂチガヒなり、四十二に飛ぶの一手あるのみ。

○ 黒四十以下打たざるを良とす、よろしく此の手を以つて左上へゐと頂け白二子を遮斷す可し。

△註 四十以下打てば打つだけ自己の不利を深めるのみである、早く斷念して方向の轉換を計らねばならぬ。



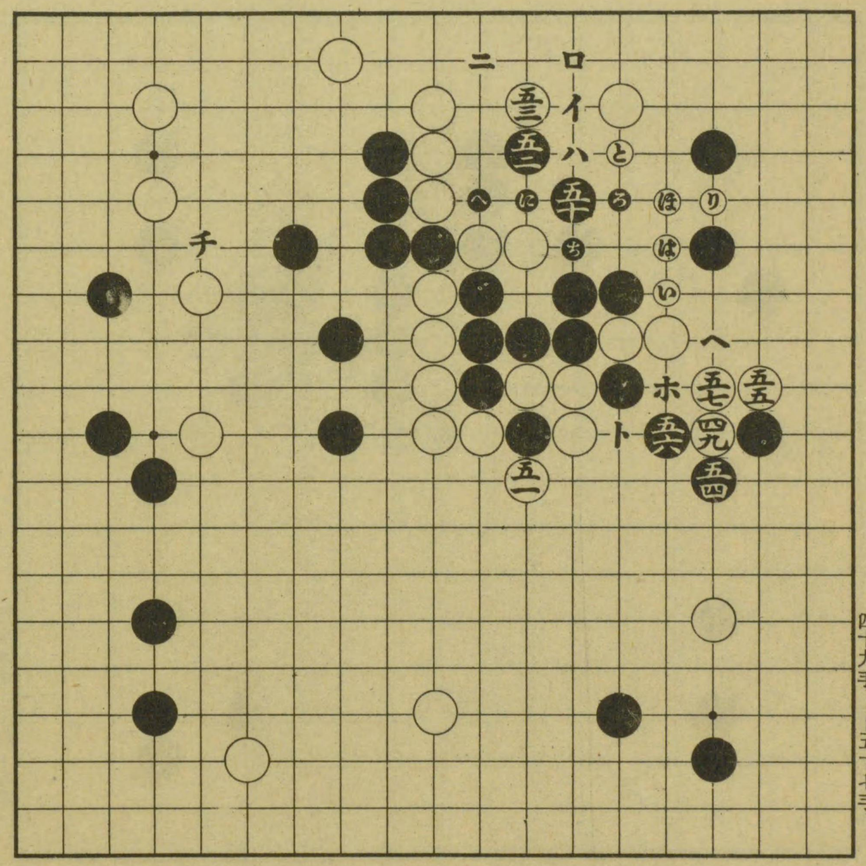
三十四手——四十八手

四五

○　白四十九緩し、直ちにいと曲り黒ろ、白はと、黒にと、白はと、黒へと、白とと、黒ちと、白りと突破せば右側の黒地は支離滅裂の外なし。

○　黒五十四は先づ上側へイと綽込み、白ロ、黒ハ、白ニと掛粘がしめ、への截りを保留しておき更に右側五十七の點より綽ね白ホ、黒五十六、白五十四、黒へ、白トと運び、先手を取つて左側へチと頂け越す可し。

△註　評の如く上側を先手で黒イ白ロ、黒ハ、白ニと運び何時でもへと截れる用意をしておけば左邊の戰が何の牽制さるゝ處なく十分出來る、次で五十四と下から行く手を五十七の點卽ち上から綽ねておけば右側數十目の地が自然に先手で纏まるのである。



四十九手——五十七手

○　黒五十八は論外の愚手である、此の手を以つて五十九若くは六十三の點に粘ぎ、白いと截りし時六十四に頂けて處置せざる可らず。

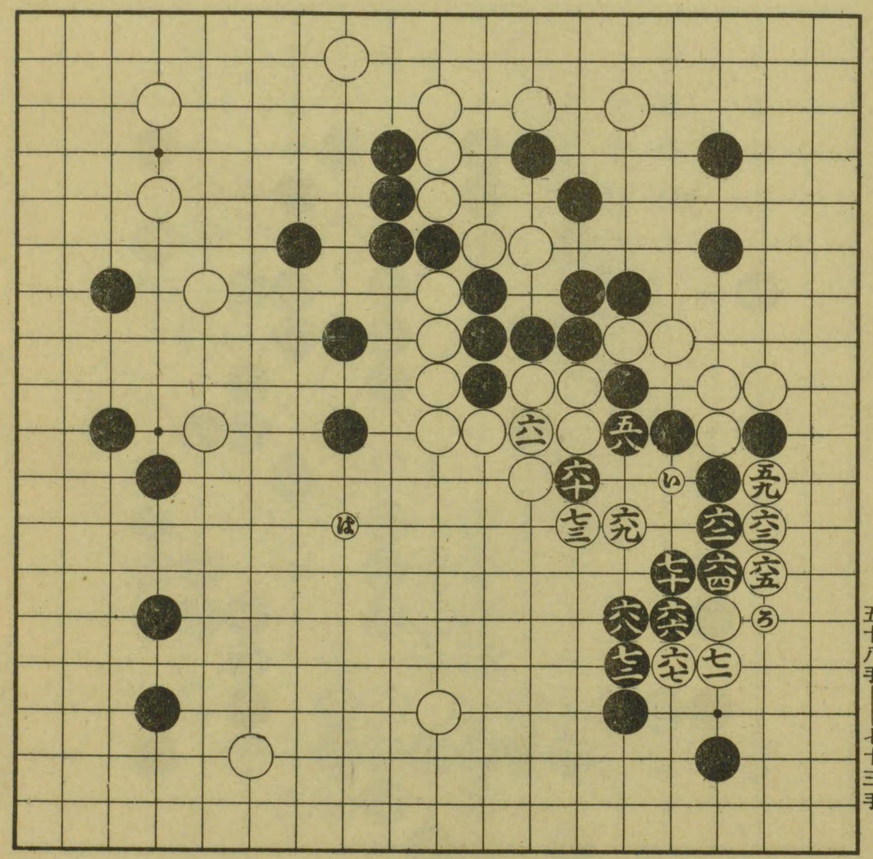
△註　之は已に五十四で方針を誤つた損害を成る可く少なくして喰ひ止める手段である、然るに本圖六十二以下七十迄、五十八の愚手の繼續といふ可く言語道斷。

△註　イケヌと知つたら早く捨てて打つ可きである、過失をどこ迄も遂げようとするのは悪い。

○　黒六十八にて七十一の點を截り白ろの時黒六十八とす可し。

○　黒七十は不用、七十一と截り、白ろの時七十三の點に押す可し。

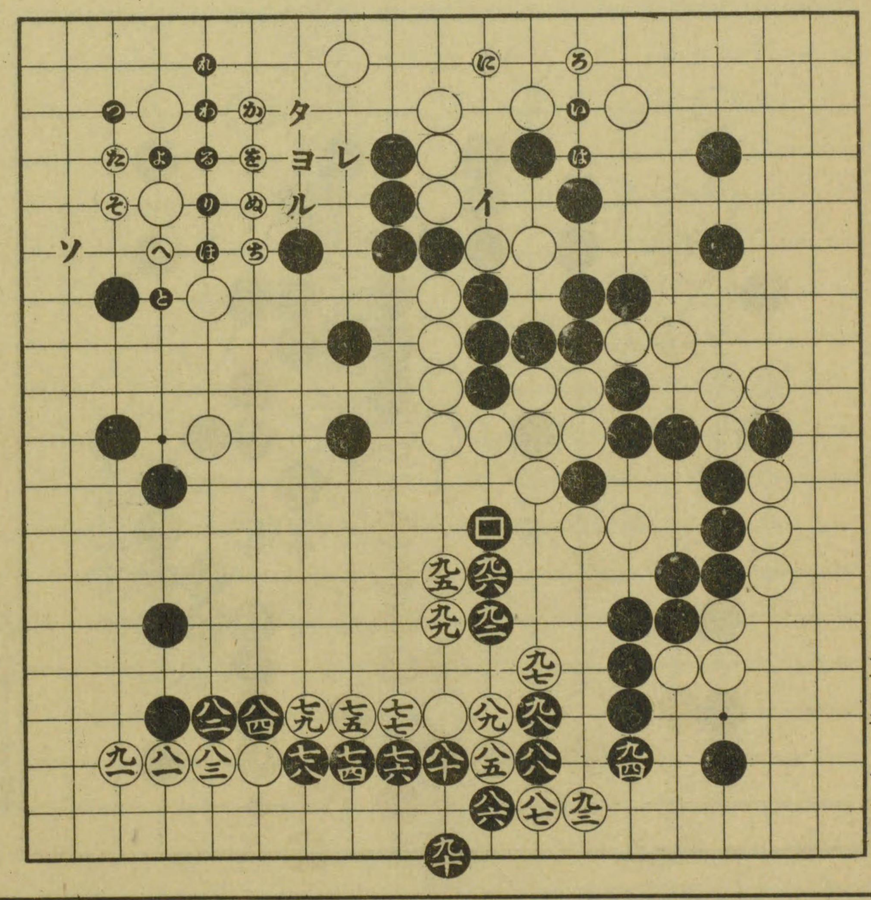
○　白七十三は事小なりはと打つて上邊七子の黒に迫る可し。



五十八手——七十三手

○ 黒七十四は不利なり、尚且前々圖五十八の手の許に於て示せし如く上側をいと綽込み、白ろ、黒は、白にと後手を引かせ玆にイの截りを保留しておき、左上に向つてほと頂越す手段に出づ可し。

△註　黒よりほと頂越した結果は、イの截りを保留した後ならば黒は安心して左上隅を侵略する事が出來る、即ち黒ほに對し白への時黒とと截り、以下符號順に白そ、黒つとなつて白に手段はないのである、或は此の手順中白はぬと行かずぬの手でると綽ね、黒ぬ、白ル黒を、白か、黒ヨ、白タ、黒レと白は先手を取つてソと左側を始末するかも知れぬ、然る場合は左邊二子の白は黒の圈内に落ちる。



七十四手——百手

四八

（指）

○ 黒六は普通にいと抑ふ可し。

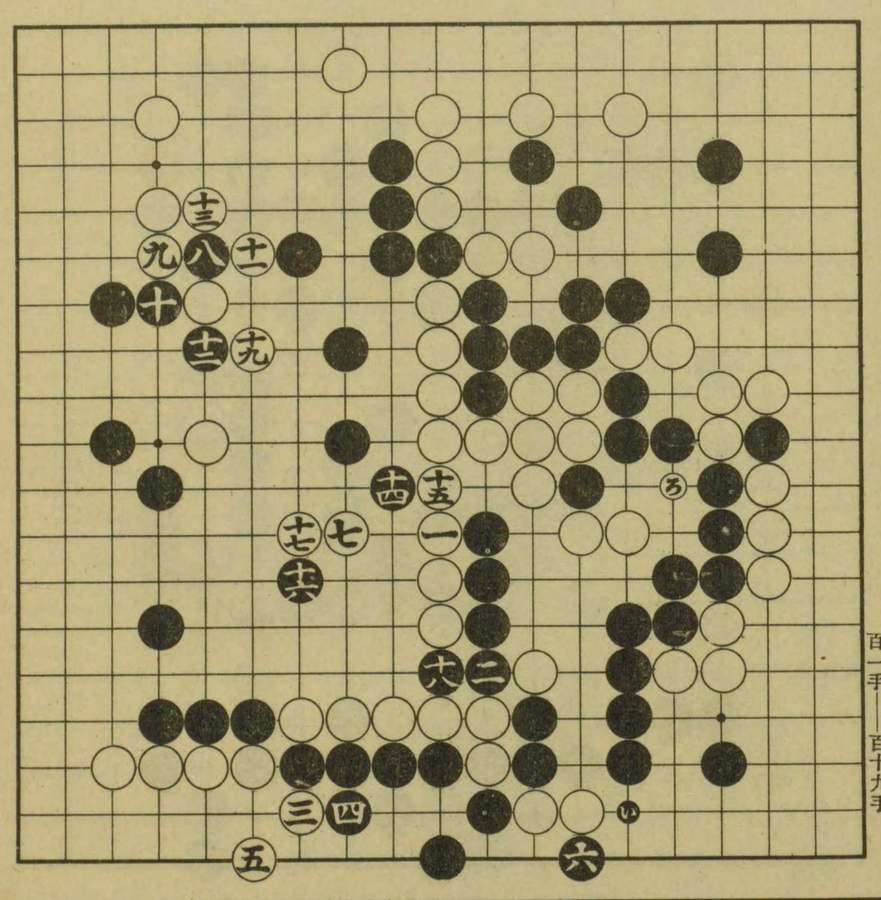
△註　黒六は全くの初心者から見ると一寸ヘンに考へられるが、一種のテスヂで、碁が多少解つた人でないと打てぬ手である、之は劫を未然に妨たげる理で一寸巧妙ではあるが對局者は今の場合應用を誤つたから、巧妙變じて大惡手となつた譯である。

白に七の手でいの點に出られると劫問題になる、問題になるのを嫌うて六と打ちながら、却つて問題となつては六が無意義である否惡手である。

○ 白七にてろと截る可し。

○ 黒十六は十九の點に打つて數子の黒の連絡を計るを急務とす。

△黒六の手の詳細參考圖參看。



百一手——百十九手

四九

（指）

△（參考甲圖の一）　白に七と出られたら黒は八と抑へるか、九の點に盤るかより途はない、白九の時、黒いなら白ろ黒はに白にで劫（黒不利）

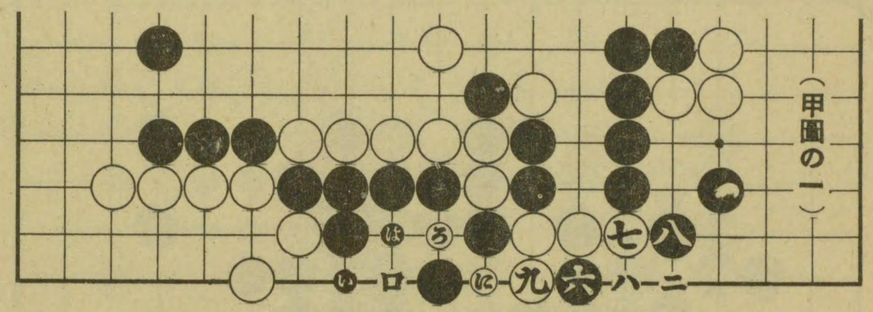
黒いとせずろに粘がば白い黒ロ白ハで劫付のセキ。

黒いとせず又ろとせずハならば白ニ、黒ハ打かき白ろ黒はに白にで劫。

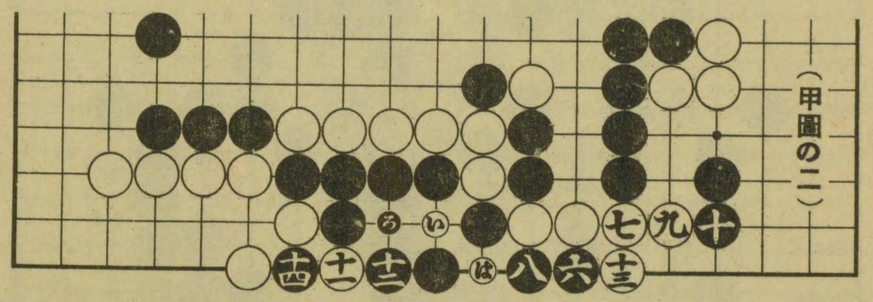
△（參考甲圖の二）　黒八ならば白は九、十の交換の後十一とし飽迄十四の點を粘ぐ劫にせねばならぬ、手順中白よりいと打込黒ろ白は黒八、白六と手數が掛り白稍不利の劫。

黒六の手の應用さるゝは例せば次圖の如き場合である。

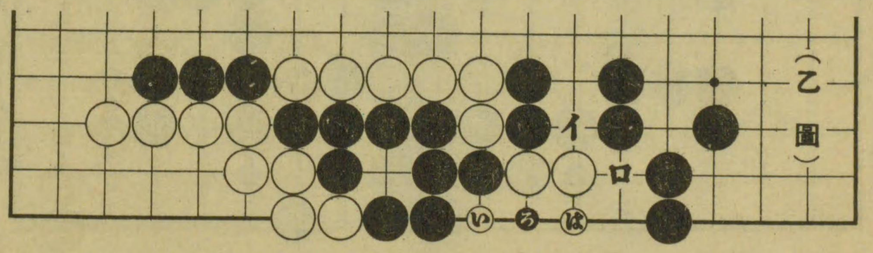
△（參考乙圖）　黒がイから行てもロから行ても白い黒ろ白はと劫にさるゝ時黒よりはと打つて成功する。



（甲圖の一）



（甲圖の二）



（乙圖）

（指）

二子

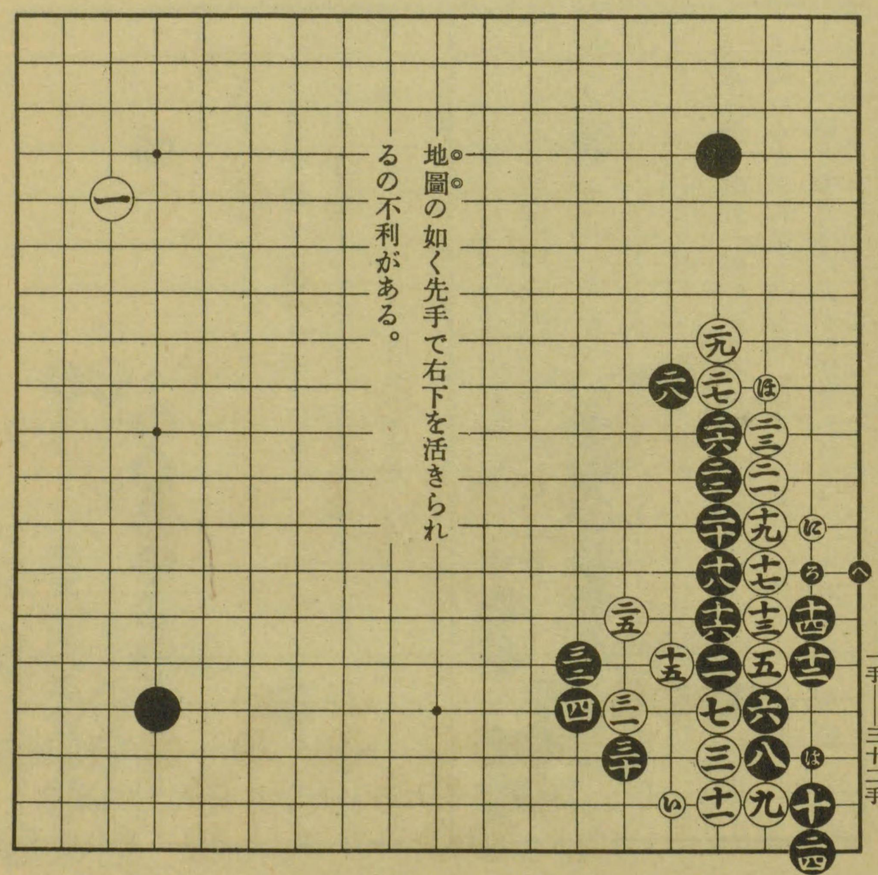
第七局

勝　少年F君
來賓G氏

△冠註　黒二の趣向は兎も角として四の手は餘計の事である、單に四の手で八の點に頂け、白九、黒六白いと掛粘いだ時、右側二十一の點に拓く定型に據り、局面を解り易くするがよい。

○　黒二十四はろと側面へ行び出し白二十四、黒は、白二十五、黒二十六白ほ黒三十の手順に出づ可し、二十四と單に隅に下るは何等白に響かず消極的にて面白からず。

白二十四、黒はとある場合、黒二十六に對し白は圖の如く二十七と綽ねる譯に行かぬ、若し綽ねると參考地圖の如く先手で右下を活きられるの不利がある。

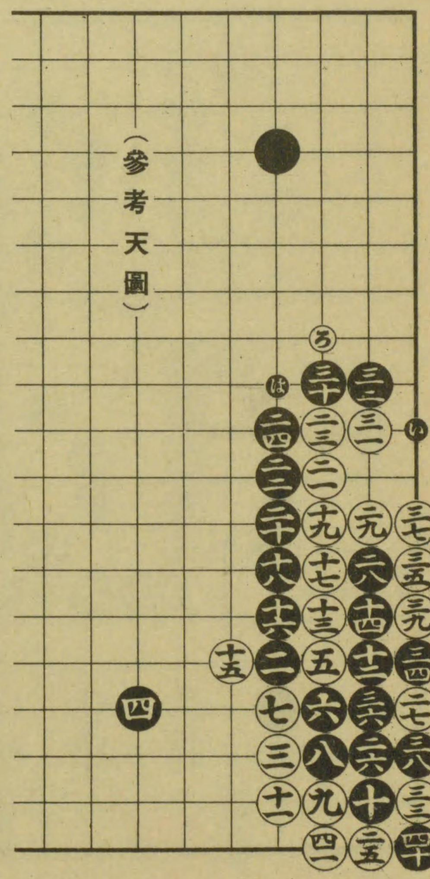


（指）

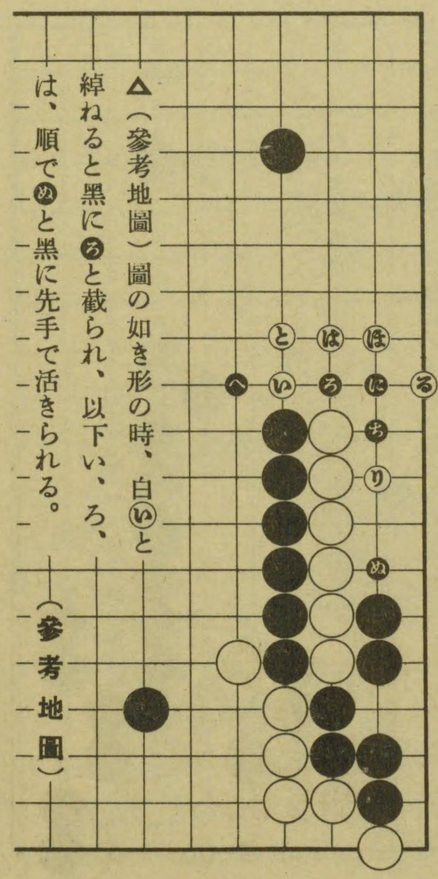
△（參考天圖）　黑二十四で二十八へも押さず、二十五にも下らず、此く二十三に沿うて上から押すと、白に二十五と綽られ、黑二十六の時二十七と置かれ以下數字の手順で劫にされる、卽ち白四十一と粘ぎ、黑いと綽ね、白三十三と劫トリ、一手劫で局部としては黑不利の劫である、卽ち二十四の押しは危險、ヤハリ二十八の點に側を這ふのが本手。

注意！　此の手順中、白三十一を誤つて三十二に綽ねると黑に活きられて終ふ、卽ち白三十二へ綽ねた時、黑三十五、白ろ、黑は、白三十一の時、黑三十四で活。

又黑三十五の下りの時白強いて黑を取らんとして三十四へ行ると黑に三十一を截られ反對に白全滅。



（參考天圖）



△（參考地圖）圖の如き形の時、白いと綽ねると黑にろと截られ、以下い、ろ、は、順でぬと黑に先手で活きられる。

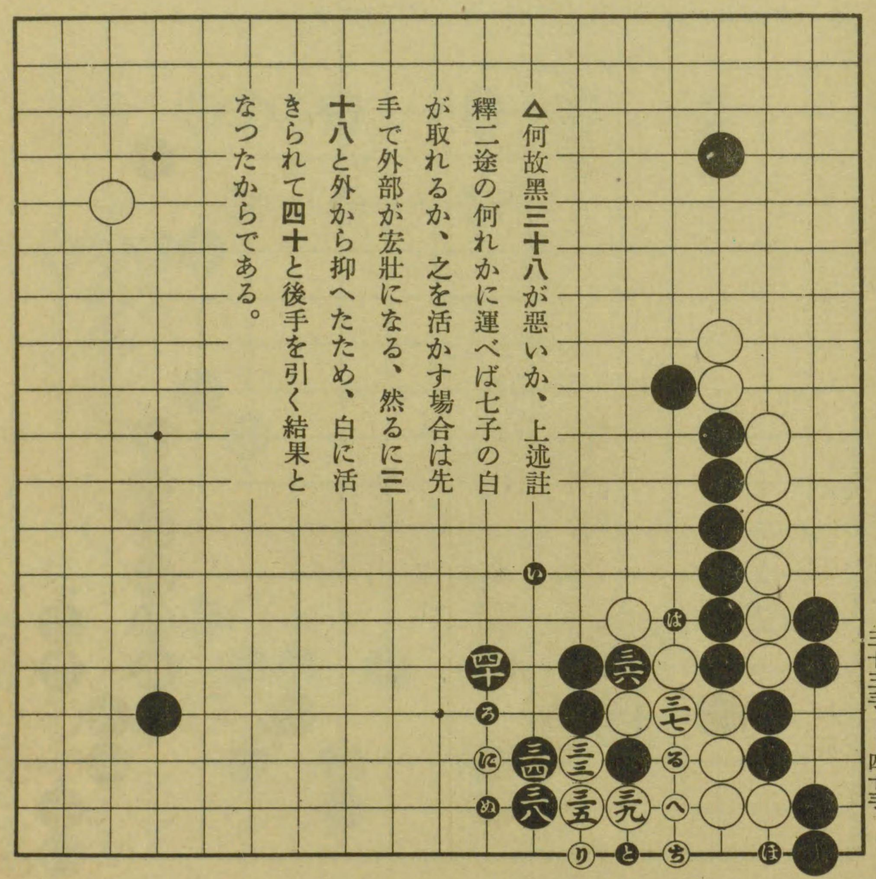
（參考地圖）

○　白三十三は三十六の點を粘ぐが普通、其の時黑はいと包むか、或はろと備へるかである。

黑三十六はろと備ふ可し。

○　黑三十八は三十九の點より押し、白の應手を試む可きである。

△註　黑三十八の手で三十九の點より抑へたとすると、白の取る可き途は二つよりない、卽ち白は外部三十八の點へ曲り、黑はと截つた時、白七子を捨て、にと綽ね上げるか、或はへと夾んで活を計るかである、前者ならば白三十八、黑は、白に、黑ほでよい、後者ならば白三十八、黑は、白へ、黑と、白ち、黑ほ、白り、黑ぬ、白る、黑ろ、白活で黑先手となり外部宏壯を極める。



△何故黑三十八が悪いか、上述註釋二途の何れかに運べば七子の白が取れるか、之を活かす場合は先手で外部が宏壯になる、然るに三十八と外から抑へたため、白に活きられて四十と後手を引く結果となつたからである。

三十三手——四十手

○ 白四十一は四十七に締る可し。

○ 黑四十六は急務に非ず、宜しく右上五十八の點に斜走して五十七の點への侵略を覗ふ可し。

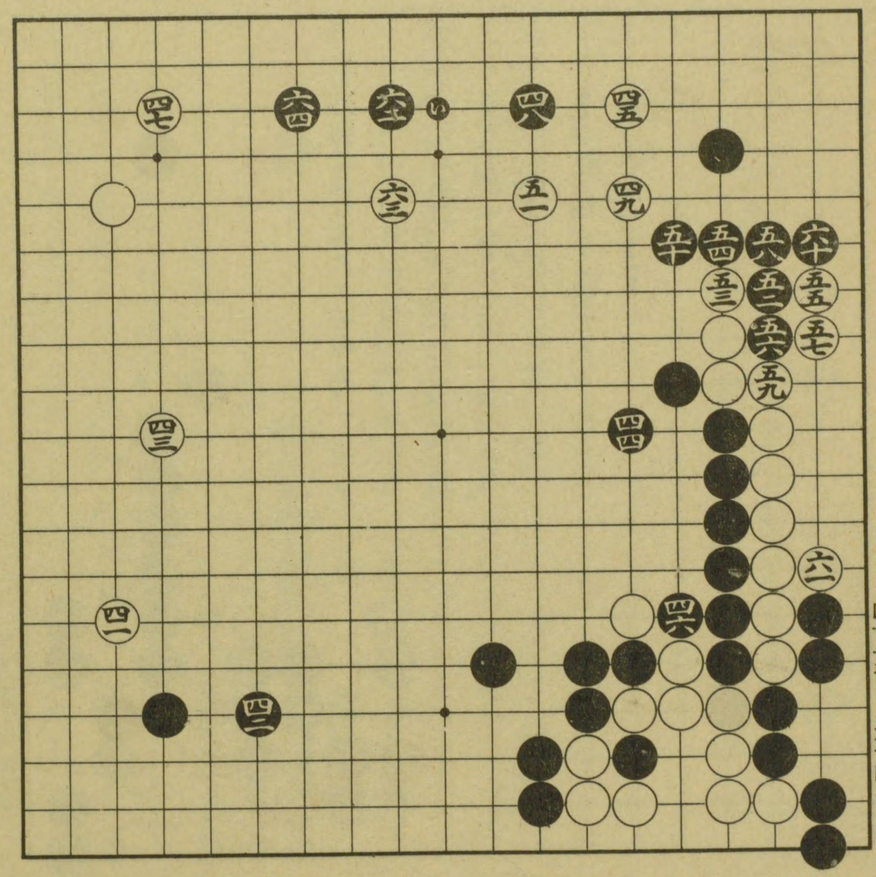
△註　黑より五十八と來られたならば、白は五十二と尖頂け左側を防禦するの外なく、黑五十四と立ち、白左上を四十七と締り、黑いと上側星下より夾攻める手順。

○ 黑五十は尙且つ五十八なり。

○ 白五十一の手を以つて五十八の點に走らば黑は應手に苦しまん。

○ 黑五十六は六十の點に抑へ先手を取らば六十一への侵入は黑よりする手順となる可し。

○ 白六十三は六十四の點より左上の實利を擴めつゝ徐ろに黑に迫る可きものとす。



四十一手——六十四手

（指）

二子

第八局（補充其の一）

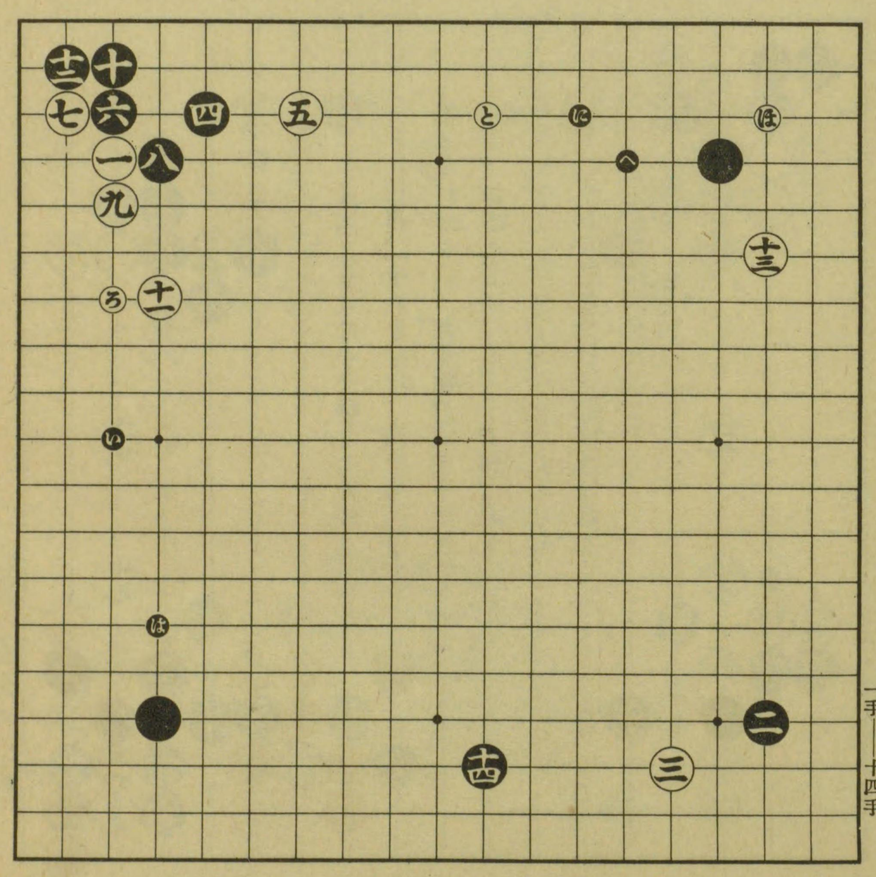
本因坊隱居秀元翁講評

少年S君（現在六段）

來賓H氏

△冠註　黑六以下十二迄は定石の一種である、此くなれば此の隅が安定して何等紛れを生ずる惧がない、黑六でいと打ち、白ろの時、黑はと行く樣な手段もあるが、隅が治まらぬだけ局勢の變化が多樣になつて面白くない。

黑十四の夾は時機を得た着手である、若し此の手でにと上側へ大斜走すると、忽ち白にほと打込まれる惧がある、サリトテへと一間高に應じると、白にとと詰められて甚だ面白くない。



一手——十四手

（指）

『自評』　白十七は右上十三、及右下十五との均衡上、一路高くいと打つ可きであつた、十七は位が低い。

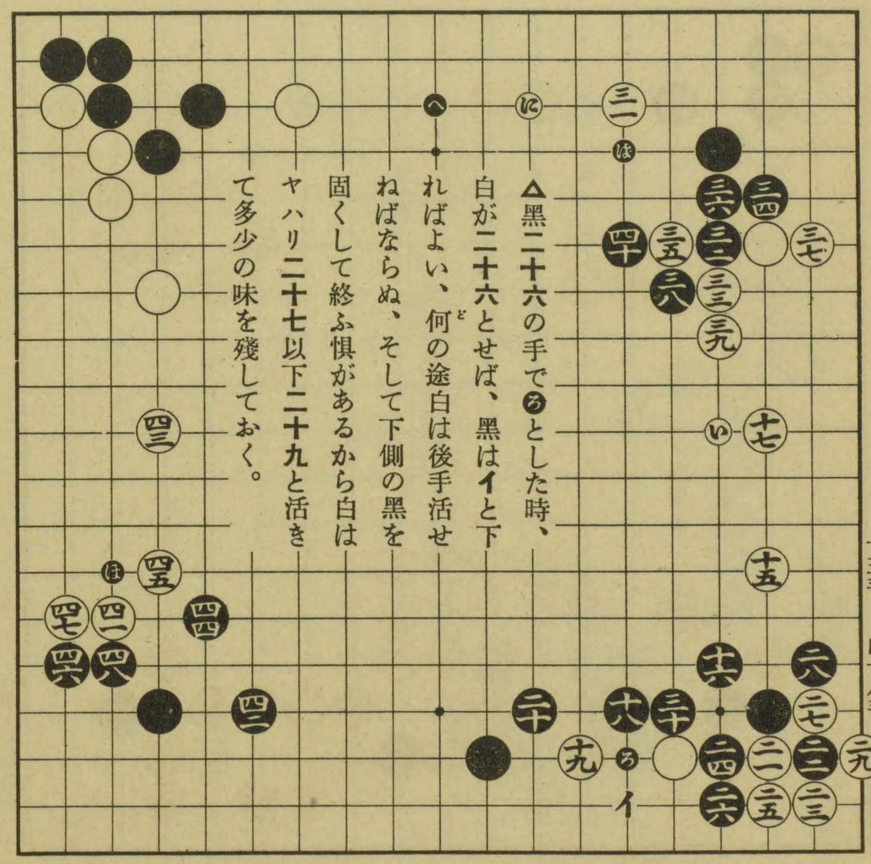
○　黒二十六はろと突き出し先手を取つて右上をはと一間し、白にと上側より詰めなば黒は更に左側下方に轉じてほと大斜走す可し。

△註　黒十八以下三十迄は三間夾定石の一種であつて手順上何等非難す可き處はない、然し彌々實戰といふ場合には定石を墨守してゐて勝てるといふ譯には行かぬ。

假令其が立派な定石でも後手である場合は臨機の變化を考案して先手を取る樣にせねばならぬ。

○　黒四十四不利なり、上側星下にへと打込むを急務とす。

○　黒四十八に於ても尚且然り。



△黒二十六の手でろとした時、白が二十六とせば、黒はイと下ればよい、何の途白は後手活せねばならぬ、そして下側の黒を固くして終ふ惧があるから白はヤハリ二十七以下二十九と活きて多少の味を殘しておく。

十五手——四十八手

○　黒五十は何たる消極退嬰の手なるか、宜しく五十七の點より冠して、深く敵地を侵せし白四十九の非を咎めて之を攻撃せざる可からず。

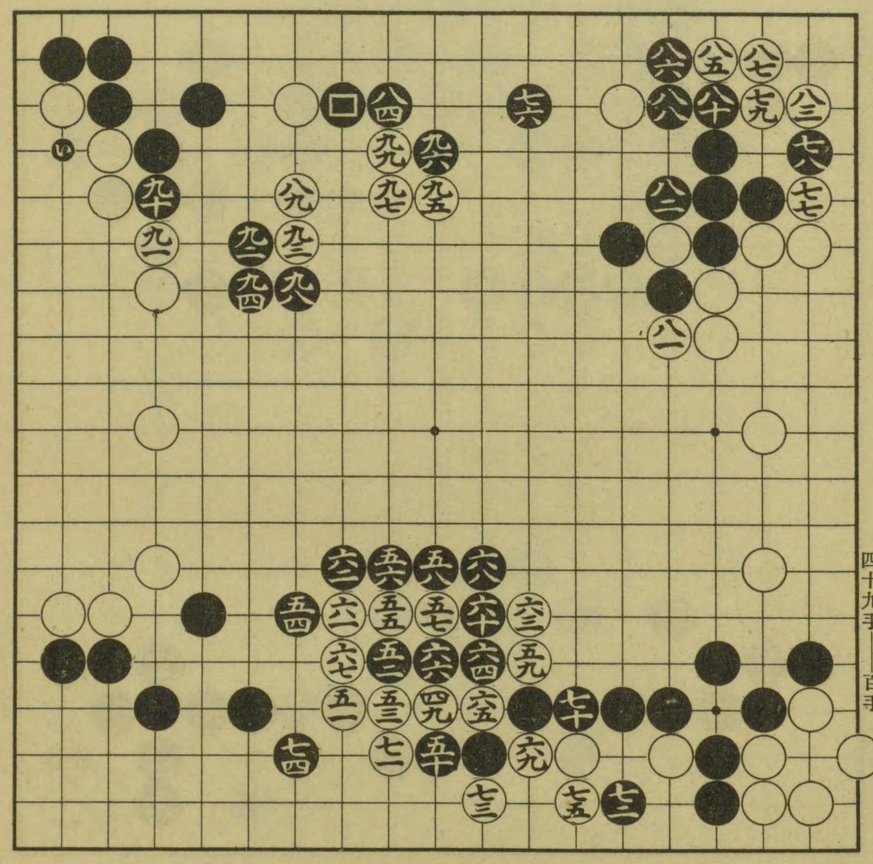
△註　黒五十の手で五十七から威壓するのは之を取らうといふのではない、右側なり左側なりへ連絡させ、白が空地を走つて居る間に之を牽制して利を占めようの意。

黒五十六以下重い手である、モ少し輕く捌く工夫をせねばならぬ。

○　黒七十八は七十九に控ゆ可し。

△註　抑へて見ても右側の白には少しも響かぬ、其上白より七十九と隅を侵されるは見易き所。

○　黒九十二は九十七の點より迫り上側中邊の實利を占めつゝ左上いの截取りを覗ふ可し。



四十九手——百手

○ 黒六と截斷して何の利益ありや宜しく十五の點に綽ね盤り、白を六の點に連絡せしめて(い)と備ふ可し。

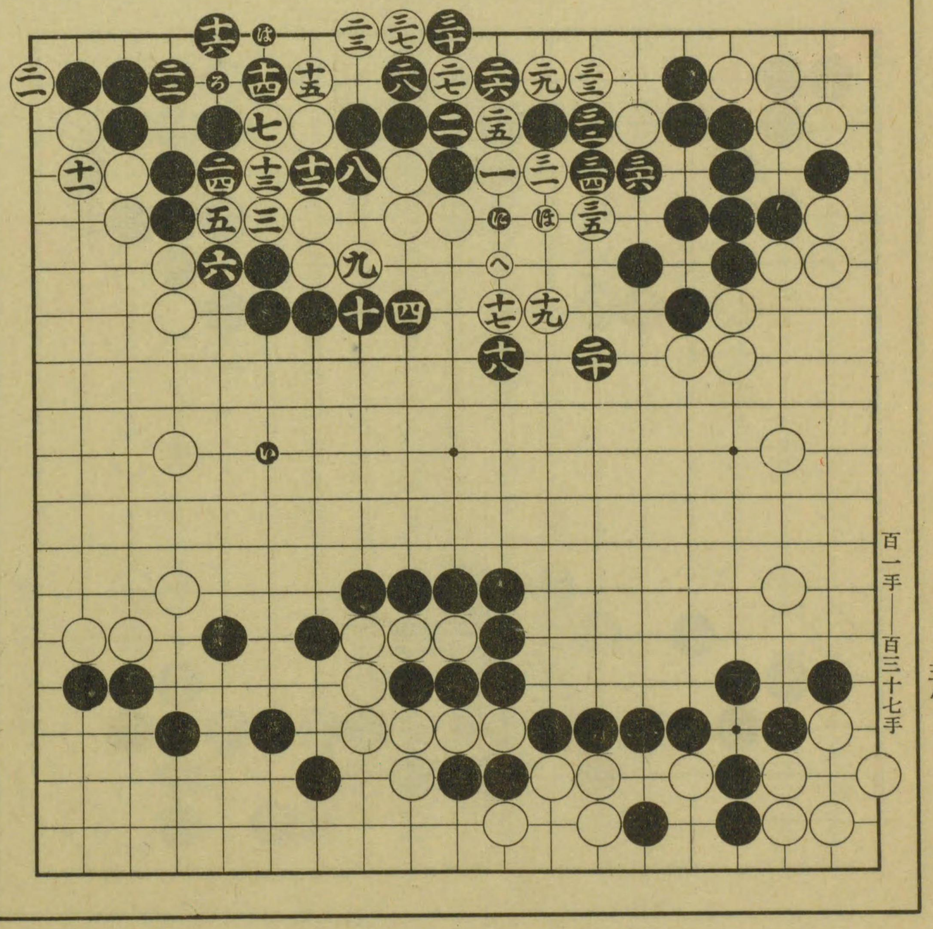
△ 黒十四は(ろ)と下り、白十五の時二十一と下つておけばよい。

黒十六は形に似て非なるもの、(ろ)と堅く粘ぎ、白二十一に應じて(は)と打つ手である、然らば二十三と白より策動さるゝ危險は無かつたのであつた。

○ 黒十八の手にて(に)と截り、白(ほ)黒三十一、白(へ)と運び白より二十五、二十七等の策動を拒ぎおく可し。

○ 黒二十の手の時に於ても尚前述(に)、白(ほ)、黒三十一、白(へ)の手順を追ひおく可し。

第百三十七手止



百一手——百三十七手

（指）

二子

第九局（補充其の二）

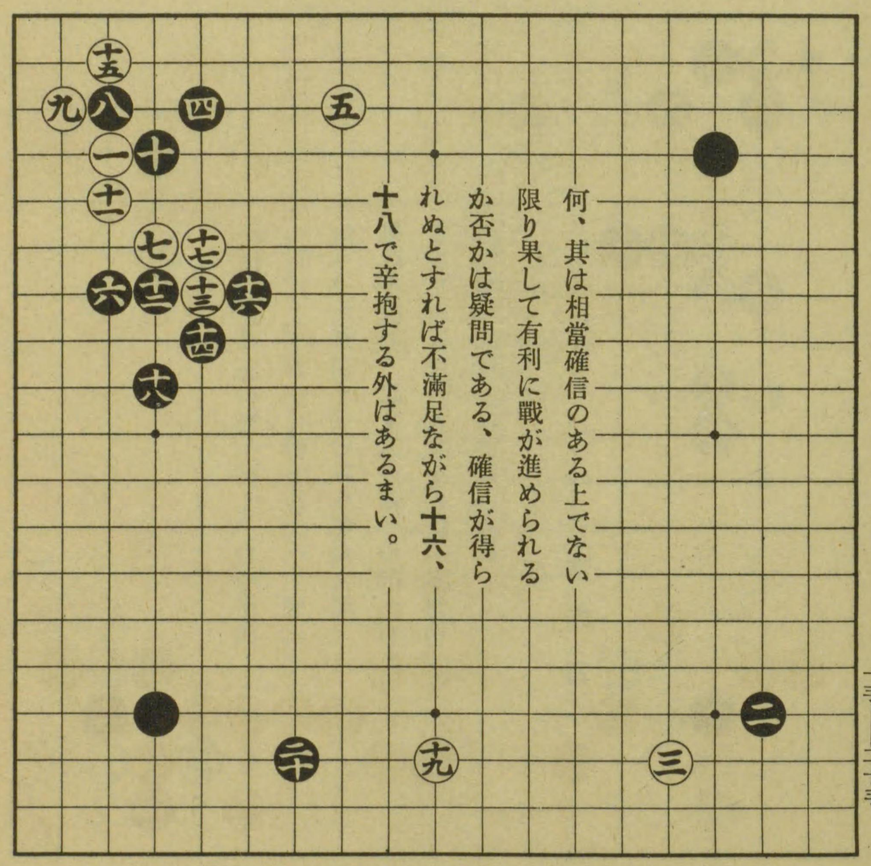
本因坊隱居秀元翁講評

宮阪六段（當時三段）

來賓S氏

△冠註　黒四の相掛り、白五の二間夾、黒六の二間夾返しに對して、白七の肩、此までは第一局と類型であるが、黒八に對して白より九と根據を妨たげ、黒十二の押しに對して十三と綽ねた手等に着々白の手腕が發揮され、非力の黒が紛れに陷つて行く徑路がハッキリ判る。

白十三に對して黒は十七の點から截つて戰ふのも一策、其の變化は次に參考圖として一端を示しておく、白に十五と綽ねられた後黒十六で十七から截つて行けるか如何、其は相當確信のある上でない限り果して有利に戰が進められるか否かは疑問である、確信が得られぬとすれば不滿足ながら十六、十八で辛抱する外はあるまい。



一手——二十手

（指）

△（參考圖）　白十三と綽ねた時、黒が直ちに十四と截つて戰に應じるのは有り得可き手である。

（本局の如く一旦十四で、此の圖十五の點へ綽返しておいてから更に十四と截るのは考へもの）

乃で白十五、黒十六と各自方向を異にして行びるのは合理的、此の場合白十七の綽ねは唯一の急所。

黒十八、二十と左側に於ける急場の備へを立て、白亦十九、二十一と中央に陣形を正したのは互に用意の周到を示すもの、黒二十二の抑へは元より異議のない手、白手拔。

黒よりはいの截り、白よりはろの劫ドリが或程度迄局勢を面白く導く誘因となる譯である。

白十三と綽ねずに十四の點へ行びれば、黒十三の點へ押し、白を十六へ行ばしておいてはと左側へ三間に備へ、白が隅十七の點へ綽ねた時、黒は手拔で、二十二の點への抑へを覗つてゐる局勢となるのは、本卷初頭配置の心得に詳述しある筈。

（參考圖）

△　黒四十とアテル手で四十二の抑へを先にす可く、其の時白四十三、黒四十四に次で白五十の點を截つて來れば、黒ゐとアテ、白四十一と粘ぎ、黒四十九に行び、白四十七へ綽ね返し、黒四十六と截り、白四十と粘ぎ、黒ろと粘ぎ、白四十五と抱へ、黒はと備へる手順となる。

△　此の手順中、白四十七、黒四十六、白四十の時、黒よりにと抑へると、白にほと截られて黒三十六以下の三子が征に提られる。

反對に征が黒に有利（右上二十一の白の無い場合の如き）とすれば白は四十七と二段綽を止して四十六に下るの外はない。本圖四十六はへと左側を掛粘ぐが本手である。

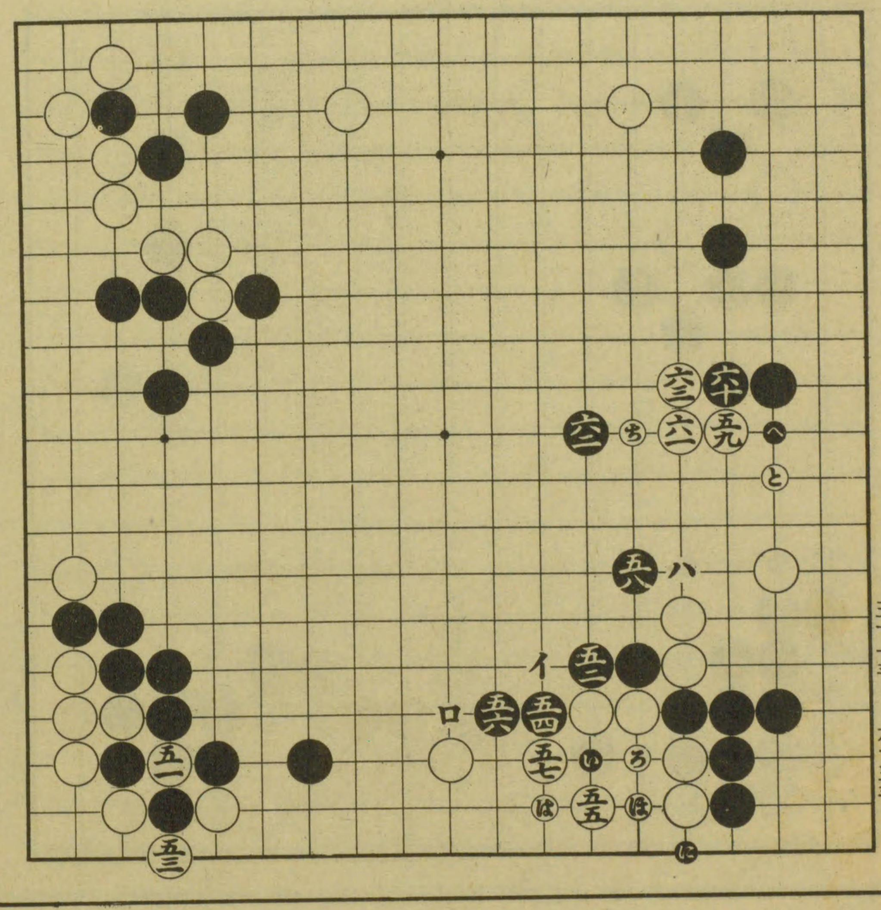
四六　切トリ

二十一手——五十手

○　黒五十六は緩慢極まれり、此くては殆んど無效に等しき結果となれり、五十六の手にていと綽ね込み、白ろ、黒五十七、と粘ぎ白の應手を見る、白はと盤らば、黒にとアテ、白ほの時黒イと堅く粘いで左右を搦む手順となる、若又白はと盤らず強くイの點を截つて來れば、黒はにとアテ白ほの時五十八の點に飛んで形勢を觀望する事となる、孰れにしても本圖五十六の結果に優る萬々。

○　黒六十二はへと曲るを急務とす中原の經營は黒へ白とのの交換の後なり、白よりへの點を抑へらるゝ事とならば不利少々に非ず。

△註　中原は黒よりロの押しもハの押しも利く處、兎に角黒へと曲り白と、黒六十三、白ちとす可し。



五十一手——六十三手

△　黒六十四に至つても尚右側六十九の點への曲り若くはいの走りかを先にす可きである。

此く左右に薄弱なる石を控へてゐて六十四と打込んだとて決して有利の解決を得らるゝ筈はない。

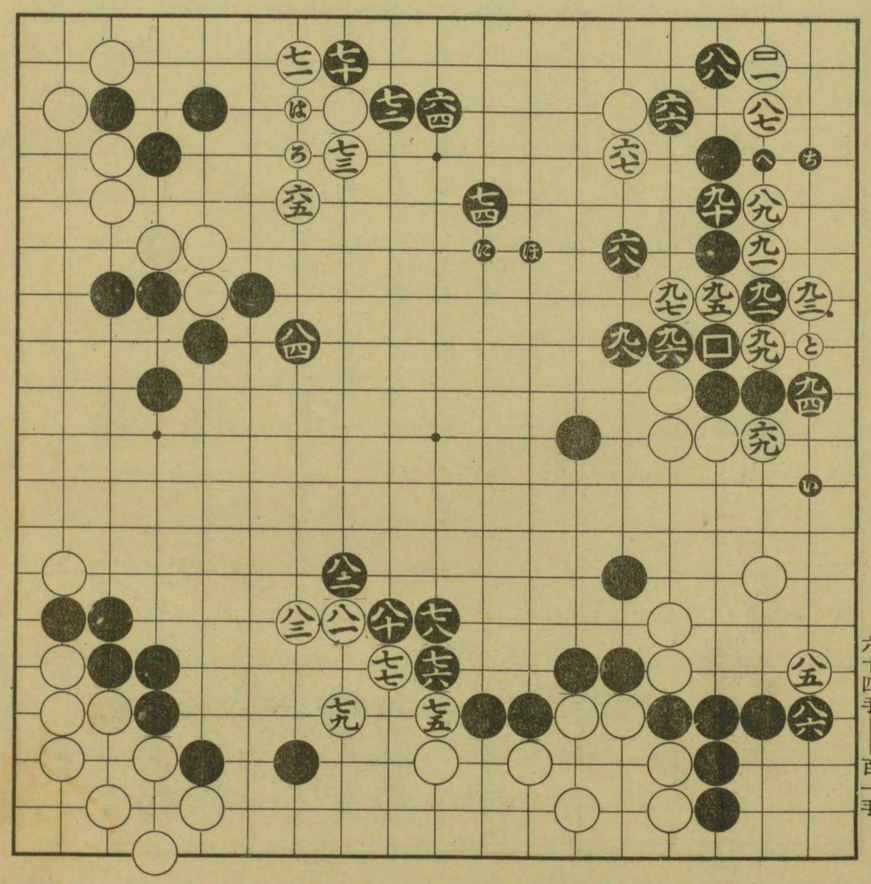
黒七十二は七十三に夾み、白ろ、黒七十二、白はと始末の出來る處。

然すれば七十四を一路廣くにと打ち得らるゝのであつた。

白から七十五と出られてはタマラヌ、此の點は黒より押しておきたい處であつた。

黒八十四と掛粘いだ意味が判らぬほと上邊に備へるがよい。

黒九十四で九十五と粘ぎ、白が九十四の點に盤らばへと出、白とと盤つて終つた時ちと下つておく。



六十四手——百一手

二子

第十局（補充の三）

本因坊隱居秀元翁講評

勝 宮阪六段（當時三段）

來賓T氏

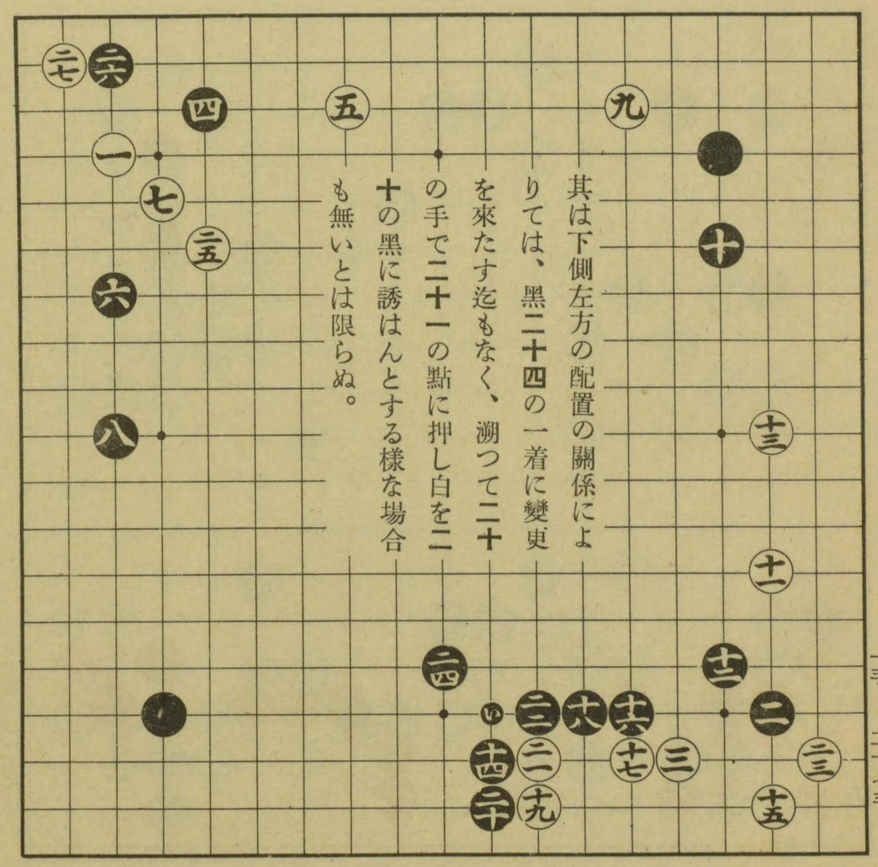
△冠註　黒十迄は普通の配置で何等取り立てゝ言ふ處もない。

黒十四から二十三迄は三間夾定石の一種である。

黒二十四はいの粘ぎをハタラかした事は無論であるが、左下附近に堅固な配置がある場合は此の一着を省略し、若くは（圖の如き斜走でなく）他の形で間に合はせる事もある。

黒二十六は後の局勢の爲めに活を保留しておく意。

尙又此ういふ事も考へられる、



其は下側左方の配置の關係によりては、黒二十四の一着に變更を來たす迄もなく、溯つて二十の手で二十一の點に押し白を二十の黒に誘はんとする樣な場合も無いとは限らぬ。

（指）

一手——二十七手

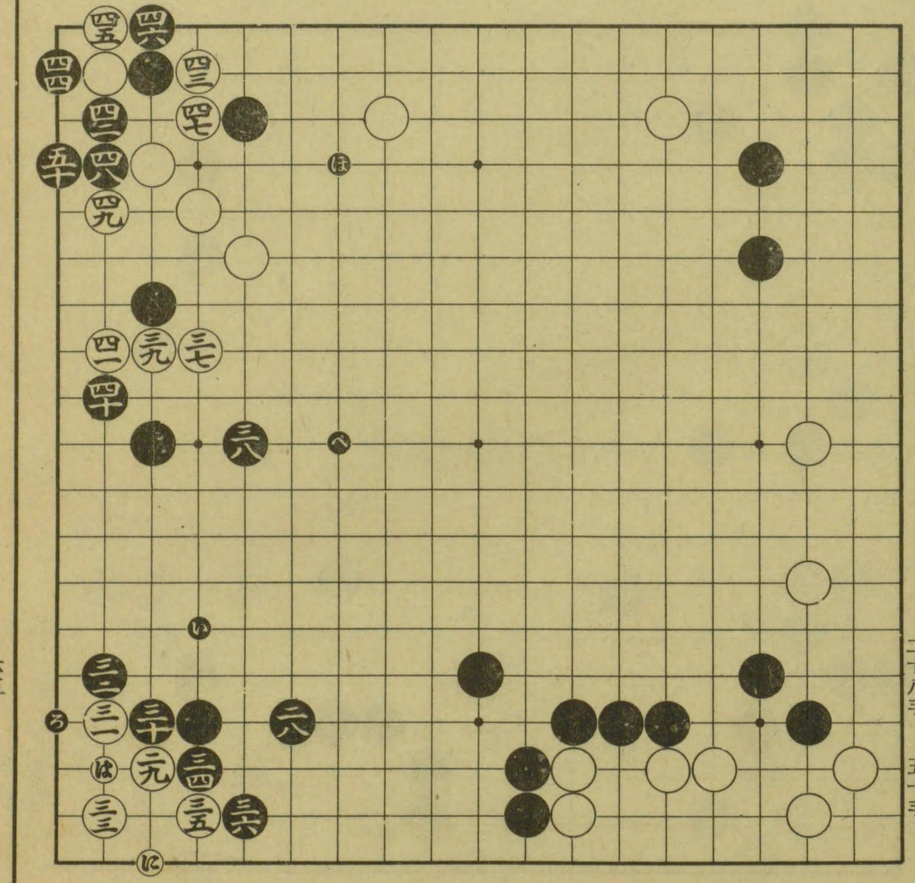
○　黒二十八は方向を誤れり、左方へいと飛ばざる可からず。

△註　下側星下邊は黒の勢力旺盛で何等缺陷がない、が左側上方は單に二間拓のみで黒の勢力稀薄の感がある、卽ち此の幾分弱い方へ向つて二十八の手をいと加へる事は碁法の常識である。

△　黒三十四の手でろと綽ね、白はの時、黒三十四と抑へ、白三十五、黒三十六、白にと活きた時、黒は上側五の肩へほと打つて逸出する手順に運ぶがよい。

○　黒四十の尖みは打たずして單に中央をへと飛ぶ可し。

△註　左側は左上隅との關係で色色味のある處故四十一と打たさぬがよい、四十二も時機尙早し。



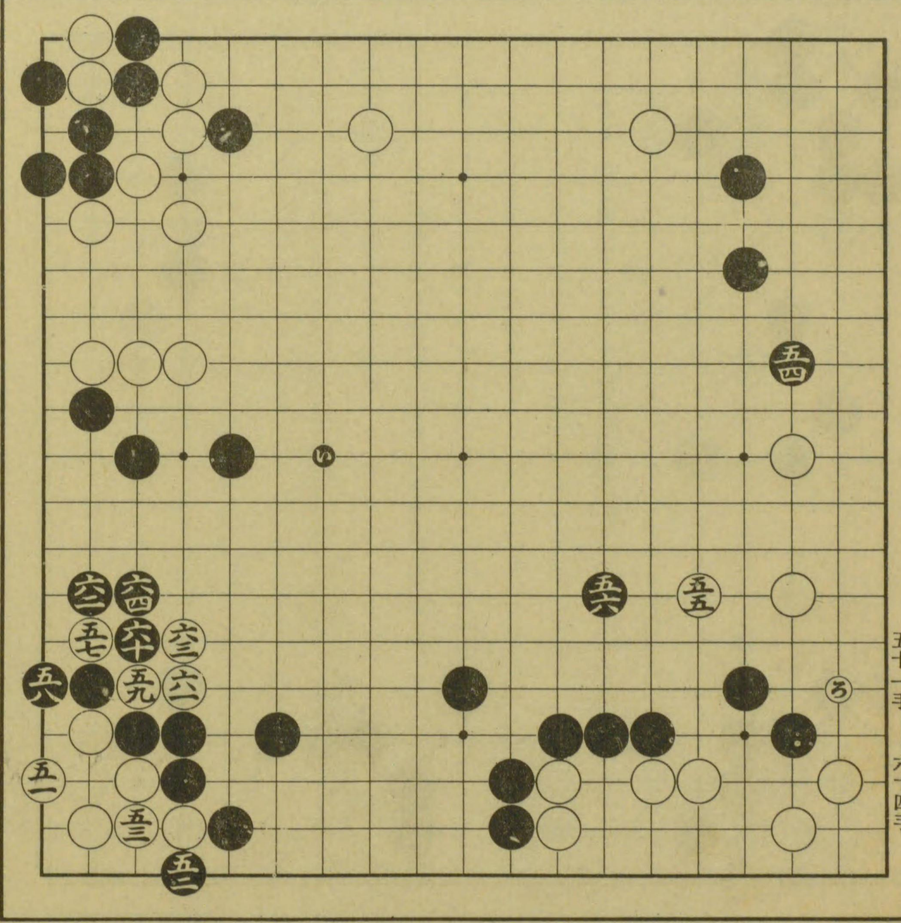
二十八手——五十手

（指）

○ 黑五十四事小なり、いに飛んで地域爭覇の樞機を握る可し。

△註　黑五十四は右側上方の黑地を守り同時に右側の白二子に迫る意味であらうが其の考は誤つて居る、此の白二子は初から白が地域として考へては居らぬ、取られさへせねばよい、といふ石で危險と感じれば直にろへ打つて右下へ逃げる途が開けてゐる、して見ると五十四の價値は僅かなものである、之を中央いの點から白の大地を削りつゝ黑自からの大地を守るかといふ重大な使命を荷つて居る一子に比べて見ると其の輕重大小は同日の論でない。

○ 黑五十六は冗着に等しい、尙且ついの飛びを最大急務とす。



（指）

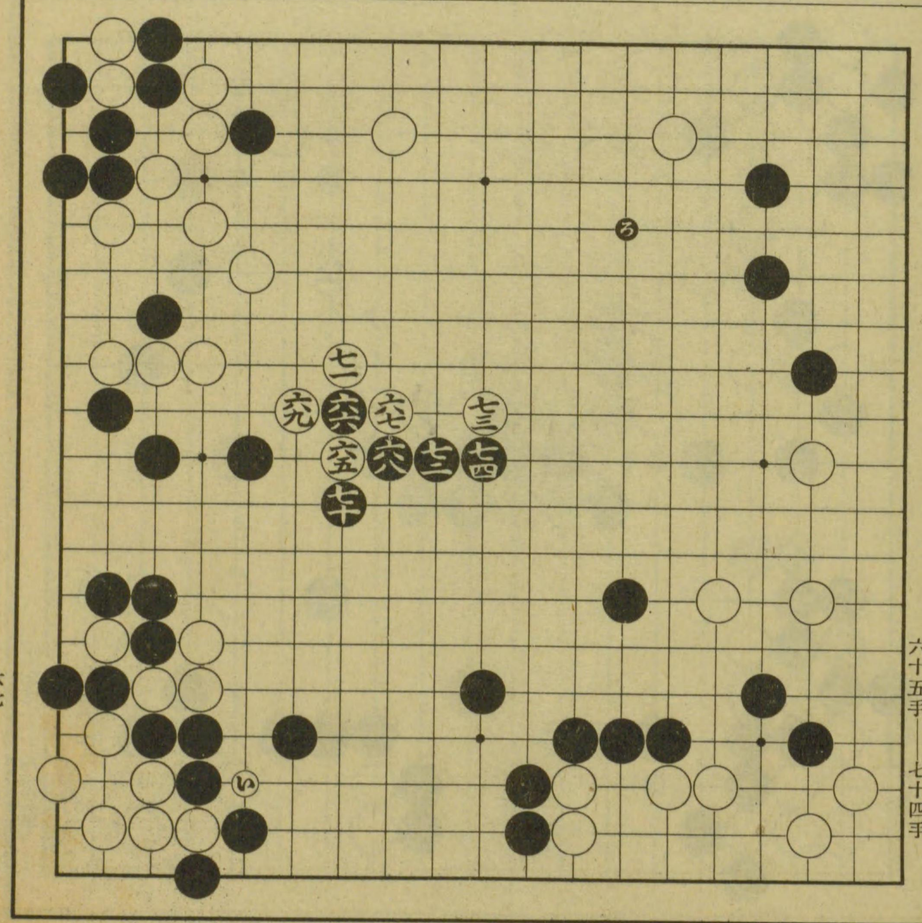
五十一手——六十四手

○ 黑六十八は六十九の點に引き、上側方面に白の作らんとする大模樣を削らざる可からず。

△註　六十八の手で六十九に引けば萬全の策であるが或は此の手で七十一の點に行び出しても十分に戰ひ得られる。

六十六と頂けておきながらナゼ六十八と打つて六十六の一子を捨てたか、一寸不可解に見えるが、對局者の考は初から六十六の一子を捨石として六十八、七十と此の方面の地を纏めようといふのである、然し黑地には下側にいと截られる缺點があつて存外に減る地である、白地の方は六十八以下黑が援助して減らぬ大地を完成した。

○ 黑七十四でろと行く機會がある。



（指）

六十五手——七十四手

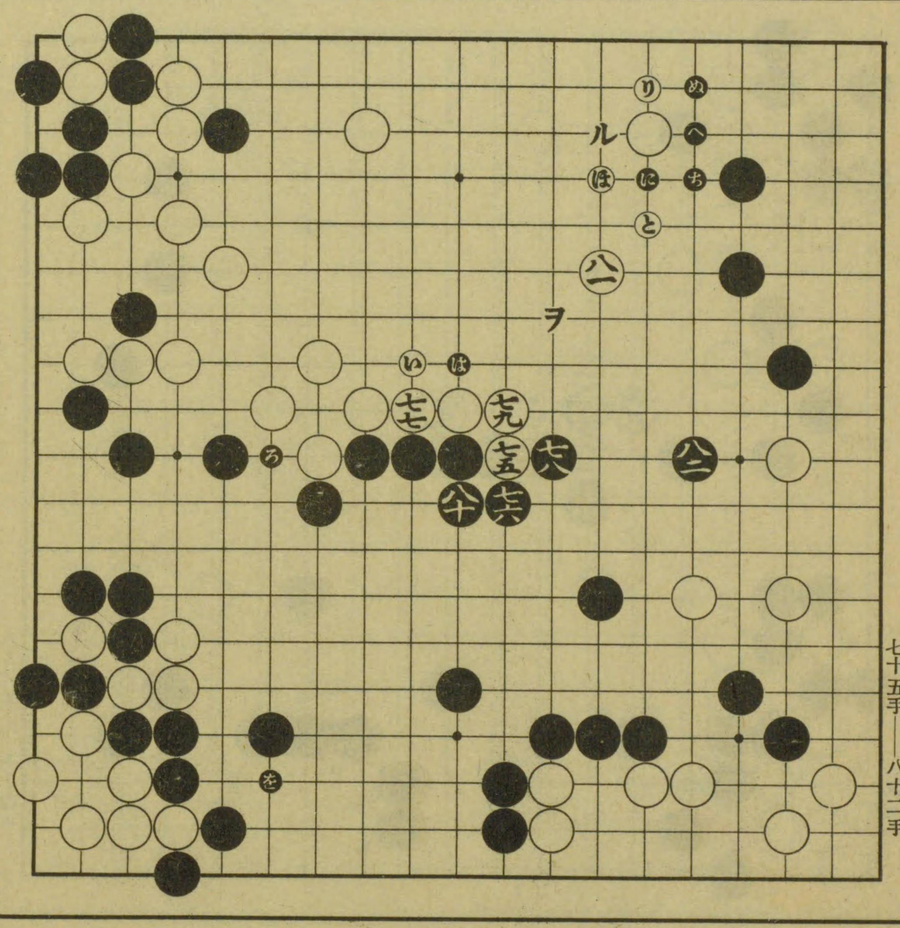
○ 黒七十六は七十七に突き出しおかざる可らず。

△註　七十七の點に出ておく事は白が㋙と抑へた時、黒㋚と截つて戰はうといふ準備、單に中央の防備から見ても、㋜とキメッケル手が重要化する、七十七と此く堅固に粘がれて終つては、㋜のキメッケが白に取つては一向痛痒を感じない處となる。

○ 黒八十二は何の意たるや解し難し、此の手で右上を收束す可し。

△註　黒八十二で㋛とし以下符號順に㋝迄運び、白ルと粘がば、黒下側を㋞と備へる、若白手拔ならばルと截り白の應手によりてヲから白地を侵略する機會を覗ふ。

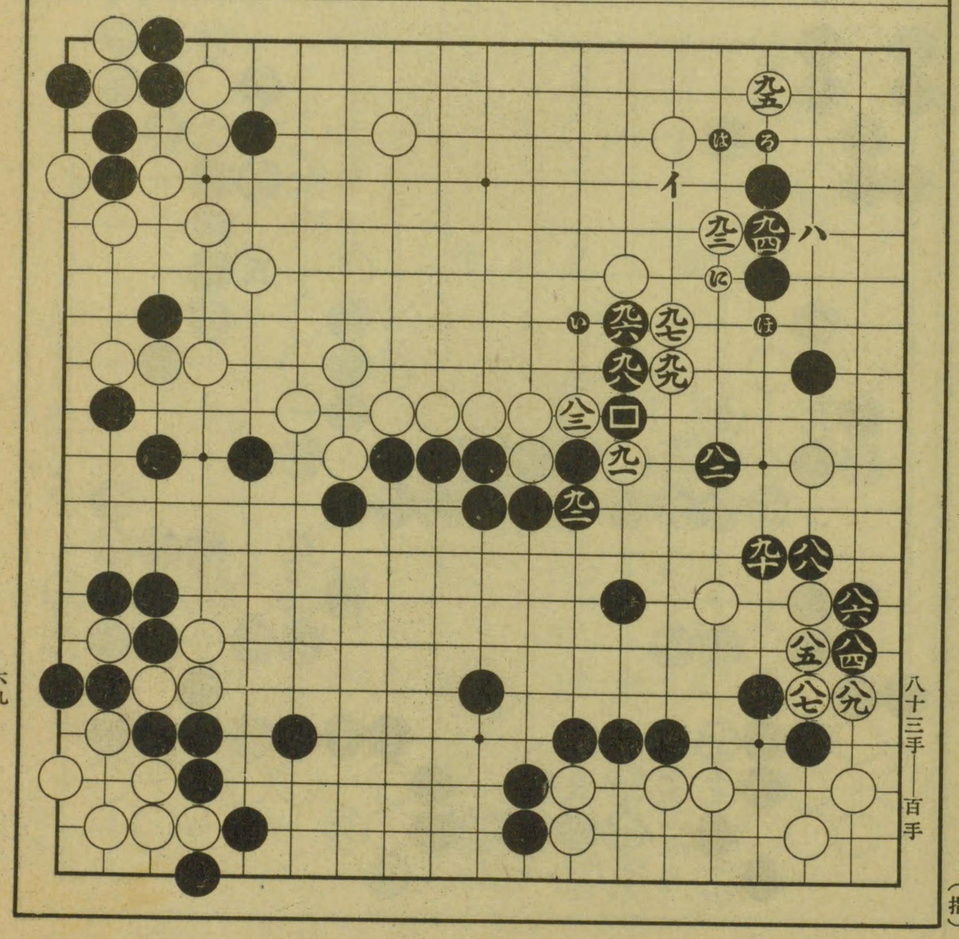
（次頁へ續く）



△（黒八十二の殘說）白が八十三と來ぬ前ならば、黒から㋑と侵入する隙があるから其と相俟つてイから策動する餘地もあるが、白八十三と來た後は、㋚と尖頂ける收束位より外に手段もない。

○ 黒九十四は㋜と下つて九十五の走りを妨げおく可し。

△註　九十三とノゾかれた時は必らず九十四に粘がねばならぬ、とは布石の初期に於ける教訓で、此の場合の樣に、收束の時期に入つて居る際は、左右附近の關係を觀て臨機の處置をせなければならぬ、今黒が九十四を㋜と下つて白に九十四と突き出られたとしても黒ハの時白に㋛と一本利かされる位のもの、黒㋚で何の仔細もない。

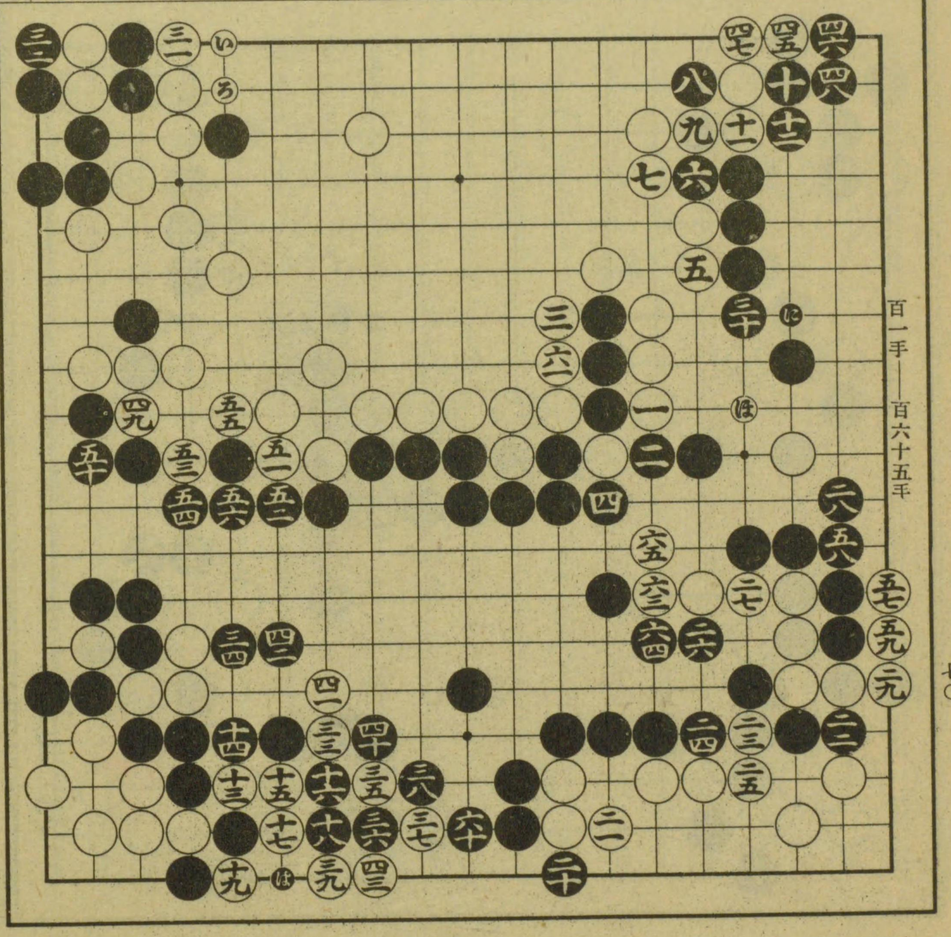


△ 黒は六の手で、若くは二十の手で左上三十一の點に出、白㋑、黒三十二白㋺と運ぶ可く、僅に二目ではあるが先手の利は絶對である不可逸。

黒十八は打つて終はず三十五の點へ引いておきたい處である、其は白十九と拔けば黒任意の地點に先手をつける、黒若し手拔ならはと綽ねて劫にする味が殘るといふ處、然し本圖は白に三十の點へ綽出されると黒にの時、白はと一子を逸出する莫大な手を保留されてゐるから十八で三十五へ引く餘裕などはない。

隨て黒二十二は否二十の手で兎に角三十と備へておかねばならぬ、然し散々失着の後である、之を不敗に結末する事は容易でない。

㊃左下三目粘　㊄中央三目粘



百一手——百六十五手

（指）

三子局目次

三子局配置の心得　自其一至其卅……七二—九四

第一局　中押勝　少年HK君氏…九五—一〇〇

第二局　勝　少年XF君氏…一〇一—一〇六

第三局　勝　少年YK君氏…一〇七—一一五

第四局　中押勝　少年AS君氏…一一六—一二〇

第五局　中押勝　少年BO君氏…一二一—一二四

第六局　中押勝　少年WT君氏…一二五—一二九

第七局　勝　少年HS君氏…一三〇—一三四

第八局　中押勝　少年RD君氏…一三五—一三八

第九局（補充）　野澤七段夫…一三九—一四五

第十局（補充）　宮阪六段一郎…一四六—一五三

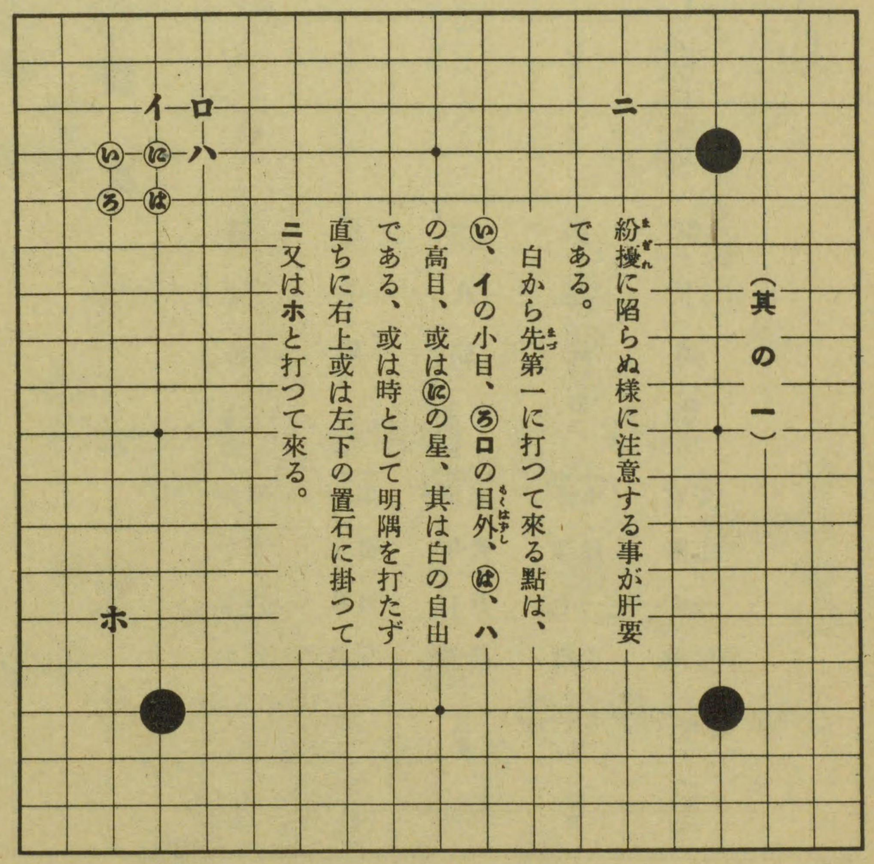
三子局
布石初期

配置之心得（其の一）

三子局は一隅が白先で互先狀態であるから、此の一隅を失着なき樣に應接すれば、他の三隅には黑の配石が嚴存して居るから打ち易い譯である、然し其も主として力量の問題であるから、二子局に比較すると何れだけ樂なか分らぬが、四子局に比較すると一隅（左上隅）が空隅となつて、其處へ白の先手が來るので、一子の差とは思へぬほど打ち辛く感じるのである。

『空隅を互角に打てばよい』とよく聽く言葉であるが、白先であるから多少黑の不利は致し方がない、從來學び得た互先定石の型と理論とを應用して、成る可く簡易に平明に運び、紛擾に陷らぬ樣に注意する事が肝要である。

白から先第一に打つて來る點は、い、イの小目、ろロの目外、は、ハの高目、或はにの星、其は白の自由である、或は時として明隅を打たず直ちに右上或は左下の置石に掛つてニ又はホと打つて來る。



（其の一）

（指）

△（其の二）最も普通とさるゝ型

夾と夾返し

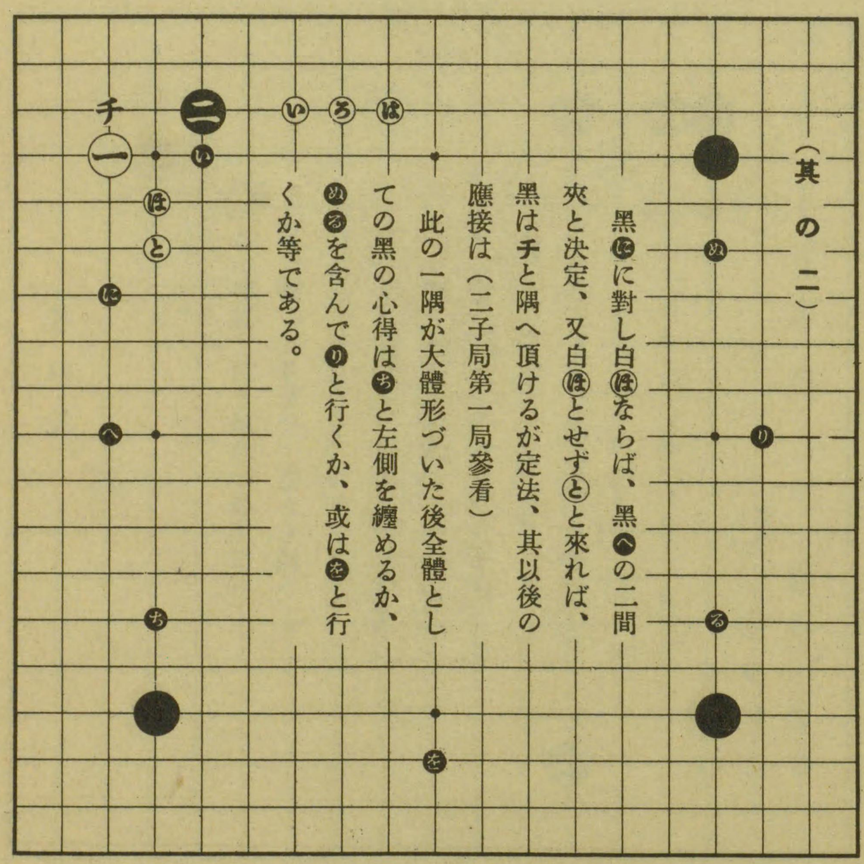
白一と小目に據るのは最も普通の型である、之に對して黑は二と掛るのが之亦尋常の應接、然しいと高く掛つても敢て惡くはない。

何れにしても白をして此の一隅を獨占させぬ樣、一半の利權を奪つておくといふ心得が大切。

黑二に對して白はいの一間夾、ろの二間夾、はの三間夾等積極的に夾擊して來るのが普通である。

此の場合黑の應接は色々あつて何れも定石として利害の研究は盡くされてあるが其の內で（白の夾がいろはの孰れたるに論なく）黑にと二間に夾返すのが比較的簡明である。

黑にの時白はほかとかの二途。



（其の二）

黑にに對し白はならば、黑への二間夾と決定、又白はとせずとと來れば、黑はチと隅へ頂けるが定法、其以後の應接は（二子局第一局參看）

此の一隅が大體形づいた後全體としての黑の心得はおと左側を纏めるか、ぬるを含んでりと行くか、或はをと行くか等である。

（指）

△（其の三）　白一の目外（もくはずし）

大斜掛の舊型

白三に對し黑四をぬと頂けるのが現代型となつてゐる。

然しぬと頂けた後の變化が極めて多岐であつて、俗に『大斜百變』など丶稱し初學者の頗る難關とする所である、其故、大斜定石の變化を學習中で誤り易い惧のある際敵から三と掛けられた時古風に四と並び白五の時六と飛べばよい、此の型を黑少し不利などいふのは專門家の微細な論で、素人碁の拘泥する限でない。

白五でイと遮斷せば黑ぬと頂け白ロの時五と外へ出るから仔細はない

白七と大々斜走（だいだいけいそう）に掛らば黑八が定石、左側に白の大地の出來る前に全局的に黑の大領域が出來る。

（其の三）

△（特註）白七黑八の後黑は容易に隅の締りをせず白から隅へ打込んで來るのを待つ意がある、白がろと隅を侵す其は黑の歡迎する所、卽ち普通にから抑へる手ではと抑へるのが此の白七黑八關係の特色である、此くして白は勢力重複、黑は實利確乎。

△（其の四）黑四と頂ける現代型

前圖には古風ながら大斜百變の繁雜を避ける意味で四と並ぶ型を出したが、本圖四と頂ける手必しも紛擾の因となるといふ譯ではない。

孰れかと言はゞ大斜に掛けた白よりは、掛けられた黑の方から强いて事を好む樣な手を打つのが變化を多樣ならしむる嫌を招く事もある。

本圖の如きは變化も少なく、形も比較的簡單で、此の定石の善後策卽ち其の應用の利害關係も分り易いのであり、常に用ゐらるゝ型である、變化の分岐點は黑十の手で四の一子を十一と行び出すから始まる。

十と截れば極めて簡單である。

㊀九の一子を取る

㊀九の點を粘ぐ

（其の四）

定石としては黑十八、白十九となるのが普通であるが實戰の際、上側右方及左側下方の既着の黑白配置の關係で黑十八の手を省略して左側十九の點に打ち白は上側へいと迫る樣な變化もあれど局面に未だ何等の配置もない三子局の此の圖の如き場合はヤハリ圖の如く十八、十九でよい。

△（其の五）現代型大斜之變化

白がいと取らずに此く十一と行びるのは白の策戰の自由で、多くは中原に壁を造らうといふ意の時である黑十二は紛れのない手。

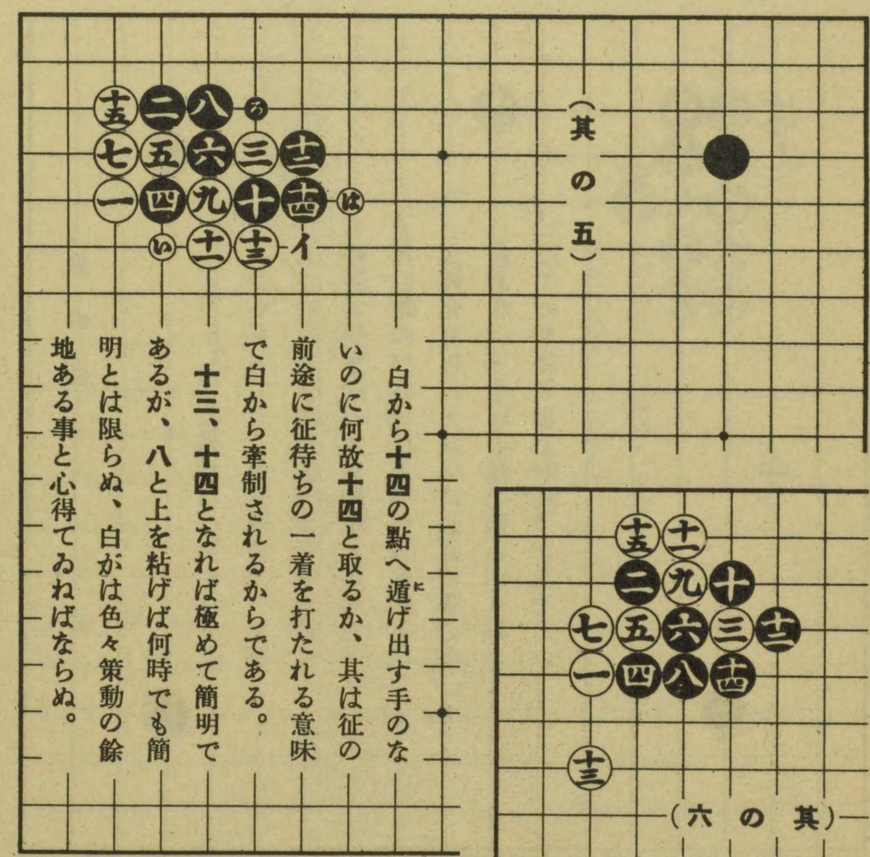
白十三の時黑はろと拔いてもよい黑十四でろなら白ははと威壓するが普通であるが此く十四と粘げば局部を主とする定石としては十五と抑へて隅の實利を占め手順。

然し實戰の場合は白趣向次第で、十五の手でイと押す事もある。

△（其の六）同上

右下隅に白の配石が無いか、或は黑白配石の關係で白三の一子を十二と抱へて征に取る事の出來る時、黑は八の手で此く上を粘いでもよい。

黑十四と拔くは本手である。



（其の五）

白から十四の點へ遁げ出す手のないのに何故十四と取るか、其は征の前途に征待ちの一着を打たれる意味で白から牽制されるからである。

十三、十四となれば極めて簡明であるが、八と上を粘げば何時でも簡明とは限らぬ、白がは色々策動の餘地ある事と心得てゐねばならぬ。

（其の六）

△（其の七）黑二の高掛

白三、五と下る型

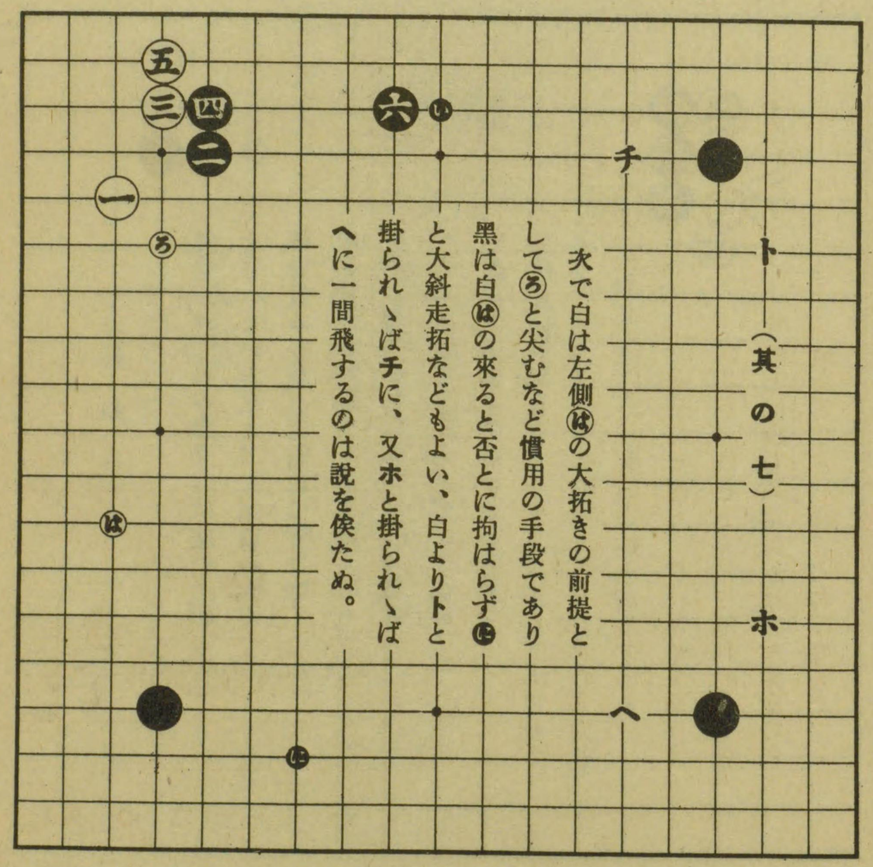
大斜に掛けらるゝがイヤな時。

そして二、四を全局的に有利に活用する意味で。

△部分的に言へば二、四と行くのは不利である、何となれば白に一、三、五と完全に一隅を占領され、其の代償として得た二、四、六は單に側面に繩張りしたといふ迄で、白五の下りに因つて黑は寸毫の實利をも得て居らぬからである。

然し黑の二、四、六は上側に於ける白の策動に制限を與へると同時に右上の置石と相待つて上側に大規模の領域を作成する準備となつてゐる。

黑六は右上隅との均衡上いと廣く星下に拓いておいてもよい。



（其の七）

次で白は左側はの大拓きの前提としてろと尖むなど慣用の手段であり黑は白はの來ると否とに拘はらずにと大斜走拓などもよい、白よりトと掛られゝばチに、又ホと掛られゝばヘに一間飛するのは說を俟たぬ。

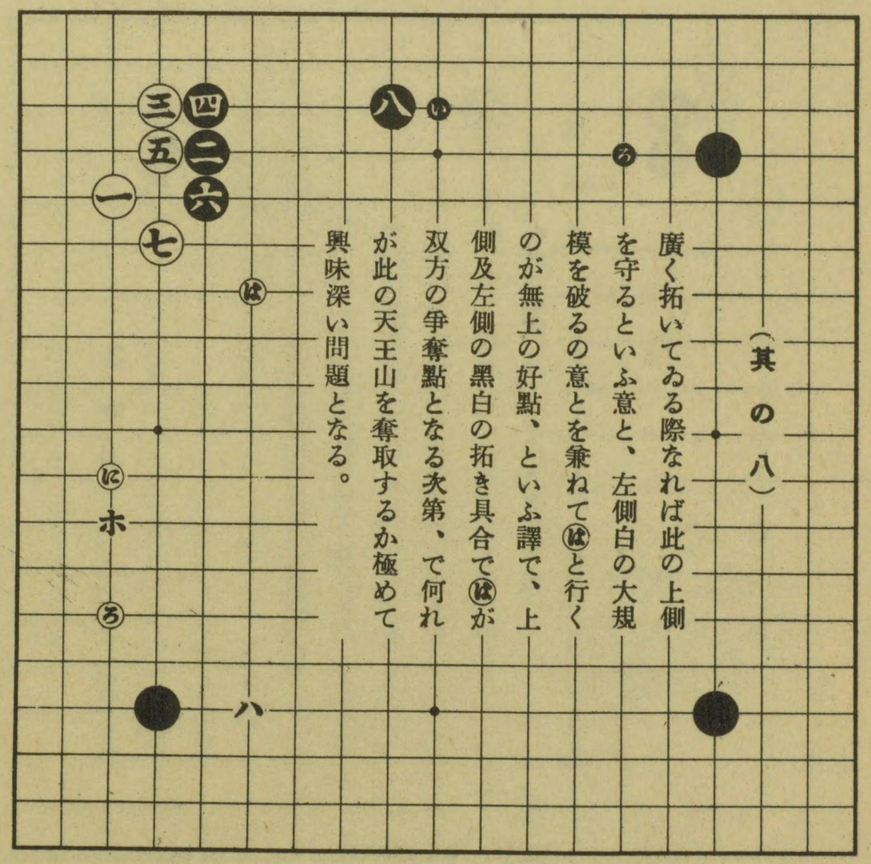
△（其の八）白三、五と上へ押す型

白三、五の意は、黒を六と誘うて其の調子を以つて七と尖み、左側に廣い領域を劃さうといふにある。

黒八は部分の定石としては此く三間拓きが普通なれど後に右上より㋐と飛んで上側を纏める配置としては一路廣く㋑と星下に四間するもよい。

白七と尖んである以上黒六から威壓される惧はないから左側へ廣く㋙の點若くはホに拓ける譯であるが或は極力廣く㋒と左下へ迫り黒をハと應ぜしめる手段もある。

黒八が一路廣く㋑に在れば、白は上側黒の宏壯を妨ぐる意と、左側自己の地域を大成する策とを兼ねて㋺と斜走する手が非常によい手となる、隨つて黒から言へば八の一子を㋑と廣く拓いてゐる際なれば此の上側を守るといふ意と、左側白の大規模を破るの意とを兼ねて㋺と行くのが無上の好點、といふ譯で、上側及左側の黒白の拓き具合で㋺が双方の爭奪點となる次第、で何れが此の天王山を奪取するか極めて興味深い問題となる。



（其の八）

（指）

△（其の九）黒六と飛ぶ型

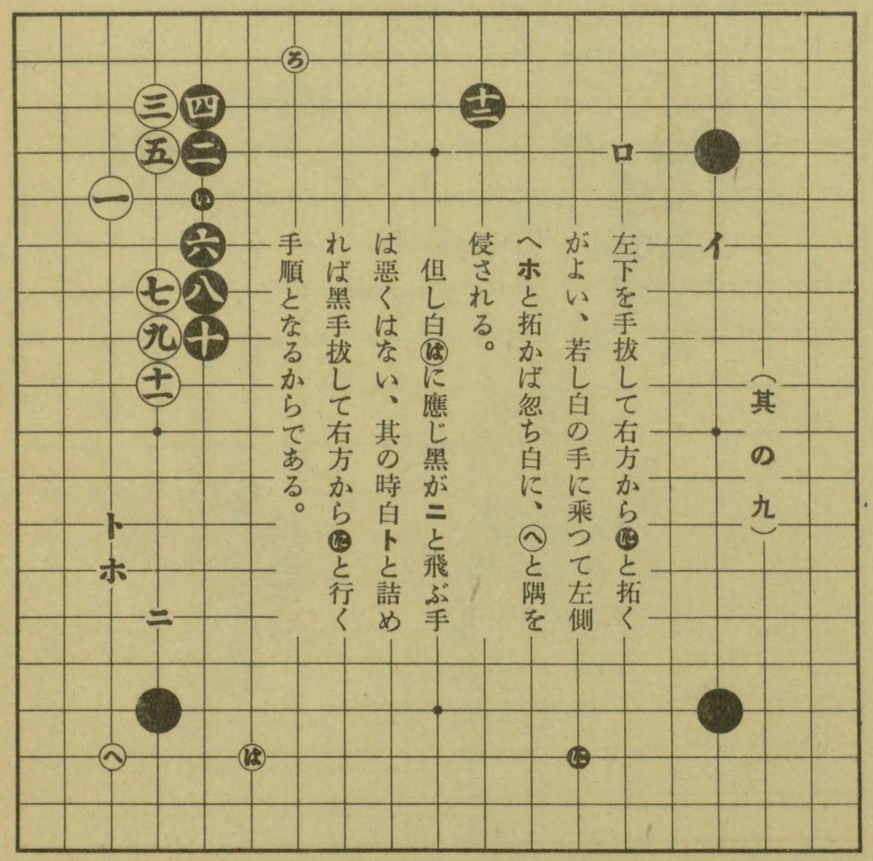
前圖㋑と行びた手を一歩ハタラカして六と飛んだのは、白を左側に壓迫しておいて上側に老大なる地域を形成しようとの意である。

白七は更に一歩を先んずる慣用の手、黒は十と押し十一迄行ばしておいて十二と大勢を制する譯であるが

然し此ういふ大構への策は一手や二手で完全に纏まるものでなく況んや左側の黒壁には㋑の缺點もあり又上側左方には㋒と盤りをほのめかす手も白から打てる譯であるから、黒が二、四と打つ前に、白イ黒ロの既着でもあれば兎も角、此かる漠然たる計劃には却つて非常な細心を要するのである。

本圖十二の後、白㋺と迫らば黒は左下を手抜して右方から㋙と拓くがよい、若し白の手に乘つて左側へホと拓かば忽ち白に、㋭と隅を侵される。

但し白㋺に應じ黒がニと飛ぶ手は悪くはない、其の時白トと詰めれば黒手抜して右方から㋙と行く手順となるからである。



（其の九）

（指）

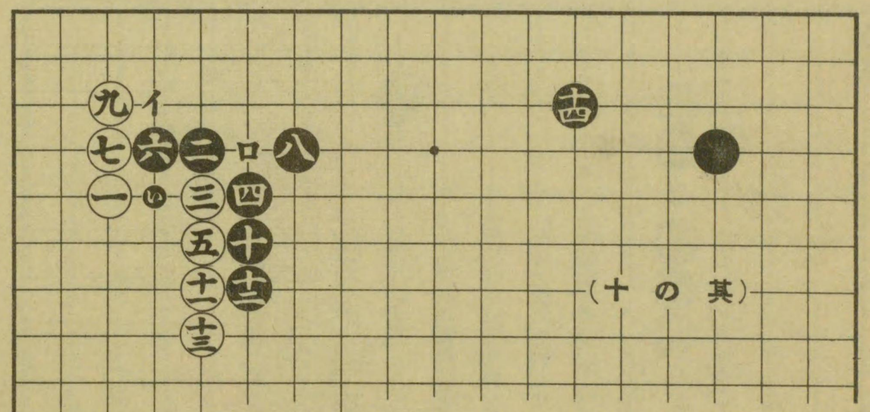
△（其の十）　白三と高く頂ける型

黑が二と高掛りに行た時、白必しも低くイと受けるとは限らぬ、上述諸圖では、隅の實利は白にあるが、大勢は黑に讓る形、白之を嫌ふ時、三と頂けて來る手がある。

白三は黑二の策戰のウラをカク意がある、黑四でいと綽込む手がある（其の十四參看）白五で直ちにロと截る手がある（其の十一圖參看）

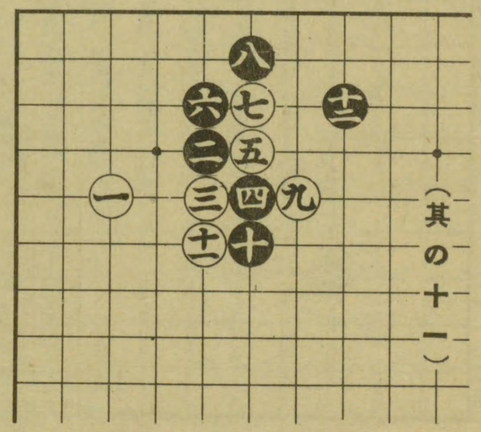
黑四、白五となつた後は十三迄は普通、黑十四は場合による、本圖は右上置石との均衡上好點である。

△（其十一）白五と截る手は、本圖の如く右下に黑の配石があつて白十一と打つても黑二子を征に取れぬ時は十二と打たれるから失敗、白は溯つて五の手から考へねばならぬ。



（其の十）

白七の手でロと截る手がある（其の十二參看）



（其の十一）

（指）

△（其の十二）

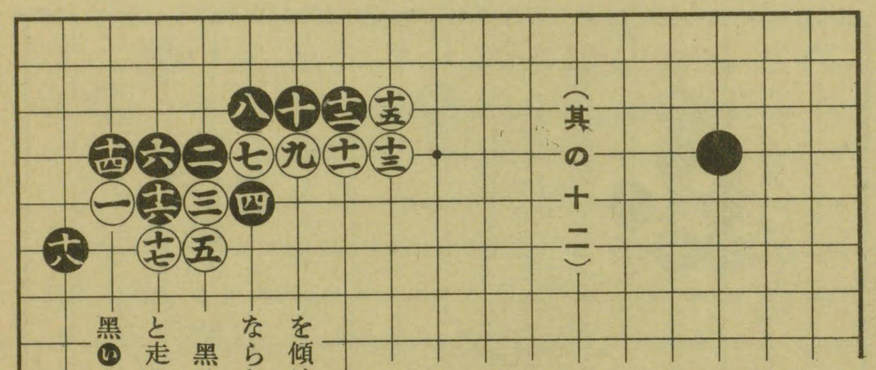
（其の十）七よりの變化

白が七と截つて來た時八と下から掬ひ、以下十二まで押しておいて十四と隅の實利を保留し、上側右方は白十五と曲るに委せておいて十六、十八と運ぶなど穩便な打ち方である

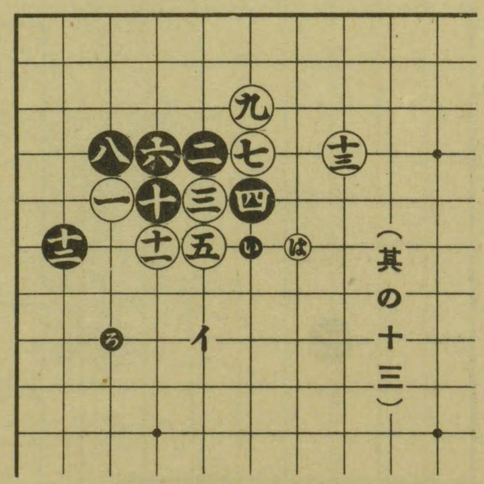
茲で注意せねばならぬのは、（其の九）（其の十）の如く黑が外部に勢を張る手順になれば三子局の布石初期として申ぶんはないが、白の來方に由つて必しも黑の注文通りには參らぬ、本圖及次圖の如く運ばれると白に外勢を張られる手となる、此かる場合黑は、隅に不拔の根據を据ゑ、然る後白外勢の利用を如何妨げるかが研究の主題となるのである。

△（其の十三）黑八で此く隅へ主力を傾けるのは白の外勢をアマリに盛ならしめまいとの用意である。

黑は此處いと押すも一策、或はろと走る手法もある、黑いなら白イ又黑いとせずろなら白はである。



（其の十二）



（其の十三）

（指）

△（其の十四）　征關係

黑四と綽ね込む手法

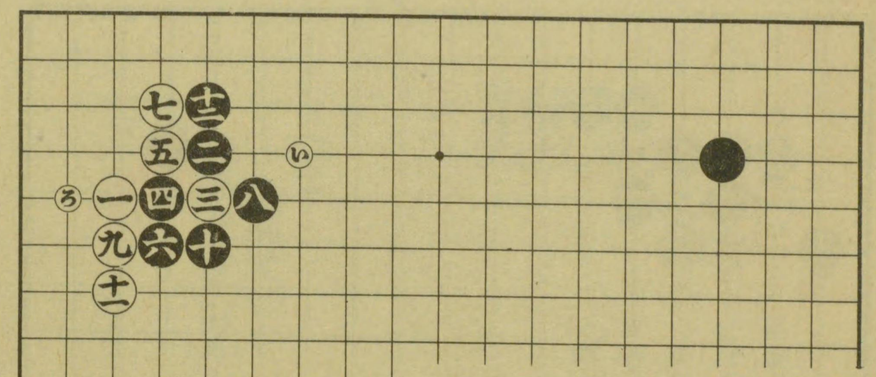
右下隅配石の關係で、白三を八と抱へて征に取り得る場合に限り、黑は四と綽込む手がある。

白三の一子を征に取らるゝを嫌ふ時白は五の手で六の點からアテねばならぬ、白五は三の一子を犧牲として隅に實利を占める意。

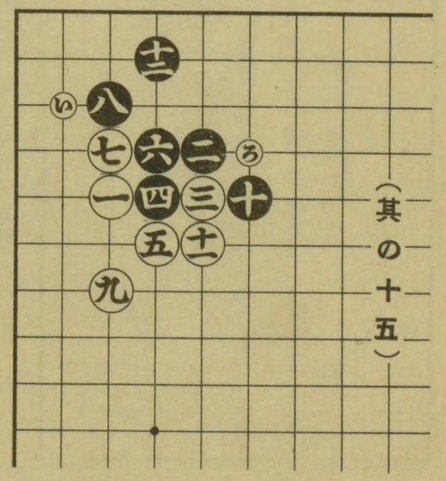
白が九、十一と打つのは左側に黑地を造らすまいと考へた時。

白若し上側に重きを置かば九の手で十二とし、黑十と一子取つた時、白いとする、然る場合黑は左側を九に抑へ、白ろと下る手順。

△（其の十五）　白はいと行く手で九と備へたから黑も隅の實利とろの疵に備へるため十二とした。



（其の十四）



（其の十五）

△（其の十六）　白九、十一と隅の實利を略取する型

黑十八以下の巧妙手段

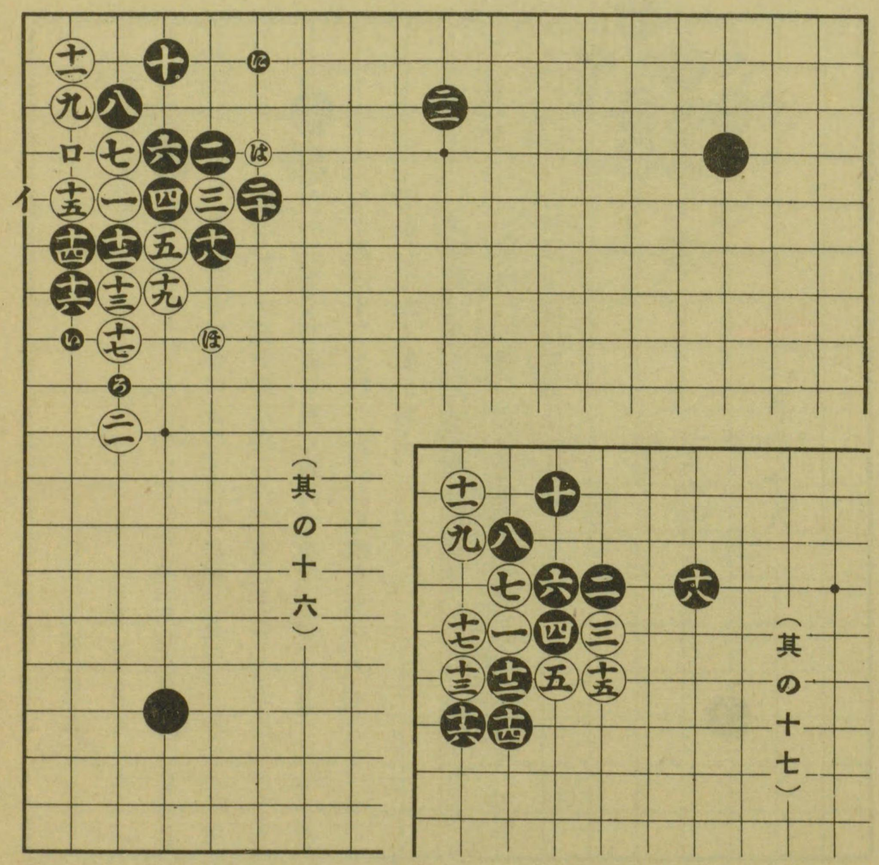
黑十二は之を捨石として外勢を張らうといふ策である。

黑若し十八の手でぬと這へば、白十八の點を粘ぎ、黑イ、白ロ、黑ろと綽ね上げた時、白は、黑にと交換しておいてほと備へ、隅の數子を犧牲にして外勢を張らうといふ考。

乃ち黑十八、二十、二十二は此の白の策戰を打ち破つた譯である。

△（其の十七）同上變化

白十三と下から來れば、黑十四は議論の無い手、白十五の時、黑十六白十七は必然の應接、そこで黑は十八と飛んで上側を整へる手順、中邊白三子が浮いてゐるから黑大利。



（其の十六）

（其の十七）

△（其の十八）　白一高目

黑二の小目掛に對し白三の外頂

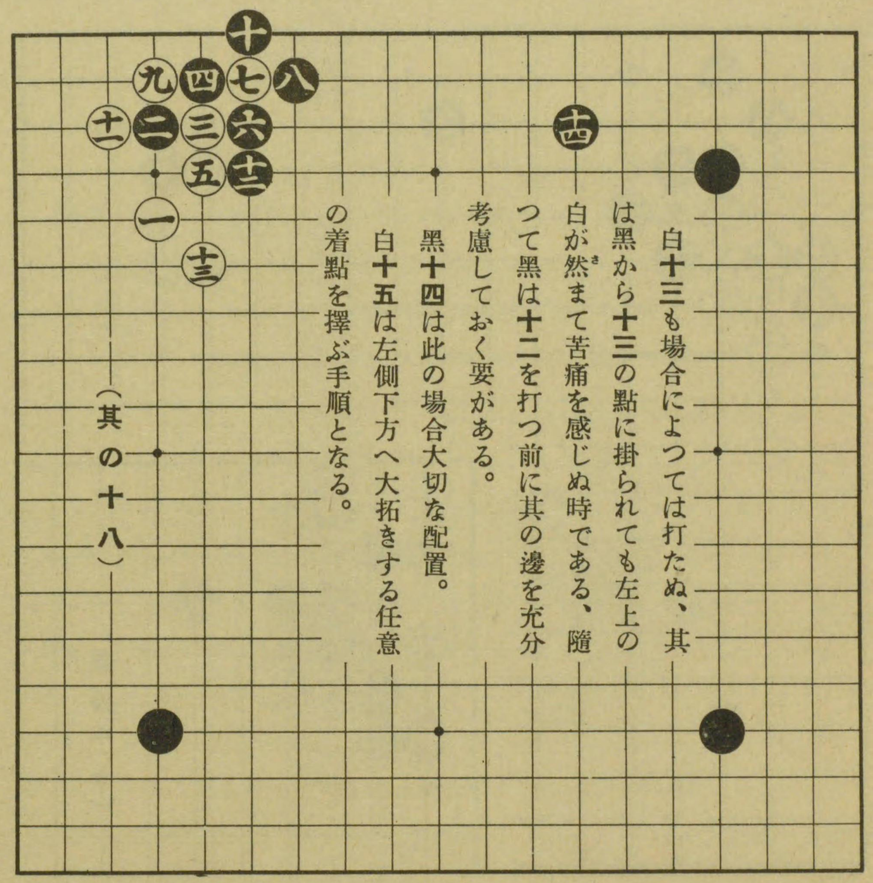
白に三と外から頂けられた以上は黑六迄は動かぬ定石である。

七から截るか、九からきるかは白の自由であるが、本圖は右下隅方面に黑の配石が有つて六の一子を征に取る事が出來ぬから、白は七から截つたのである、此ういふ場合、

白は取らうと思ふ石の反對の方を截る、是は捨石の意味。

黑は、先きに截つて來た方を抱へて取る（以上二つは通則）

黑十二は場合によつて打つか打たぬか判らぬ、本圖では黑が（右上隅置石との關係で）上側を手厚くしようとの策で十二と押す、此の手は白手拔せば十三へ壓迫する意。



（其の十八）

白十三も場合によつては打たぬ、其は黑から十三の點に掛られても左上の白が然まて苦痛を感じぬ時である、隨つて黑は十二を打つ前に其の邊を充分考慮しておく要がある。

黑十四は此の場合大切な配置。

白十五は左側下方へ大拓きする任意の着點を擇ぶ手順となる。

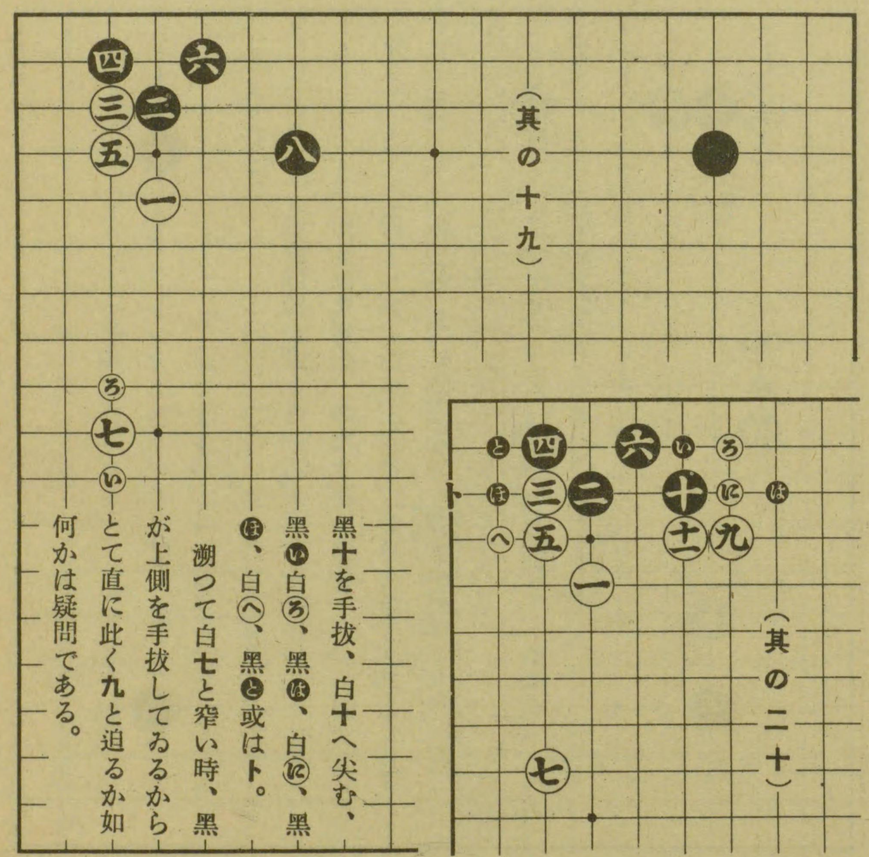
△（其の十九）　白三の內頂

黑四を手拔する手段もある（其の二十一參看）應接するとせば黑四、白五、黑六迄は鐵則。

白七は左下隅方面の關係でいと廣く打つ事もある、又上側へ黑から八と打たさぬ用意としてろと窄く打つ事もある。

黑八は此の點から白に威壓されぬ豫防である。

△（其の二十）白が七と狹い場合黑上側を手拔するのは單に定石としての話であつて、本圖の如く右上隅に黑の置石がある場合はヤハリ黑は九の點に（黑八の一着を）備へておく方がよい、黑十、白十一は定石、黑十を手拔すれば下記の手順で活きだけはあるが黑不利である。



（其の十九）

（其の二十）

黑十を手拔、白十へ尖む、黑いの白ろ、黑はの、白にの、黑はの、白へ、黑とは或はト。

溯つて白七と窄い時、黑が上側を手拔してゐるからとて直に此く九と迫るか如何かは疑問である。

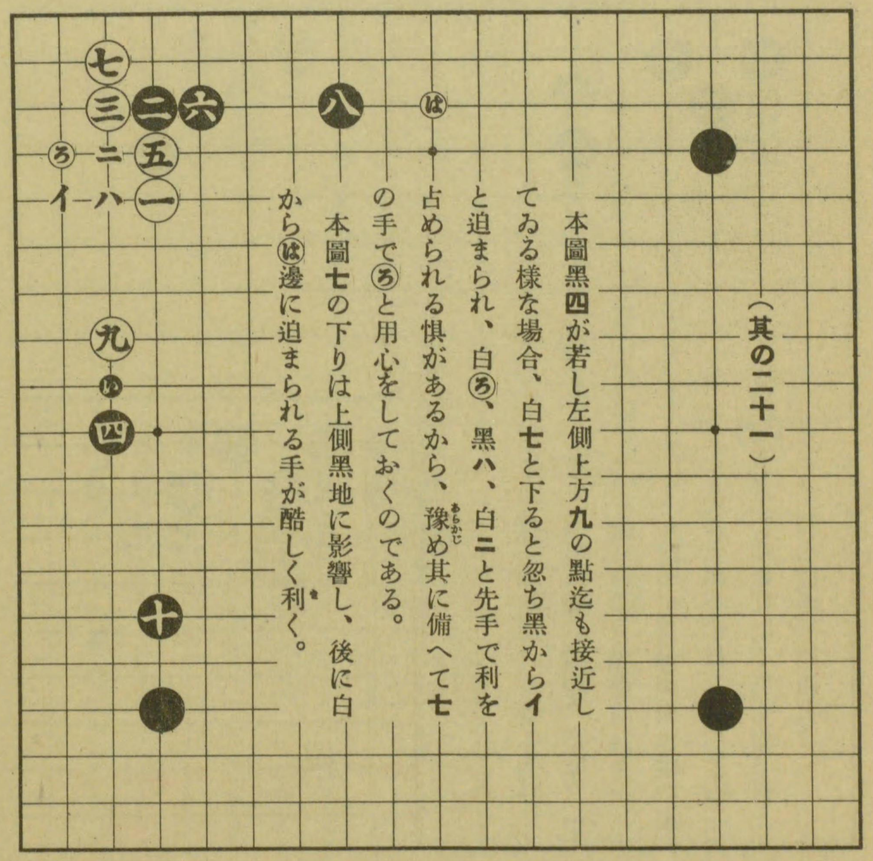
△（其の二十一）黑二と一旦隅の利權に干與する一着を下しておいて白三に對し輕く手を拔いて四と左側の大場に先鞭をつけ、白五以下黑八迄定型を履んで上側にも地歩を占め、白九の詰めに對して十と左下を整へたのは、本局の如く三子碁布石の初期に於ける打ち廻しとして面白い手法である。

（白五で六へ夾む變化もある）

左側下方との關係で黑四がいと若くは九の點に迫つて居る場合は、白七の手をろと掛粘ぐが定石である。

△次頁以下は白斜走掛

高目定石の中で最もメンドウなのが此の小斜走掛け及大斜走掛けの應接である、定石本に就て特に十分の研究を遂げられん事を切望する。



（其の二十一）

本圖黑四が若し左側上方九の點迄も接近してゐる樣な場合、白七と下ると忽ち黑からイと迫まられ、白ろ、黑ハ、白ニと先手で利を占められる惧があるから、豫め其に備へて七の手でろと用心をしておくのである。

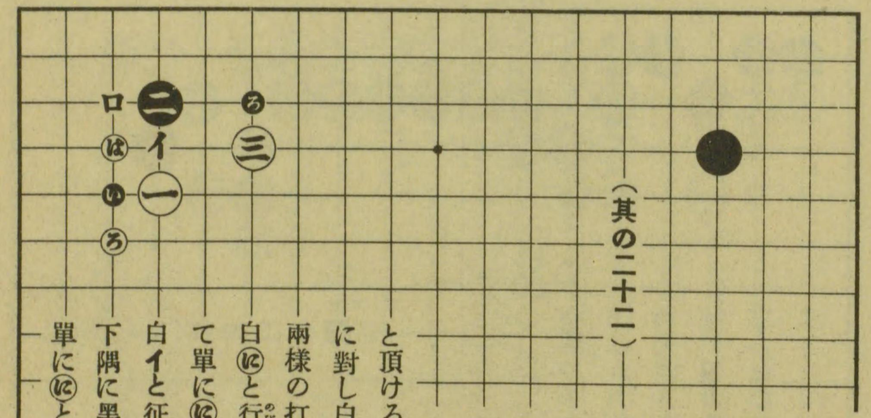
本圖七の下りは上側黑地に影響し、後に白からは邊に迫まられる手が酷しく利く。

△（其の二十二）小斜走掛

白に三と小斜走に掛けられた時、黑の應手は左方へいと頂けるか右方へろと頂けるか、此の二つが爾後のあらゆる變化の分岐點になつてゐるのである、いがよいかろがよいか其は分らぬ、卽今局面の狀態と、次に打つて來る白の策戰によつて樣子が違ふ、いとろと何れを普通とし孰れを特殊とする事も出來ぬ、黑いに對し白がろと外から抑へたならば比較的平明に形づくが、

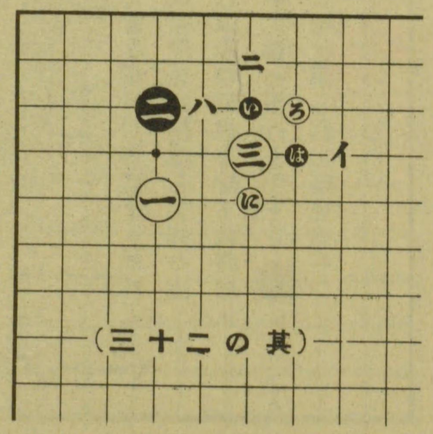
白はろとせずイとツキアタリ、黑はの時ロと截つて黑を一隅に封鎖する手段に出るか（是亦簡明）或は黑いの時直にはと綽込み、紛擾を策するかも知れぬ（複雜）

△（其の二十三）白三の腹へ黑がい



（其の二十二）

と頂ける變化は比較的簡明である、黑いに對し白ろと抑へ黑はと截る、茲で白に兩樣の打方がある、黑はの時白ハ、黑ニ、白にと行か或はハ、ニの交換を打たずして單ににと行るか、前者は黑はの一子が白イと征に取れる時、本圖は三子局で右下隅に黑置石あるため征は不可能故、白單ににと行る、但し是も征問題となる。



（其の二十三）

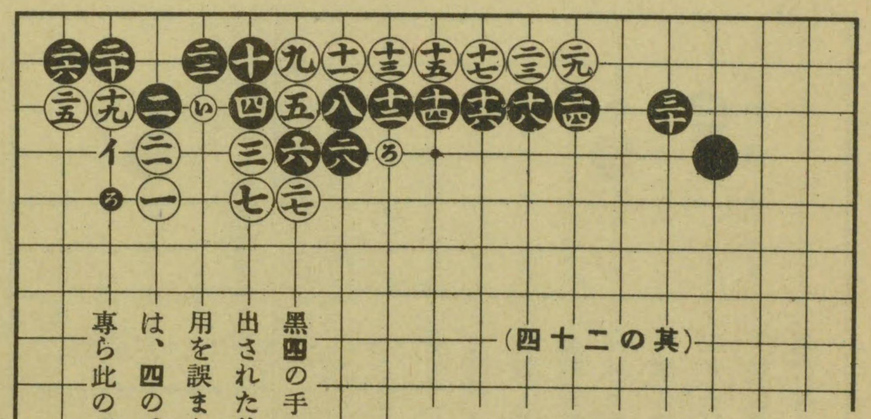
△（其の二十四）八、十と打つて白を第二線に壓迫する型

白七の手でい、黒十、白七、黒二十二、白二十八と打つても黒六の一子を征に取る事が出來ぬとすれば、本圖の如く單に七と行びるより外はない、以下白二十九迄は命令手。

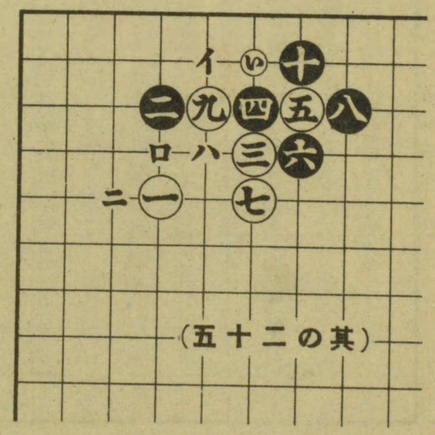
白十三で二十八黒二十七白ろとするのも征であるが、本局は右下に置石あるため此の征も成立せぬから十三、十五と這ふの外なし。

△（其の二十五）黒八の時、白は一子を捨てゝ振替るの一法、サテ白十一の手は如何に打つ可きか、白の態度としてはいにアテル所黒はイの劫を保留して手抜きといふ順序。

白若しいとせずイと下らば、黒ロ白ハ、黒ニの手が殘る。



（其の二十四）



（五十二の其）

黒四の手でろと頂け、白にイと綽ね出された後の變化に精通して其の應用を誤まらぬ迄の自信の持てぬ諸君は、四の手でいと頂ける手を止して專ら此の二圖に據られん事を望む。

△（其の二十六）　大斜走掛

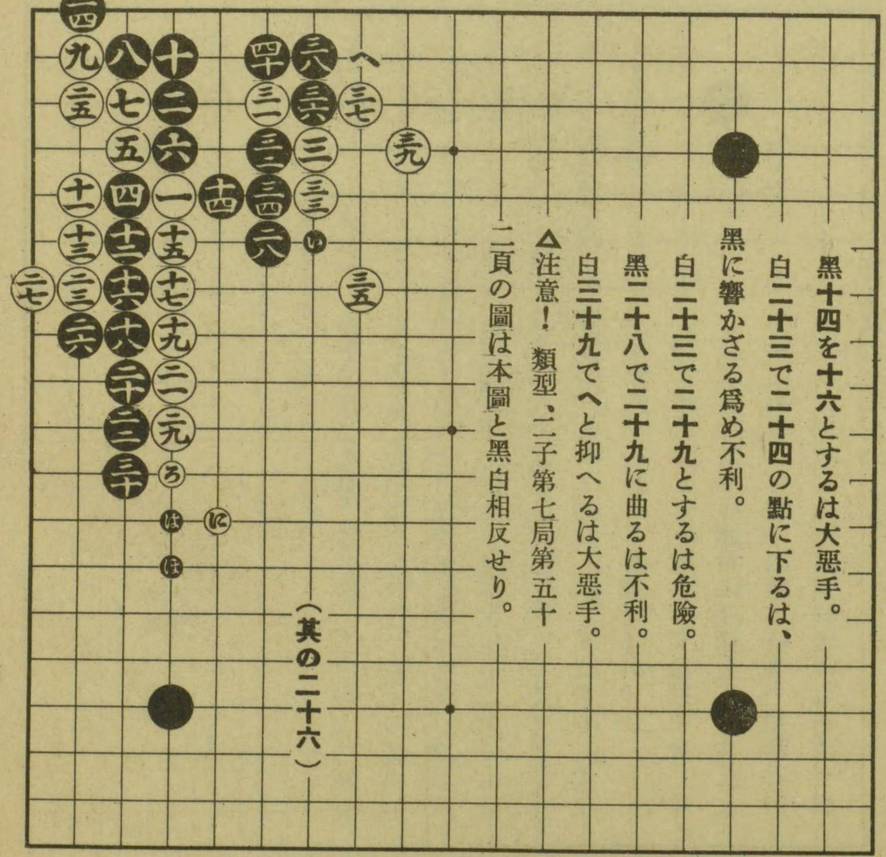
黒が四と頂けた時、白に五と綽出されたならば大體本圖の如き結果となるのが普通。

此の手順中注意す可き大切な手は黒の十四、白の二十三等である。

白若し二十三の手で二十九と押さば、二子第七局（第五十二頁）の如き不利の劫となる。

白三十五は或は三十九と上側に備へる事もある、其は三十六のキリ取りを拒ぎ黒に根據を造らさぬ意。

△註　白三十五で三十九とせば、黒はいと曲つておけばよい、其の際白ろに押さば黒はと綽ね白に、黒はで自然黒の地域は整備する、此の手順中、双方共陷り易き不利の手若くは惡手は下記の如し。



黒十四を十六とするは大惡手。

白二十三で二十四の點に下るは、黒に響かざる爲め不利。

白二十三で二十九とするは危險。

黒二十八で二十九に曲るは不利。

白三十九でへと抑へるは大惡手。

△注意！　類型、二子第七局第五十二頁の圖は本圖と黒白相反せり。

（其の二十六）

△（其の二十七）　小斜走掛

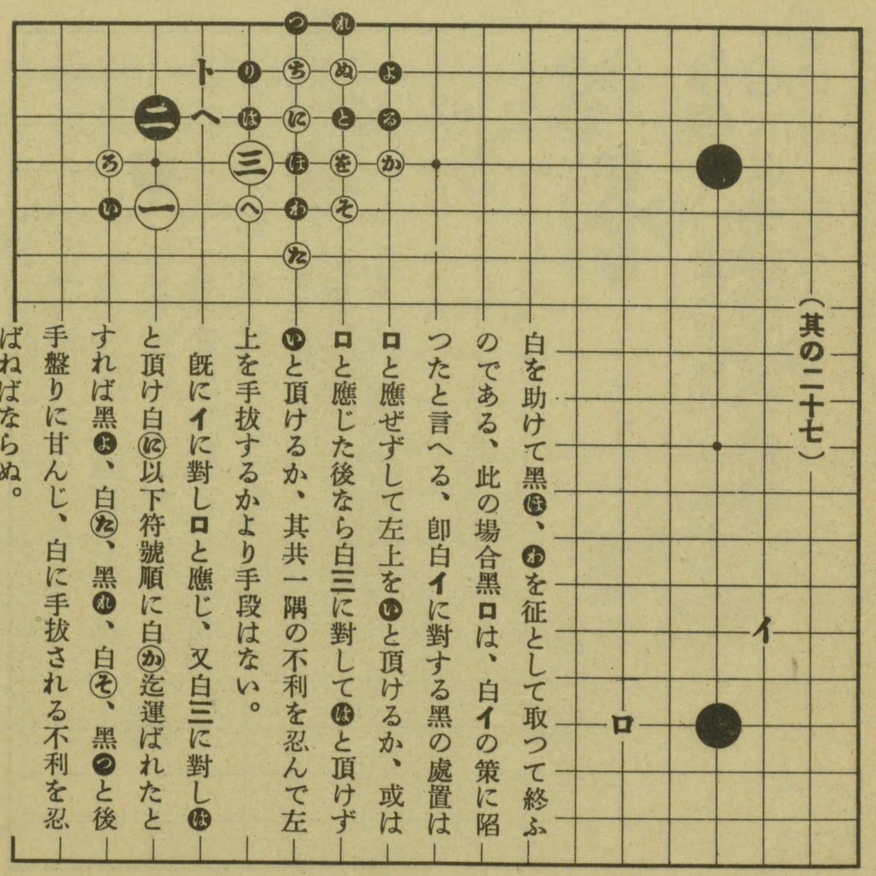
手拔問題の前提

白三の手でイと行く征關係

白三、黑四の手で㋚、白㋛、黑㋜白へ、黑り、白㋩、黑ト、白㋭とするも征關係（前掲八十七頁參看）

又此に符號順に示す、白三、黑㋚白㋛、黑㋜、白㋩、黑と、白ち、黑り、白ぬ、黑るの時、白が㋭と截る手ありや否やも征關係。

本圖の如く三子局で右下隅に黑の置石のある場合は、白から㋜の一子を征にかけても此の㋜が右下隅置石へ連絡して終ふから征は成立しないのである、乃で白に一策をヤラレるかも知れぬ、白三の手でイと右下へ掛つて黑の動靜を見るのである、白イに對し黑ロなら此の白イが左上の



（其の二十七）

白を助けて黑㋜、㋞を征として取つて終ふのである、此の場合黑ロは、白イの策に陷つたと言へる、卽白イに對する黑の處置はロと應ぜずして左上を㋩と頂けるか、或はロと應じた後なら白三に對して㋚と頂けずぬと頂けるか、其共一隅の不利を忍んで左上を手拔するかより手段はない。

既にイに對しロと應じ、又白三に對し㋚と頂け白㋛以下符號順に白㋕迄運ばれたとすれば黑よ、白た、黑れ、白そ、黑つと後手盤りに甘んじ、白に手拔される不利を忍ばねばならぬ。

△（其の二十八）　手拔問題

白三を何處へ打つかは主として白の特權であるから黑は手を束ねて白の來方を見てゐるより外はない。

黑四の手でぬと頂け白イと外より抑へられる手は研究ズミだが、るとの綽込まれる手はマダ卒業してゐないから中止してくれ、とは言へぬ。

黑㋚と頂ける手も同斷である。

□未知の路を辿る譯にはゆかぬ。

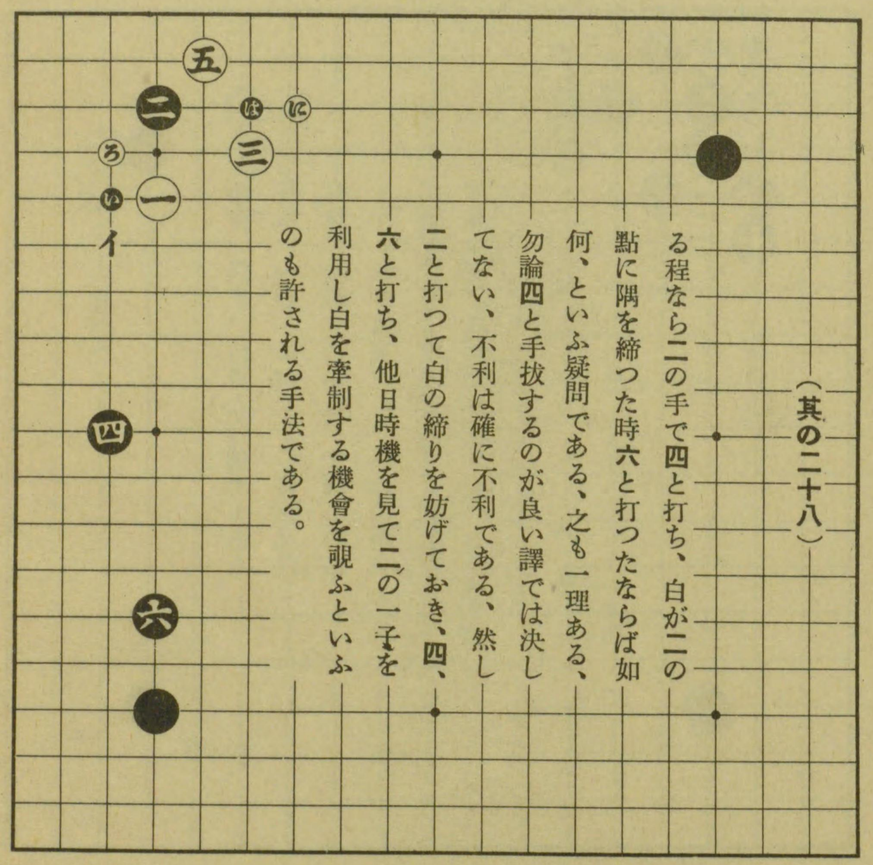
此の場合黑の取る可き方針は、

手拔の一路

あるのみである、白一、黑二、白三の時黑手拔して四と打つ（此の四は後に白より側面發展として擇ぶ好地點であるから豫じめ其を奪ふ意。

白五とでも來れば、黑六と守る。

玆で問題となるのは、黑が手拔する程なら二の手で四と打ち、白が二の點に隅を締つた時六と打つたならば如何、といふ疑問である、之も一理ある、勿論四と手拔するのが良い譯では決してない、不利は確に不利である、然し二と打つて白の締りを妨げておき、四、六と打ち、他日時機を見て二の一子を利用し白を牽制する機會を覗ふといふのも許される手法である。



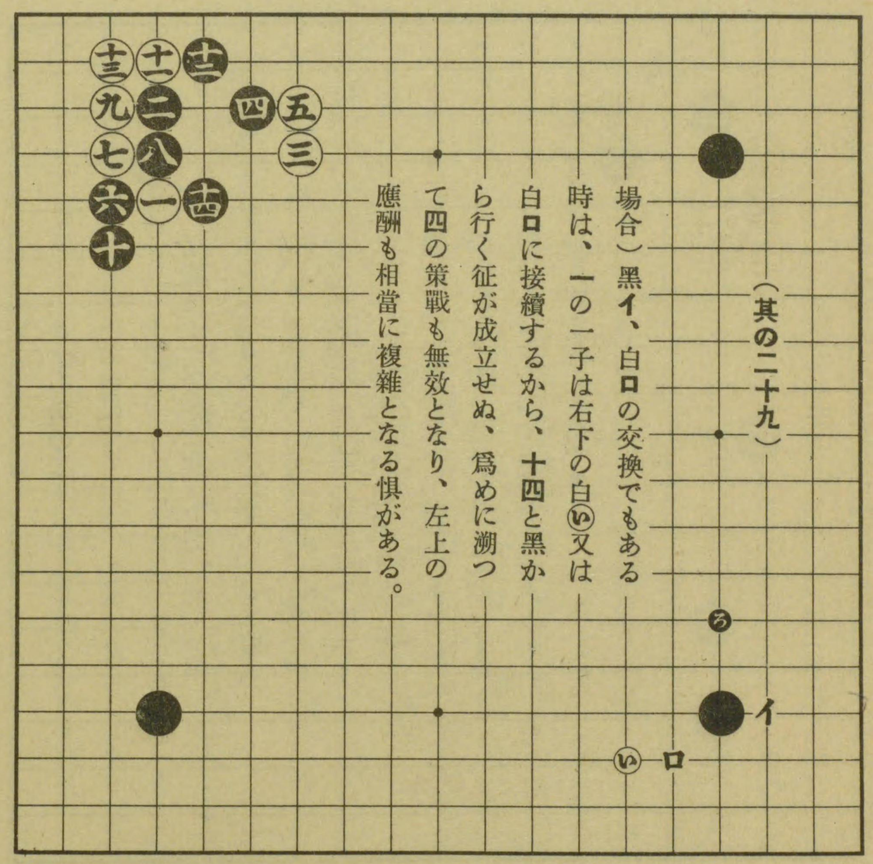
（其の二十八）

△（其の二十九）　大斜走掛

同上　手拔問題の前提

白三は、黑若し四の手で六と頂けて來たならば七の點へ綽込まうといふ意であるから、白から別の打ち方はない、と心得てゐてよい、唯一つ黑が此の綽込みを嫌ふ場合、其の豫防策として圖の如く四と右へ打ち、白に五と應じさせてから六と頂ける手段である、然し此の策は絶對ではない、右下隅の配石狀態が、征問題として黑に有利な場合に限るので、右下方面に白の配石が無くて、左上で黑十、十四と行ける時のみ四が成功してゐる、卽ち白は七と綽込む手はない。

然し右下隅に白ゐ、黑ろの交換でもあるか、或は（互先或は二子局の場合）黑イ、白ロの交換でもある時は、一の一子は右下の白ゐ又は白ロに接續するから、十四と黑から行く征が成立せぬ、爲めに溯つて四の策戰も無效となり、左上の應酬も相當に複雜となる惧がある。



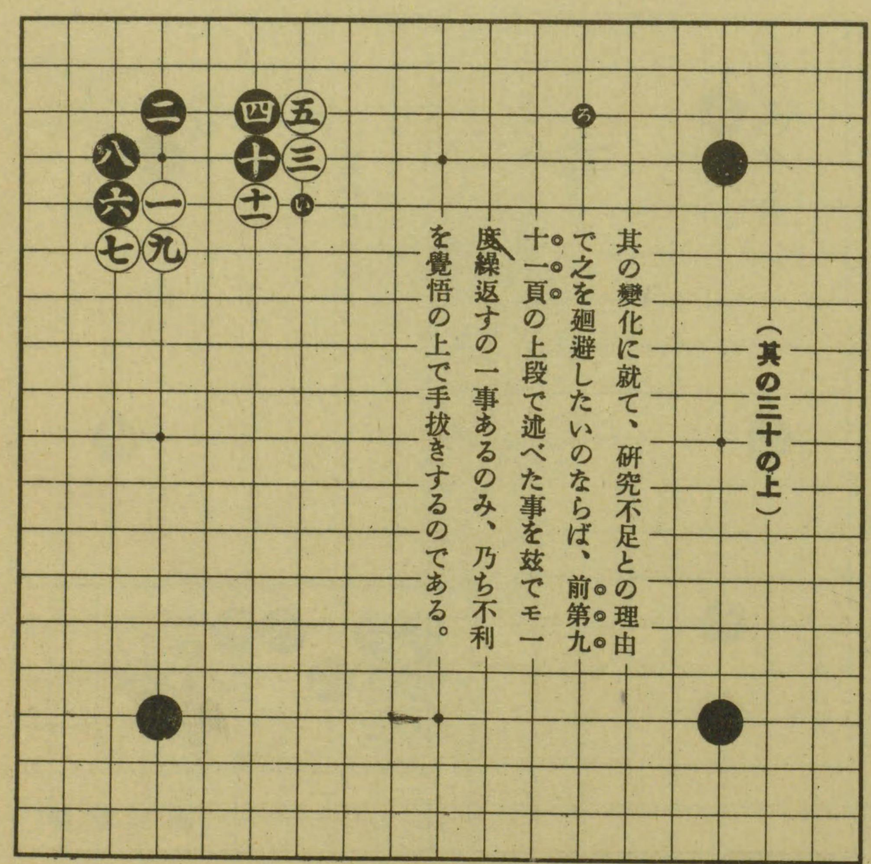
（其の二十九）

△（其の三十の上）

同上　手拔問題

白に三と大斜走に掛けられた時、黑は先以つて右下隅方面の布石狀態を調べる、前圖の如く征で白を取る事が可能と見たならば、黑は四と一着を白三のアゴへ打つておいてから六と左へ頂ける、白は綽込が出來ぬから外より七と抑へ、黑八と引き、白が九と粘いだ時、黑十と出、白が二子の頭を十一と綽ねた時、ゐのキリを保留しておいて、局面任意の點（例せば右上をろと大斜走）に着手すればよい。

大斜走掛は小斜走掛に比して變化も少いのであるから、本來は八の點への綽込などに顧慮せず六と頂け敢然として戰はねばならぬ、が若しも其の變化に就て、研究不足との理由で之を廻避したいのならば、前第九十一頁の上段で述べた事を玆でモ一度繰返すの一事あるのみ、乃ち不利を覺悟の上で手拔きするのである。



（其の三十の上）

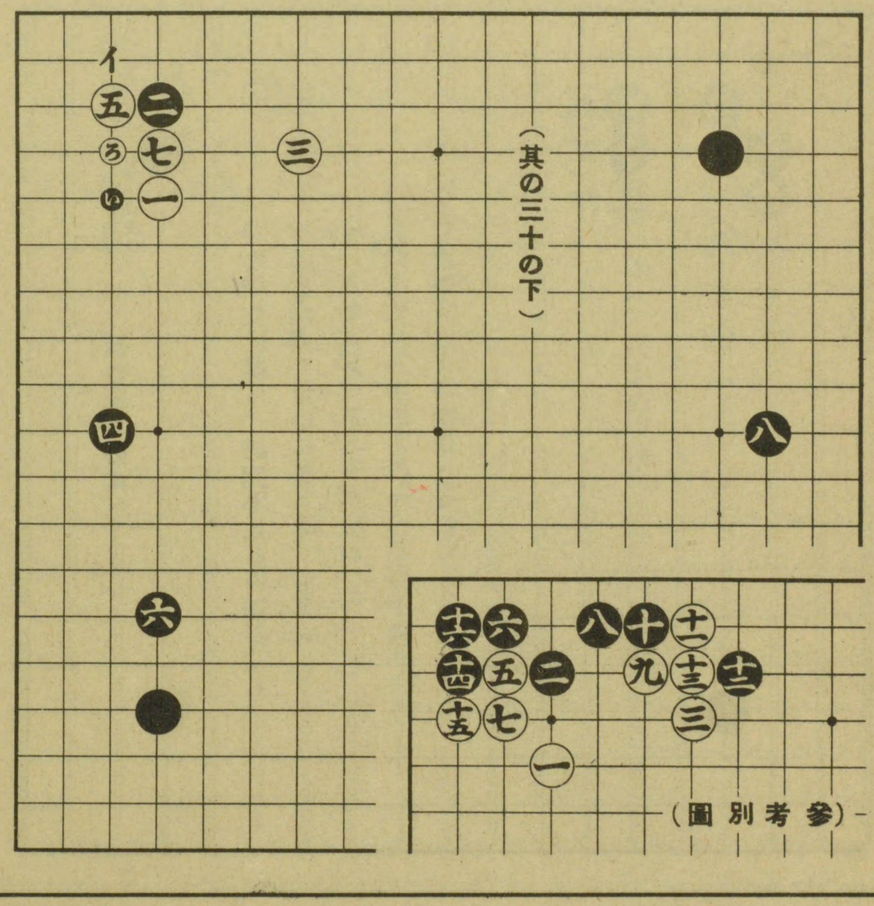
△（其の三十の下）

同上　手抜問題　（續き）

黒四で㋺と頂けて㋩と綽込まれる手の變化に自信が持てぬとあらば、四の手を手抜して左側星下に四と大場を占めるの外はない、其の際白五ならば黒は六と飛んで四との連絡を取り左側下方の整備を計り、白七と左上の黒に止を刺した時、八と右側の大場に據るのも三子置碁たる本局に在つては相當有望の局面となる。

問　白五に對し黒イと綽ねて左上を應酬して行くの可否如何。

答　斷じて不可なり、一旦手抜した以上は徹底的に手抜せねばイケヌ、若しイと綽ねると別圖の如き結果となつて所謂三手抜の不利に陷る事となる。



（指）

三子

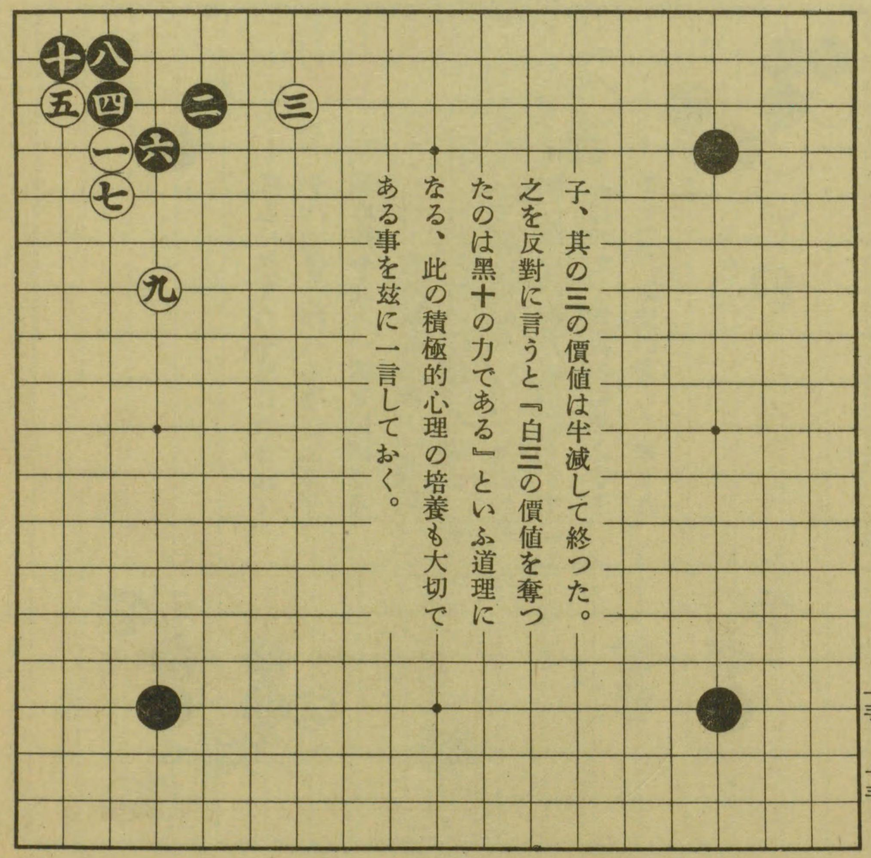
第一局

中押勝　少年K君　來賓H氏

叙

三子局劈頭の二十三頁を以つて布石初期配置の心得を略叙した、其の中で一間、二間、三間の三種の夾に就ては特に省略しておいた、其は本文に入つて（本局の如く）實例が提供されるからである。

△　黒四以下十迄は三々頂の定型の一種である、白三と酷しく迫つて居るから十と曲つて活きを確實にするのは極めて肝要である、此の十の手を以つて『恐しいから活きておく』といふ消極的心理の外に『堅固に活きてゐる』黒に三と肉薄し白三の一子、其の三の價値は半減して終つた。之を反對に言うと『白三の價値を奪つたのは黒十の力である』といふ道理になる、此の積極的心理の培養も大切である事を茲に一言しておく。



（指）

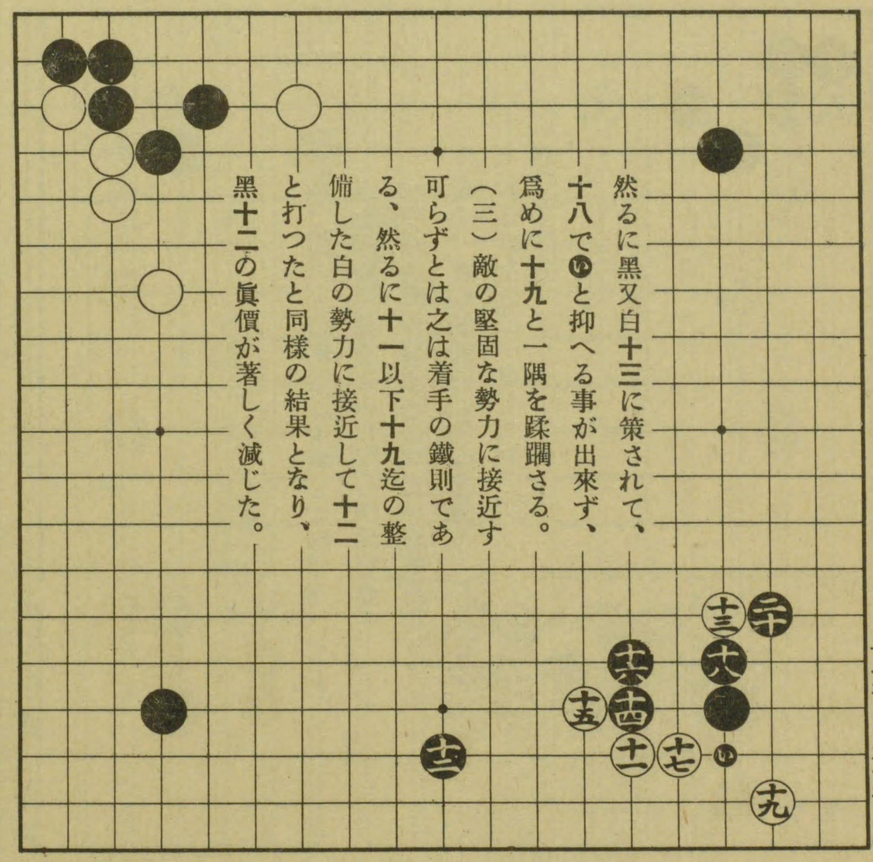
○　黑十二の手は十三の點に一間飛するを可とす。

△註　十二の點は白十一に對して三間夾の位置に在る、此く夾む事も場合宜しきを得ば有利な着點であるが、時も處も考へずに夾みさへすればよい、といふ譯のものではない、本局十二は場合宜しきを得ぬため局勢を不利に導いた。

黑十二が原因となつて黑は玆に三重の非を犯した結果となる。

（一）兩掛の時は自己の勢力の無き方に頂く可し、とは通則である、然るに黑は白十三に餘義なくされて十二と我が勢力のある方へ十四と頂けた。

（二）頂手は白十七の時い と抑へて隅の守りが出來るが常である



然るに黑又白十三に策されて、十八でい と抑へる事が出來ず、爲めに十九と一隅を蹂躙さる。

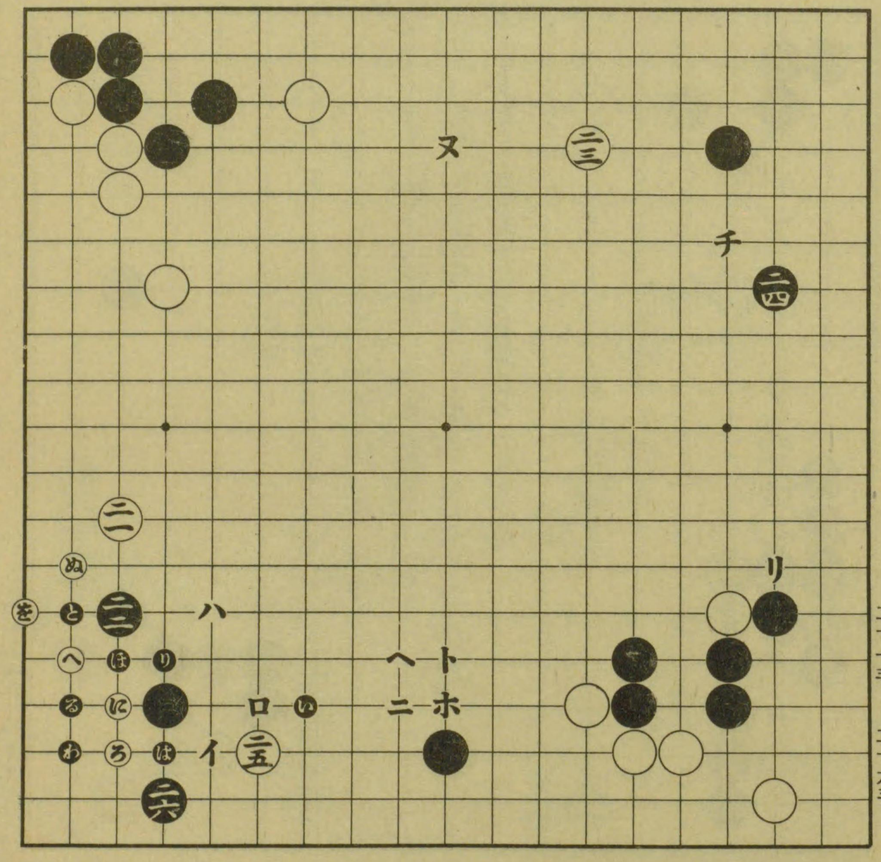
（三）敵の堅固な勢力に接近す可らずとは之は着手の鐵則である、然るに十一以下十九迄の整備した白の勢力に接近して十二と打つたと同樣の結果となり、黑十二の眞價が著しく減じた。

△註　黑二十二と必しも此く窄く受ける必要はない、此の手でか と下側を二間し、白若しろ と三々を侵して來たならばは と背面より抑へ白に、黑は、白へ、黑と、白二十二、黑り、白ぬ、黑る、白を、黑わ と振替つて隅を治まるがよい。

○　黑二十六緩し、イと尖みつけ、白ロの時ハと飛ぶ手法をよしとす。

△註　次で白ニとせば黑ホと抑す又白ニとせずへならば黑トと飛び頂け何れにしても星下の一子を逸出して白を左右に隔てる事となる。

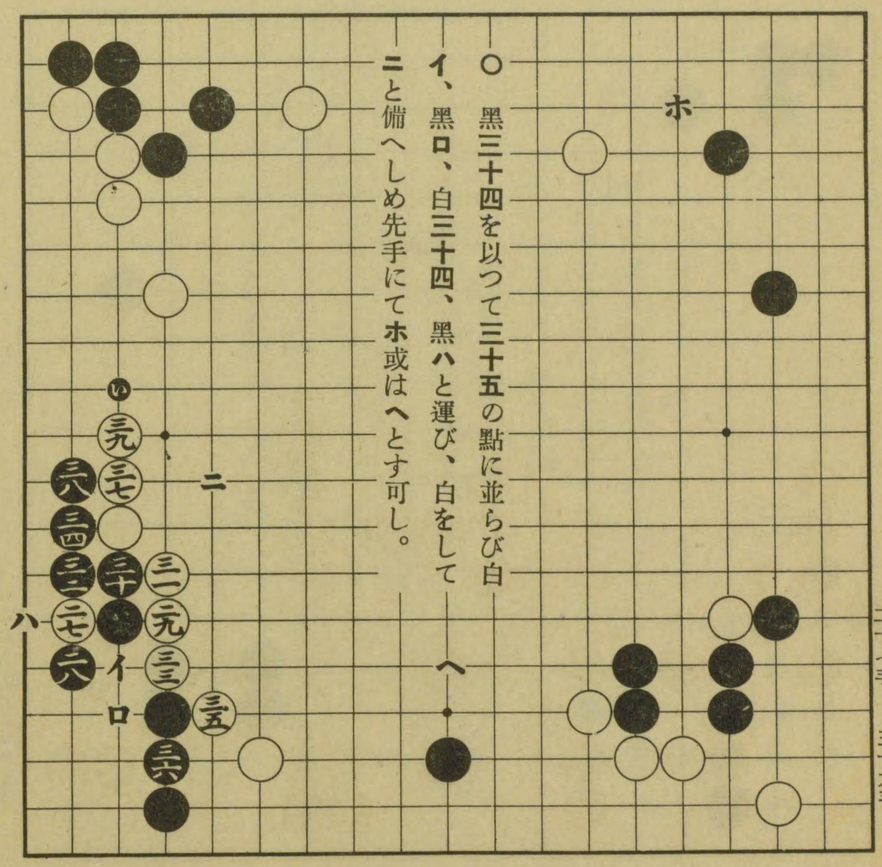
△　黑二十四はチと一間に飛ぶ尋常の應接の方が後の捌きに良い、チと高ければ後に黑が右下よりリと出た時其の均衡もよろしく又上側をヌと威壓する時の便宜もよい。



○　黒二十八の手にてイと引くも良し、次で三十の手はイの點を堅く粘ぐが本手たる可し。

△註　二十八でイと引いて置けば白の手が二十九とは來ない、又三十と進む手でイと堅固に粘いでおけば、三十一、三十三、三十五と塗りつけられる惧もなかつたのである、要するに白二十七以下の趣向は黒の姿勢を重複せしめ、茲に多少の勢力を加へてい邊の打込を拒がうといふのである、然るに黒の應接は却つて白を援けて所期以上の效果を收めしめた。

黒三十八、白三十九の交換なくば後にいと侵す手も出來る、畢竟三十二、三十四、三十八と二線を這ふは大不利。



○　黒三十四を以つて三十五の點に並らび白イ、黒ロ、白三十四、黒ハと運び、白をしてニと備へしめ先手にてホ或はヘとす可し。

二十七手——三十九手

○　黒四十六打過ぎなり、四十七とするを本手とす。

○　黒五十六は七十九の點に打つ可し、此の手最も大切なり。

○　黒六十はたと打つ可し。

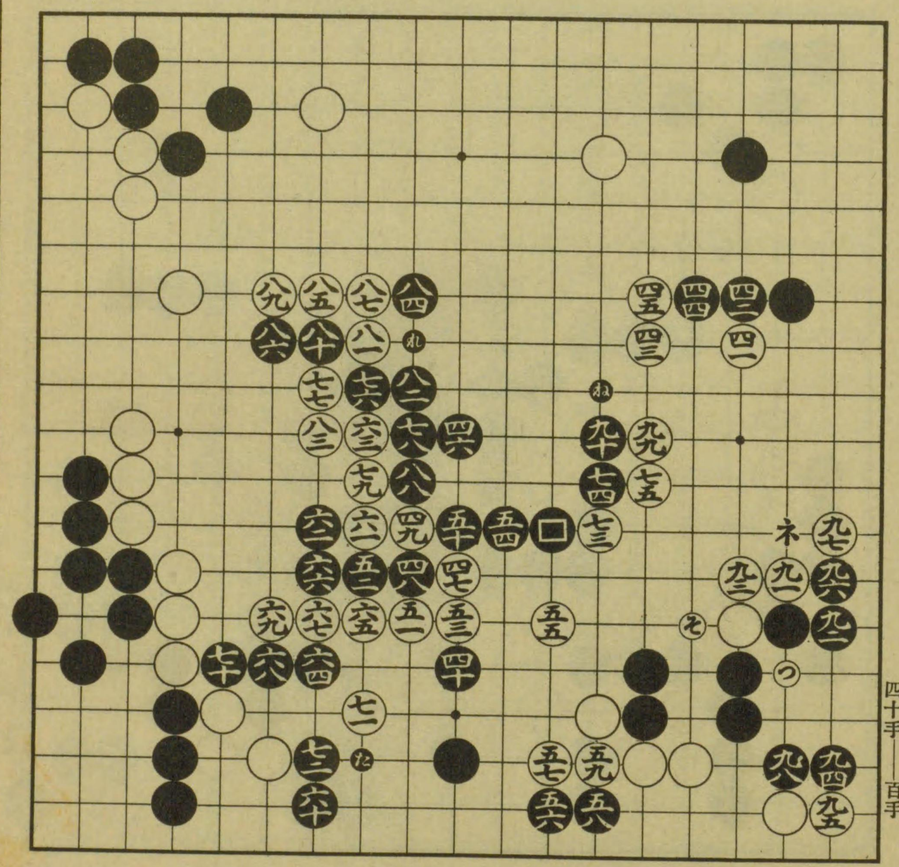
○　黒六十二は七十四の邊に飛ぶ可し六十四以下着々皆惡し、此の手で七十六とし白七十七黒七十八白七十九黒八十一と運ぶの外なし。

○　黒八十も八十一の行びなり。

○　黒八十八は打たずして單にれと粘ぐ可し。

○　黒九十二は先づ九十三と截るを要點とす、白そと行び黒九十六とアテ白若しつと截つて來ればネと拔いて四子を捨つるも決して不利に非ず。

○　黒百は惡い、ねと打ちおかば中央と右下隅は味にて活あり。



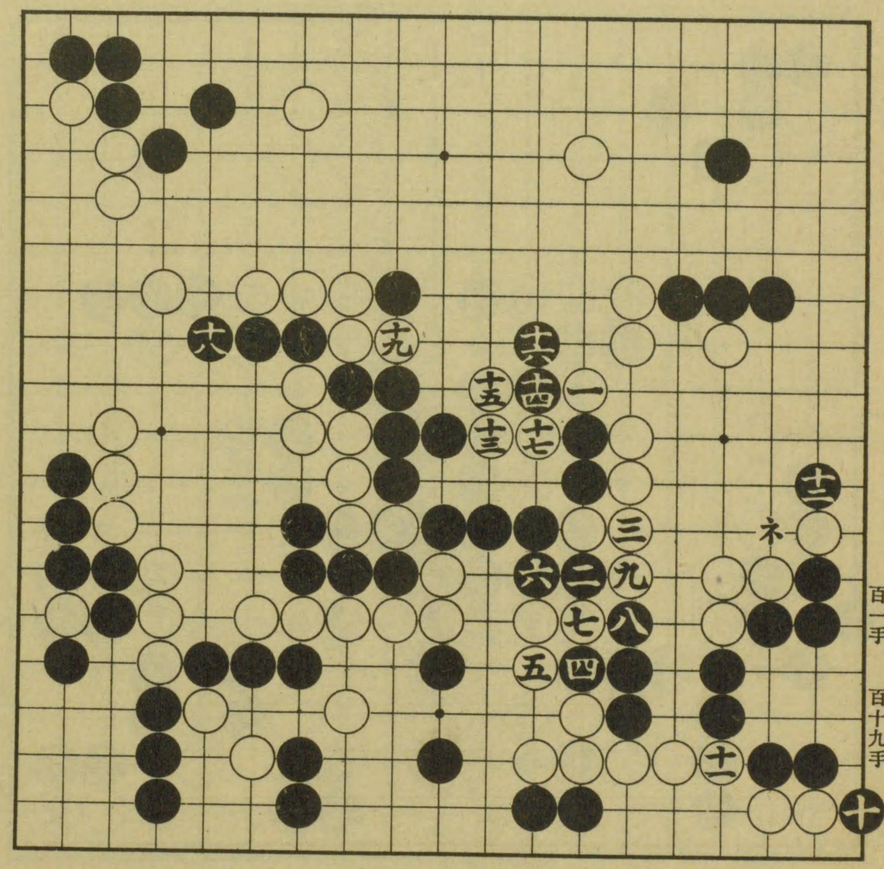
四十手——百手

『總評』本局は四十六の打ち過ぎにて敗因を醸したのである、白に四十七、四十九と急撃されて陣形早くも亂れ、終に收拾す可からざる局面となつた。最後百（ロ）の手で（一の點）に行びておけば中原の黑は容易に斃れるものではない、然して（ネ）の缺點と相持して隅にも活はあるが此く白に一と綽ねられては、中原の大石に活路は六かしく、ヨシヤ僥倖に九死に一生を得たとしても、敗局たる事は免れぬのである。

「計百十九手止」

△　△　△

對局中に『玆を此く打てば取れてゐた』とか『此くすれば活があつたのだ』とか、アマリクド〳〵しきは耳障りにして聞き苦しきものなり。



（指）

三子

第二局

勝　少年F君
來賓X氏

△冠註　白九は上側方面に廣く地域を取らうといふ計劃であり、溯つて白七は其の準備と見てよい。

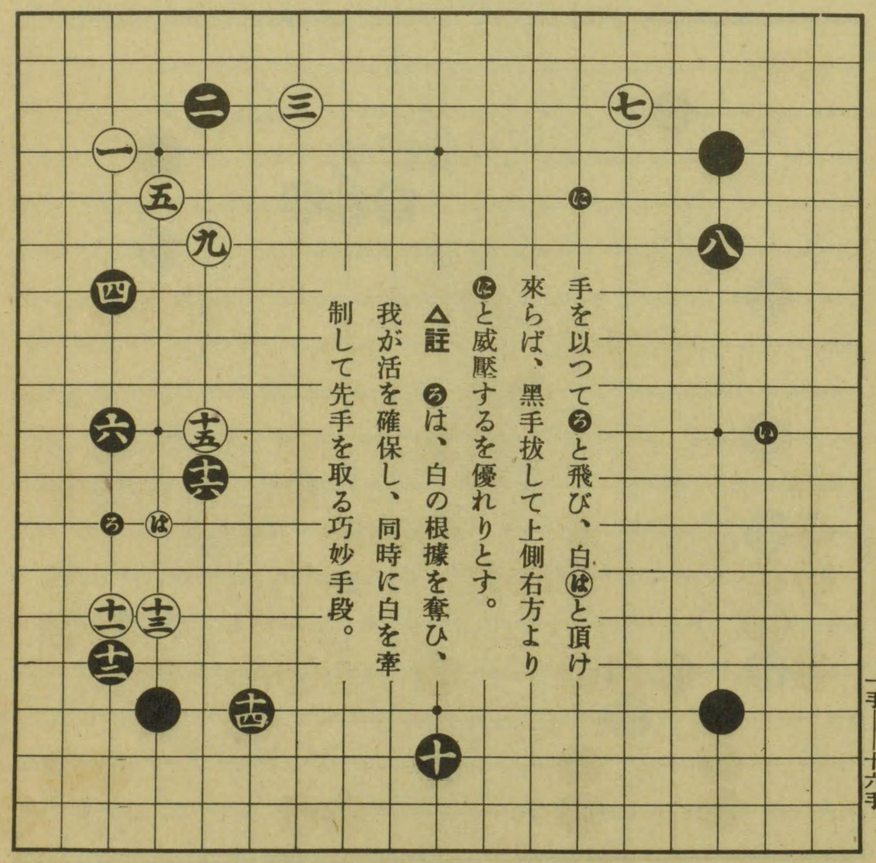
黑十は敢て惡くはない、然し九の尖みが多少左側へ響いてゐるから之に備へる意で十三と飛び、六と關聯して左側を纏めるのもよい

或は十三が勢力偏重の嫌ありとすれば十の手で右側星下にいと打つて右上八の理想を完成するのも一策たるを失はぬ。

黑十二、十四の手段は六の一子をハタラカした手で大に良い。

○　黑十六、敢て惡きに非るも此の手を以つてろと飛び、白はと頂け來らば、黑手拔して上側右方よりにと威壓するを優れりとす。

△註　ろは、白の根據を奪ひ、我が活を確保し、同時に白を牽制して先手を取る巧妙手段。



（指）

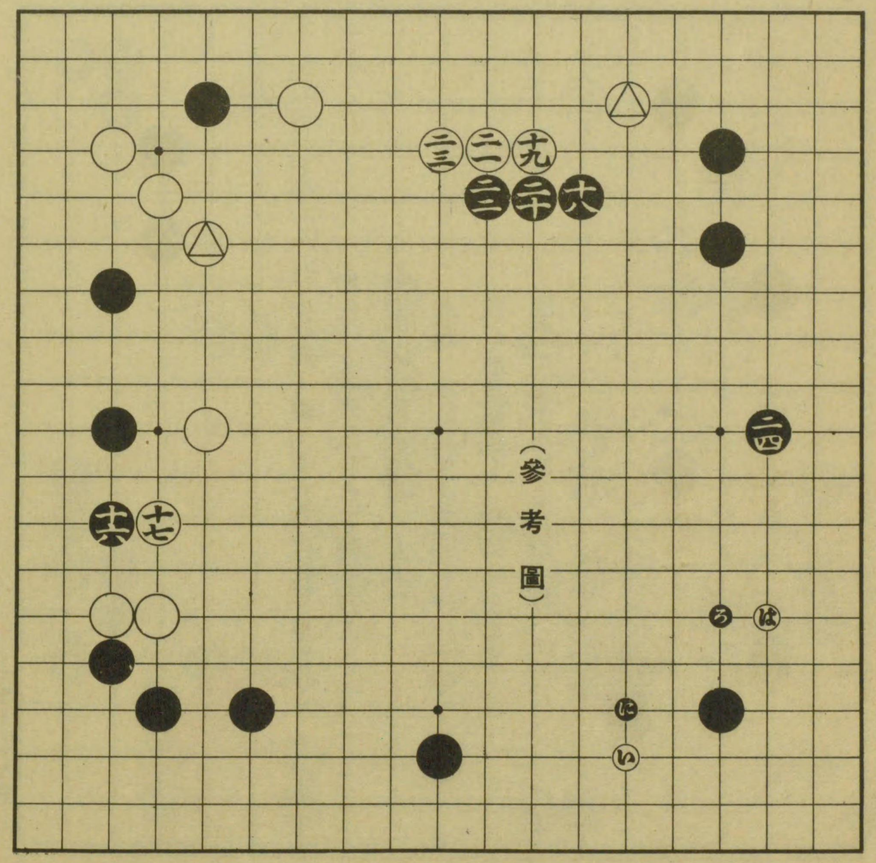
△（前圖黑十六の手の殘說として）

參考圖

白十七は絕對に手拔する譯には行かぬ、打つ以上は黑に響かして此く頂けるより外はない、十六の飛びが一着あれば左側の黑は安心である。

黑十八は此の場合に最もよく適應した着點で、既着の白七及九（△印）の策戰を根底から破壞する意味になる、十八に對し、白は十九と受けるの一途、黑は二十、二十二と押しておいて二十四と大局的着點を占める手順となる。

次で白が右下隅に向つていと來れば黑ろ、又いと來ずはならば黑に、或は白が一間高若くは二間高に來ても右よりすれば左へ、左よりならば右へ一間に應じておいて差支ない。



（參考圖）

（指）

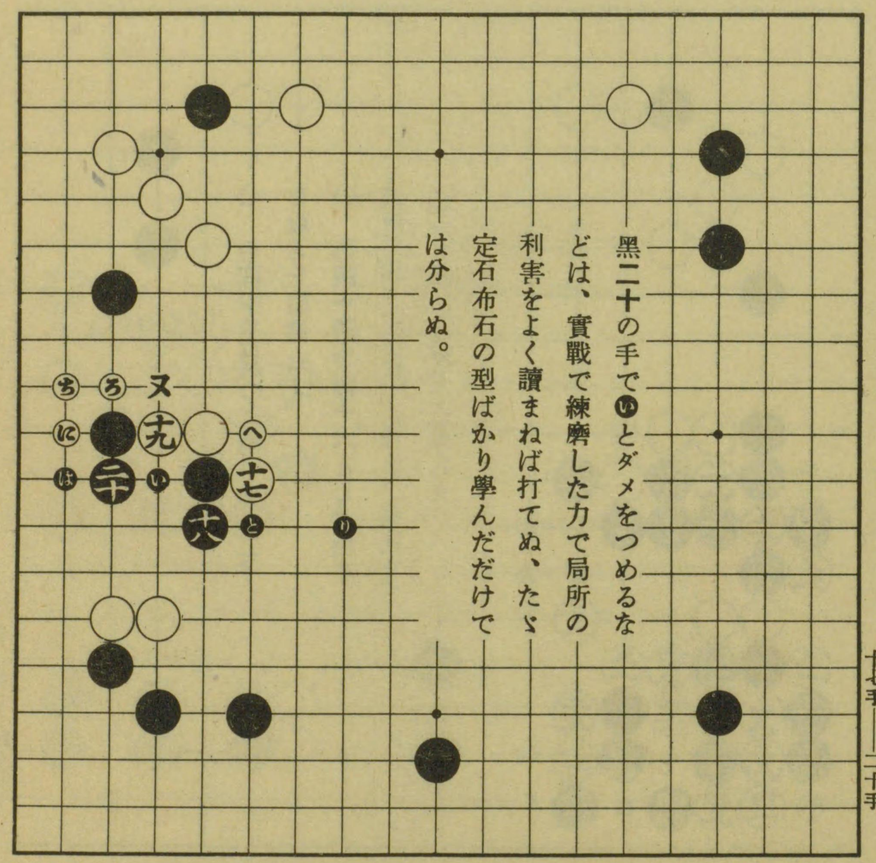
○ 黑二十はいとし、白ろと抑へし時黑はと掛粘ぐ可し。

△註 黑二十の引きはアマリに常軌に拘泥した手である、いとダメをつめておけば、次でへ或はヌのキリが酷しくなる、と同時にはと掛粘ぐ手を誘發して側面を好委勢に導く事が出來る。

そこで黑二十をいとした結果を想像して見ると、

黑二十の手でい、白ろ、黑はの時白にとアテ、黑二十と粘ぎ、白亦中央をへと粘ぎ、黑とと曲り、白ちと粘いで左側上方を確實に大きくした時、黑はりと飛んで下側方面を宏壯ならしめる。

此の手順中白ちを手拔すると黑にヌと截られ大不利を招く。



黑二十の手でいとダメをつめるなどは、實戰で練磨した力で局所の利害をよく讀まねば打てぬ、たゞ定石布石の型ばかり學んだだけでは分らぬ。

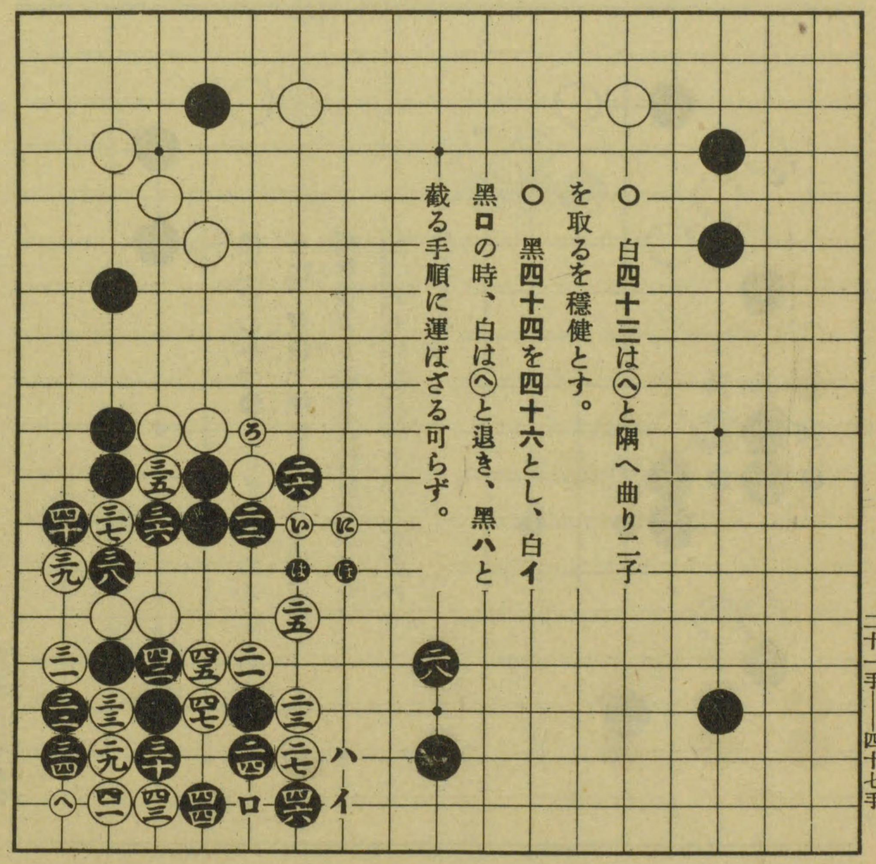
十七手——二十手

（指）

△　黒二十六は二十八の點に飛び、右方の白五子に響かせつゝ左方の宏壯に資するといふ策戰を採る可きである、その際白いとアタマを綽ねるのはアマリにも無謀――卽ち白い、黒二十六、白ろ、黒は、白に、黒ほと押し出して行けば五子の白は忽ち危險に瀕する、而て白いでほ等と逸出を試みれば、黒に等と打つて白に迫りつゝ中原を突破する事が出來る譯である。

黒二十八は三十一の點に下つておく方が堅實である、卽ち先づ我に備へて後の猛襲を期する意。

○　黒三十八大惡手なり、四十の點より綽ね、白を三十八に粘がして中央をろと拔き、參考別圖の如く運ばざる可からず。



○　白四十三はへと隅へ曲り二子を取るを穩健とす。

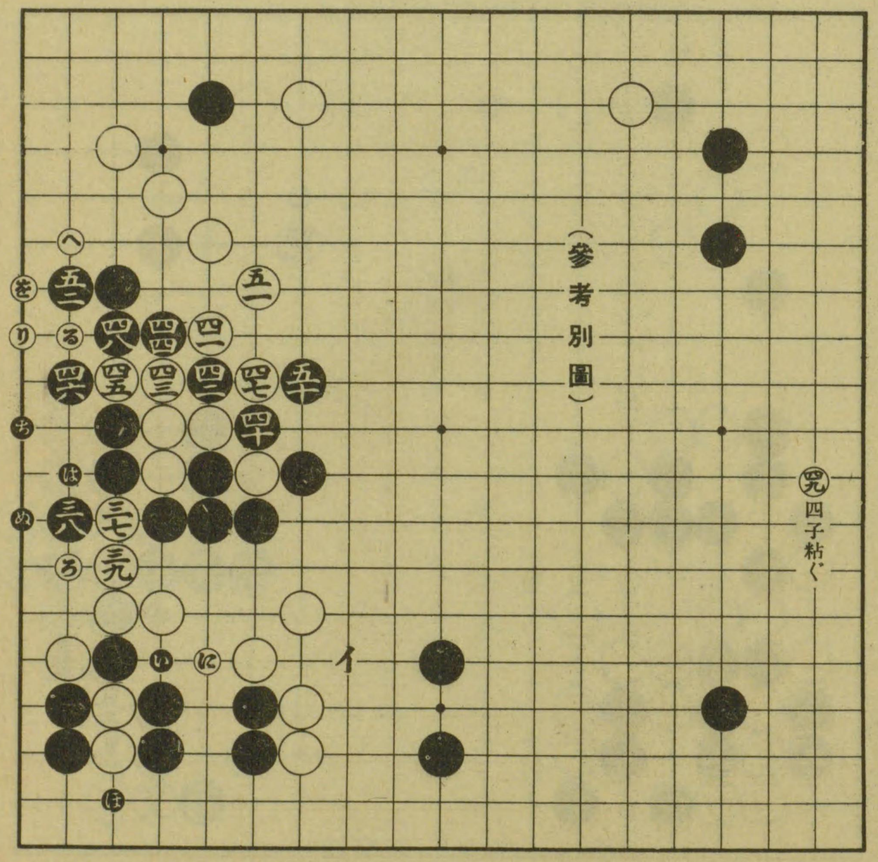
○　黒四十四を四十六とし、白イ黒ロの時、白はへと退き、黒ハと截る手順に運ばざる可らず。

（指）

二十一手――四十七手

△（參考別圖）　白三十七に對し、黒は圖の如く三十八と側からアテ、白を三十九と粘がして四十と中央の一子を拔き、以下數字の手順を履んで五十二と左側を活きておくのもよい、或は五十二の手でいと粘ぎ、白ろの時、黒はと粘いで自然の手順で左側を活き、白にの時、ほと拔き、隅の味を消し、イの窺きを覗つて此の白に迫りつゝ右下より中央へ掛けての經營に資する方針に出るのも面白い策戰である。

△註　黒五十二の下りを打たずにいとし、白ろ、黒はとする左側の活きは、後に白よりへと打たれ、黒ち、白り、黒ぬ、白る、黒五十二、白きとなり四子の黒を取られる事になるが、然し先手である。



（指）

○ 黒四十八はいと打ち機先を制して白四十九を妨げおく可し。

○ 黒五十は右下隅よりろと飛んで此の隅を守らざる可からず。

○ 黒五十六と緩めしため却つて禍を醸せり、酷しく五十七の點に二段綽す可し（白は隅を後手活か、側へ振替るかの二途）

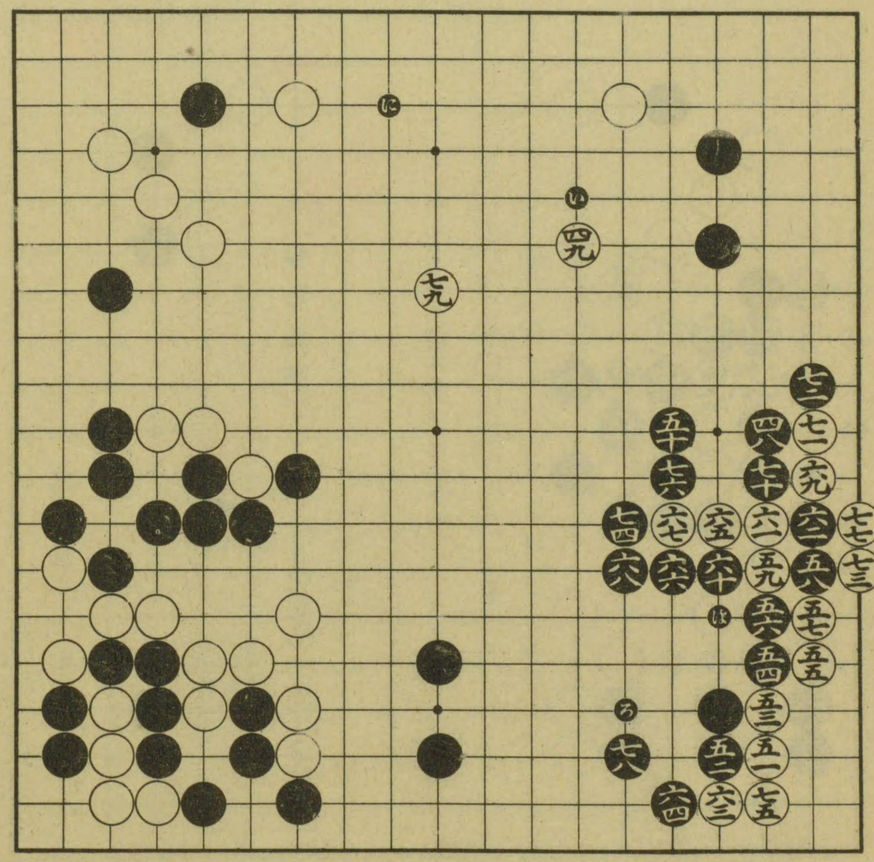
○ 黒五十八の抑へ大悪手なり、白に五十九と截られてはどの道破綻は免かれぬ。

○黒六十六ははと粘ぐ外なし。

○ 黒七十は七十四と曲るを急務なりとす。

○ 黒七十二も尙且つ七十四の曲りなり、然して先手を取つてにの邊から決戰を試みるの外手段なし。

四十八手—七十九手迄



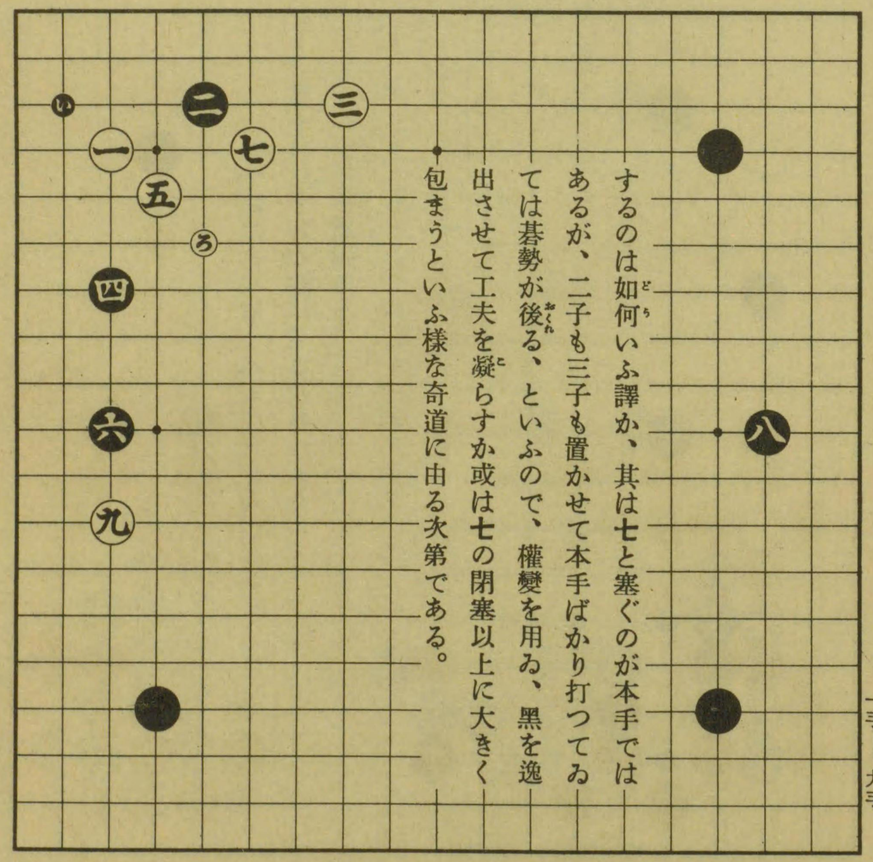
三子

第三局

勝 少年K君
來賓Y氏

△ 白三が一間夾である場合でも亦此く二間夾の際でも、黒に四、六と打たれた時は七と封鎖するのが碁理としては極めて穩健な手法である、卽ち黒の四、六は二の一子を捨石とした譯、隨つて白の一、三、五、七は黒二を捕獲した、といふタテマへになつてゐる、但し黒二間夾返し卽四との關係上、後に黒より隅をいと侵す味は殘つてゐるが、今の場合末節であるから不問に附しておく。

然らば白が七と打たずに此の手でろと雁行したり、或は全然手拔するのは如何いふ譯か、其は七と塞ぐのが本手ではあるが、二子も三子も置かせて本手ばかり打つてゐては碁勢が後る、といふので、權變を用ゐ、黒を逸出させて工夫を凝らすか或は七の閉塞以上に大きく包まうといふ樣な奇道に由る次第である。



一手—九手

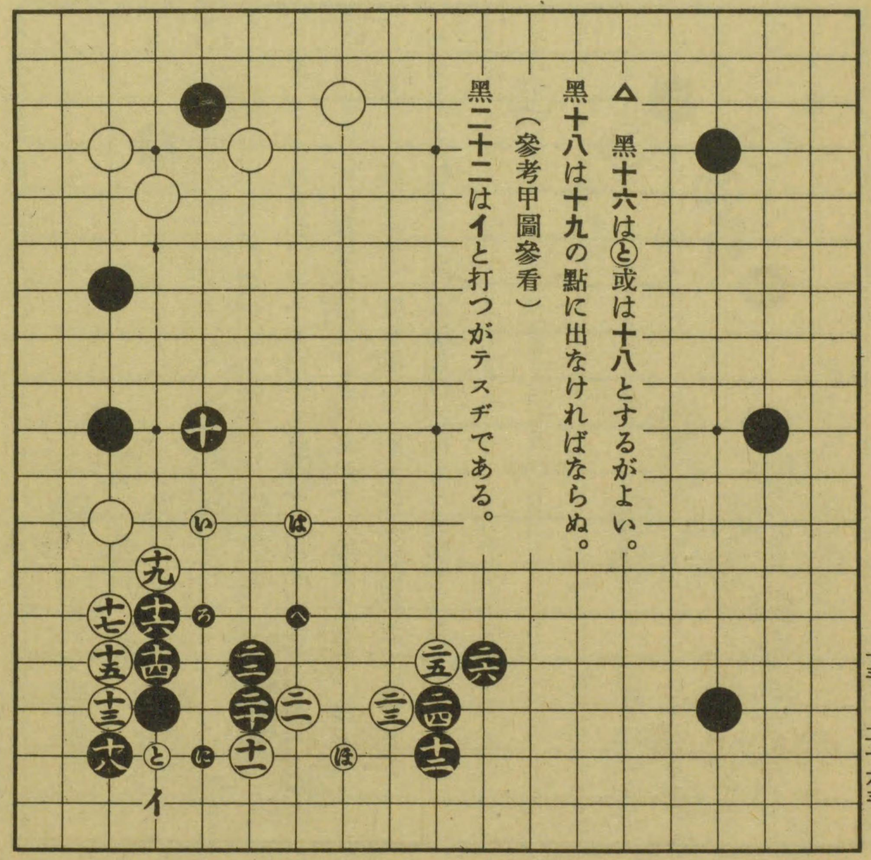
△　黒十で十七の點に迫り、白を(い)と飛ばして十と飛ぶ手法に出てもよい、兎に角卽今左側の形勢は、左上の白が堅固になつて居る處へ白の九に隔てられる傾を呈して來たので十の飛びは最も大切。

黒十二は十七の點に迫り、白を(い)と飛ばして更に(ろ)と飛び、次で白(は)とせば、黒は(に)と尖頂け白の動きの二十、二十一、(ほ)、其の何れたるに論なく(へ)と飛んで白を兩斷す可きなり。

○　黒十四は十八の點に抑へ、白十五ならば、黒十四の點に押す可し。

△註　黒十四で十八、其の時白(と)と截る變化（參考天圖參看）

黒十四で十八、白十五、黒十四の後の變化は（參考地圖以下）



△　黒十六は(と)或は十八とするがよい。

黒十八は十九の點に出なければならぬ。

（參考甲圖參看）

黒二十二はイと打つがテスヂである。

十手——二十六手

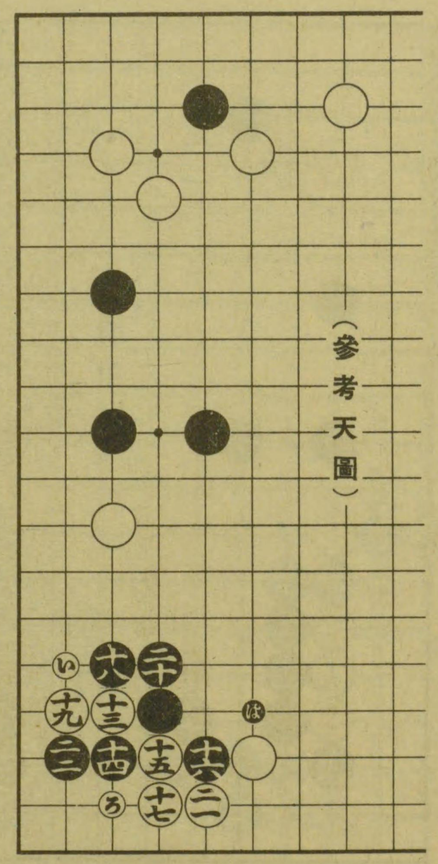
△（參考天圖）　白十三に對しては十四と隅から抑へるが普通、其の時白が直に十五と截つて來れば、黒十六以下二十二迄數字の手順に運んで左右の振替りとなる。

此の手順中白二十一と右へ行かず左側へ(い)と曲らば、黒二十一へ抑へ白(ろ)と隅を活き、黒(は)と外部へ。

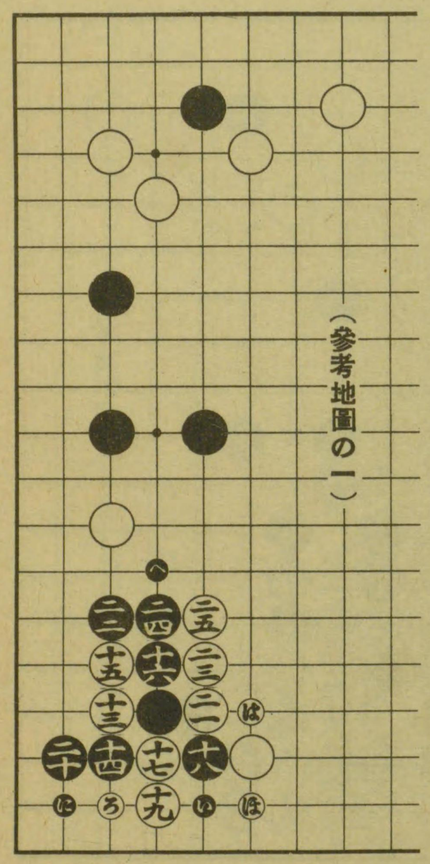
又白二十一で(ろ)とせば、黒左側より(い)に抑へ、白二十二へ取り黒(は)。

△（參考地圖の一）　白が十三、十五の後十七と截らば、黒十八以下白二十五迄運び黒先手となりて他へ。

此の手順中、黒二十で(い)と抑へると白(ろ)とアテ、黒二十と行び、白二十一と截り、黒二十二と綽ね、白外部を(は)と粘いだ時、黒(に)と隅へ、白(ほ)と二子をアテ、黒(へ)と掛粘ぐ。



（參考天圖）



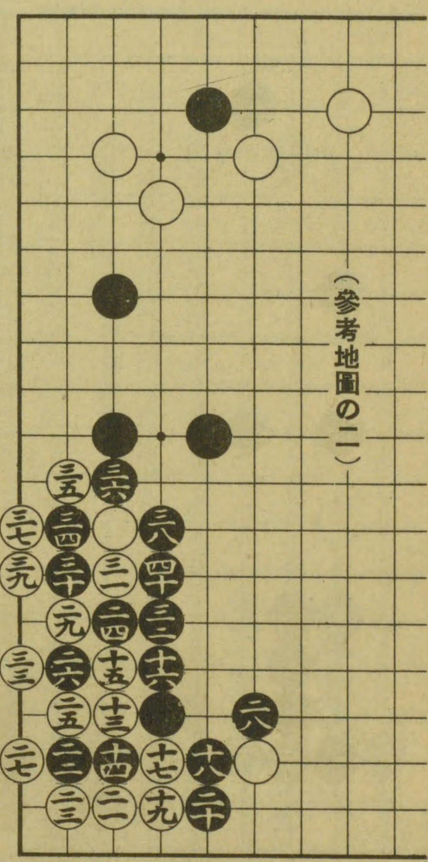
（參考地圖の一）

△（參考地圖の二）　前圖黑二十からの變化で、前圖の變化說明中、第十五行の終『白二十一へ截り』とあるを截らずに二十三と押して隅の黑二子を取りに行つた變化で、此くては完全に黑四十と密閉され、白の實利は僅々十五目、黑外部の優勢は無限大、但し黑後手であるから三十四以下を保留して他に轉じてもよい、其の時白は三十六にツキ當つて來るや否やは疑問。

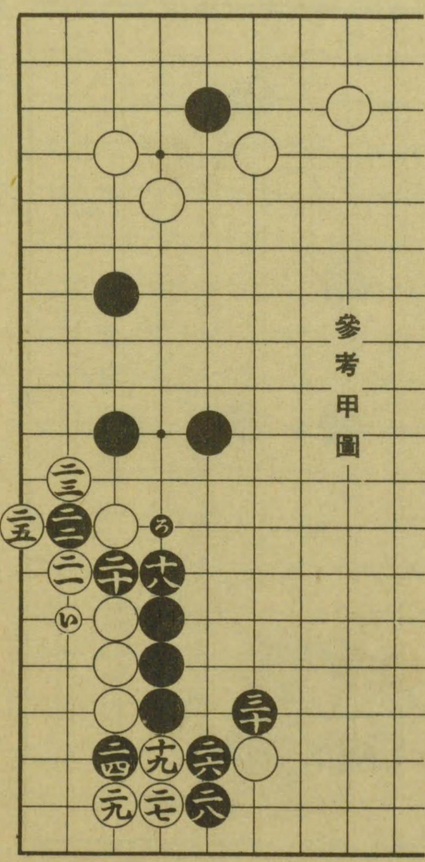
△（參考甲圖）　本文黑十八の手で此く行た時、白十九とせず二十四なら黑は十九の點に押しておく。

數字順に三十迄運び、結果に於ては參考地圖の二に類してゐる。

此の手順中白二十三でいと粘がば黑二十四でろと一子抱へておく。



（參考地圖の二）



參考甲圖

（指）

○　黑二十八は三十三の點を截り、白四十四の時四十の點に抱ふ可し。

（參考春圖參看）

○　白二十九惡し三十一とす可し。

△註　黑三十二の手でいとノゾキ白にろと粘がしておくがよい、後にイに盤る手が殘る、白ろとせずイならば黑ろと截り、白ロ黑ハと行かうといふテスヂ。

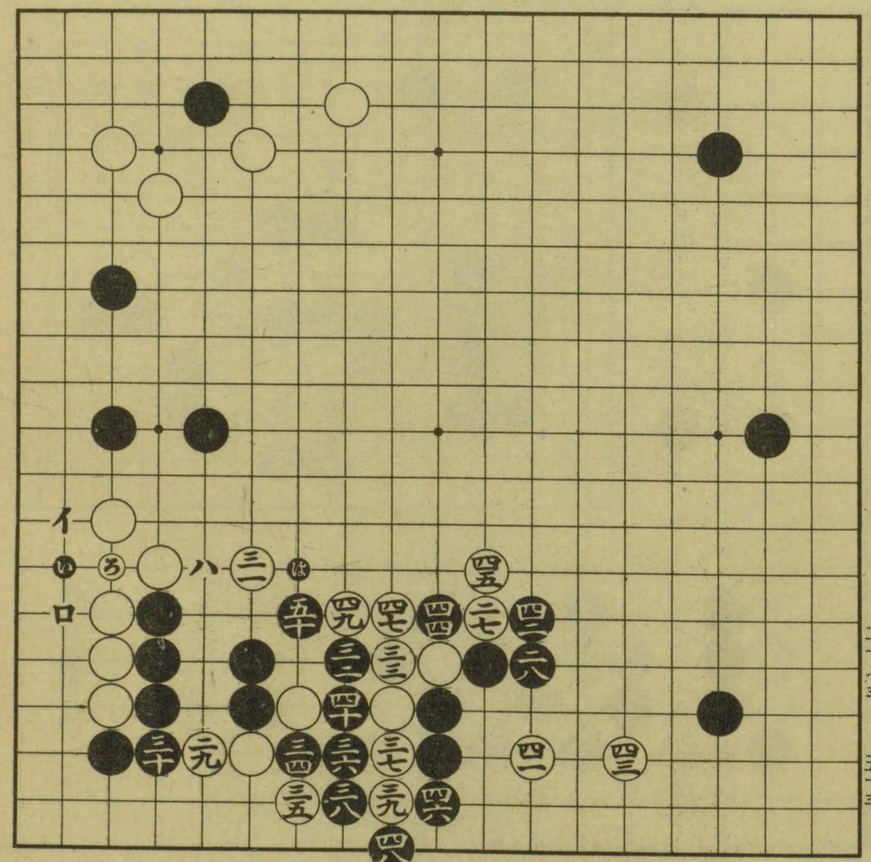
○　黑三十二大惡手なり、はと頂けて白の應手を試む可し。

（參考夏圖參看）

△註　截れる處を截らずに粘がしたといふ其の意了解に苦しむ。

○　黑四十四は四十五の點にアッ可き所なり、然らば右方八の一子と呼應して大地域の構成に便宜を得可し。

○　白四十五は四十七に打つ可し。



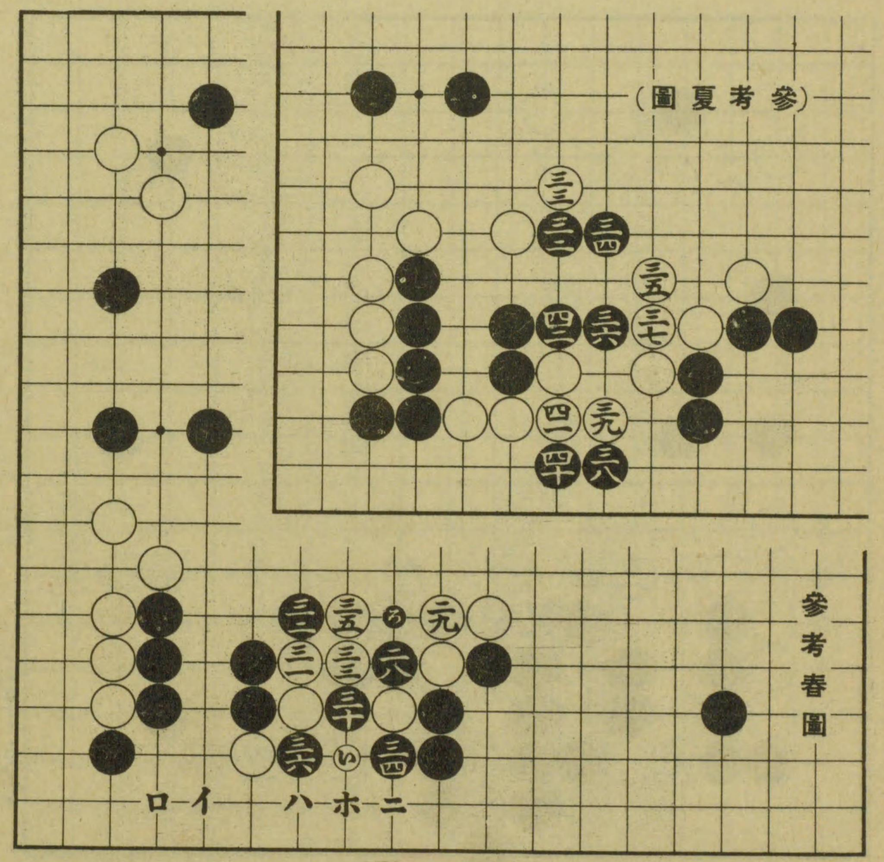
二十七手——五十手

（指）

△（參考春圖）　黑二十八と截り白二十九の時、三十と抱へ、數字の順序を經て三十六と截れば黑大利。

此の手順中、白三十一の手で㋙とアテると、黑三十四へ一子拔き、白三十三とアテ、黑三十五と抱へ、白劫を取つた時、黑ろと粘ぐ、そこで白イと尖み、黑ロと掛粘ぎ、白ハの時、黑ニと曲り、白ホと沿ひ、黑三十へ劫を取る順序。

△（參考夏圖）　黑三十二は右方のキリを覗ひつゝ三十二と頂けて中原への逸出を策する、そこで白が三十五と粘いだ時、黑は三十六以下四十二迄白の缺點を衝きつゝ外部へ逸出する手順、既に三十八、四十と根據を奪つた黑は此の白を攻めつゝ中原の經營を策すればよい。



（指）

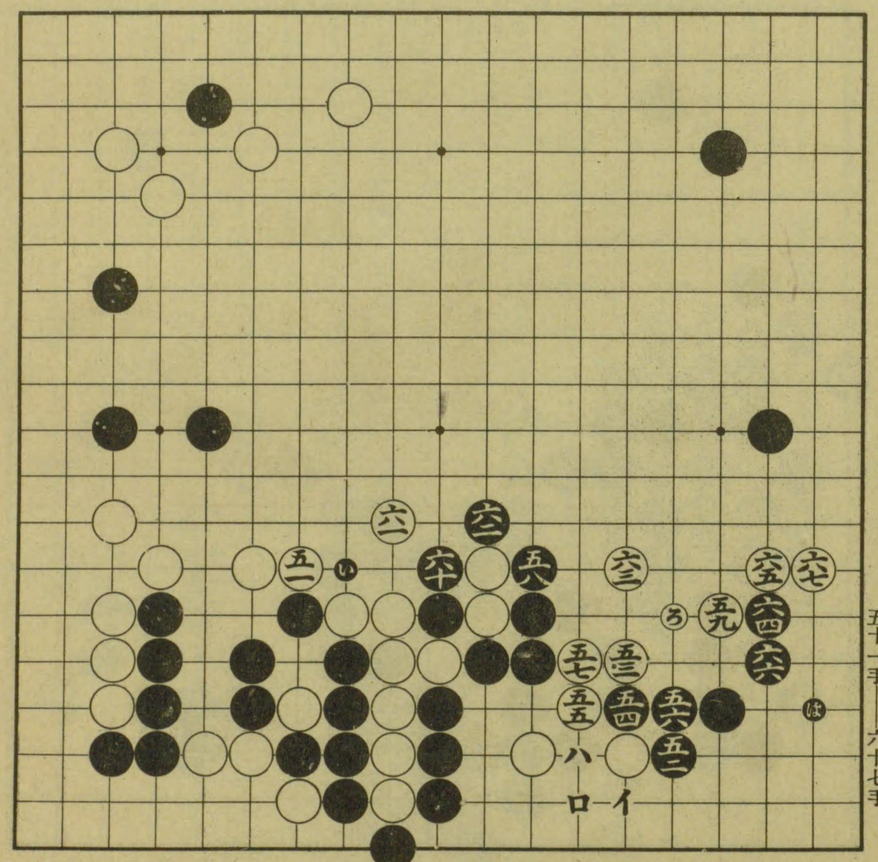
○　黑五十四は無意味の手なり、單に五十九と飛び、右側の我が地を纏めつゝ白に迫るを良とす。

△註　敵を攻め自から守る手段としてイと裾から綽ね、白にロと抑へさせて五十四とアテ、白五十五とせばハと劫を取るといふ樣な打ち方は、場合に由つてはある。

然し本圖の如きは其の必要すらない、五十六と粘いで愚形に陷つたは沙汰の限りである。

○　黑六十は打たぬ方がよい、さすれば白の六十一もない譯故、後に至つてぬと截る手も出來る。

△註　六十の手で六十三の點に飛び、白にろとダメへ連絡させ隅をはと守り樣子を見てゐるがよい。六十四打たず單にはと守る可し。



（指）

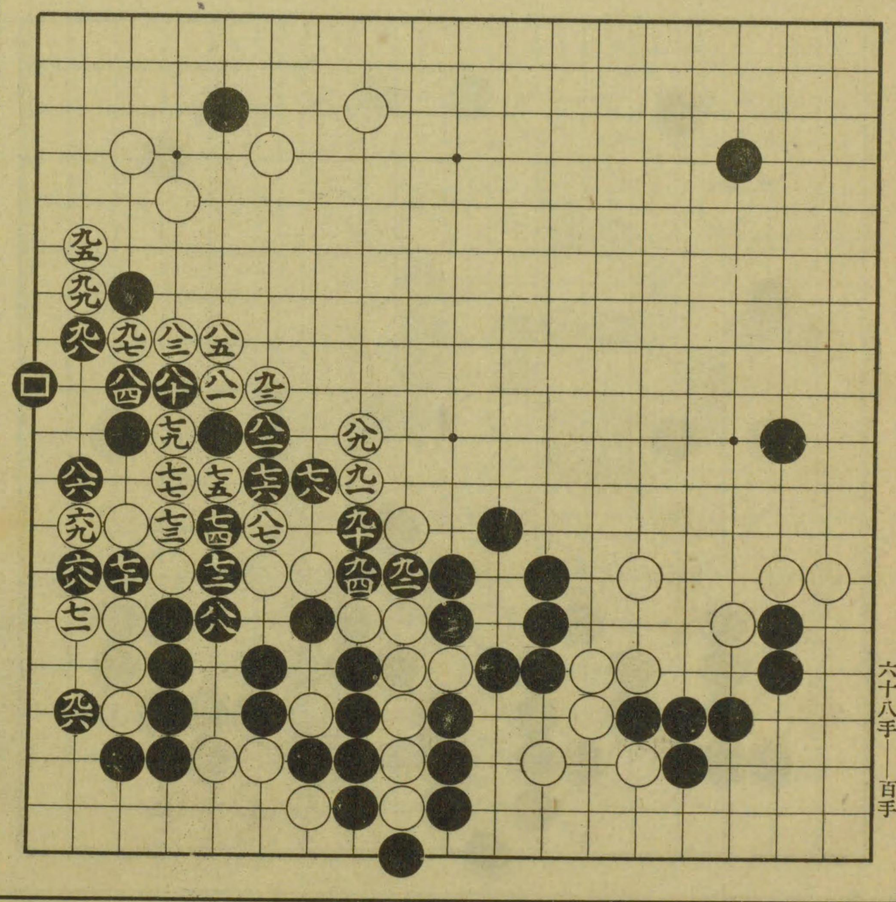
○ 黒七十八は八十二の點を堅く粘ぐを無難なりとす。

○ 黒八十六は寧ろ九十五の點に尖むを優れりとす。

△註 然らば左上隅の味と相待つて活は確である、本圖の如く左側の數子を無條件で提られ同時に外部の白を堅固にした爲め左上隅の活味をなくし當初下側に占めたる大利を半ば失うた觀がある。

□待つた！を せぬ事

上達しようと思はゞ、絶對に待つたをしてはイケヌ、待つたをする癖がつくと匆卒に手を下す習慣になる、泥溝へ落ちてから『待つて吳れ』では間に合はぬ、首が飛んでからでは尙更致し方がない。



（指）

○ 黒六は緩慢である、八の點に綽ねておけばよい。

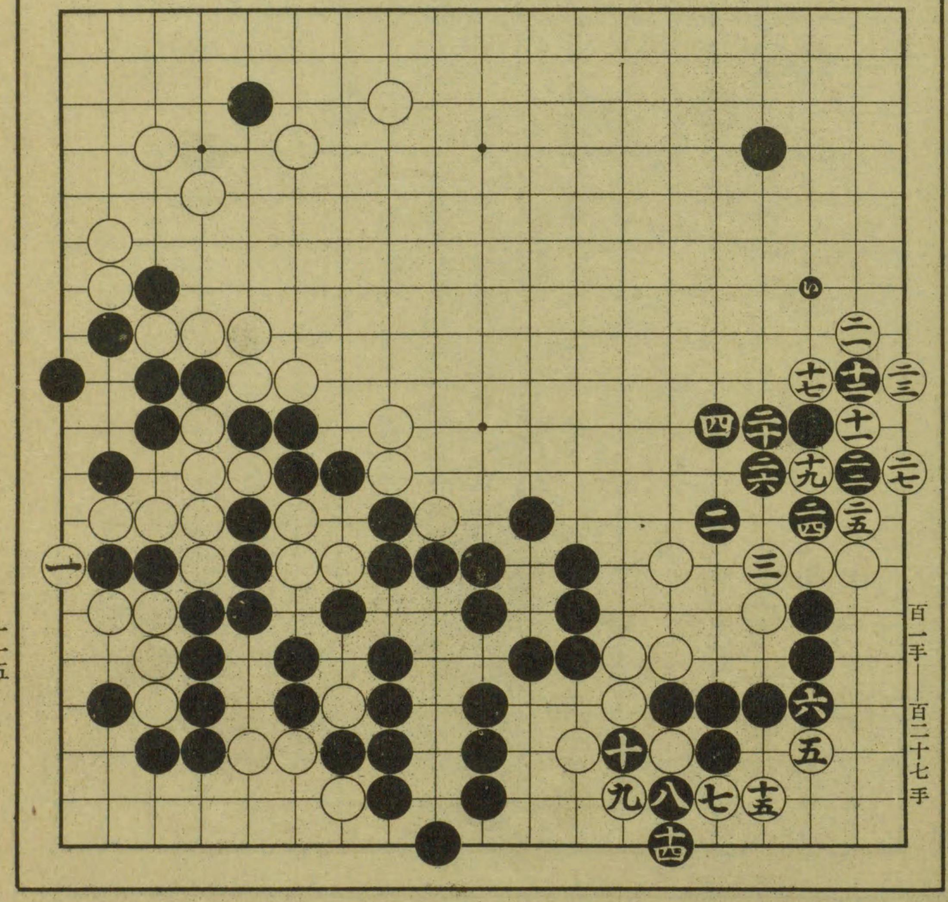
○ 黒十二の手で劫を粘ぎ、白十七と綽ねた時二十二と抑へ、白十九、黒二十、白十二、黒二十四、白二十五、黒二十六、白二十七と運べば、黒はいの邊より白に迫る手となり、尙黒の優勢たるを失はぬ。

△註 然るに黒十二と一着を應ぜしため、白をして二十一、二十三、と眼形を造らしめ此の白を堅固ならしめたばかりでなく、右下隅にも白に十五と引かした爲めに活味を殘さるゝ事となつて大勢黒の利運を見捨てる事となつた。

㊀劫トル

㊁劫トル

㊂劫ツグ



（指）

三子

第四局

中押勝　少年S君
來賓A氏

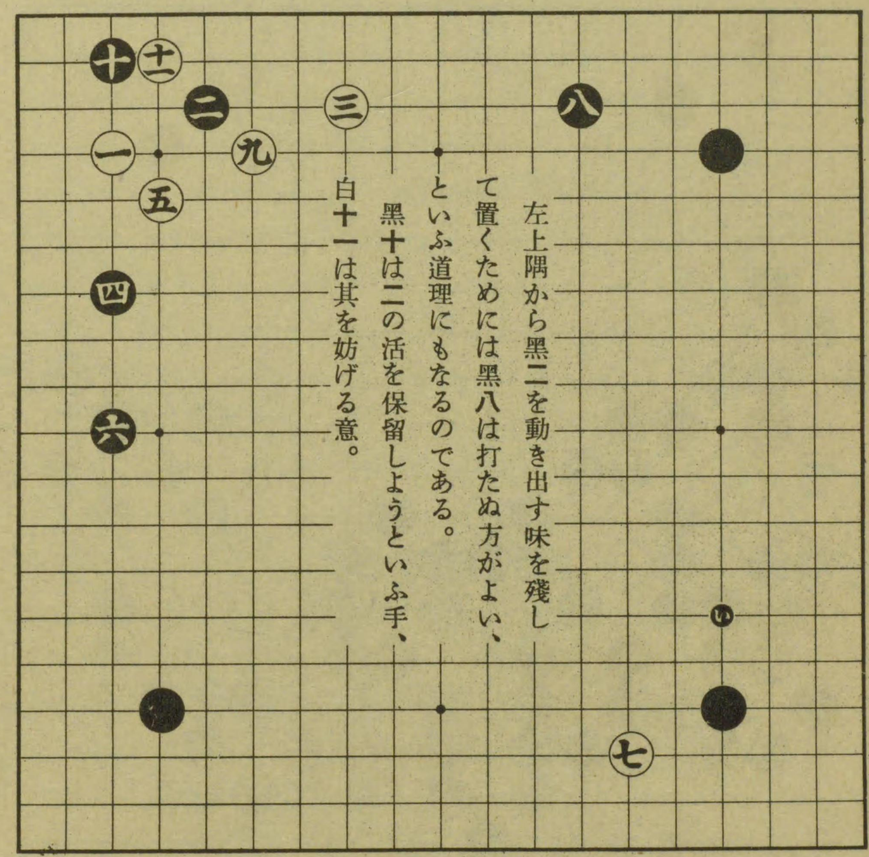
△　既に四、六と左側に黒の勢力が出來た卽今、黒八の手を以つて、白の三及一、五を兩斷して攻める積極的方針の下に九の點へ尖み出すのも一策である。

○　黒八は尋常に右下隅をいと一間に飛ぶ可し。

△註　本圖九となつた結果から見ると左上白の勢力旺盛な方へ向つて居る黒八の價値は極めて少いと言はねばならぬ。

黒が八と來てから二の一子を動き出されてはタマラヌから白九と封鎖した、之を反面から言ふと、左上隅から黒二を動き出す味を殘して置くためには黒八は打たぬ方がよい、といふ道理にもなるのである。

黒十は二の活を保留しようといふ手、白十一は其を妨げる意。



一手——十一手

（指）

○　黒十二もイと飛ぶを良とす。

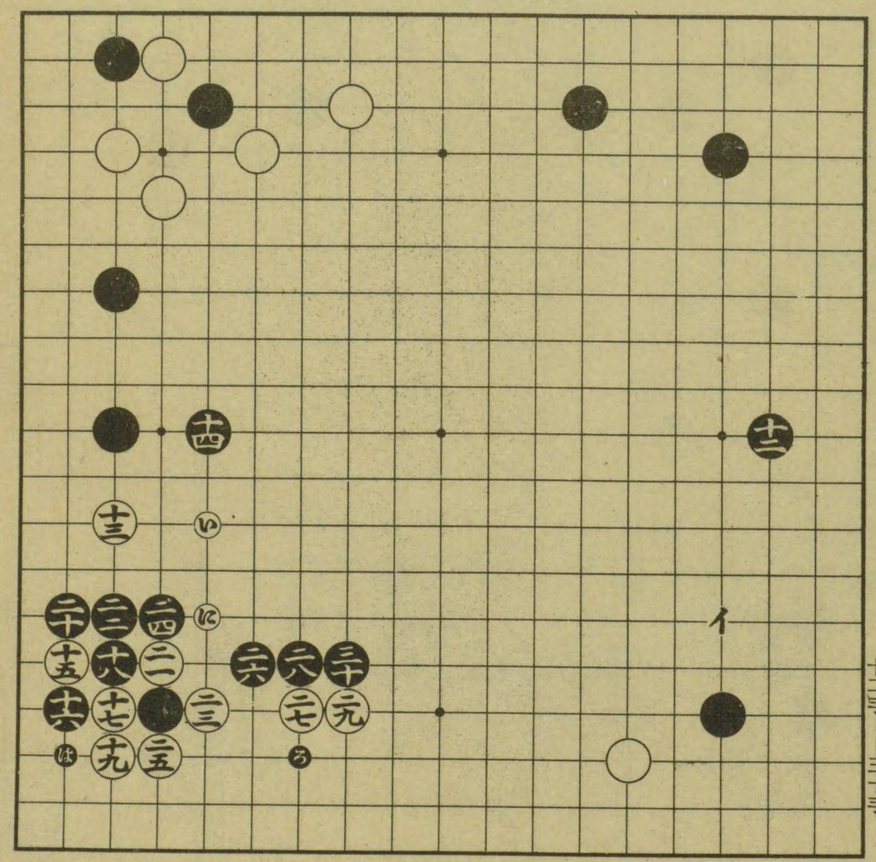
△　黒十六を十七の點に下つておくのも紛れが無くてよい、其の時白いと飛ばゞ、黒亦ろと拓いてよい。

△　黒十八は十九と隅からアテ、白十八の時、黒はと粘ぎ、白にと斜走せば、黒は二十三の點に並んでおく應接でよい。

之は黒五間拓きの窄い處へ白を重複させて其の機會に左下隅の黒を纏める結果となるから十分。

本圖黒左側に地域を造つて白の十三を取り込め、其の代償として下側一帶を白地とした現況に比して前者の方が遙に有利である。

○　黒二十八は白の實利を助長するのみにして黒益する處少し、宜しくイと飛び右側を整備す可し。



十二手——三十手

（指）

○ 黑三十二は打たざるを良とす。

△註　ダメヅマリで害ありとも寸毫の益なき手であるから。

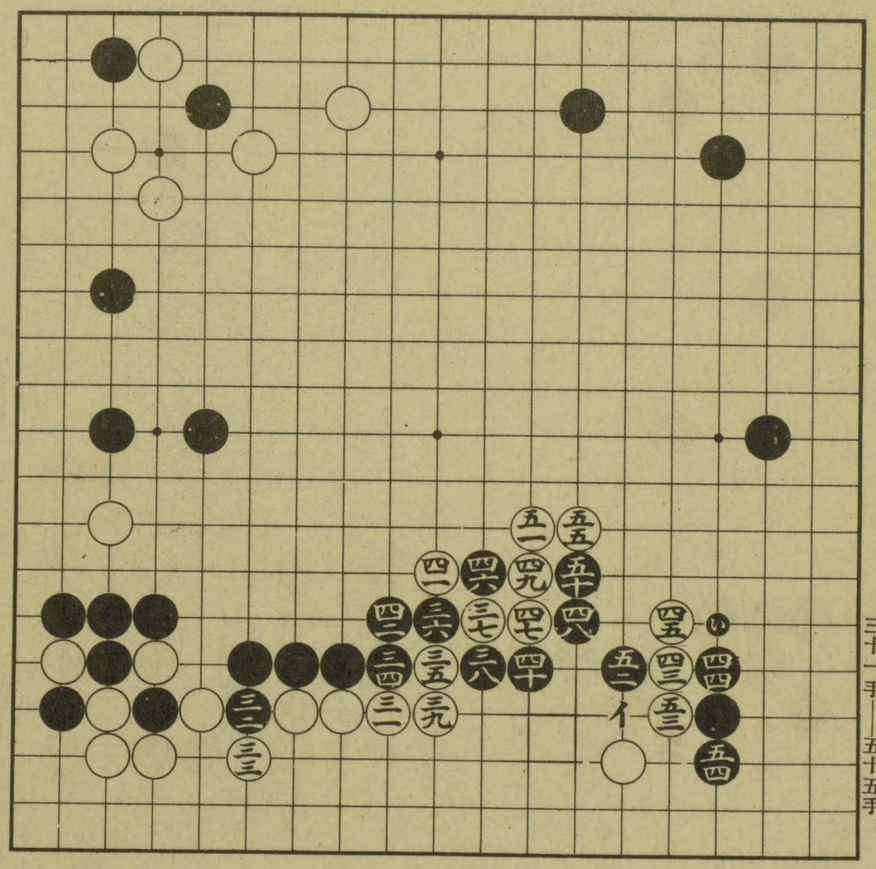
三十二の手で右側下方より㋑と飛んでおくがよい。

○ 黑四十大惡手、之本局の敗因なり、單に四十一の點に立つ可し。

△註　其の時白四十と抱へなば、黑四十六とアテ、白四十七の時黑㋑とする、若又白四十に抱へず四十七の行ならば、黑㋑の飛でよし

○ 黑五十は五十三の點に出て白の應手を試み、白五十二ならば黑はイに突破する、若又白イと抑へなば、黑五十、白五十一の時五十二と截斷すればよい、黑五十二に至つても上述の手順をふむ可し。

△ 黑五十四は五十五と出る手。



三十一手—五十五手

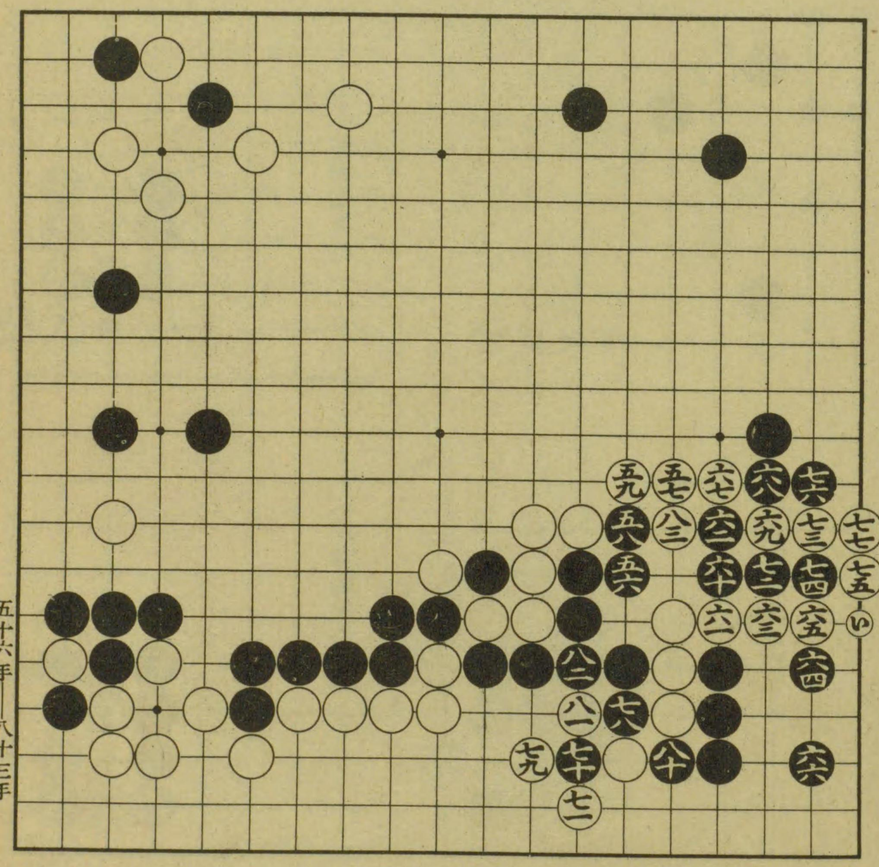
○ 黑六十六の手を以つて七十三の點に備ふるを萬全の策とす。

△註　六十六が無くとも隅に死はない（次頁參考圖參看）

○ 黑六十八輕卒なり、此の手で七十三の點に外し、白六十八の點に來らば、黑は七十四の點に並らび、白㋑と遮斷せば、黑は七十六に盤る可く、卽ち勝算歷々たる局面なりしを六十八一着の不用意にて潰滅に歸せしは惜む可しとなす。

□ 對局者の儀禮

專門碁士の間には昔より其々の禮式作法備れり、素人と玄人、或は素人同志の間としても普通常識的の禮はありて可なるべし、己不快に感ずる事は之を人に施さざるにあり、之禮の精神なる可し。



五十六手—八十三手

△（參考圖其の一）　前圖六十六を手拔して後に白より一と來られたならば二と引き數字順に應接して八でよし、其の時白いなら黑ろ。

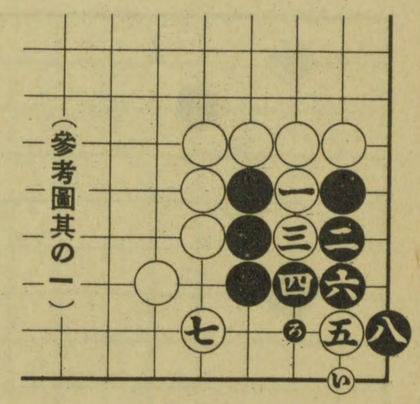
白一に對し黑三に抑へ、白二黑六白ろと來れば次圖と同結果となる。

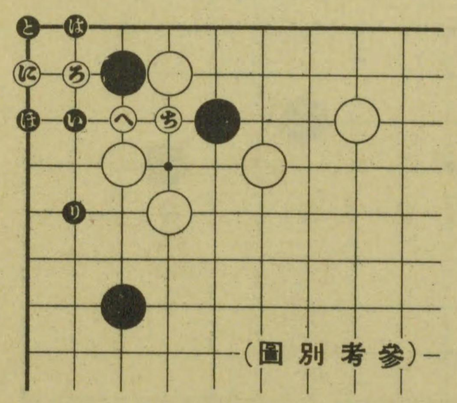
△（參考圖其の二）　黑六を誤つていと拔けば白に六の點へ引かれて黑は死滅となる。

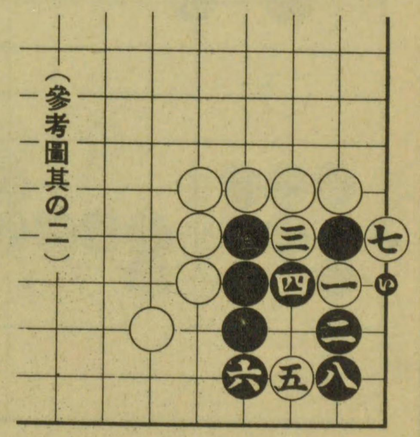
△（參考圖其の三）　黑四を六とせば白に七と打れて事メンドウなり。

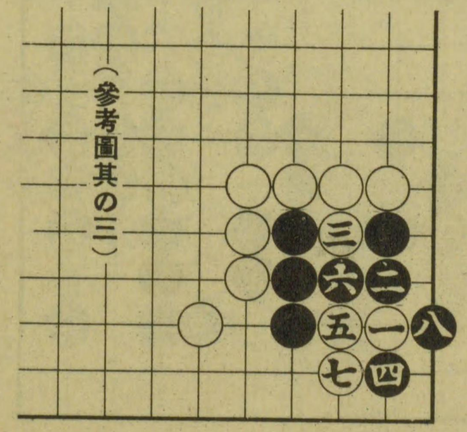
△（參考別圖）　前頁左上隅を白より先手でろと夾めば何等餘韻なし。

之に反し黑の先手が玆に廻る事とならば黑いとして以下符號順を經て黑りと左側へ盤る、黑いでちとするも、白にろと夾まれて手段なし、但し上側に黑の勢力加はらば別なり。


（參考圖其の一）


（參考別圖）


（參考圖其の二）


（參考圖其の三）

（指）

三子

第五局

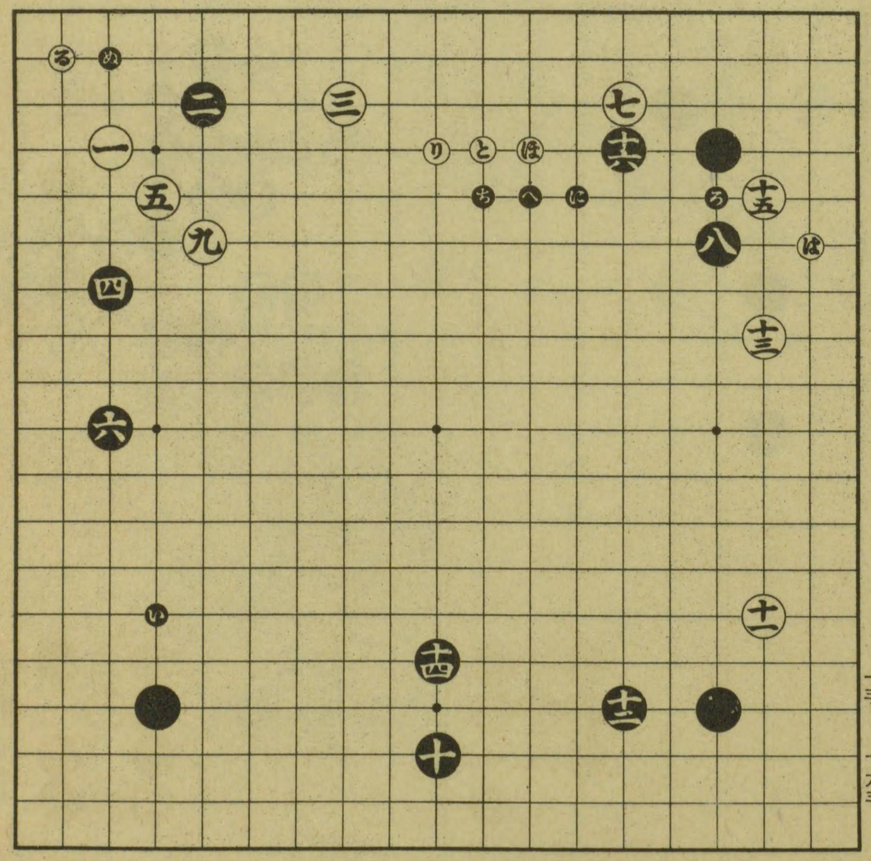
中押勝　少年O君
來賓B氏

△冠註　白九と雁行した意味は、三子第二局九の手の說明參看。

○　黑十四は左下をいと飛も一策。

△註　黑十、十二、十四と打つたのは完全な姿勢ではあるが、左側が單に四、六だけでは稍勢力偏重の嫌がある、で十四でいと飛んでおけば勢力が均分してよい。

○　黑十六でろと粘ぎ、白はの時にと上側を威壓し、白は、黑へ、白と黑ちと運び、白りの時黑左下をいと備ふ可し（黑は十二、若くは十四の手で左上へぬと走り、白をしてるとと應ぜしめおく可し『前局參照』）


一手―十六手

（指）

△ 黒三十の手にて三十一の點に飛ぶも一策である。

（參考天圖參看）

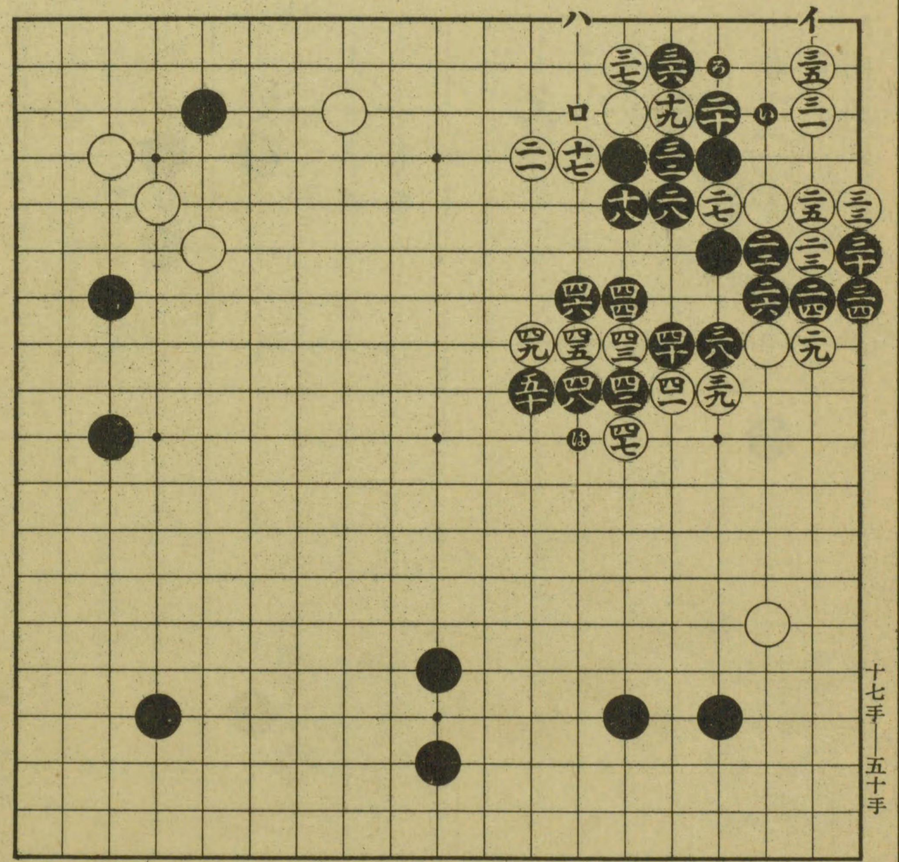
黒三十二でいと突アタル手段もある（參考地圖參看）

○ 黒三十六はろと下るを以つて正着なりとす。

△註 黒にろと下られた時、右隅の白手拔ならば、黒よりイと飛頂けられて活はない、其故黒は茲が先手となつた上にロの截、或はハの走り等の味が殘る、黒三十六と綽ねた不利は言語道斷である。

○ 白四十三は誤着なり、黒に四十四の手を以つて四十五と打たれなば其迄なり。

○ 黒五十はぬと曲り缺點多き右側の白に迫らざる可らず。

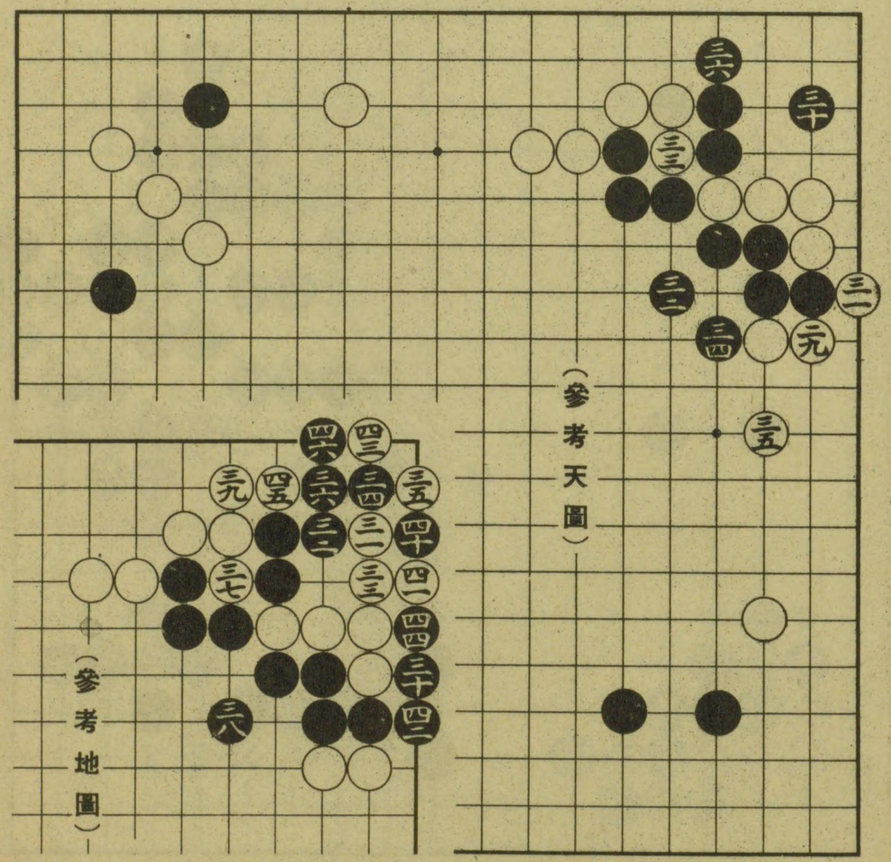


（指）

△（參考天圖） 黒三十で此く隅へ飛び、白を三十一と右側へ連絡せしめて三十二と備へ茲に眼形を造り、白が三十三と兩斷して來た機會に三十四と綽ね、白三十五と應ぜしめたる後三十六と下り隅の活を確保すると同時に上側を削る味を殘す手順となるのも一策である。

溯つて白二十九の手で三十三の點を截つたならば黒三十、白二十九、黒三十二、白三十一、黒三十四、白三十五、黒三十六で此の天圖と同結果となる。

△（參考地圖） 黒三十二で此く突當ると、白は三十三より外に應手はない、以下數字順に運び黒四十六で隅は劫、黒は適當の時機に隅を白に讓つて要所に二手打てばよい。



（指）

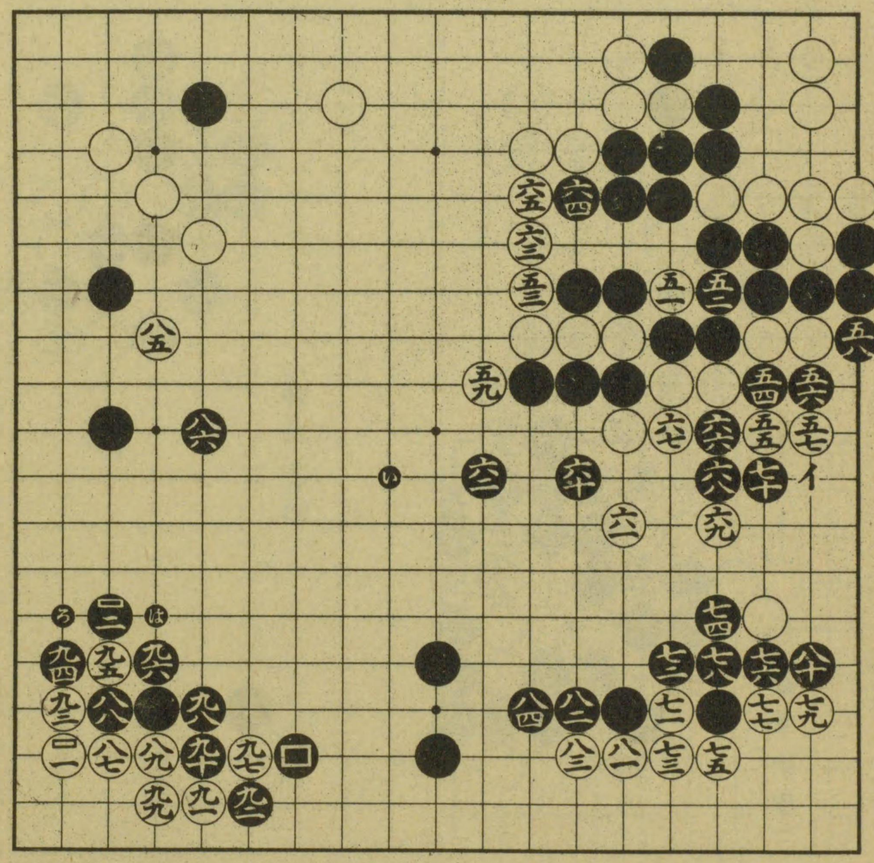
△　黒六十四と活きて終つた後は、六十六の截は問題が小サクなる、手法としては重い、六十六の手で單にいと飛び、中原防護と同時に上方白の大地を削る兩利きの手段を擇ばねばならぬ。

白七十一を七十二の點に打つと黒をイから掬ふ手が出來る、で黒がイと二子抱へた時に白七十一、黒七十三、白七十五、黒八十一となつて圖の如く振替りでなくて右下隅を蹂躙する手順となる。

○　黒九十六を以つて九十八の點を粘ぐを優れりとす。

△註　然すれば白百一、黒ろ、白九十九と後手活、黒はの邊に防護を加へ勝勢黒に在らむ。

五十一手—百二手迄



（指）

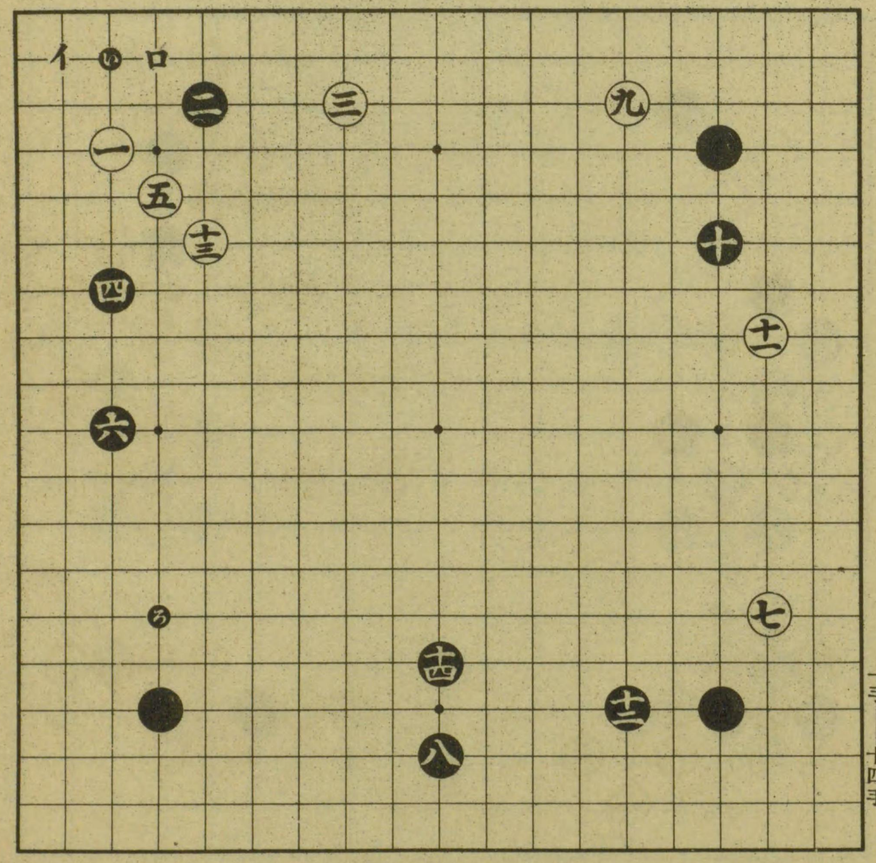
三子

第六局

中押勝　少年T君
來賓W氏

○　黒十四はろと左側の備へを嚴重にするを適切とす。

△註　白一から黒十四迄の配置は手順こそ違へ結果に於て前局と同一となつてゐるのも奇觀である、隨つて前局十四の評は其の儘此處に移す事が出來る、そこで黒十四の手で先左上隅へいと走り、白をしてイ又はロと應ぜしめ、玆に他日白地を削る味を保留しておき、次でろと飛び、下側右方との勢力の均分を計り、兼ねて幾分白十三の尖みに對する防備ともするのがよい。



一手—十四手

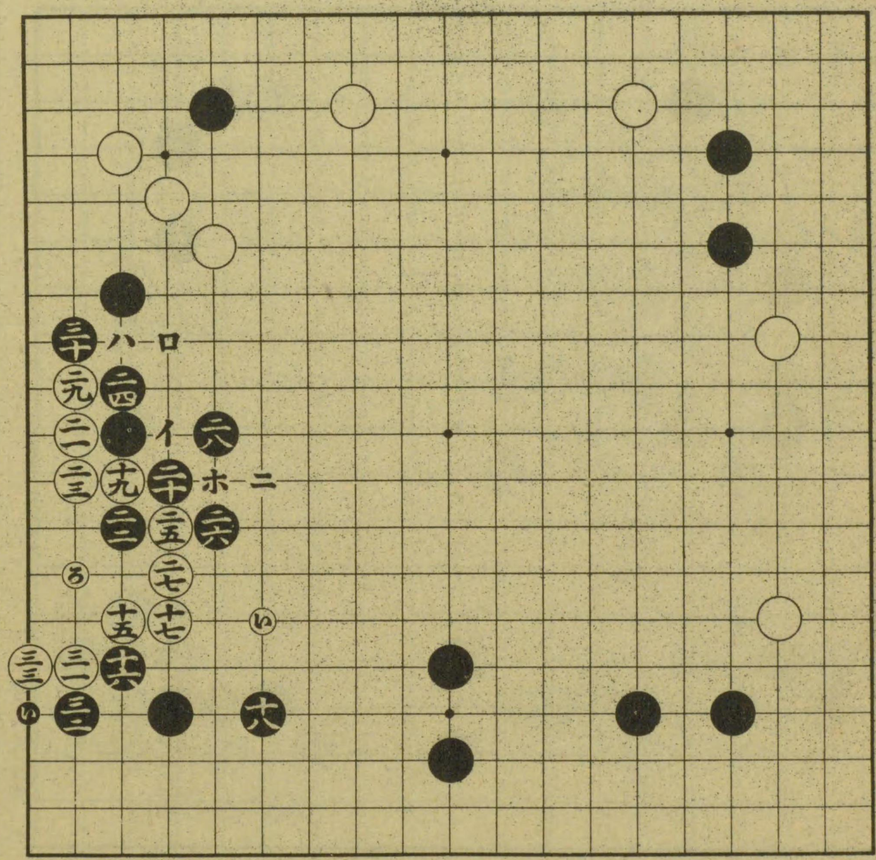
（指）

○　黑二十二はイと粘ぐか、或は二十四の點に引く可し。

△註　二十二と打つ手は自己にイ及二十五の點のキズを殘して敵の缺點を二十三と癒やさしむる手である、イ若くは二十四としておけば白二十二と引いた時二十九の點へ有利な抑へも利く。

○　白三十三はいと飛出す可し、若し左側を打つとしてもろと掛粘ぐ方を味よしとす。

△註　三十三は黑からいの抑へが利くから左下隅へ手段の施し様が無くなる、且つ三十三とし或はろと行くは消極的である、同じく飛出すにしてもロとノゾキ黑にハと粘がし、更にニとノゾキ黑にホと粘がし凝しておいていがよい。



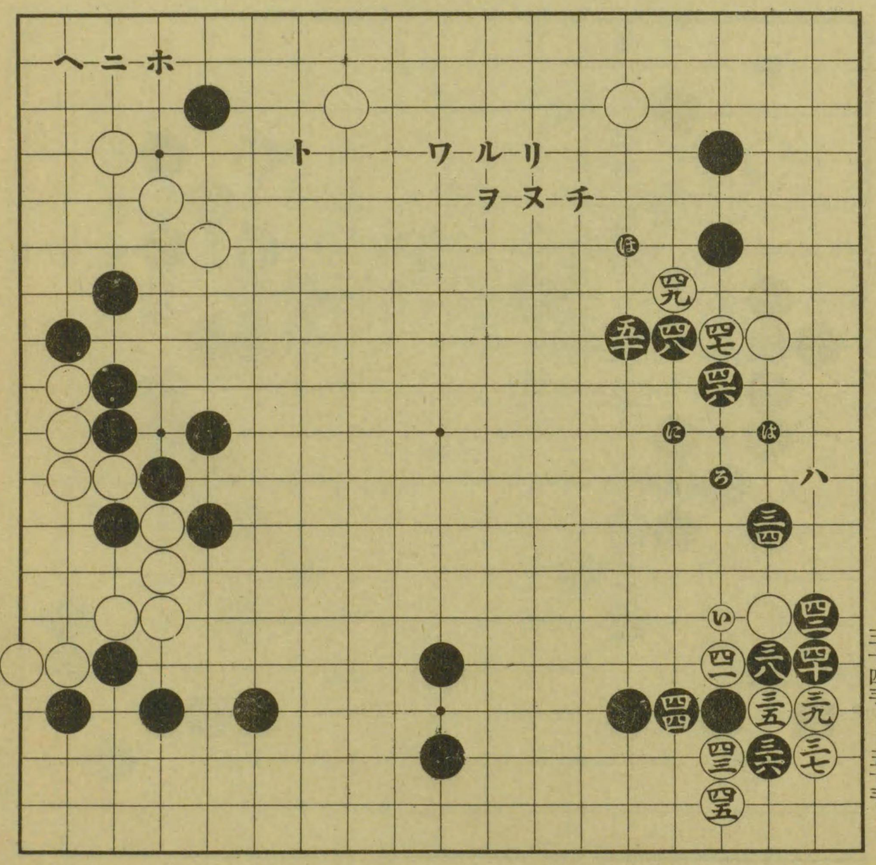
（指）

○　黑三十四を以つて三十八の點に尖み頂け、白いと立ちし時、ろと高く威壓す可し。

△註　黑ろに對し白ハと低く盤つたならば、黑は手拔して左上隅をニと走り、白がホ若くはヘと應じた時左上をトと逸出する手もあり、或は右側を四十六の點より壓する手もある。

黑三十八の點に尖みつけず單に打込むとすればはと星下に打ち、白四十八へ飛べば黑も亦にと飛出し、右上ほのとびと、右下三十八への尖頂とを觀望する。

○　黑四十六時機尙早し、上側をチと壓し、白リ、黑ヌ、白ル、黑ヲ、白ワと運び壁を造つておいて四十六と迫る手順である。



（指）

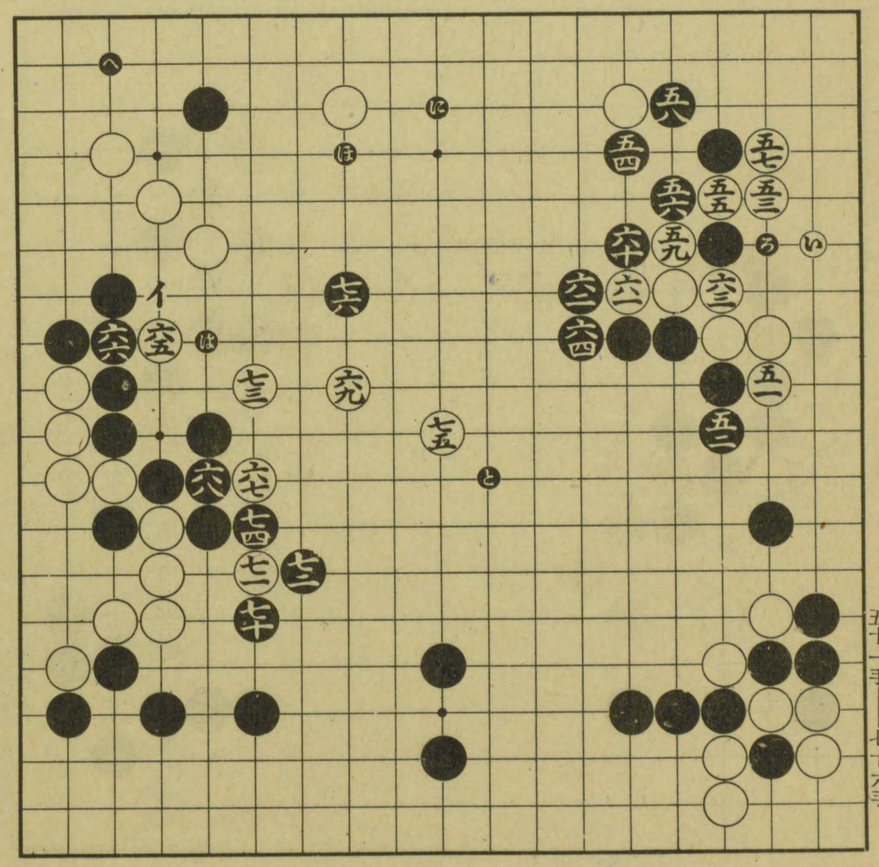
○　黑五十四は五十五の點を粘ぐを正着なりとす、次で白いと尖まば黑は六十三の點を截る可く、若又白六十三の點を粘がば、黑はろと曲るをよしとす。

黑五十八は五十九と粘ぐも可。

黑六十六ははと頂けるをテスヂとなす、其の時白イと引かば、黑六十六と粘いで可なり。

黑七十六は定見なき手なり、中央との點に大地域を守らざる可からず、然らば勝勢寧ろ黑に在らん。

△註　上側右方の白一子が死命を制せられて居る卽今、黑からはにと詰めて實質を得る手もあり、或はにと頂けて白の動靜を窺ふも可、或はへと走るも可、又退いてとと守るも尙勝を失はざる可し。



（指）

五十一手——七十六手

○　黑七十八でいとアテ、おけば白より八十一と策動さるゝも恐るゝ處なかりしならん。

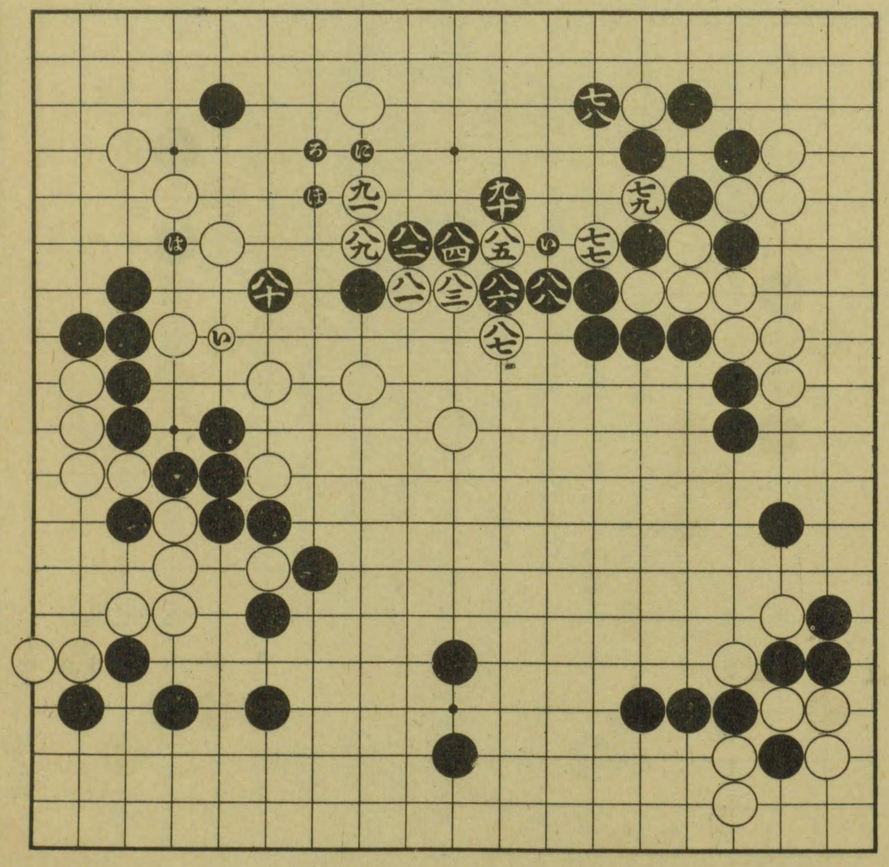
△　黑八十の時、白がいと連絡を計つて來たならば、黑はろと打つて白に迫りつゝ暗にはと尖頂けて白を兩斷する時機を覗ふがよい。

○　黑九十の手を以つてにと頂け、白若しろの點へ綽ねなば、黑は更にほと綽返すといふ猛烈な戰法ありて、毫も危惧する要なかりしなり。

然るに黑の考茲に及ばず白より九十一と要所を鎖さるゝ事となりては形勢頗る重大と言はざる可らず。

△　此の後黑緩手連發して、終に一局を放了するの餘義なきに至つたのは惜しむ可きであつた。

七十七手—九十一手迄



（指）

三子

第七局

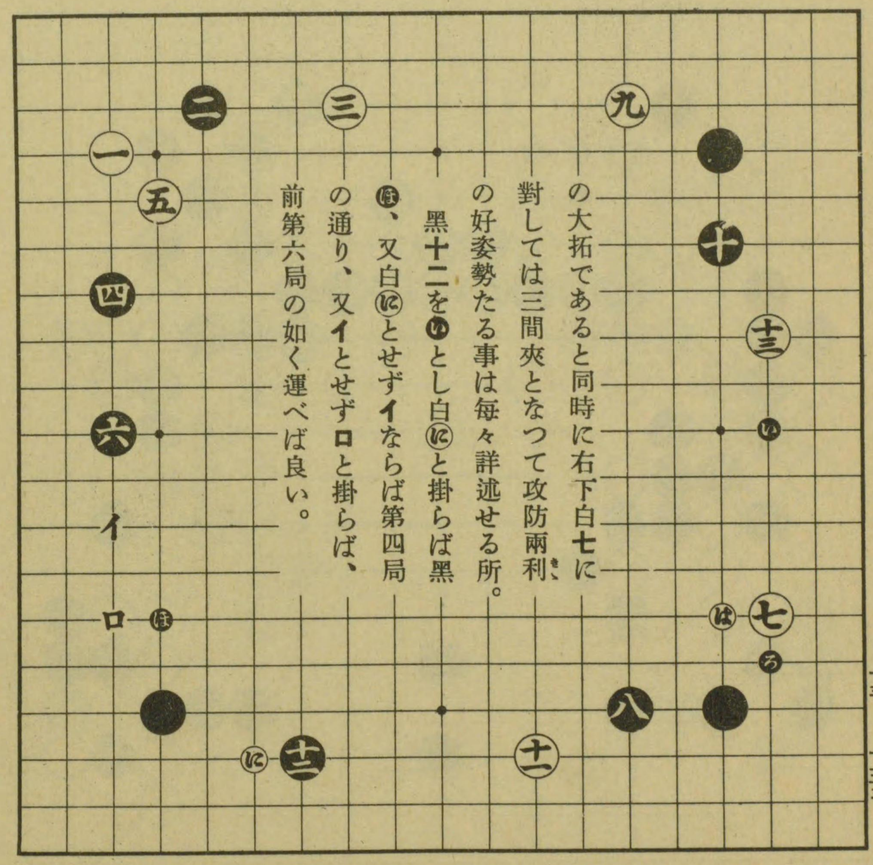
中押勝　少年S君
來賓H氏

○　黒十二は右側星下にいと打つを可とす、或は十二でろと尖頂け、白をはと立たしていと打つ慣用の手法に出づるも一策たる可し。

△註　十二と大斜走に拓く手は下側に於ける白十一の拓きに制限を加へ且つ左下隅に地域を拓いたのであるから悪いとは言へぬ、然し此の十二は十一に對しては彼の二間拓を許容する四間の距離にあるから詰としては緩く、又左下隅自己の拓きとしては未完成である。

之に反して右側へいと打てば、其は右上十よりしての理想的完成の大拓であると同時に右下白七に對しては三間夾となつて攻防兩利の好姿勢たる事は毎々詳述せる所。

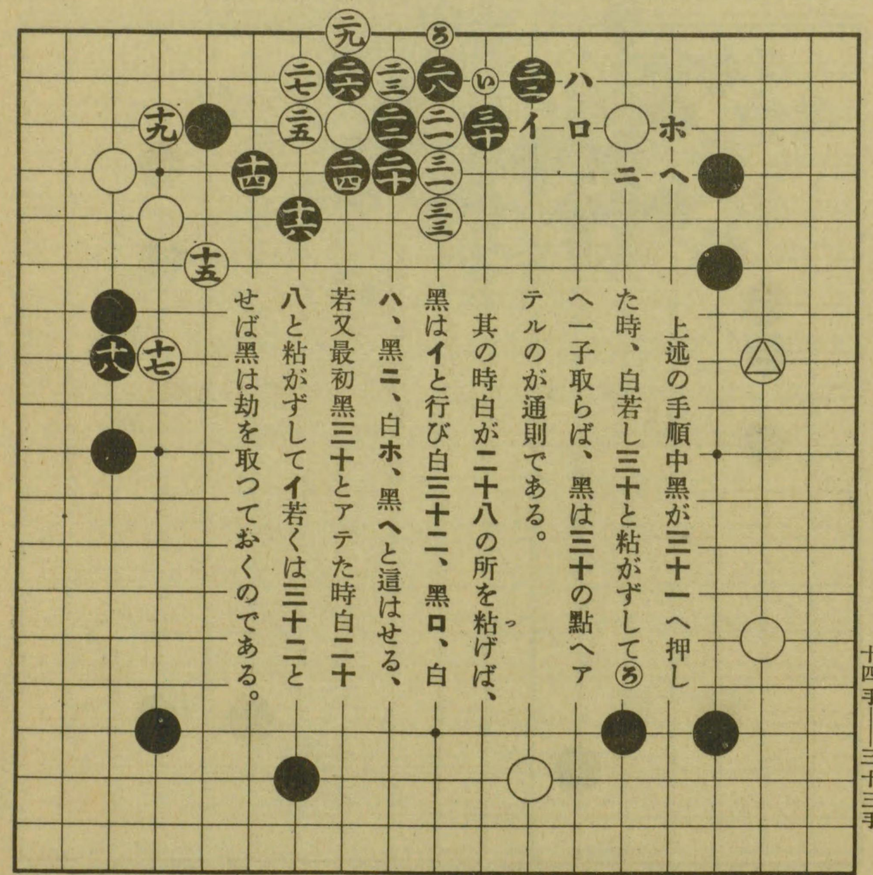
黒十二をいとし白にと掛らば黒ほ、又白にとせずイならば第四局の通り、又イとせずロと掛らば、前第六局の如く運べば良い。



（指）

○　黒二十六は方向を誤れり、二十八の點より截らざる可らず。

△註　此の誤着が因となつて本局は僅に五十九手で一局を拋了して終つた、曾て何れかの局で詳述しておいた筈であるが、斷點が二ケ處ある時、自分が取らうといふ目的の反對の方へキリを入れる、キラレた方は、先截つて來た方を取る、といふのが通則、處で本圖は右側△印の白が禍をなして、三十と抱へても白二十一の一子を征とする事が出來ぬから、二十六の手で二十八の點を截り、白にいと抱へさせて黒は三十一へ押し、白に三十の點を粘がせて二十六と截り、白ろ、黒二十七と二子を抱へる手順である。



上述の手順中黒が三十一へ押した時、白若し三十と粘がずしてろへ一子取らば、黒は三十の點へアテルのが通則である。

其の時白が二十八の所を粘げば、黒はイと行び白三十二、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホ、黒ヘと這はせる、若又最初黒三十とアテた時白二十八と粘がずしてイ若くは三十二とせば黒は劫を取つておくのである。

（指）

△ 黑三十とアテル手で㊀と行び、白の頭を三十三と出さぬ工夫を講じたならば如何に不利益な結果となつても全滅する非運は免かれる筈。（參考天圖は其の變化の一斑）

○ 黑は四十と截る前に四十一の點へ出で玆に斷點を造つて劫立の準備をなし然る後四十と截る可し。

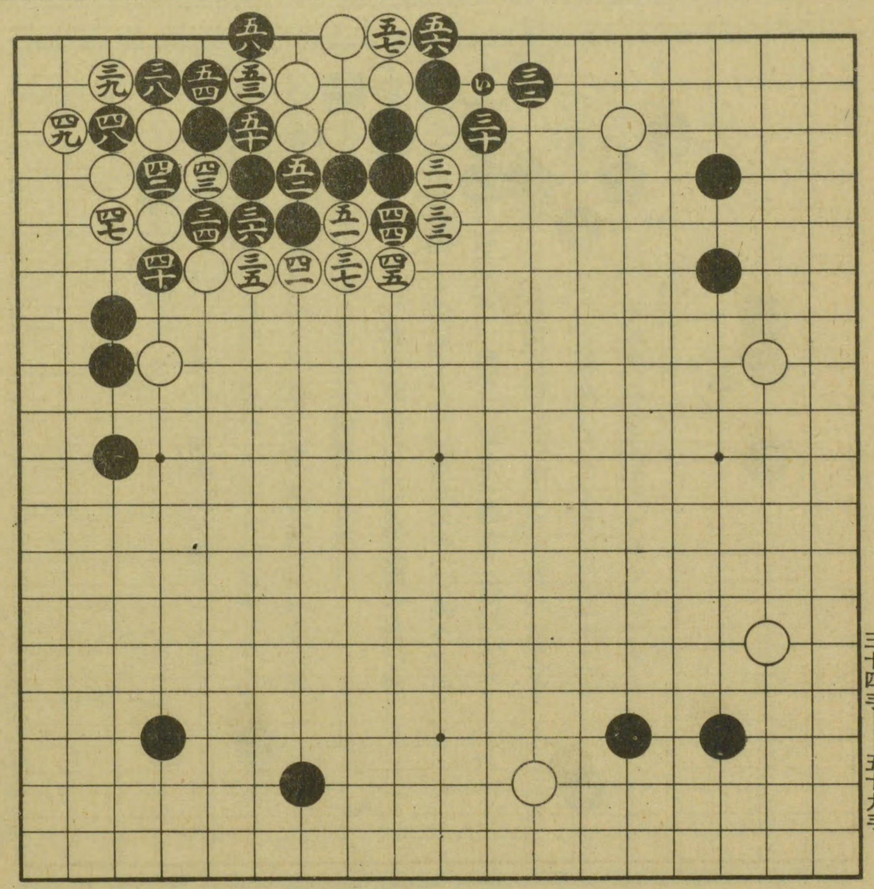
△ 黑三十四の尖み頂けば窮餘の策である、が事玆に至つてはモハヤ致し方はない、勝敗の結果は如何あらうと劫として戰ふより外に手段はないのである。

（參考地圖は黑四十一に出た後に四十と截つた變化を示す）

㊃㊀劫トル　㊄㊁劫トル

㊄㊂劫トル

第五十九手止

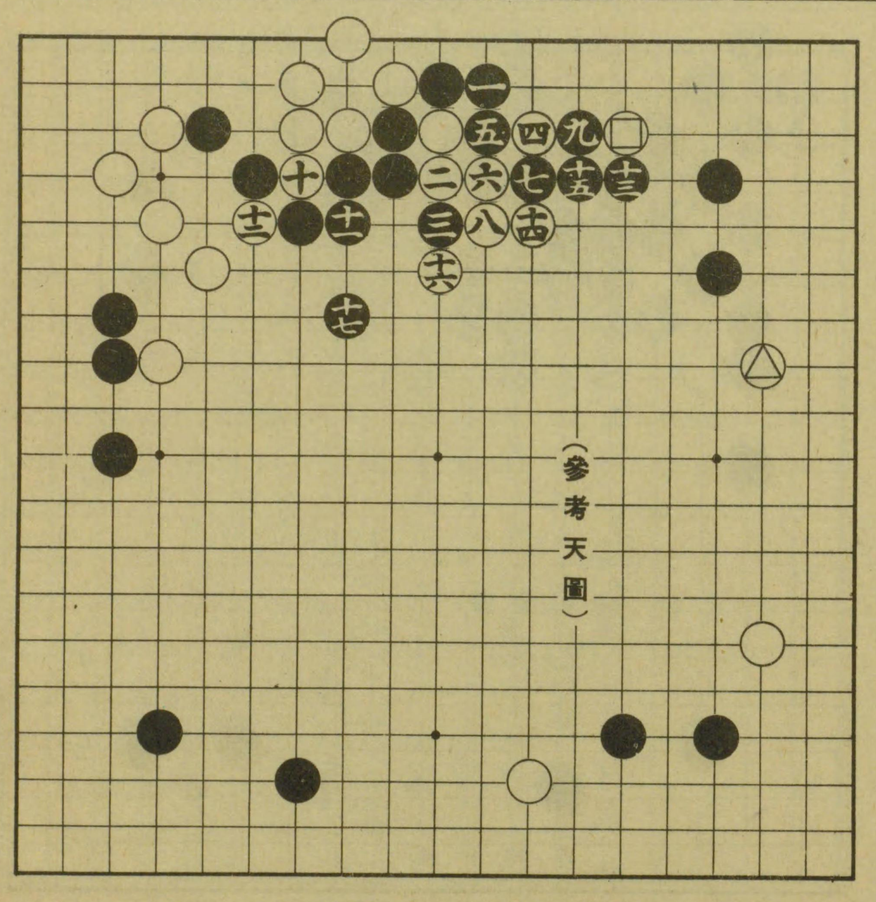


三十四手——五十九手

（指）

△（參考天圖）　右上には（□印）掛りの白一子がある、今黑が一の手で五と抱へて見ても、右側△印白一子あるため征が不成功とすると餘程警戒を加へねばならぬ、況んや上側中邊數子の黑は一眼もなく浮いた石で其の上缺點ばかりである、此の場合黑は、白が三の點へ出る迄に迂回運動をさせ、其の機會に右上を黑の勢力範圍にして終ふより外仕方はない、卽ち黑一と引き三と綽ねて其の目的の半は達した譯、十三、十五と右上隅の整理が出來れば、十二と截られて二子の黑を取られたのも然程惜くはないといふ次第である。

十六と打つた白が治まらぬ限りは十七と飛んだ黑にも不安はない、他に色々と打方もあらうが是一變化。



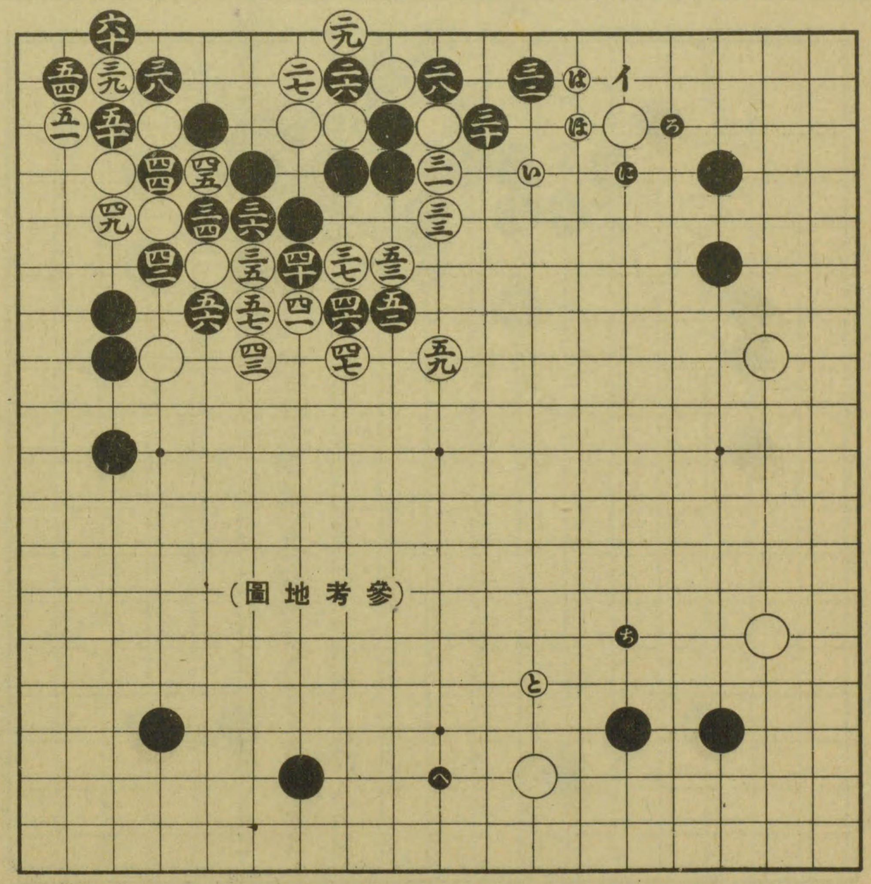
（參考天圖）

（指）

△（參考地圖）　黑四十の突出、之が此の問題を解く鍵、白に三十三、三十七と封鎖された以上は、劫より外はない、そして劫の勝敗は劫立の多少、特に此の場合、四十と突破して玆に四十六、五十二、五十六と劫立を造るが緊要である。㊃劫トル

㊄劫トル　㊅劫トル

黑六十と打拔いた時、白は㋑と掛けて黑三子に迫るは當然、此の三子の運命は上側五子の白の死活に關係するから決して小さくはない、が黑若しイと頂けて强いて活を計らば其の影響で右上隅は全部白地に化し却つて不利、其故白㋑に對し黑は㋺、㋩と打ち、右上黑地を防護しておいて下側へ㋥と先鞭をつけ、更に㋭と活躍する方が得策である。



（指）

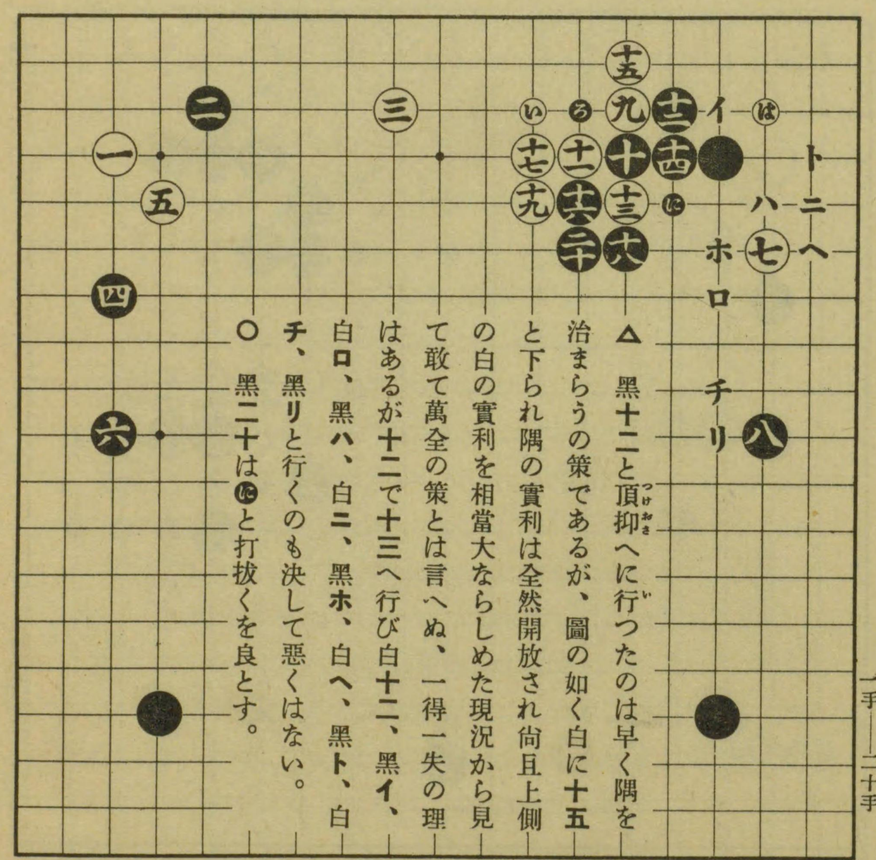
三子

第八局

中押勝　少年D君
來賓R氏

△冠註　黑が四と二間に夾返す手法は、白三の夾が一間、二間、三間其の何れたるに論なく應用して可い、白七と掛つたのは黑が十と飛ばゝ㋑と掛つて上側を整へよう、若又黑十とせず㋺の大斜走ならば、㋩と三々に打込まうといふ意であるから其の策を外して黑が八と行つたのは賢明の手である。

黑が右上を手拔した以上は白九の兩掛りは必然の成り行き、此くて白十九迄運んで上側に巨利を占め得たが、黑の先鞭が右側へ八と打つてあるから黑も惡くはない。



△黑十二と頂抑へに行つたのは早く隅を治まらうの策であるが、圖の如く白に十五と下られ隅の實利は全然開放され尙且上側の白の實利を相當大ならしめた現況から見て敢て萬全の策とは言へぬ、一得一失の理はあるが十二で十三へ行び白十二、黑イ、白ロ、黑ハ、白ニ、黑ホ、白ヘ、黑ト、白チ、黑リと行くのも決して惡くはない。

○黑二十は�iと打拔くを良とす。

一手―二十手

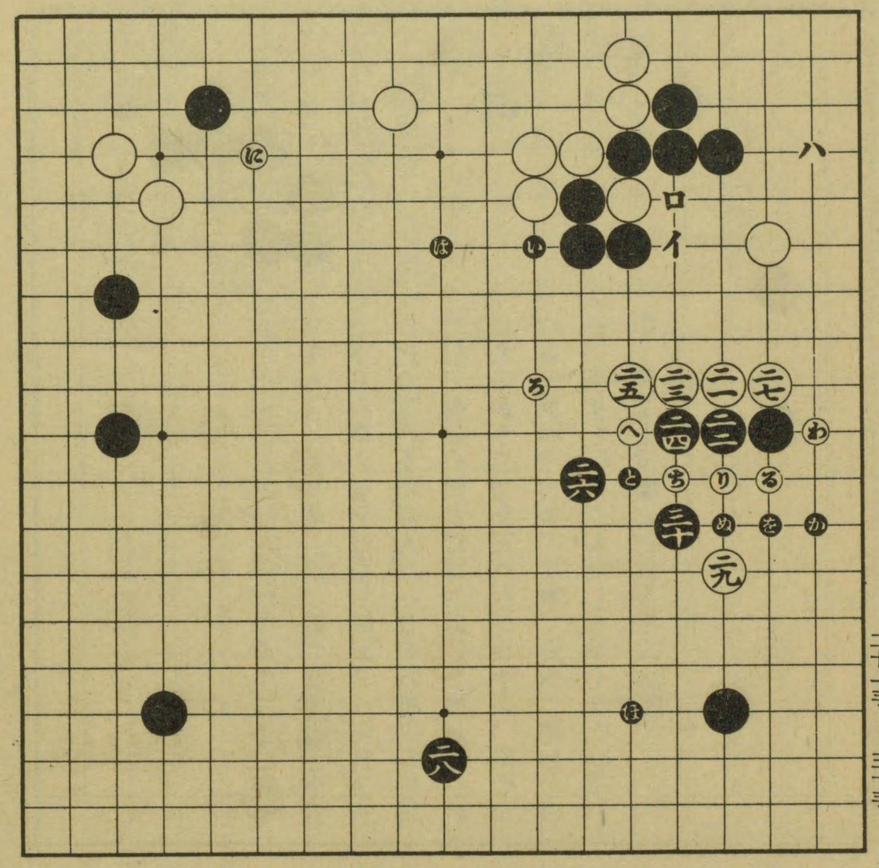
（指）

△ 黒二十八の手でいと押し、白ろと飛んだ時、黒亦はと飛び、白がにと左上に備へた時、黒はほと右下隅を防備して八以下の黒壁を背景として壯大を計るがよい。

注意！ 右側白壁の勢力が中原に瀰漫した時、右上の黒は白よりイと頂けられ黒ロ、白ハと眼形を奪はる惧がある。

○ 黒三十は不用なり、ほの點に備ふ可し。

△註 黒三十をほとした時、白へと來れば黒と、白ちの截りに對し黒三十とアテ、白り、黒ぬ、白る、黒を、白わ、黒かと三子を捨てゝも決して損ではない、且つ黒の手が三十からか迄來れば白より右下隅に向つて策動の餘地はない。



二十一手——三十手

（指）

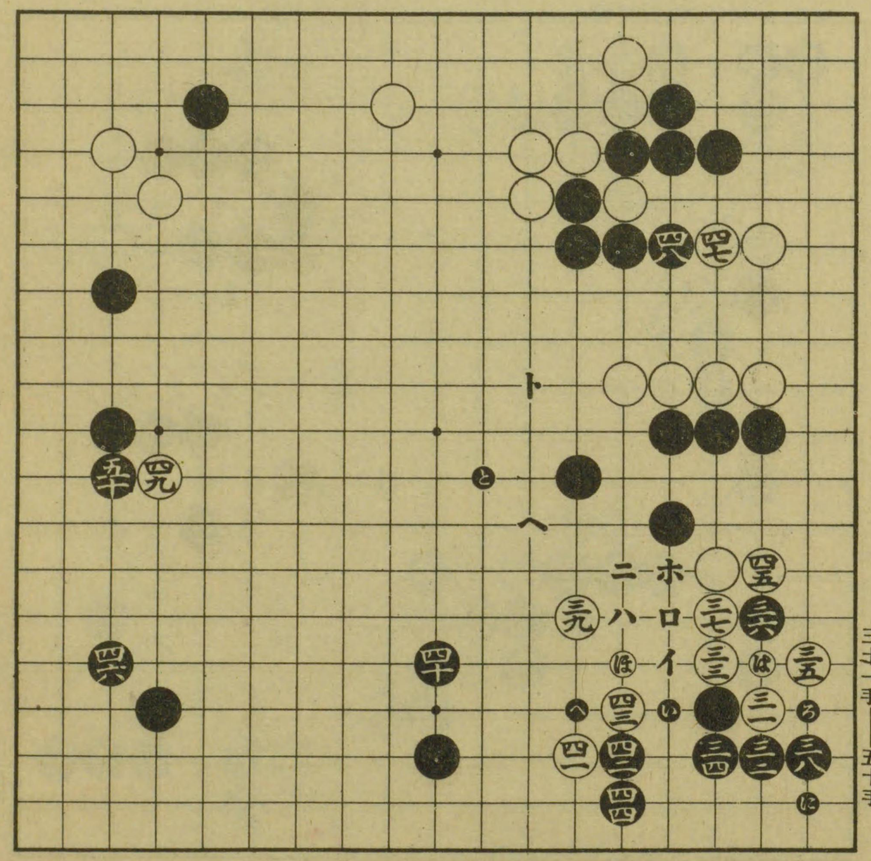
△ 黒三十四は少し堅固に過ぎる、此の手でいと行び、白三十八とせばろと截り、白は、黒にと運び、白ハの時黒へと飛ぶがよい。

○ 黒三十六はテスヂに似て非なり外部よりイと綽ね、白ロと綽返した時ハと二段に綽ね、白ほの時、黒いと粘ぎ、白ニとアテ、黒三十九へ行び、白ホと粘がば、黒へと包み、白三十八と活たる時トと打つて中原經營と同時に右上の黒を聲援す可し。

△ 黒四十はへと打つて實利を收めつゝ徐々に白に迫るがよい。

黒四十二は四十三の點から行くと白は應手に困るのであつた。

黒四十六はとと飛んで六子の黒を中原に導くと同時に、右上隅の黒に聲援を送る可きである。



三十一手——五十手

（指）

○ 黒五十六はぬと曲る可し。

△註 左上隅五十六の走りは早く打つておかねばならぬ所であつた、然し現在の局勢としてはぬと曲り右邊及右上の黒と呼應して中原經營に向ふが緊要である。

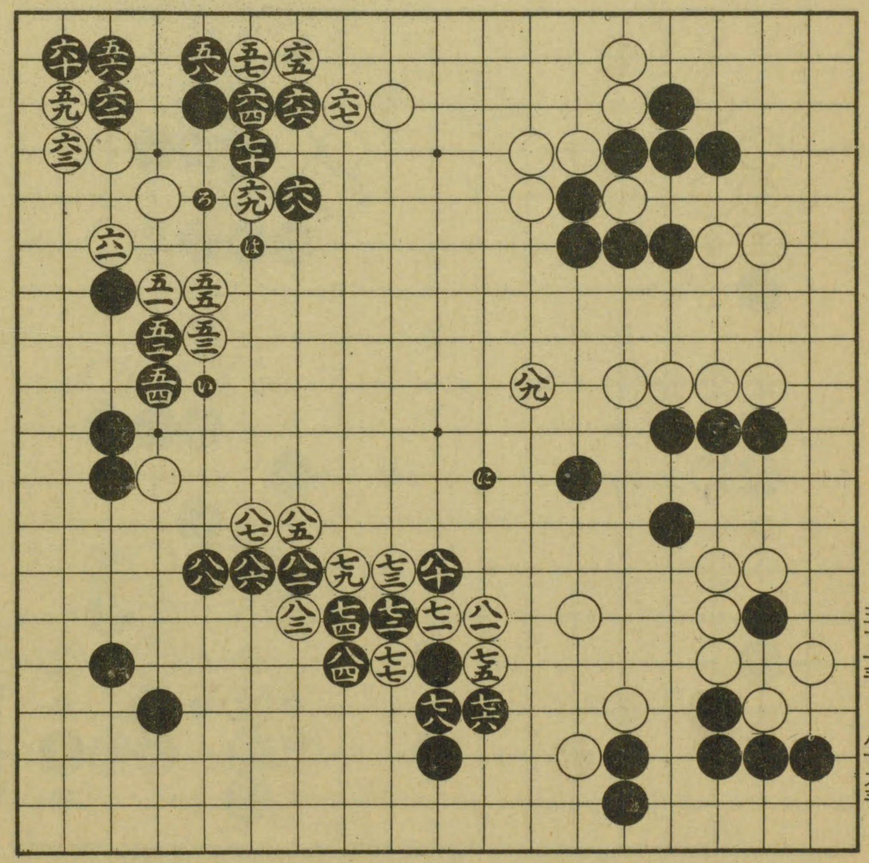
○ 黒五十八は五十九の點に尖んで早く左側に盤るを萬全の策とす。

△註 黒六十はろと頂けて右方の黒と連絡を取りつゝ局勢を展開す可し。

黒七十はほと外より打が本手。

○ 黒七十六は大惡手なり、單に八十の點を截る可し。

△註 爲めに七十九より八十七迄の白の壁を造らして右邊の黒を危地に陷入れた、卽七十六で八十とキリ白八十一黒にとす可し。



五十一手——八十九手

三子 第九局（補充の一）

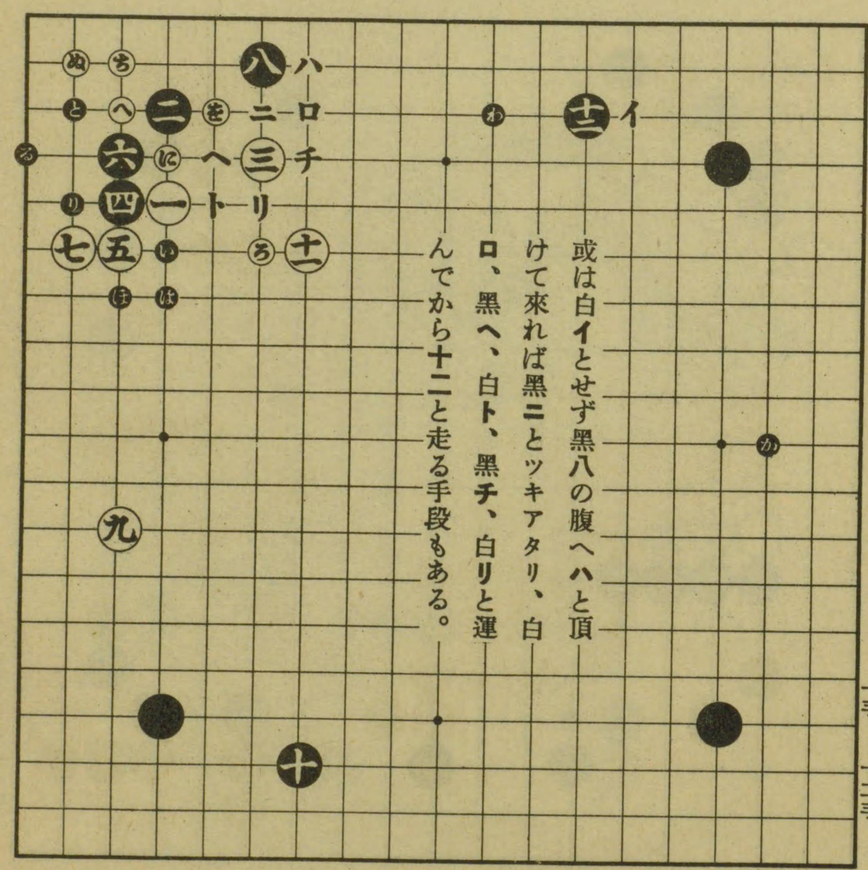
七段野澤竹朝先生講評

中押勝 野澤七段（當時五段）
小島一夫

○ 黒十は普通の應接で何等非難す可き處はない、然し左側を廣くする白の計劃を破る意味でぬと截り、白ろの時、黒ほとし、白にに對し黒へと粘ぐ尋常手段を變じてほと曲り白への截り、黒とのアテ、白ち、黒り白ぬ、黒る、白をと振替はり、黒は先手を取つてわと上側大場に大勢を占めるのも一策である。

○ 黒十二は右側星下にかと打つて大勢の均衡を計るがよい。

△註 上側は白が右上へイと掛らば黒左上よりロと尖む手もある、或は白イとせず黒八の腹へハと頂けて來れば黒ニとツキアタリ、白ロ、黒へ、白ト、黒チ、白リと運んでから十二と走る手段もある。



一手——十二手

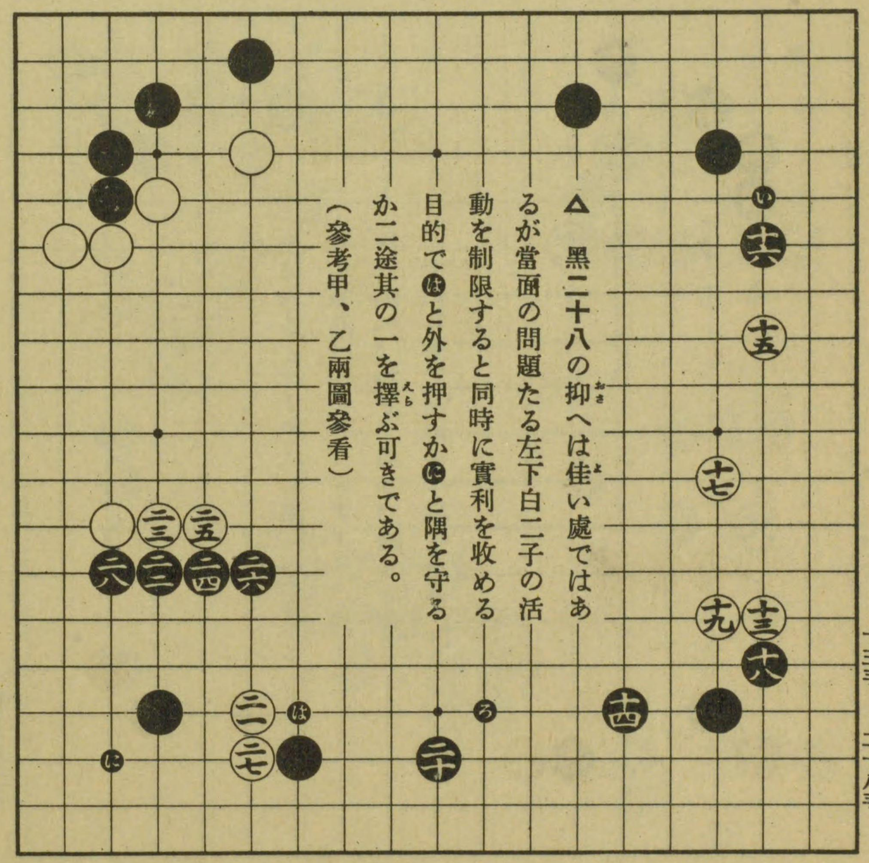
△ 黒十六は一路控へて(い)と隅を守る方がよい、然すれば後に白から右上隅へ策動される惧はない、何の途白に十七と防備されて右側の白地が纏まるものとすれば十六と散漫な詰めで後に隅へ白より手を弄される隙を殘すよりは(い)の堅實な方がどれ程優るか知れぬ。

○ 黒十八は時機が早い。

△註 單に下側を(ろ)とす可きだ。

○ 黒二十は左方黒十の拓きの低いのと姿勢が重複して面白くない、一路高く廣く(ろ)とす可きである。

白二十一の來攻に關せず二十二と打ち白の孤弱を衝いて自然の手順で二十四、二十六と運び、白二十一の進路を阻止する姿勢を造つたのは黒のハタラキと稱贊せねばならぬ。



△ 黒二十八の抑へは佳い處ではあるが當面の問題たる左下白二子の活動を制限すると同時に實利を收める目的で(は)と外を押すか(に)と隅を守るか二途其の一を擇ぶ可きである。

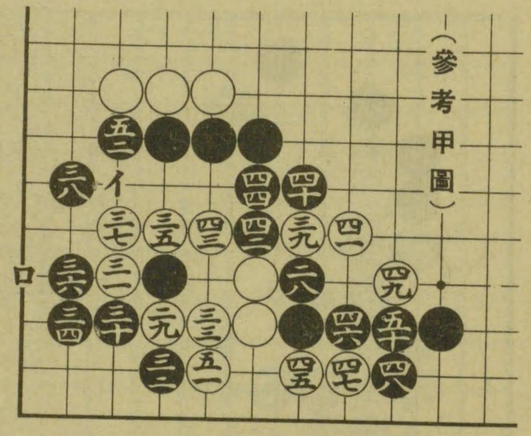
（參考甲、乙兩圖參看）

十三手——二十八手

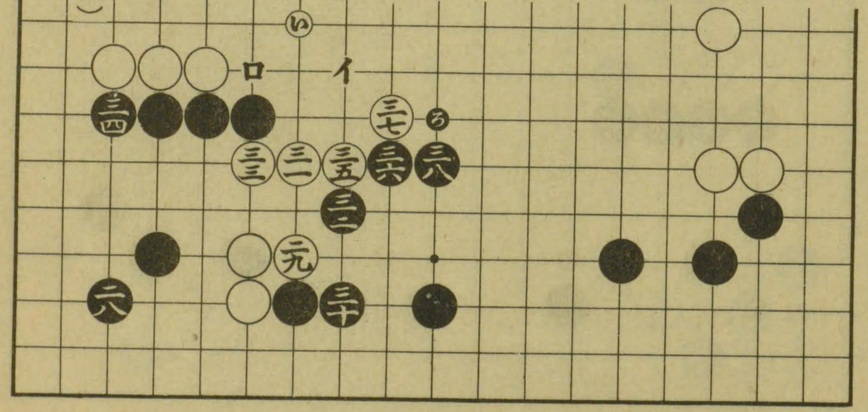
△（參考甲圖） 黒二十八と外から押すのは白を小サク活かす方針である、黒三十四と下るのは本局の如く隅へ振替られるのを嫌ふ手。

白若し三十五と抱へず三十六の點に抑へて來れば黒は三十五の點に行び、白イの時、黒ロと綽ね、白三十八の時、黒四十二に綽ねておけばよい、本圖は白を活かして外部に優勢を張る結果となつた。

△（參考乙圖） 黒が二十八と尖むのは先隅の實利を確保しておき、白をしてダメを走らしめ、其の逸出の機會を利用して下側の大地域を纏めようといふ主旨なのである、本圖白三十九の手で(い)と圍へば黒(ろ)と曲る、若又白(い)とする手でイならば黒ロでよい。



（參考甲圖）



（參考乙圖）

△ 黒三十四でいと下つておけば圖の如く白に三十五、三十七と隅を侵略さるゝ惧れはない。

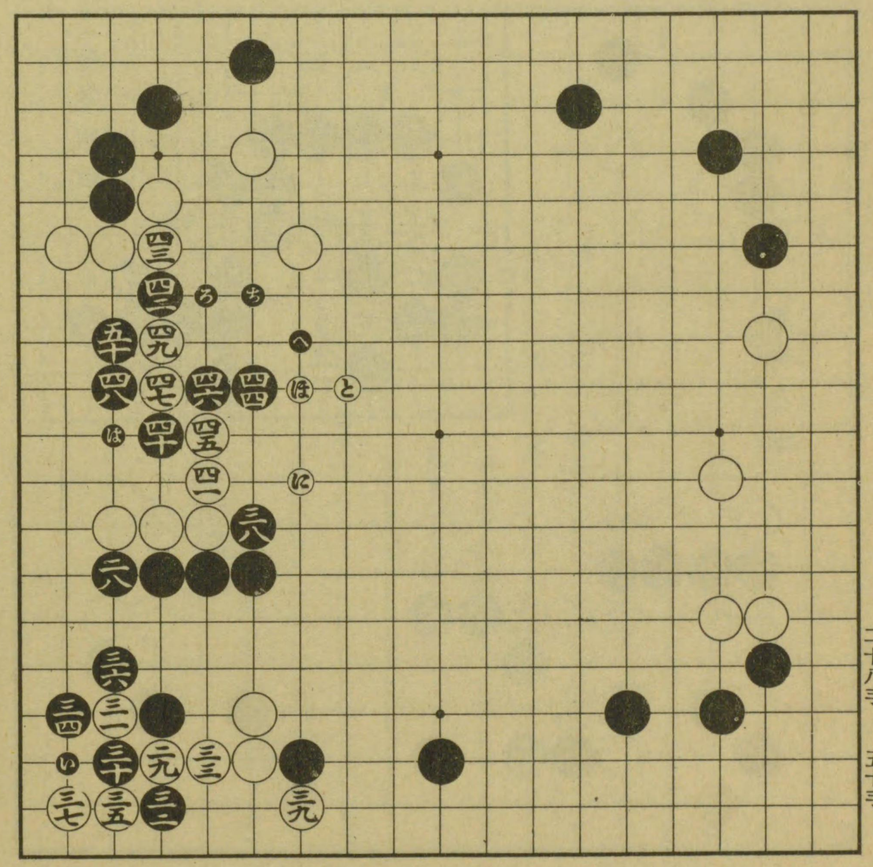
黒 三十八、四十は酷しい。

四十二で四十四の斜走ならば白は恐らく應接に窮したであらう。

○ 黒四十二のノゾキは俗手、若し茲を打つとせばうが手スヂ。

○ 黒四十八ではと下り、白にと飛んだ時、黒五十とし、白ほ、黒へ、白と、黒ちとして白地を蹂躙して終へば茲に大勢は決するのであつた。

△ 本圖黒五十以下五十六迄の手順で白を絞つて長壁を築いたが其の壁の背面たる右側には十五、十七、十九の白の配置がある故、黒は左側の實利を失うただけで何の效果も摑めなかつた。



二十八手——五十手

（指）

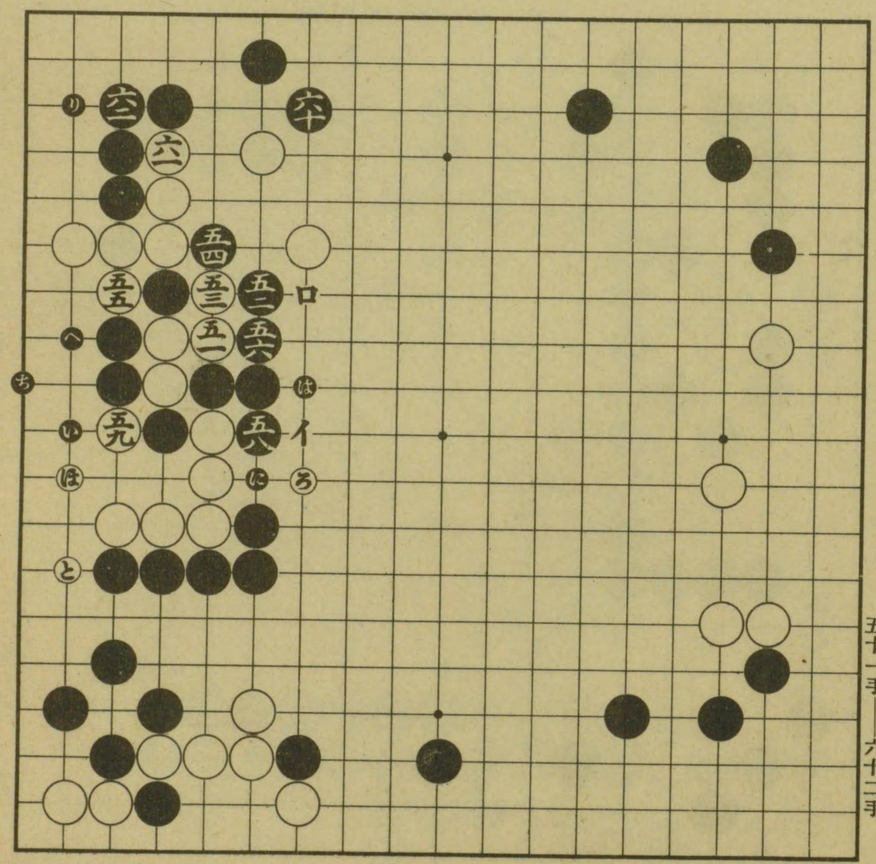
△ 黒五十二でいと掛粘ぎ、白ろの時黒五十三へ押し、白を五十六の點に行ばしてはと行び、白五十五と截り、黒又外部をにと截り、白ほと盤りを止めた時、へと曲り白と、黒ちと運んだならばセキより悪くなる筈なく先手で五十八を密閉する事が出來る。

若又最初黒い、白ろ、黒五十三白五十六、黒はの時白がイと竝んで中央に出れば黒ロで白四子を捕る事は問題でない、圖の如く五十六迄絞つて見ても左側に拂ふ犧牲が多いから面白くない。

△ 黒五十八に至つても尚りと一着を加へ攻取にさせる方が有利。

○ 黒六十二はりと掛粘ぐがよい。

（五七）四目つぎ



五十一手——六十二手

（指）

△ 黒六十四はいと下つて隅を防護し、兼て白の此の方面への發展を阻止す可きである、其の時白イならば黒ロでよし。

黒六十八は七十六と下つておくの外はない。

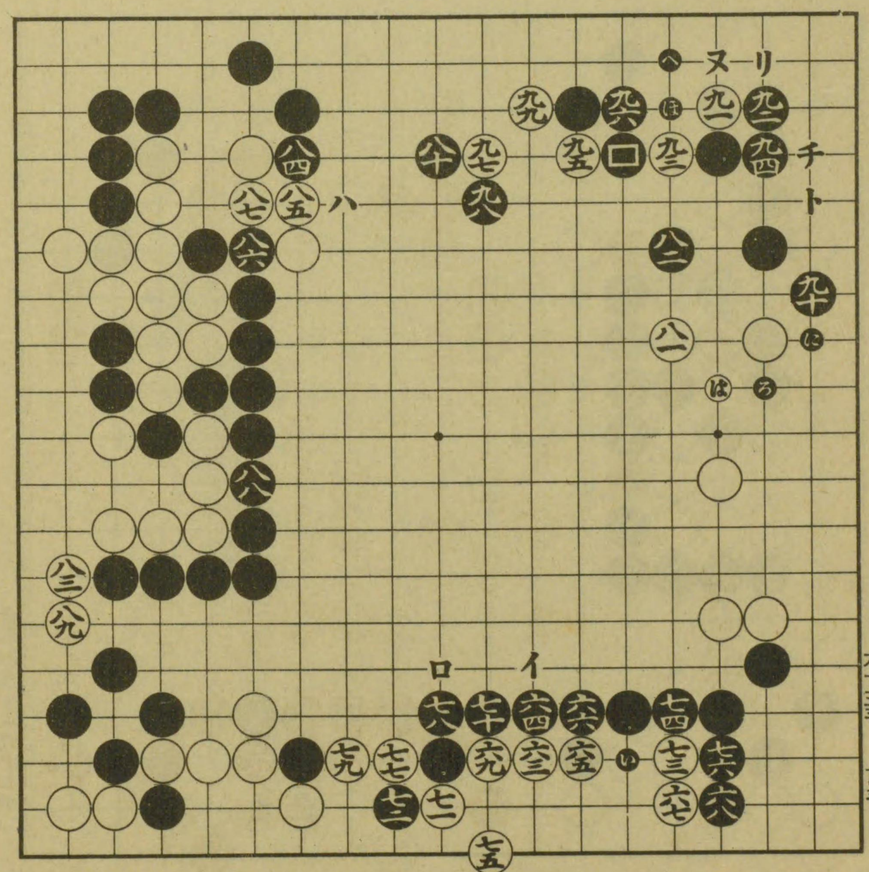
黒八十はろと頂け、白はの時、にと盤り右側を侵略するがよい。

八十で上側を打つものとすれば ハと大きく構へる手もある。

○ 既に九十と側の防備が出來てゐるのであるから九十二はほと外から抑へねばならぬ。

黒九十四は無論ほである。

△註 白九十一、黒ほ、白九十二黒へ、白ト、黒九十四、白チ、黒リ、或は白九十一、黒ほ、白九十四、黒九十二、白ヌ、黒へ。



六十三手——百手

（指）

○ 黒十八、二十は無意味の着手なり、黒二十四も亦然り、四十一の邊より打着して自己の地域を造ると同時に徐々として右側方面の白地を削る方針に出づ可し。

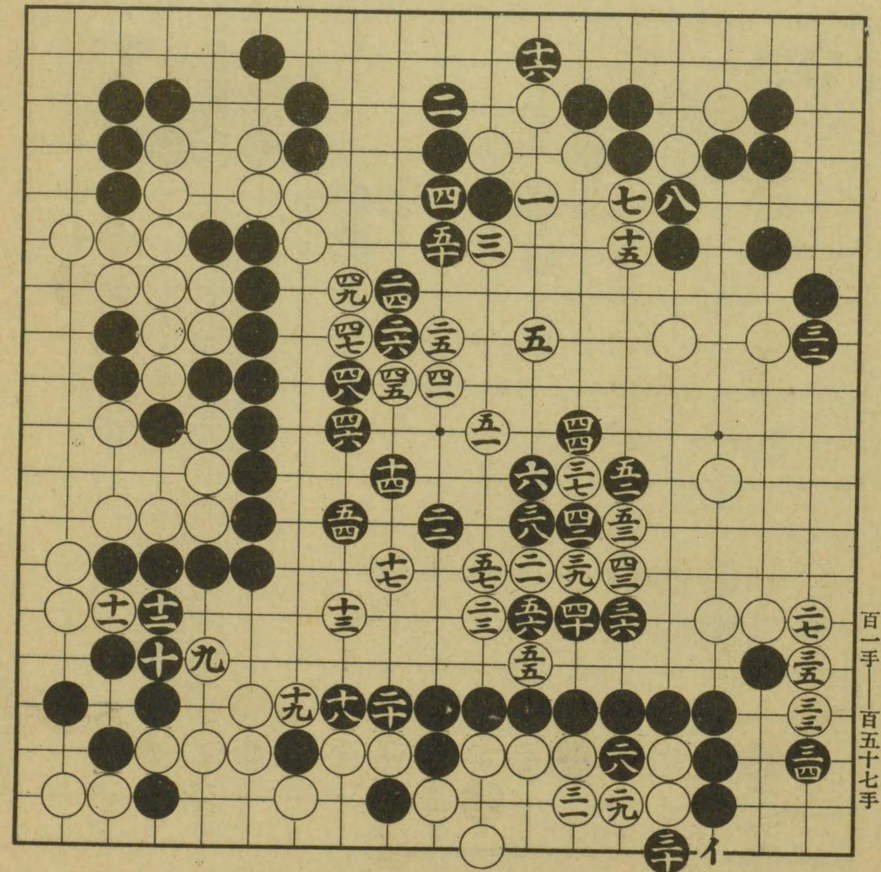
○ 黒二十八、三十不急なり、白よりイの綽ねの不可能なる處急ぐの要なし、二十八にて三十五と應ず可し。

○ 黒三十二は輕重を誤れり、三十五の點に抑へて此の大石を安定しおく可し。

黒四十四は四十六の點に備へて活に就く可し。

黒五十に至つても尚五十四を急務なりとす。

白より五十一、五十五と搦まるゝに至つては上下の大石孰れか其の一を失ふの外なし。



百一手——百五十七手

（指）

三子

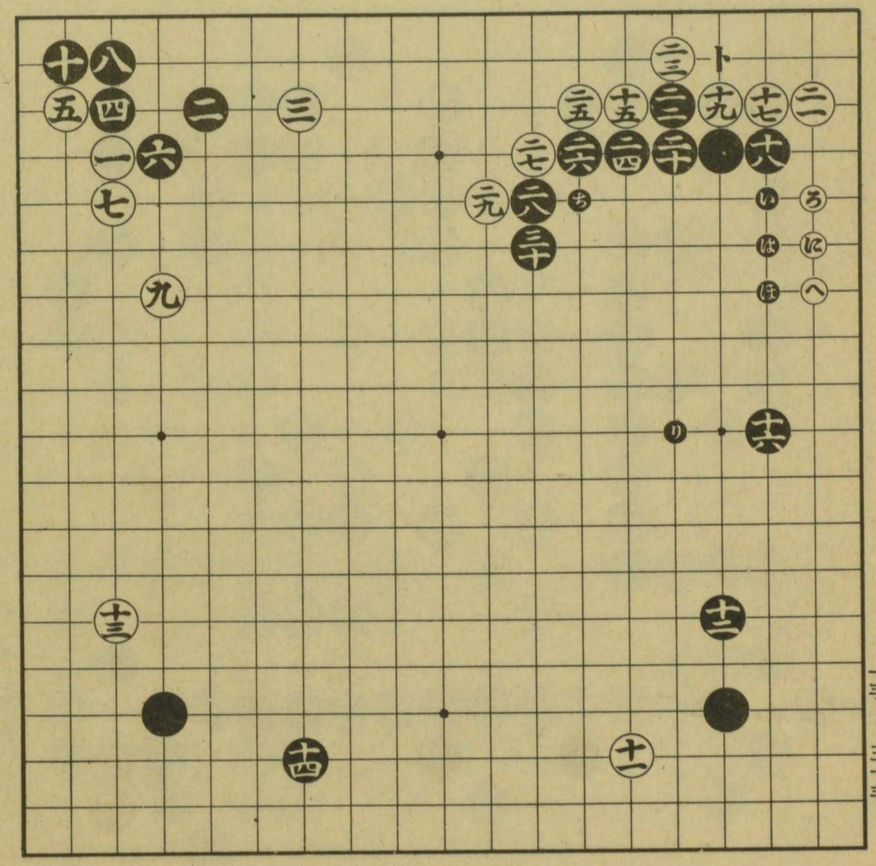
第十局（補充第二）

本因坊隱居秀元翁講評

市　宮阪六段（當時三段）
青山一郎

△黑十八は十九の點より抑へ、白十八、黑い、白ろ、黑は、白に、黑ほと運ぶ方がよい、白へを手拔して黑より此點を抑へられると黑トの下りも利き右側が非常に宏壯になる、サリトテ白は第二線を何處迄も這ふは不利に不利を重ねる譯、黑は却つて局面が平明になつて大有利。

○黑二十二はダメヅマリにて不利此の手はちと斜走し、白二十五と竝びし時りと右側を飛ぶべし。



一手——三十手

（指）

○黑三十二綴し、三十三の點に頂く可し。

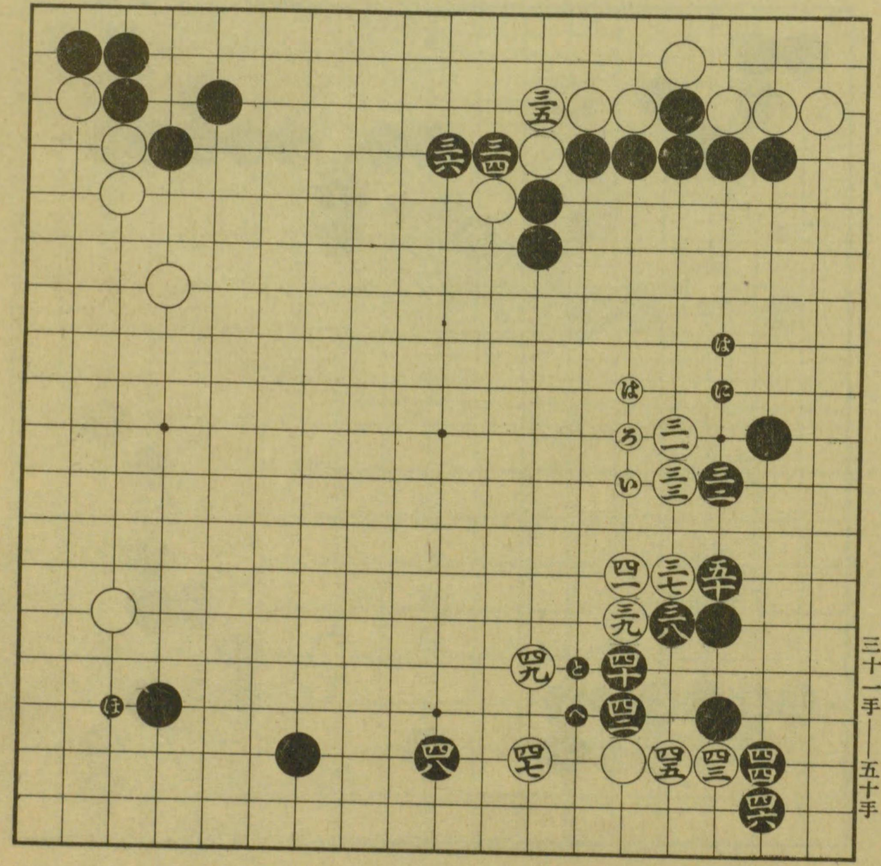
△註　黑三十二で三十三の時、白いと綽ね、黑三十二に引き白がろ或はぱと粘いだ時、黑はに若くはぱと打ち、白が上側を三十四と用心したならば左下隅ほに締るか或は機宜の處置としてへと白十一の肩より壓して暗に中邊三子の白を大きく包む策も面白い。

○黑三十八は五十と打つ可し。

△黑四十二は白を上下に遮斷する意味でとと行び出るがよい。

○黑四十八は五十を急務とす。

△註　一擧にして右側の地域を破壞さる可き五十の點と、唯一の隅の締りたる左下ほとを捨置くは宜しくない。



三十一手——五十手

（指）

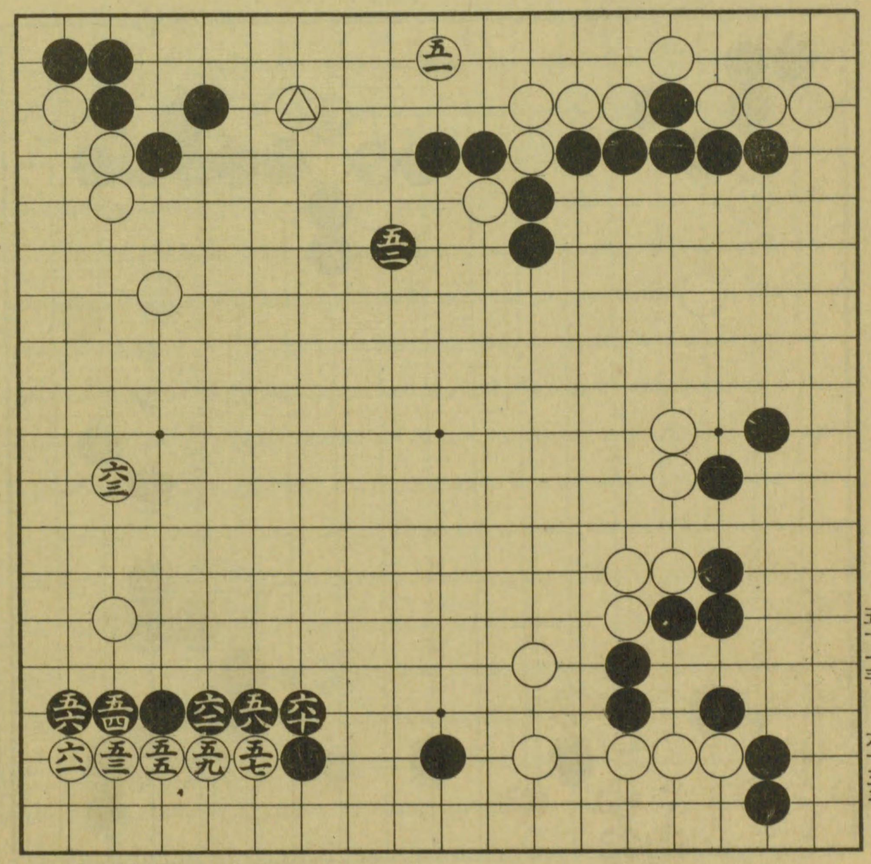
△　黑五十二は左下五十四の點に締る方が重大である。

△註　白五十一の備のない時ならば五十二と打つ手が自己中腹の厚みと同時に△印孤立の白に影響を與へるから良い、然し卽今白が五十一と來た後であるから五十二は單に自分のみの手である、之を左下隅五十四の締りに比較すると同日の論でない、見よ白より五十三と打込まれ一隅の實利を擧げて敵に委し、背面卽左側一帶も亦白の領域となつて終つたではないか。

○　黑五十六は六十二を穩健とす。

△註　白に五十九で六十二と打たれると其の結果は如何なつたか分らぬ、恐らく黑の不利であらう。

（ヲ頁參考圖參看）



五十一手——六十三手

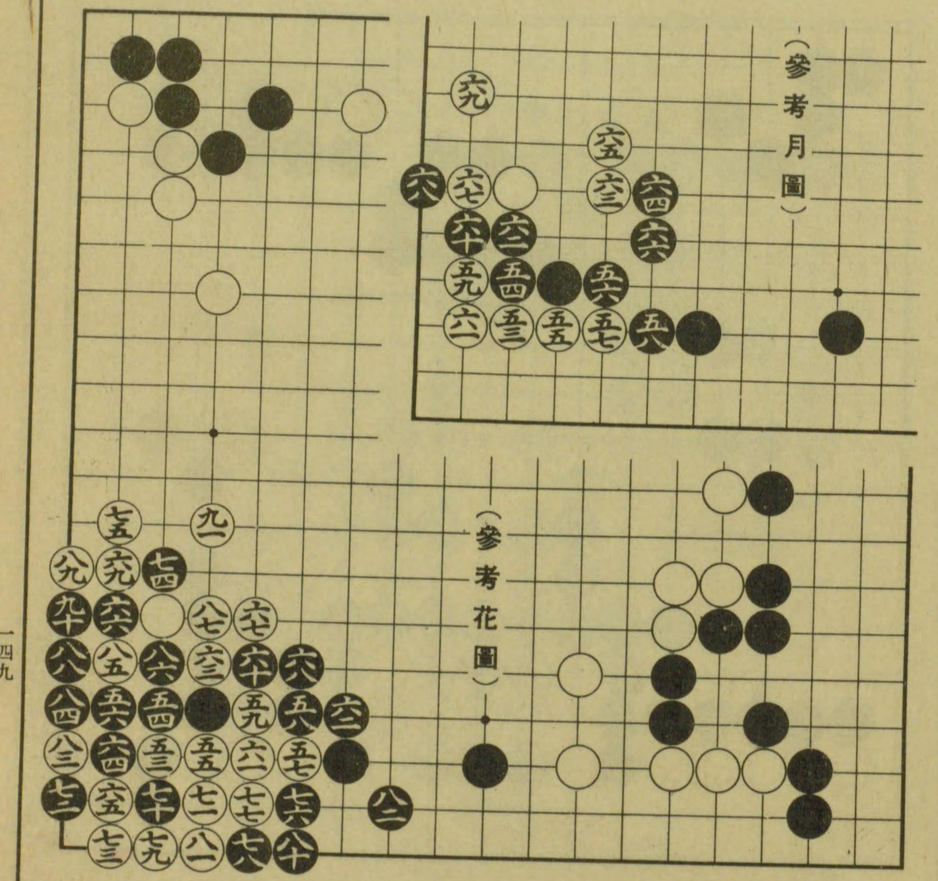
（指）

△（參考花圖）　黑が五十六の手で五十九の點へ行びる（月圖）のは極めて穩健な手で、一旦黑が此の隅を手拔して白に五十三と打込まれた以上は尋常の應接をするより外はなかつたのである、然るに五十六と變則の手を打つた、此くては五十七、五十九と行くのは白の任意で、黑は白の命令に服するより外はない。

此は定型の一種である、尙是以外に色々變化もあるが黑に有利と見らるゝ打方もない、白に五十九とワリ出されたら此くなるのであつた、黑白損得の差は說明する迄もなからう。

△（參考月圖）　黑五十六と上を押さば圖の如き結果となる。

此の方簡明で紛れなくてよい、花圖の方は一步を誤ると危險である。



（指）

○ 黒六十六でいと尖めば此の白を兩斷し得たのである。

隨つて白六十五は考ふ可き手。

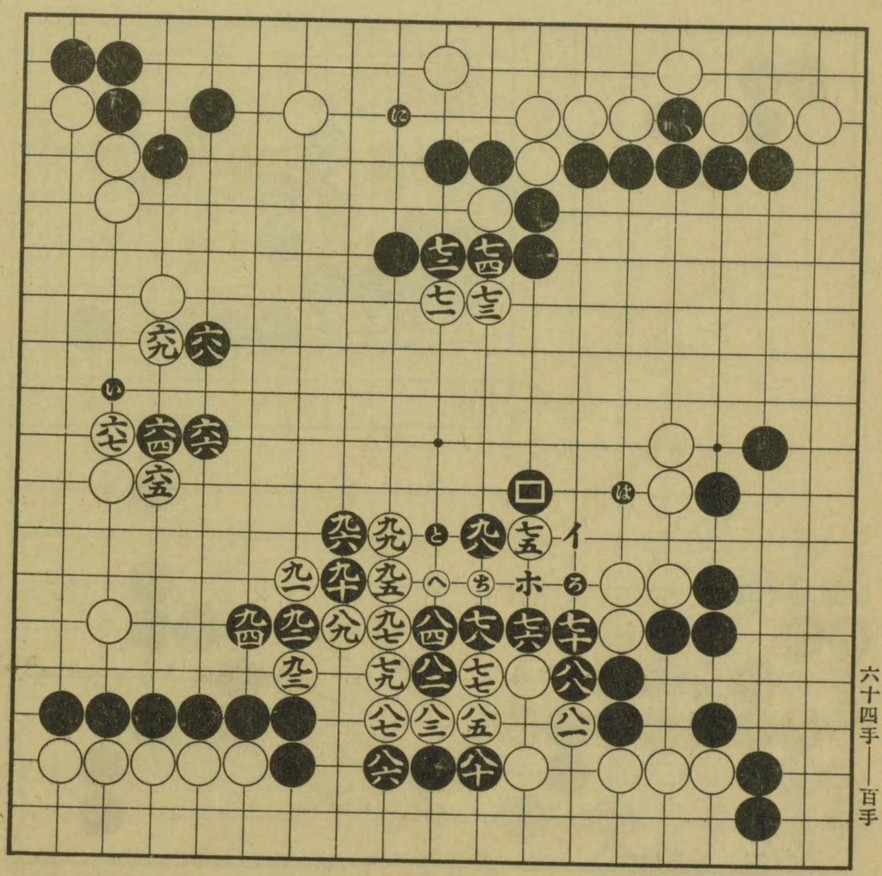
○ 黒六十八其の何の意たるやを解するに苦しむ、七十若くはホの邊より白に迫る可し。

○ 黒七十二は一着ると押して白の應手を問ふ可き所である。

△註 中央をると押された時白手を拔けばはと夾まれる、又るに應じてイと綽ねれば黒に七十五へ綽ね返される、上側の如きは黒にと凌ぐ手があるから惧るゝに足らぬ

○ 黒八十二は八十四の行にてよし。

△註 黒九十八の手で九十九の點に曲り、白へ、黒と、白ち、黒百の手順にて封鎖せば中央に大なる黒の領域が出來る。



（指）

六十四手——百手

○ 黒六の手にて單に十と截り白十一、黒十二と一子を抱へおく可し。

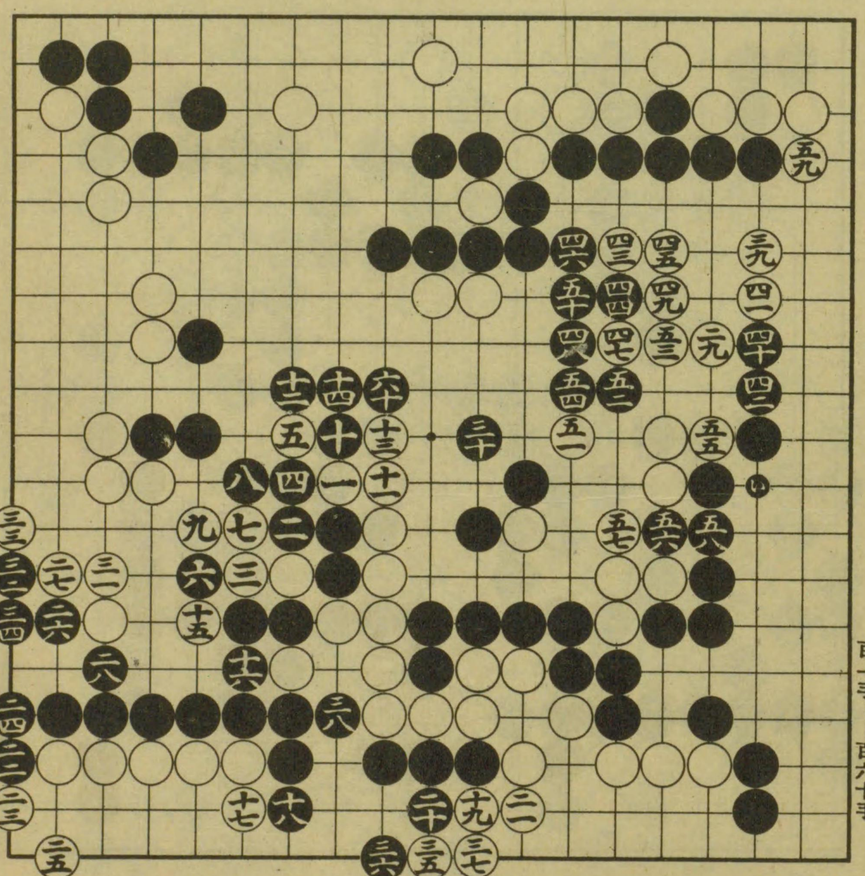
○ 黒四十四の頂けは四十五の點よりす可し。

○ 黒四十八は四十九の點に出でゝ白五十三の時五十と粘ぐもおそからずとす。

△ 黒五十六は單にいと粘ぐ可し。

□ 圍碁に就ての儀禮

専門家同志の事は玆に言ふ要はない、素人と專門家、素人と素人同志の間、特に素人と專門家との場合に就て一言したい、ツマリ强者と弱者と對局する時、弱い方からモウ一局と番數を强いる事は無禮であると心得てほしい、然し特に親しい間柄に在つては別問題である。



（指）

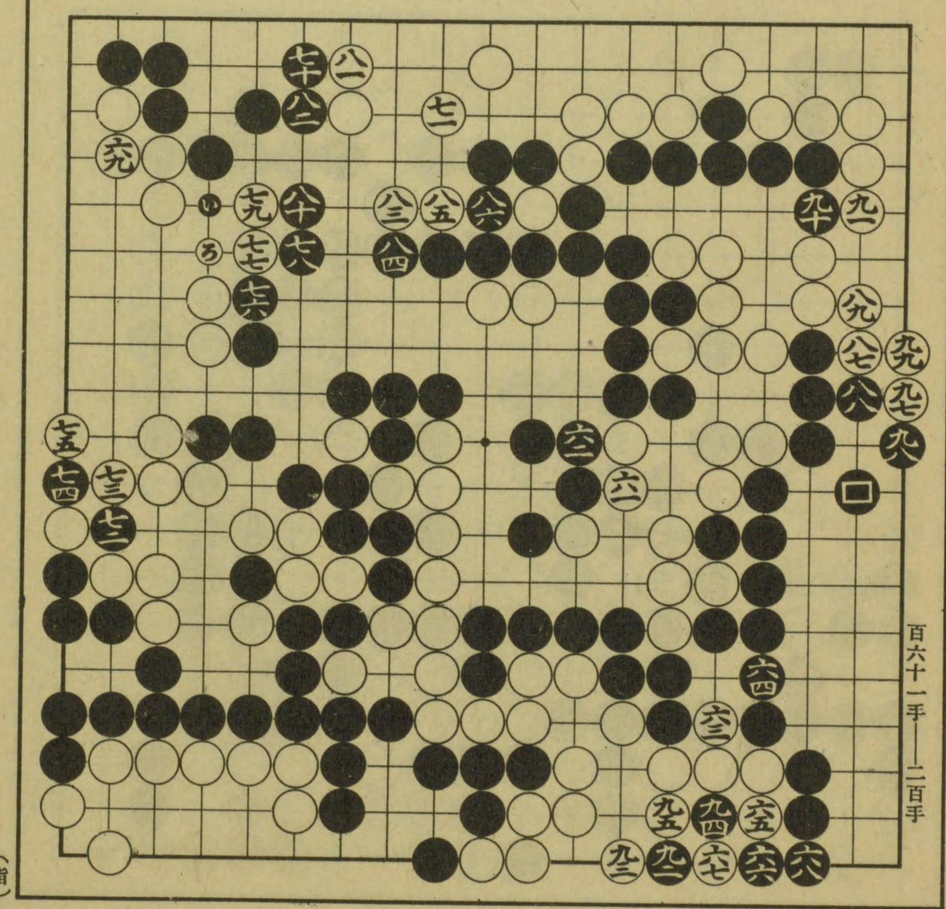
百一手——百六十手

○ 黒六十六と後手を引いたのは最後の失着である、此の手で左上をいと出、白ろの時、黒六十九の點に截り隅の一子を取らば確實なる勝なりしを惜しむ可し。

ろ 右下六十七の點つぐ

□ 圍碁に就ての儀禮

特別の席、特殊の會合などでは此うした注意は不要と思ふが、普通坊間の碁席などで客と客と初對面！初手合の場合、セメテ名刺の交換、名刺の持合せのない時は口頭でなりとも一應名乘り合ひ位はしてから對局をはじめる樣にしたいものだとおもふ、圍碁が普通の遊戯よりは一段高い位置を占めて居るものだけに此うした事も眞摯に考へたい。



百六十一手——二百手

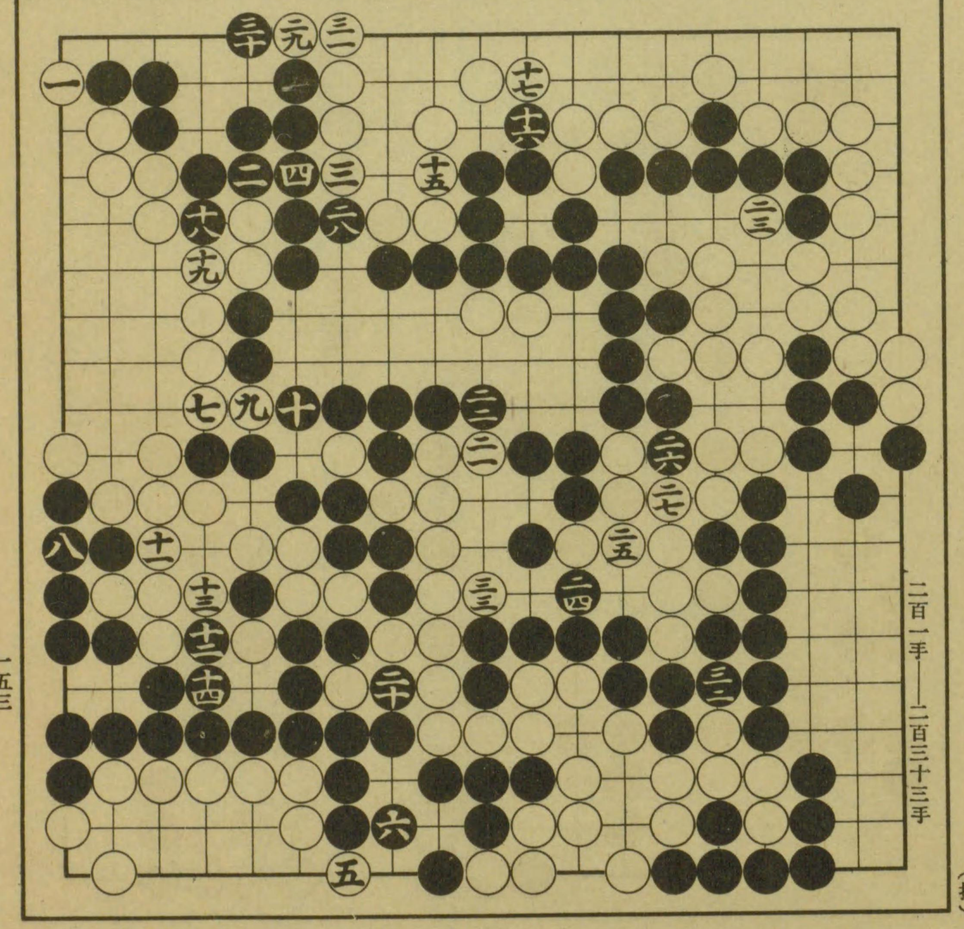
（指）

□圍碁に就ての儀禮

對局の際、上座と下座との區別は有段者ならば段の高い方が上座、他が下座、同段者なら入段の月日の前後でといふやうに常識的にキメる。

下座の方から手を出して黒石を膝前へ下ろし（先ならば）黒を盤の右上右寄りの小目にパチリとおき、そこで一禮する、上座も同時に答禮。

膝と盤との間にゴギを入れるだけの間隔（三四寸）ある可きは當然、ゴギの蓋は仰向きにしてゴギの右側に置き、ハマ（取石）は必ず其の中へ入れる、疊の上に散亂する樣な事は絶對嚴禁、自分の手番（打つ番）の時は萬止むを得ぬ時の外は決して立つたり他と話などせぬ事、盤に手を觸れぬ事、石は靜に扱ふ事。



二百一手——二百三十三手

（指）

昭和八年十月十五日印刷
昭和八年十月廿五日發行

第二
名人指南叢（二、三子局）

名人閨菲講座

編輯者　廣月絕軒
發行者　下中彌三郎
東京市日本橋區吳服橋三ノ五
印刷者　關口一男
東京市日本橋區吳服橋三ノ五

發行所　東京市日本橋區吳服橋三ノ五
振替東京二九六三九番
株式會社　平凡社

（印刷・版製社會式株刷印式單）

213
616